

金
沢
城
跡

―石川門附属太鼓塀―

二〇一四

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書20

金 沢 城 跡

―石川門附属太鼓塀―

2014

石川県金沢城調査研究所

金沢城史料叢書20

金 沢 城 跡

—石川門附属太鼓塀—

2014

石川県金沢城調査研究所

例 言

1. 本書は、石川県金沢市丸の内地内に所在する金沢城跡（石川門附属太鼓塀）の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査原因は重要文化財金沢城石川門保存修理事業であり、事業を所管する石川県教育委員会事務局文化財課の依頼に基づき、埋蔵文化財調査を石川県金沢城調査研究所が実施した。
3. 現地調査の期間及び担当職員は次のとおりである。

平成 19 年度

期 間 平成 19 年（2007） 5 月 17 日～同年 12 月 20 日

担当者 北川晴夫（主幹）

平成 20 年度

期 間 平成 20 年（2008） 4 月 24 日～同年 9 月 5 日

担当者 北川晴夫（主幹）、安中玲美（主任主事）

平成 22 年度

期 間 平成 22 年（2010） 9 月 2 日～平成 23 年（2011） 1 月 27 日

担当者 北川晴夫（主幹）、小此木真理（嘱託）

平成 23 年度

期 間 平成 23 年（2011） 5 月 12 日～同年 9 月 26 日

担当者 宮川勝次（主任主事）、坂下博晃（嘱託）

4. 出土品整理は、平成 21・24 年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託して実施した。
5. 報告書の作成は、宮川勝次（所主査）、坂下博晃（嘱託）、松井広信（嘱託）が担当した。なお、第 6 章は、株式会社パレオ・ラボ（藤根 久・米田恭子・竹原弘展）による分析報告である。執筆分担は目次に記した。
6. 調査に関する記録・遺物は石川県金沢城調査研究所で保管している。
7. 調査・報告に際して、次の方々から指導・助言ならびに協力を賜った。

文化庁文化財部参事官（建造物担当） 石川県立図書館 石川県立歴史博物館 金沢市立玉川図書館 金沢大学附属図書館 宮内庁書陵部図書寮文庫 公益財団法人文化財建造物保存技術協会 公益財団法人前田育徳会 滋賀県立安土城考古博物館 東京大学総合図書館 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 防衛省防衛研究所戦史研究センター 大友佐俊 金森安孝 北垣聰一郎 北野博司 楠正勝 久保智康 千田嘉博 田嶋明人 向井禅 森島康雄 横山隆昭 吉岡康暢（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 本書の水平基準は海拔高を表し、東京湾平均海面標高（T. P.）である。
2. 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の日本測地系第Ⅶ系に準拠した。
3. 測量図中、上端・下端間のケバ線や線種、太さについては下記の線種表の通りである。
4. 土層の色調は農林水産省農林水産技術会事務局技術会議監修「新版 標準土色帖」を使用している。
5. 石垣については、金沢城内で統一した ID 番号が付けられており、それを採用した。
6. 遺物名は次の略記号を使用した。
P: 土器・陶磁器 T: 瓦 M: 金属製品 S: 石製品
7. 出土遺物番号は、本文・観察表・遺物実測図版・写真図版において対応する。
8. 遺構・遺物実測図の縮尺に関しては各図中に示した。
9. 石垣構築技術等に使用される用語については、本書では以下の石垣用語表に記載した。
10. 引用・参考文献は一括して最後に掲載した。

線種表

	ケバ種	上端線/下端線		ケバ種	上端線/下端線		ケバ種	上端線/下端線
トレンチ		崖ケバ 実線	遺構(未完掘)		長・短ケバ 一点鎖線	遺構壁の 傾斜変換線		長・短ケバ (下端線なし)
近代以後		短・短ケバ 実線	遺構(検出のみ)		長・短ケバ (下端線なし)	遺構以外 (土質境)	—————	実線・ケバなし
近世以前		長・短ケバ 実線	壁のみで確認 された遺構		長・短ケバ (下端線なし)	石(埋没部分)	— — —	一点鎖線

石垣用語表

石垣部分名称

用語	読み	解説
築石部	つきいしぶ	石垣の面部分
隅角部	ぐうかくぶ	石垣の折れ部分、外側に折れるものを出角(ですみ)内側に折れるものを入角(いりすみ)と呼ぶ
天端	てんば	石垣の上面
天端石	てんばいし	石垣の最上部の石材
裾	すそ	石垣が地面と接する部分
根石	ねいし	石垣の最下段の石
築石	つきいし	石垣を構築する石材、平石(ひらいし)とも言う
間詰め	まづめ	築石の隙間に詰める小振りの石
角石	すみいし	隅角部に使用する石材
角脇石	すみわきいし	角石の側に位置する石材
目地	めじ	石材同士の隙間
勾配	こうばい	石垣の角度。直線のノリと曲線のソリからなる

石垣内部名称

用語	読み	解説
栗石	ぐりいし	築石の裏込などに用いられる円礫
押石	おさえいし	築石のはらみ・ずれを防止するために石尻の後ろに置く石材
介石	かいいし	築石の位置調整のために置く石材
捨石	すていし	栗石の内部に押石・介石に適さない状態で置かれた石材
盛土	もりど	本来の地面の上に盛られた土

積み方名称

用語	読み	解説
布積み	ぬのづみ	石材を横方向に並べながら積む積み方
乱積み	らんづみ	横目地が通らず、不規則に積む積み方
谷積み	たにづみ	石材の長軸を交互に斜めにして積む積み方
算木積み	さんぎづみ	出隅を構成する2面に長い石材の長辺を交互に向けて積み上げる積み方

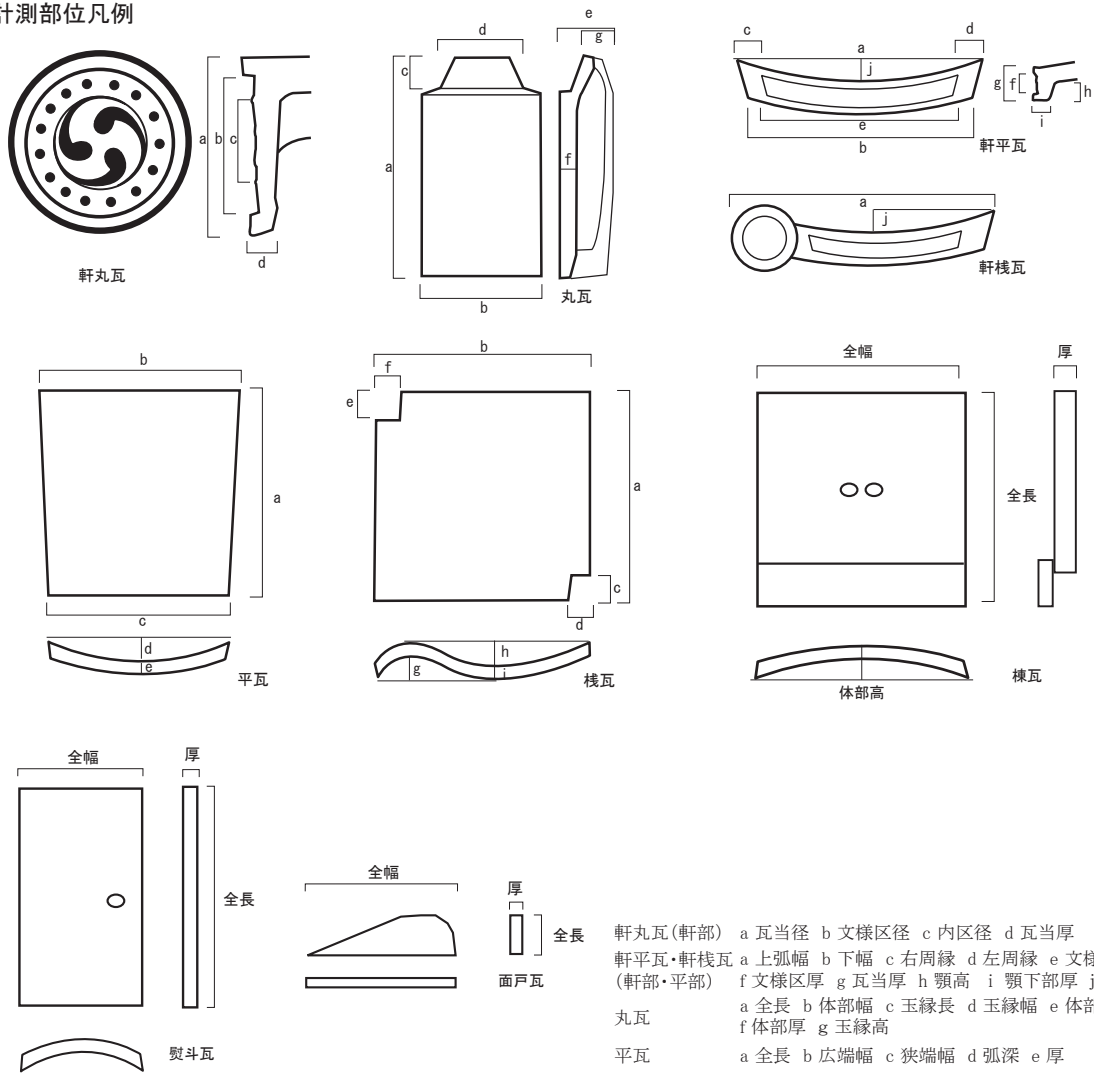
石材部分名称

用語	読み	解説
面	つら	石材の表面のうち、石垣の表面に位置する部分
大面	おおづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が大きい面
小面	こづら	角石の算木積みで使用した石材の表面のうち、控が小さい面
控	ひかえ	石材の奥行き
尻	しり	石材の後ろ側
胴	どう	石材の面と尻の間
合端	あいば	石同士の接点

石垣使用石材名称

用語	読み	解説
野面石	のづらいし	加工していない石、自然石・転石とも言う
割石	わりいし	割って、大きさを整えたり、面を造ったもの
粗加工	あらかこういし	割石をノミ等で粗く加工した石材
切石	きりいし	面や合端までを加工した石材

瓦計測部位凡例



軒丸瓦(軒部) a 瓦当径 b 文様区径 c 内区径 d 瓦当厚
 軒平瓦・軒棧瓦 a 上弧幅 b 下幅 c 右周縁 d 左周縁 e 文様区幅
 (軒部・平部) f 文様区厚 g 瓦当厚 h 顎高 i 顎下部厚 j 弧深
 丸瓦 a 全長 b 体部幅 c 玉縁長 d 玉縁幅 e 体部高
 f 体部厚 g 玉縁高
 平瓦 a 全長 b 広端幅 c 狭端幅 d 弧深 e 厚
 a 全長 b 全幅 c 平部切込長 d 平部切込幅
 棧瓦 e 棧部切込長 f 棧部切込幅 g 棧部弧深
 h 平部弧深 i 厚

目次

第1章 経緯と経過	(坂下)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		2
第2章 歴史的環境	(坂下・松井)	5
第1節 金沢城と周辺の歴史		5
第2節 金沢城の沿革		6
第3節 石川門附属太鼓塀の沿革	(坂下)	10
第4節 既往の調査成果		25
第3章 調査の概要	(坂下)	30
第1節 調査の目的		30
第2節 調査区の設定		30
第4章 右方太鼓塀の調査成果	(坂下)	35
第1節 概要		35
第2節 調査の方法		35
第3節 基本層序と時期区分		35
第4節 遺構		37
第5節 遺物		66
第6節 小結		67
第5章 左方太鼓塀の調査成果	(宮川)	74
第1節 概要		74
第2節 調査の方法		74
第3節 基本層序と時期区分		74
第4節 遺構		77
第5節 遺物		111
第6章 小結		112
第6章 自然科学的調査	(藤根・米田・竹原)	124
第7章 総括	(宮川・坂下)	133
引用・参考文献		141
写真図版		145
報告書抄録		187

図版目次

頁

第 1 図 調査区位置図 4
 第 2 図 金沢城跡の位置と周辺の遺跡 7
 第 3 図 金沢城全体図 12
 第 4 図 石川門附属太鼓塀関連絵図 1・弘化 5 年棟札 13
 第 5 図 石川門附属太鼓塀関連絵図 2 14
 第 6 図 石川門附属太鼓塀関連絵図 3 15
 第 7 図 石川門附属太鼓塀関連絵図 4 17
 第 8 図 明治期石川門全景 古写真 1 19
 第 9 図 明治期石川門全景 古写真 2 20
 第 10 図 昭和保存修理工事 右方太鼓塀修理前 1 21
 第 11 図 昭和保存修理工事 右方太鼓塀修理前 2 22
 第 12 図 昭和保存修理工事 左方太鼓塀修理前 1 23
 第 13 図 昭和保存修理工事 左方太鼓塀修理前 2 24
 第 14 図 金沢城跡発掘調査位置図 27
 第 15 図 右方太鼓塀調査区全体図 31
 第 16 図 左方太鼓塀調査区全体図 33
 第 17 図 太鼓塀断面・基本層序模式図 36
 第 18 図 1 区 遺構平面図 1 46
 第 19 図 1 区 遺構平面図 2 47
 第 20 図 2 区 遺構平面図 1 48
 第 21 図 2 区 遺構平面図 2 49
 第 22 図 3 区 遺構平面図 50
 第 23 図 1～3 区 遺構断面図 51
 第 24 図 4 区 遺構平面図 52
 第 25 図 2・4 区 遺構断面図 53
 第 26 図 4 区 遺構断面図 54
 第 27 図 5 区 遺構平面図 1 55
 第 28 図 5 区 遺構断面図 56
 第 29 図 5 区 遺構平面図 2 57
 第 30 図 5 区 遺構平面図 3 58
 第 31 図 6 区 遺構平面図 59
 第 32 図 5・6 区 遺構断面図 60
 第 33 図 石垣水平断面図軸座標 61
 第 34 図 石垣 (ID3410W・3410S) 水平断面図 62
 第 35 図 石垣 (ID3410W・3410S) 立面・垂直断面図 63
 第 36 図 石垣 (ID3140N) 水平断面図 64
 第 37 図 石垣 (ID3140N) 立面・垂直断面図 65
 第 38 図 遺物実測図 土器・陶磁器 68
 第 39 図 遺物実測図 瓦 69
 第 40 図 遺物実測図 金属・石製品 70
 第 41 図 基本層序模式図 75
 第 42 図 太鼓塀断面模式図 76
 第 43 図 1 区 遺構平面図 1 86
 第 44 図 1 区 遺構平面図 2 87
 第 45 図 1 区 遺構断面図 88
 第 46 図 2 区 遺構平面図 1 89
 第 47 図 2 区 遺構平面図 2 90
 第 48 図 2 区 遺構断面図 91
 第 49 図 3 区 遺構平面図 1 92
 第 50 図 3 区 遺構平面図 2 93

第 51 図 2・3 区 遺構断面図 94
 第 52 図 4 区 遺構平面図 95
 第 53 図 5 区 遺構平面図 96
 第 54 図 3～5 区 遺構断面図 97
 第 55 図 宝暦大火前の水ノ手門 98
 第 56 図 調査区 (5 区) と絵図の照合図 99
 第 57 図 石垣水平断面図軸座標 100
 第 58 図 石垣 (ID3110S・3310S) 水平断面図 1 101
 第 59 図 石垣 (ID3110S・3310S) 水平断面図 2 102
 第 60 図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図 1 103
 第 61 図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図 2 104
 第 62 図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図 3 105
 第 63 図 石垣 (ID3110S) 立面・垂直断面図 106
 第 64 図 石垣 (ID3310S・3020W・3020S) 立面・垂直断面図 107
 第 65 図 石垣 (ID3020S) 垂直断面図 1 108
 第 66 図 石垣 (ID3020S) 垂直断面図 2 109
 第 67 図 石垣 (ID1221N・1221W) 立面・垂直断面図 110
 第 68 図 遺物実測図 土器・陶磁器 113
 第 69 図 遺物実測図 瓦 1 114
 第 70 図 遺物実測図 瓦 2 115
 第 71 図 瓦当・刻印拓本 116
 第 72 図 遺物実測図 金属・石製品 117
 第 73 図 遺物実測図 石製品 1 118
 第 74 図 遺物実測図 石製品 2 119
 第 75 図 瓦胎土の蛍光 X 線分析による各元素分布図 130
 第 76 図 瓦胎土の蛍光 X 線分析による Al₂O₃ SiO₂ 分布図 131
 第 77 図 胎土分析および釉薬の成分分析を行った瓦 131
 第 78 図 瓦胎土の偏光顕微鏡写真 132
 第 79 図 附属太鼓塀の屋根瓦 1 136
 第 80 図 附属太鼓塀の屋根瓦 2 137
 第 81 図 附属太鼓塀の屋根瓦 3 138
 第 82 図 附属太鼓塀の屋根瓦 4 139
 第 83 図 附属太鼓塀の腰瓦 140

表目次

頁

第 1 表 周辺遺跡地名表 8
 第 2 表 金沢城の沿革 9
 第 3 表 金沢城跡発掘調査一覧 28 29
 第 4 表 遺物観察表 (～11 表) 71 73
 第 12 表 遺物観察表 (～20 表) 120 123
 第 21 表 分析試料 124
 第 22 表 胎土中の微化石類と砂粒物の特徴 127
 第 23 表 瓦胎土の蛍光 X 線分析による化学組成 127
 第 24 表 釉薬の蛍光 X 線分析半定量分析結果 127
 第 25 表 土器胎土中の粘土および砂粒組成の特徴 128
 第 26 表 岩石片の起源と組み合わせ 128
 第 27 表 造作弁図解との比較 133

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

重要文化財石川門は老朽化により、附属左方・右方太鼓塀の柱・土台や海鼠壁、その他檜等の建物においても鉛瓦や漆喰上塗に傷みが著しいため、文化庁の指導・助言のもと石川県教育委員会事務局文化財課は附属太鼓塀の解体修理と石川門表門、表門北方・南方太鼓塀、檜、続檜、檜門の屋根や漆喰の塗り直し等の部分修理を実施することにした。

事前調査として平成15年度(2003)には絵図・写真等の基礎資料の収集・調査等を目的とした基本調査、平成16・17年度(2004・2005)は破損箇所等の調査及び修理工法の検討を目的とした調査工事を実施した。

このような調査成果を踏まえて、平成18年度(2006)には重要文化財金沢城石川門保存修理事業に本格着手することになった。事業は平成25年度(2013)までの8年間にわたる。第Ⅰ期工事(平成18～21年度)は附属右方太鼓塀の解体修理・埋蔵文化財調査、檜門の部分修理、第Ⅱ期工事(平成22～25年度)は附属左方太鼓塀の解体修理・埋蔵文化財調査、表門・檜等の部分修理を実施した。

控柱の構造は調査工事の部分解体によって太鼓塀本柱に上下2段の貫穴があることが再確認されたことから(昭和28～34年の文化財保護委員会による保存修理工事で痕跡を確認済)、コンクリート製控柱が整備される以前は、「造作弁図解」や「加州金沢御城来因略記」に描かれているような木製の控柱に上下2段の貫を通す構造であったと理解された。また、埋蔵文化財調査においても控柱の抜取痕が検出されたことにより掘立の控柱であることが確認された。

これらを基に鉄筋コンクリート製控柱を撤去して木製とそれを繋ぐ上下段の貫を復すること、土間コンクリートを撤去して縁石及び砂利敷きを整備する現状変更を申請し許可された(右方太鼓塀は平成19年9月申請11月許可、左方太鼓塀は平成22年10月申請平成23年2月許可)。

埋蔵文化財調査は太鼓塀の基礎遺構を精査し、控柱の位置や下部構造等を確認することで木製控柱への現状変更の根拠を補強すると共に、近世以来の塀の修理履歴を地下遺構や出土遺物から検証すること、あわせて修理工事の設計施工にあたり地下遺構の保護を確実なものとするを目的に実施した。

各年度の調査経費は、以下のとおりである。

平成19年度	11,400,000円(右方太鼓塀現地調査)
平成20年度	10,500,000円(右方太鼓塀現地調査)
平成21年度	2,700,000円(右方太鼓塀出土品整理)
平成22年度	2,000,000円(左方太鼓塀現地調査)
平成23年度	11,700,000円(左方太鼓塀現地調査)
平成24年度	2,461,709円(左方太鼓塀出土品整理)
平成25年度	1,722,600円(報告書作成、分析委託)
	内 報告書印刷製本957,600円

平成19～25年度に実施した現地調査及び出土品整理、分析委託を重要文化財修理に係る国庫補助、平成25年度の印刷製本を県単費で実施した。

第2節 調査の経過

1. 現地調査（第1回）

平成19年度（2007）調査

右方太鼓塀北辺（新丸側太鼓塀）の200 m²を調査対象とした。現地調査は5月17日から開始し、1区から順に3区まで行い、12月20日に終了した。

調査と並行して太鼓塀の解体工事が行われ、一部でコンクリート製控柱を残した状態で調査を行った。

（主な調査工程）

5月17～23日	調査準備（機材搬入等）
5月24日～	掘削作業開始
8月25日	保存修理事業の一般現地説明会
11月12日	金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）合同専門委員会現地指導
12月6・7日	空中写真測量
12月20日	現地調査終了

平成20年度（2008）調査

右方太鼓塀東辺（白鳥堀側太鼓塀）の200 m²を調査対象とした。現地調査は4月24日から開始し、4区から順に6区まで行い、9月5日に終了した。4区では控柱の掘方埋土を半裁して、控柱の構造についての知見が得られた。

（主な調査工程）

4月24日	調査準備（機材搬入等）
5月2日～	掘削作業開始
6月12・13日	文化庁係官現地指導
7月7日	金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）合同専門委員会現地指導
8月20～22日	空中写真測量・石垣レーザー測量
9月5日	現地調査終了

平成22年度（2010）調査

県教育委員会文化財課、（公財）文化財建造物保存技術協会（平成21年度に財団法人から公益財団法人に移行）、金沢城調査研究所で事前協議を行った結果、現地調査は工事の工程から9月に着手し、現状変更申請のための必要最低限の範囲を調査対象とすることになった。残りの範囲は次年度に調査することとし、コンクリート製控柱は今年度中に撤去されることになった。調査は9月2日から3区と5区で控柱2本分にあたる20 m²を対象に行い、1月27日に終了した。

（主な調査工程）

9月2日	調査準備
9月3日～	掘削作業開始
10月20・21日	文化庁係官現地指導
1月26日	空中写真測量
1月27日	現地調査終了

平成 23 年度（2011）調査

県教育委員会文化財課、（公財）文化財建造物保存技術協会、金沢城調査研究所で事前協議を行った結果、現地調査は工事の工程から水ノ手門に近い部分（3～5区）を優先的に実施して、11月中旬までに終了することになり、調査範囲は左方太鼓塀の前年度調査分を含む250㎡を対象とした。また、並行して保存修理工事が行われるため、工事車両の通路確保や植栽を避ける必要から、現地にて調査方法や機材の搬入・設置場所について確認し、事業全体の調整を図るために、月2回の定例打ち合わせを県教育委員会文化財課、県土木部営繕課、県金沢城・兼六園公園管理事務所、（公財）文化財建造物保存技術協会、施工業者、金沢城調査研究所によって実施することになった。現地調査は5月12日から開始し、9月26日に終了した。5区では改変される前の水ノ手門の礎石痕跡や石垣を検出し、近世前期の知見が得られた。

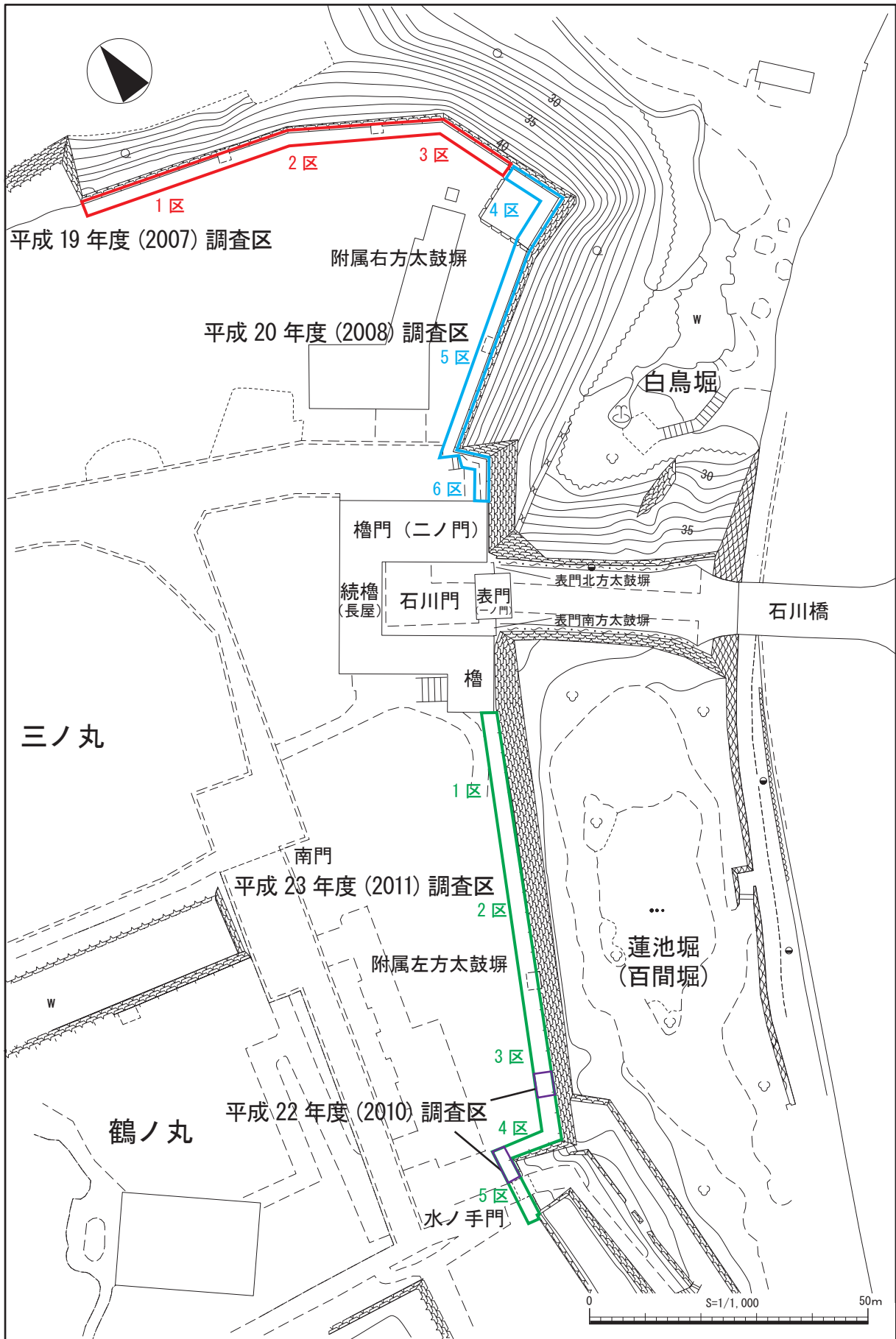
（主な調査工程）

5月12日	調査準備
5月19日～	掘削作業開始 本事業の工事工程等の打ち合わせ
6月24日	金沢城調査研究埋蔵文化財・伝統技術（石垣）合同専門委員会現地指導
7月27日	定例打ち合わせ
8月2日	空中写真測量（3～5区）・石垣レーザー測量
8月10日	定例打ち合わせ
8月24日	定例打ち合わせ
8月25日	文化庁係官現地指導
9月6・7日	空中写真測量（1・2区）・石垣レーザー測量
9月15日	定例打ち合わせ
9月26日	現地調査終了

2. 出土品整理・報告書刊行

出土遺物の整理は石川県教育委員会が、（財）石川県埋蔵文化財センターに委託して行った。担当は平成21年度の右方太鼓塀を調査部県関係調査グループ、平成24年度の左方太鼓塀を調査部特定事業調査グループがそれぞれ行った。整理内容は記名・分類・接合及び実測・トレースである。なお、遺物の洗浄は直営で実施した。自然科学的分析（瓦の胎土・釉薬成分の分析）は、平成25年度に株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

報告書の作成・刊行は石川県金沢城調査研究所が担当した。



第 1 図 調査区位置図 (S=1/1,000)

第2章 歴史的環境

第1節 金沢城と周辺の歴史

金沢市街地のほぼ中央を占める金沢城跡は、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。

小立野台地は犀川・浅野川によって開発された河成段丘であり、城外との比高差は、最高所である本丸で30m以上、低所に位置する新丸においても約10mを測り、城が天然の段丘面を巧みに利用して築かれたことが推察される。また城のある台地先端部と、その南東に続く台地本脈との間には断層があり、自然谷が形成されていたらしく〔藤1999〕、城付近の地形は、人工の手が加わる以前から、独立丘的な状況を呈していたようである。

金沢城周辺は、近世から市街化が進んでおり、近世以前の遺跡については従来伝わるところが少なかつたが、城跡自体や城地に隣接する前田氏（長種系）屋敷跡地点〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002e〕・広坂地点〔金沢市2004b・2005b・2006b・2007c・2009c〕の調査により、縄文～中世の資料が確認されている。

金沢城では、平成9年度の調査において8～9世紀代の掘立柱建物跡が検出されたほか、断片的ではあるが、幾つかの調査区で古代に属する土坑・ピット・土器片が確認されている。城地北側の前田氏（長種系）屋敷跡地点では、縄文時代の落とし穴、弥生時代後期後半～終末期の墳丘墓、古代の粘土採掘坑が検出されている。一方、城地南側の広坂地点では、8世紀代の瓦が出土し古代寺院の存在が確実視され、また中世の居館に伴う堀や寺院と思われる礎石建物を検出している。このように、市街地の下には城下町のみならず、それ以前の遺構も残存していることが判明しつつある。

戦国時代になると、現在の城地には金沢坊（金沢御堂・尾山御坊）が創建され、加賀地域における政治・宗教・経済の拠点として発展するが、16世紀後半については、城の南側に位置する県庁跡地の調査地点（近世には堂形と呼ばれ、米蔵・馬場等、藩の施設があった城の外縁部）では、館ないし寺院の区画施設と推定される溝・土塁、広坂地点では礎石建物等が検出されており、共伴する遺物に恵まれないものの数少ない遺構確認例である〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2010・2012〕。やがて金沢坊は織田政権の前に陥落し、佐久間氏・前田氏等の織豊政権の大名による支配が始まるが、この段階もいまだ、遺構・遺物は多くない。

徳川氏が幕府を創始し、豊臣氏を滅ぼして名実ともに統一政権を確立した慶長・元和期頃、金沢城周辺では大名前田氏の支配のもと、城下町の整備が進行する。現在、市街各所で調査された城下町の遺跡地点数は40箇所以上を数える（第2図・第1表）が、まとまった量の遺構・遺物が見られるようになるのは、この頃以後のことである。なお、慶長年間に築造された内・外惣構の一部についても発掘調査が行われており、当初の構造や規模を縮小しつつ存続・再生が図られる変遷過程が判明している〔金沢市2008a・2011b・2011c・2012d、木越2013〕。城下町はその後度重なる火災等の災害（寛永8年（1631）・同12年（1635）の大火等）に見舞われ、また、一方で計画的整備を繰り返しながら、寛文年間（1661～1672）までにほぼ骨格が整い、以後、明治時代の初めまで、三都に次ぐ大都市として発展する。

先にもあげたが、城下中枢に位置する遺跡として広坂地点・前田氏（長種系）屋敷跡地点がある。広坂地点は、17世紀前半における性格は、なお検討の余地はあるものの、陶磁器の優品が多く出土し、また17世紀中頃以降は高級武家の屋敷として、多様な遺構・遺物が検出されている。城下町遺跡として最大の面積が調査されており、火災の比定等、今後基準となる所見が蓄積されている点も大きく評価できよう。前田氏（長種系）屋敷跡地点は、寛永16年（1639）以後、標記の重臣屋敷となったとこ

ろであるが、これ以前の遺構・遺物が充実しており、初期城下町の屋敷跡と考えられている。

これらの外側に位置する安江町・本町一丁目遺跡の各遺跡は、性格を異にするが、城下町の一般的な在り方を示す。安江町遺跡〔金沢市1997〕は中級藩士・町人居住地为対象となる調査であるが、町人の物質的な優位性が読み取れる、興味深いデータが得られた。本町一丁目遺跡〔金沢市1995〕は町人の居住地に該当し、富籤の突札等、生活臭の強い遺物が目を引く一方、建物・井戸・土坑（粘土採取坑・廃棄土坑）等の遺構配置から、屋敷地の空間構造も追求されている。久昌寺・木ノ新保・三社町の各遺跡は、城下縁辺に所在する。久昌寺遺跡〔金沢市2004c〕では同名の曹洞宗寺院の墓地に該当する、約300基に達する墓が調査され、城下の墓制を考える上で重要な成果をあげている。木ノ新保遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002b〕では、墓地・農地から足軽・下級武士の屋敷地への変容を窺うことができ、三社町遺跡〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2007〕でも、農地から町人地への変化が遺構より捉えられている。いずれも城下縁辺における都市域の拡大を示す良好な事例である。

その他に城下町から離れるが、関連する遺跡として戸室石切丁場跡、辰巳用水が挙げられる。戸室石切丁場跡〔石川県金沢城調査研究所2008b・2013a〕は金沢市東部の戸室山・キゴ山周辺に広がる採石関連遺跡群であり、城内石垣の9割強を占める石材産地である。悉皆踏査により丁場の分布範囲と保存状態が確認され、戸室石の特性を踏まえた総合的な調査研究により丁場の構造と変遷、戸室石の石割技術等の様々な点が明らかにされた。辰巳用水〔金沢市2009b〕は寛永9年（1632）に開削され、終着点である金沢城では堀や庭園の水源として利用された。調査でも導水管（木樋、石樋）が確認されている。上流部では用水法面を保護するための三段石垣や隧道等の当時の土木技術を良好に留めた遺構が残る。

第2節 金沢城の沿革

金沢城の沿革については既刊の『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』〔石川県金沢城調査研究所2008a〕が詳しく、参照されたい。ここでは、次頁の年表（第2表）をもって代え、若干の補足を付加しておきたい。

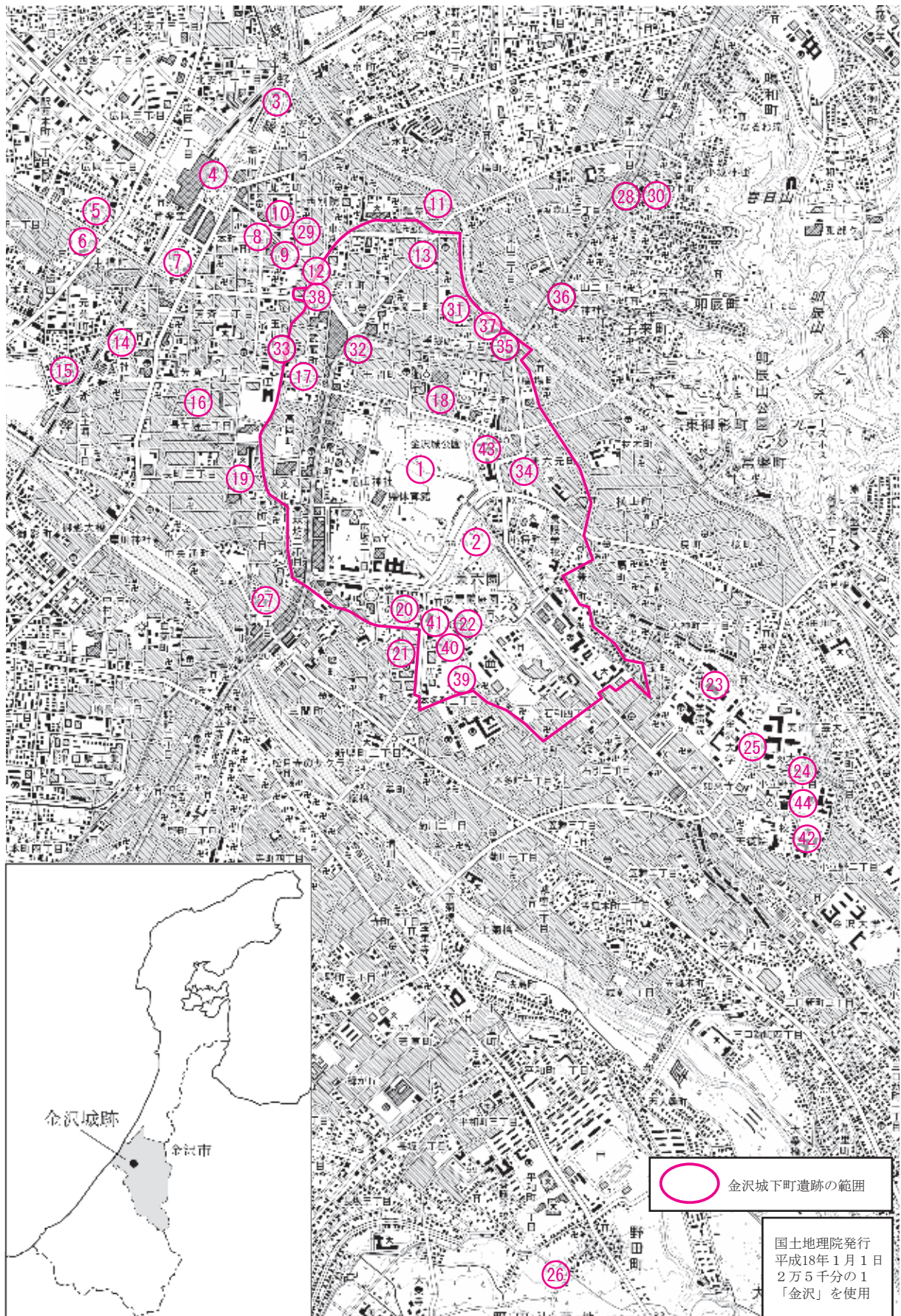
年表では、金沢城の歴史を4期に区分し、造成・災害・修築等を中心に記載した。4つの時期については、佐久間盛政の入城、そして前田家の居城となってから寛永の大火までを「初期金沢城」、寛永大火後の城内整備から宝暦の大火までを「寛永の大火後」、宝暦大火後の城内整備から廃藩までを「宝暦の大火後」、廃藩から現在までを「近代以降」とした。

初期金沢城については、その様相を窺うに足る絵図・文献は極めて少なく、埋蔵文化財調査の所見が重要となる。

画期となった災害のうち、寛永8年（1631）の大火は、金沢城の骨格を変える契機となった。それまでは本丸が中心であったが、大火を契機に二ノ丸が拡大され、ここに壮麗な御殿が営まれた。この二ノ丸を中心として定まった縄張りが、現在まで受け継がれることとなる。

一方、宝暦9年（1759）の大火は、全盛期の終わりを象徴する災害で、三階櫓や辰巳櫓といった本丸の櫓群は、二度と再建されることなく、石川門・河北門・橋爪門のいわゆる三御門も、再建までに10～30年の長期を要した。

廃藩後では、明治14年（1881）に二ノ丸御殿が焼亡したほか、あらたに城地を管轄した陸軍の手により旧来の建物は次々に撤去された。また城の外堀・内堀の多くは埋め立てられるなどした。戦後、金沢大学の敷地になってからも様々な改変を受けている。



第2図 金沢城跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

No	遺跡名	調査年度	遺跡の特徴		文献
			主要地種	特記事項	
1	金沢城跡	(別掲)	城郭	(別掲)	(別掲)
2	兼六園	(別掲)	庭園	(別掲)	(別掲)
3	久昌寺遺跡	H8(1996)・H9(1997)	寺院(墓地)	近世墓292基	金沢市埋蔵文化財センター2004c
4	木ノ新保遺跡	H5(1993) H6(1994)～H7(1995)	寺院?(墓地)→足輕組地 →下級武家地、町人地、百姓地	近世墓、水利施設(管井戸・竹樋)、溝(堰・しがらみ)、建物跡(土蔵基礎、木柱)	(財)石川県埋蔵文化財センター2002b 金沢市埋蔵文化財センター2005c
5	醒ヶ井遺跡	H7(1995)～H10(1998)	百姓地→下級武家地	前田氏(直之系)下屋敷。水路、水利施設(竹樋・溜升)	金沢市埋蔵文化財センター2001a 谷口・増山2004
6	長田町遺跡	H6(1994)	下級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
7	昭和町遺跡	H5(1993)～H7(1995)	町人地・下級武家地	延宝5年(1677)火災資料出土、近世鞍月用水の検出	金沢市埋蔵文化財センター2001b・2003a・2004a
8	本町 丁目遺跡(第1次)	H2(1990)	町人地	廃棄土坑、墨書木製品多数	金沢市教育委員会1995
9	本町 丁目遺跡(第2次)	H6(1994)	町人地	焼成遺構	金沢市教育委員会1997
10	本町 丁目遺跡(第3次)	H9(1997)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2003c
11	瓢箪町遺跡	S61(1986)	上級武家地	前田氏(主膳系)上屋敷。整地層から遺物多数出土	金沢市教育委員会1991
12	安江町遺跡	H3(1991)～H5(1993)	町人地・中級武家地	板塀跡(布堀土坑)、墨書木製品多数、「乾山」銘向付出土	金沢市教育委員会1997
13	金沢城下町遺跡(彦三町地点)	H11(1999)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター2002
14	三社町遺跡	H3(1991)・H9(1997)	百姓地→町人地	道路・側溝、肥溜め群、操人形かしら	(財)石川県埋蔵文化財センター2001・2007
15	元菊町遺跡	S62(1987)・H1(1989)	百姓地→町人地		石川県立埋蔵文化財センター1990
16	穴水町遺跡	H8(1996)	下級武家地	長氏下屋敷	金沢市埋蔵文化財センター1998
17	金沢城下町遺跡(高岡町地点)	H8(1996)・H10(1998)～H11(1999) H9(1997)	上級町人地、水溜	礎石建物、桶館墓、廃棄土坑、瓦溜り(鬼瓦を棧瓦で囲む)、石灯笼基壇、椀形鉄滓	金沢市埋蔵文化財センター2001c・2003b (財)石川県埋蔵文化財センター2002d
18	金沢城下町遺跡(前田氏(長種系)屋敷跡地点)	H8(1996)	町人地→上級武家地	寛永以前の町屋遺構	(財)石川県埋蔵文化財センター2002e
19	長町遺跡	H8(1996)	中級武家地		金沢市埋蔵文化財センター1998
20	金沢城下町遺跡(広坂地点)	H8(1996)～H12(2000) H14(2002) H17(2005)	中～上級武家地	寛永の大火火災資料、大型土坑(廃棄土坑、地下室、池等)、楽焼窯道具、惣構跡、紀年名木製品等の基準資料検出。	金沢市埋蔵文化財センター2004b・2005b・2006b・2007c・2009c
21	下本多町遺跡	H4(1992)	下級武家地→上級武家地	宝暦の大火による火災資料	金沢市埋蔵文化財センター1999
22	金沢城下町遺跡(本多土屋敷跡地点)	S55(1980)	上級武家地	溝、階段(地下室?)	石川県立埋蔵文化財センター1992
23	金沢大学宝町遺跡(医学部付風病院地点)(医学図書館地点)	H9(1997)～H14(2002) H23(2011)	下～中級武家地等	地下室多数	金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
24	金沢大学宝町遺跡(医学部保健学科地区)	H10(1998)～H11(1999) H13(2001)	下～中級武家地等		金沢大学埋蔵文化財調査センター編2000～2003
25	経王寺遺跡	H9(1997)～H10(1998)	寺院(墓地)・中級武家地	近世初期の灰塚、池状遺構、塀跡	(財)石川県埋蔵文化財センター2002c
26	野田山墓地	H12(2000)～H14(2002) H16(2004)～H19(2007) H20(2008)～H22(2010)	墓地	藩主家の墓所を中核とした近世墓地。	金沢市埋蔵文化財センター2003d・2012c
27	片町二丁目遺跡	H15(2003) H23(2011)	武家地		金沢市埋蔵文化財センター2005a
28	妙国寺門前	H15(2003)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2006a
29	本町 丁目遺跡(第4次)	H15(2003)	町屋	鍛冶関連遺物(輪羽口、椀形鉄滓)	金沢市埋蔵文化財センター2006c
30	三宝寺前遺跡	H16(2004)	寺院、参道		金沢市埋蔵文化財センター2005d
31	金沢城下町遺跡(彦三町丁目地点)	H16(2004)	武家地	廃棄土坑	金沢市埋蔵文化財センター2007a
32	金沢城下町遺跡(下堤・青草町地点)	H17(2005)	町人地		金沢市埋蔵文化財センター2007b
33	金沢城下町遺跡(金沢城西外惣構跡武蔵町地点)	H17(2005) H21(2009)	惣構	築造当初の堀、堀の改変状況 土居盛土	金沢市埋蔵文化財センター2008a・2010a・2011c
34	金沢城下町遺跡(兼六元町地点 兼六元町五番地点)	H17(2005) H23(2011)	武家地	溝、石列	金沢市埋蔵文化財センター2007a
35	金沢城下町遺跡(金沢城東外惣構跡枯木橋北地点)	H18(2006)	惣構	堀の改変状況確認	金沢市埋蔵文化財センター2008a
36	東山 丁目遺跡	H20(2008)	町人地	鍛冶関連遺物・遺物(炉跡、輪羽口、椀形鉄滓等)	金沢市埋蔵文化財センター2010b
37	金沢城下町遺跡(金沢城西内惣構跡主計町地点)	H20(2008)	惣構	素掘の堀、室町～戦国期の鍛冶関連遺物	金沢市埋蔵文化財センター2011b
38	金沢城下町遺跡(金沢城西外惣構跡升形地点)	H20(2008)～H22(2010)	惣構	堀、升形遺構、建物跡	金沢市埋蔵文化財センター2009a・2010a・2011a・2012d
39	金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)	H22(2010)	武家地	道路、水路(辰巳用水分流)	金沢市埋蔵文化財センター2011a・2012b
40	金沢城下町遺跡(本多氏屋敷跡地点)	H21(2009)・H22(2010)	武家地	本多家上屋敷、塀基礎石積、門跡、石垣、道跡	金沢市埋蔵文化財センター2010a・2011a・2012a
41	金沢城下町遺跡(西外惣構跡本多町三丁目地点)	H21(2009)	惣構(西外惣構起点付近)	堀、土居基部	金沢市埋蔵文化財センター2010a・2012a
42	小立野四丁目遺跡(旧天徳院加賀藩主前田家墓所)	H22(2010)	寺院、墓地	堀	金沢市埋蔵文化財センター2011a・2013
43	金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)	H21(2009)～H23(2011)	武家地(公事場、屋敷)	庭園遺構(石組池状遺構、景石等)	安中2010・2011 魚水2012
44	小立野ユミノマチ遺跡	H22(2010)～H24(2012)	武家地	階段付大型土坑	荒木2011 谷内2012・2013

第2表 金沢城の沿革

時期	年号	西暦	出来事
初期 金沢城	天正8年	(1580)	佐久間盛政が入城、土塁や堀を整備
	天正11年	(1583)	賤ヶ岳の合戦において佐久間盛政が敗北 前田利家が入城し、これ以後前田家の14代にわたる居城となる
	天正14年	(1586)	天守構築、翌年に南部藩家臣北信愛が前田利家のもてなしを受け、天守をはじめ、城内の案内をされたとの記述（『北信愛覚書』）
	天正15年	(1587)	石垣職人の穴太源助に知行100俵を与え召抱える
	文禄元年	(1592)	戸室石を利用した本格的な石垣構築を開始、東ノ丸東面・北面、本丸西面の石垣を構築
	慶長7年	(1602)	落雷により天守焼失
	慶長期		本丸南面・三ノ丸北面・尾坂門の石垣を構築
	元和期		東ノ丸附段・百間堀縁などの石垣を構築
	元和6年	(1620)	本丸焼失、翌年本丸御殿などを再建
寛永の 大火後	寛永8年	(1631)	城下町から出火、辰巳櫓に飛び火し城内も延焼 【寛永の大火】 大火後の石垣構築・修築でほぼ現在の縄張りに近い状態に
	寛永9年	(1632)	犀川上流から取水する辰巳用水を施工、城内に引水され城内外の堀が水堀化
	寛永11年	(1634)	玉泉院丸に泉水や築山、御亭などを造成
	寛永17年	(1640)	20年間藩主不在、城内が荒廃
	万治3年	(1660)	
	寛文元年	(1661)	5代藩主綱紀がはじめて入国、城内のみならず城下町整備や新田開発など文化振興に寄与
	寛文2年	(1662)	城内の損傷著しい石垣箇所を修築。玉泉院丸色紙短冊積み石垣もこの頃に構築か 鉛瓦が普及
	寛文11年	(1671)	
宝暦の 大火後	宝暦9年	(1759)	城下町で一万余以上が焼失、金沢城内でも本丸・二ノ丸・三ノ丸などの主要部が全焼する被害 【宝暦の大火】
	宝暦10年	(1760)	幕府に城再建と石垣修築を願い出て、5万両を借り修築
	宝暦11年	(1761)	河北門石垣を修築
	宝暦13年	(1763)	五十間長屋石垣を修築
	明和2年	(1765)	石川門石垣を修築
	安永元年	(1772)	河北門を再建
	天明8年	(1788)	五十間長屋や石川門などを再建
	文化5年	(1808)	二ノ丸火災
	寛政11年	(1799)	地震による石垣被害が大きく、石垣を修築
	安政2年	(1855)	
	安政5年	(1858)	
近代以降	明治4年	(1871)	兵部省（のち陸軍省）の所轄となり、多くの建物が払い下げ
	明治9年	(1876)	河北門二ノ門の渡櫓や櫓台石垣を撤去するよう進達
	明治14年	(1881)	二ノ丸御殿から出火し、御殿の他、菱櫓・五十間長屋・橋爪門など焼失
	明治15年	(1882)	河北門一ノ門を解体、代わりに矢来門を設置
	明治40年	(1907)	辰巳櫓下の高石垣が崩落、石垣が幅200mに渡り上部2/3が取り壊され、現在残るように段を設けて改修
	昭和24年	(1949)	戦後、金沢大学の敷地として利用
	平成7年	(1995)	金沢大学の敷地を城外へ移転
	平成8年	(1996)	石川県が土地を取得し、金沢城公園として整備を開始
	平成20年	(2008)	国史跡に指定

第3節 石川門附属太鼓塀の沿革

重要文化財石川門は表門（一ノ門）、表門北方・南方太鼓塀、櫓門（二ノ門）、続櫓（長屋）、櫓（石川櫓）、附属左方（水ノ手門含む）・右方太鼓塀の8棟からなる。附属太鼓塀は石川門表門を正面にして両翼にあり左右に区分されている。右方太鼓塀は石川門二ノ門から三ノ丸の東辺（白鳥堀側太鼓塀）、櫓台石垣で屈折し、そして三ノ丸北辺（新丸側太鼓塀）に位置する。出しは東辺に1棟、北辺に2棟が配置されている。左方太鼓塀は表門脇の石川櫓から鶴ノ丸東辺の蓮池堀の高石垣上を水ノ手門まで至る。途中に出し1棟が配置されている（第3図）。

城内の大半が焼失した宝暦9年（1759）の大火により、石川門周辺も焼失したことが城郭修補願絵図である、宝暦10年（1760）の「金沢城之図」（第6図8）より知られる。

大火による焼失以前は、右方太鼓塀部分には九十間長屋と同続櫓があった。九十間長屋は直線的な三十間長屋や五十間長屋等とは異なり、三ノ丸の郭形状に合わせて大小の二重の長屋（多門櫓）を連結したものであり、北東の隅櫓台には二重櫓（九十間長屋続櫓）があった。左方太鼓塀部分には中櫓があり（第6図2～7）、石川櫓・中櫓・水ノ手門を繋いだ塀は「金沢城内絵図」、「金沢城図」によれば、二重塀と記されている。また、三ノ丸と鶴ノ丸を画する堀に沿って土塁上を南門まで続く塀も同じく二重塀と記される（第6図2・5）。水ノ手門は櫓門で長屋を連結した重厚な門（第7図15）であったが、大火以降は簡略されたとみられる。城内へは櫓台に当って左に折れる構造であった。

宝暦の大火で九十間長屋、中櫓等が焼失した後、附属太鼓塀がいつ頃創建されたか明らかではないが、石川門の再建と前後した時期と考えておきたい。石川門は宝暦12年（1762）に普請が始められたが（「泰雲公御年譜」加賀藩史料8）、他の建造物や石垣修築が優先されたことから、再建されたのは大火から30年後の天明8年（1788）であった（「政隣記」加賀藩史料9、天明棟札）。しかし再建がなってもない、寛政11年（1799）の地震により、石川門周辺や南門台石垣も被害を受けた（「政隣記」加賀藩史料10・「文禄年中以来之旧記」金沢城郭史料）。享和元年（1801）には石川櫓下の石垣に孕みが見つかり、石川櫓は解体され、文化5年（1808）の二ノ丸火災を経て、再建されたのは文化11年（1814）のことであった（「政隣記」加賀藩史料11・12）。この間の石垣修築については、穴太の後藤小十郎が書き残した文化3年（1806）の「石川御櫓下等御石垣積直絵図」（第4図）がある。これによれば、石垣の修築範囲は石川櫓下、枅形、土橋、太鼓塀下、蓮池堀の乳母ヶ池付近までの広範囲に及び、この石垣修築によって左方太鼓塀も一旦解体されたと推定される。

右方太鼓塀は宝暦の大火以降、九十間長屋が河北門側に規模が縮小し、他の長屋や櫓が取り払われた部分に建てられた。弘化4年（1847）には九十間長屋跡太鼓塀下の石垣が孕み、穴太の奥源兵衛紀隆らが翌年2月までに押し直している（「奥源兵衛家系」穴太家蔵）。昭和の保存修理工事の際に出しから発見された建替えの棟札（第4図）が弘化5年3月であることから、弘化4年からの石垣修築が完了して、太鼓塀が再建されたと考えられる。

太鼓塀の構造は、「造作弁図解」や「加州金沢御城来因略記」（第5図）から窺われ、控柱は笠木をつけ、垂直に掘立、太鼓塀と上下2段の貫でつながる構造であったとみられ、明治期の古写真（第8図1・3）でも部分的ではあるが、控柱の姿を確認することができる。屋根瓦は穴太の後藤彦三郎の旧記「城中建物焼失旧新記帳」に文化5年の火災の焼失箇所を書きあげの中で、「御城中塀鉛屋ね二候。公辺御届ニハ何も瓦塀と調ル也。」（「金沢城郭史料」）とあり、この頃には城内の塀が鉛瓦であったことが知られる。

明治4年（1871）の廃藩後、城地は兵部省、続いて陸軍省の所管となった。明治9年の旧陸軍資料には、城内が狭いので河北門、橋爪門枅形、三ノ丸・鶴の丸の境界の塀を撤去し、堀を埋め立て、三ノ丸と鶴ノ丸を一体とすることで、訓練や二ノ丸の仮兵営、新兵営の場として便利になり、またそこ

に利用されていた石材を新兵舎の基礎石等に転用したいと切望していたが、翌年に却下され（「河北門等ノ基礎石ヲ採用ノ儀伺」『陸軍省大日記』防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵）、明治11年の天皇行幸時の写真に、二ノ丸の櫓・長屋・橋爪門、三ノ丸の河北門等が、映し出されることになった〔石川県金沢城調査研究所2010b〕。この上記の要望は二ノ丸内堀や河北門の調査による石垣の残存状態が、この申請書に添付された図と一致することから、行幸以後に実施されたものと考えられる（第7図12）。

附属太鼓塀は明治11年天皇行幸時の写真（第8図1）では、左方太鼓塀から南門方向へ分岐した太鼓塀と控柱、出しが確認されるが、第8図3では確認できないことから、この間に三ノ丸と鶴ノ丸を画した土塁、塀が撤去され、堀が埋め立てられたと考えられる。太鼓塀の屋根瓦は、第9図5のような棧瓦葺きではなく本瓦葺きと判断され、鉛瓦である石川門や出しの屋根瓦と比較しても色調が近似するため、現在のような釉薬瓦ではなく鉛瓦であった可能性が明らかになった。また、今回の解体調査において、釉薬瓦への変更は太鼓塀の建て替えに伴って変更されたことが明らかとなり、その時期は明治中期頃と推定されている〔(公財)文化財建造物保存技術協会2014〕。

水ノ手門は、もとは北面していたが、軍隊による改変で現在は東面している。旧陸軍資料には水ノ手門と推測される「百間堀上降口ノ門」が明治9年に入札によって売却され、その後、門がなくなって取締に影響が出たので、鶴ノ丸内部の門を建て移したいと要望し、許可されている（「金沢城内本丸等ノ門建移ノ儀ニ付伺」『陸軍省大日記』防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵）。

明治14年（1881）には兵舎として改築され利用されていた二ノ丸御殿からの失火により二ノ丸の大半の建物は焼失し（「稿本 金沢市史」）、以後、兵舎の建設や訓練の障害になることから、堀や石垣は撤去され、不要な建造物は取り壊し払い下げられる等、城郭は軍隊の施設として改変されていった（第7図13）。石川門は解体を免れ、櫓や長屋は仮被服庫として利用された。右方太鼓塀周辺では中隊被覆庫、薪炭雑物庫、厩、衛兵所、左方太鼓塀周辺は脂油庫、塵捨場、灰捨場、軽装甲車廠、陣営具倉庫、被覆乾燥庫等の施設が近接していた（第7図14）。

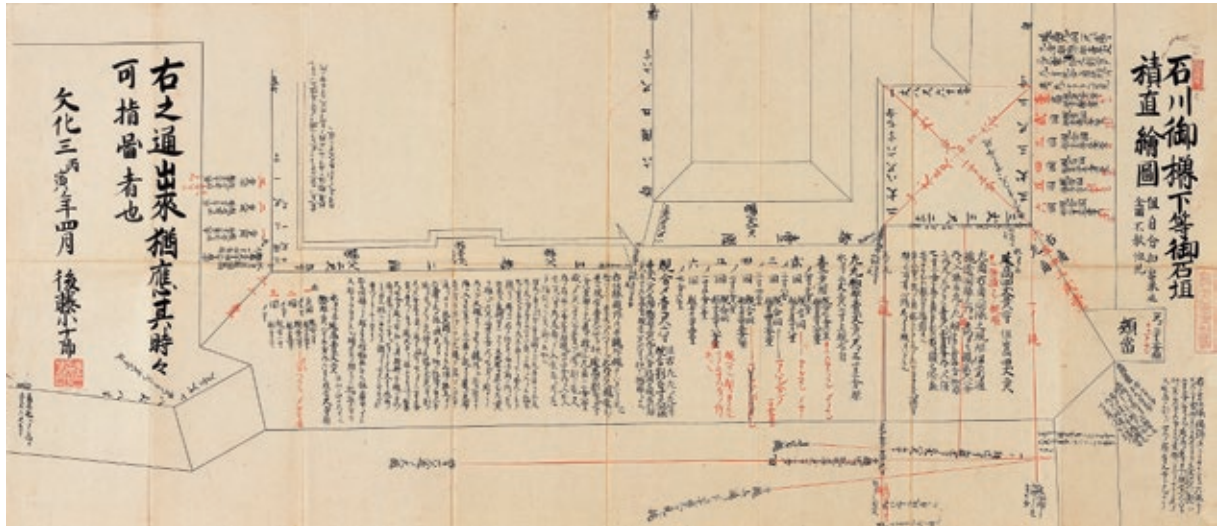
昭和10年（1935）には石川門が国宝保存法により国宝に指定され、昭和25年（1950）には文化財保護法により重要文化財に移行した。

昭和28～34年（1953～1959）には国の文化財保護委員会の直営工事として保存修理工事（記録写真（文化庁保管）：第10～13図）が実施された。表門と脇の北方・南方太鼓塀、附属左方・右方太鼓塀は全解体、二ノ門、続櫓、石川櫓は半解体している。附属太鼓塀は各間に隠し狭間、塀内側の板塀を腰板付土塀に復した。太鼓塀控柱は既に鉄筋コンクリート製であった。解体により太鼓塀の本柱に上下2段の貫穴が確認できたことから、もとは木製の控柱であることが推定されたが、予算面や根腐れの不安からコンクリート製控柱の補修に留め変更されなかった。水ノ手門はコンクリート製控柱であったが、控柱を建て猿甲屋根造りに変更した。石垣は上部で孕んだところは積み直し、沈下した所は石を取り替え、既にないところはコンクリートの裏込めにて積み直した。地覆石は小さく折れたものは取り替えられ、モルタルで据え直された。附属太鼓塀及び出しと水ノ手門の内部にはコンクリート洗い出し塗りの武者走りを構築して排水を良くし建物の保存に留意している〔石川県金沢城調査研究所2010b〕。

昭和の保存修理工事以降は自然災害による修理等があった。昭和55年（1980）には石川門櫓の屋根や漆喰塗り直し等の修理が行われた。平成12年（2000）には金沢城公園開園に備えて、表門、表門北方太鼓塀、櫓門、櫓、附属太鼓塀の応急補修が行われた。附属太鼓塀は城内側の漆喰壁の上塗り直し、腰板腐食部分の取り替え、隠し狭間の木部を補修、屋根瓦の葺き直しを行っている。控柱は鉄筋の腐食による破損部分の補修と見付と両側面の三方に化粧板を貼り整備している。水ノ手門は控柱の根継ぎ、屋根瓦葺き直しが行われ、現在の保存修理に至っている。



第3図 金沢城全体図（「御城中巻分碁絵図」横山隆昭家蔵に加筆）



文化3年 (1806)

「石川御櫓下等御石垣積直絵圖」(金沢市立玉川図書館蔵)

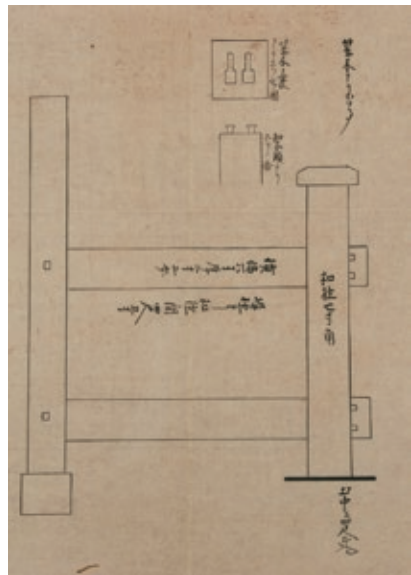
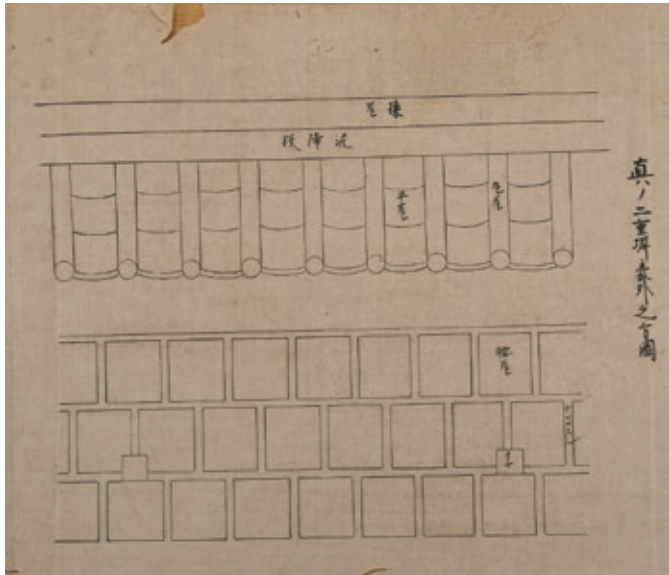
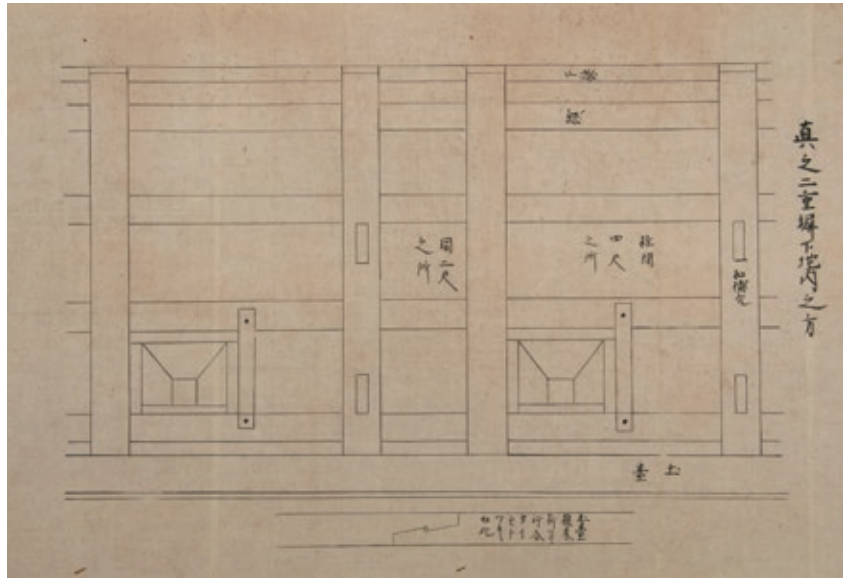


千時弘化五申歳三月御建替言附^{〔主〕}

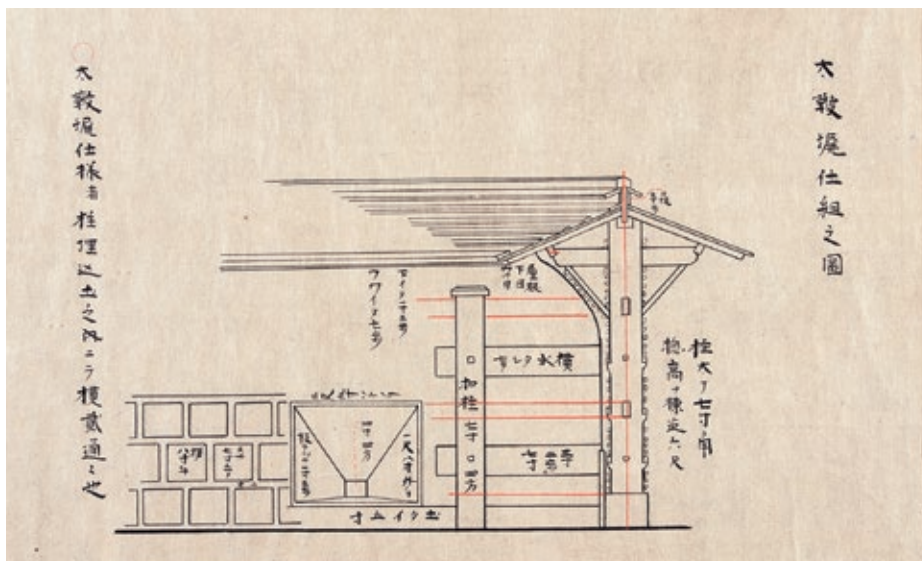
御大工	中山藤右衛門	屋根方棟梁	沖田仁右衛門	取	梅村善治	頭	取	谷古之丞
言附	井上太左衛門	御扶持方大工	五十嵐忠平	頭	渡辺武兵衛	屋根方	森田清蔵	若松善右衛門
					忝波清助		森田清蔵	
					梅村善治		森田清蔵	
					頭		森田清蔵	
					取		森田清蔵	
					村山太八郎		森田清蔵	
					忝倉勘助		森田清蔵	

弘化5年3月棟札 (独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所提供)
 ※昭和保存修理工事時、出し2から発見

第4図 石川門附属太鼓塀関連絵図1・弘化5年棟札



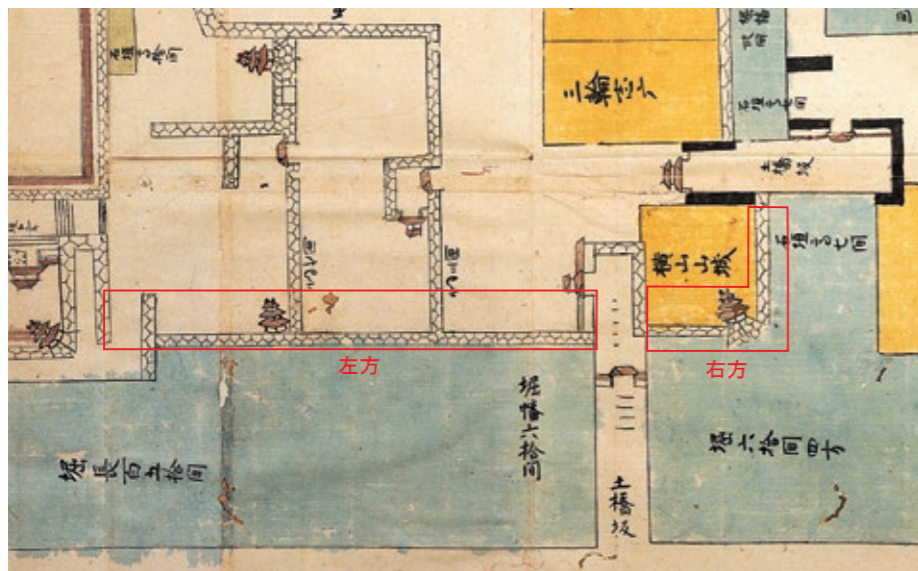
「造作弁図解」 (金沢市立玉川図書館蔵)



天保 15 年 (1844)

「加州金沢御城来因略記」 (石川県立図書館蔵)

第 5 図 石川門附属太鼓塀関連絵図 2



1 元和7年(1621)頃 「加州金沢之城図」(東京大学総合図書館蔵)



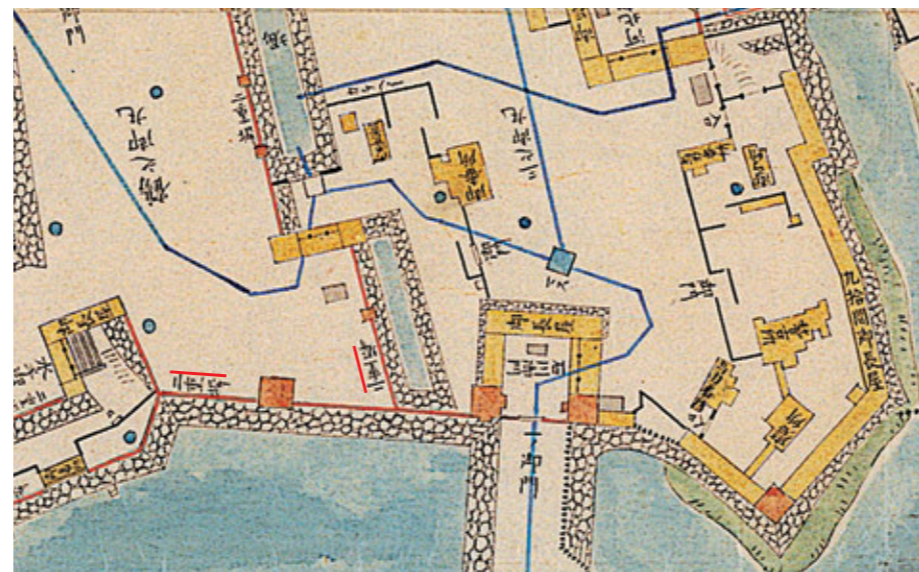
4 延宝4年~元禄年間(1676~1704) 「金沢城絵図」(石川県立歴史博物館蔵)



※2枚の絵図を合成
7 宝暦大火以前 「金沢城中地割絵図」甲号④三之御丸(金沢市立玉川図書館蔵)



2 万治2年~延宝4年(1659~1676) 「金沢城内絵図」(滋賀県立安土城考古博物館蔵)



5 享保5年~元文5年(1720~1740)頃 「金沢城図」(金沢市立玉川図書館蔵)



8 宝暦10年(1760) 「金沢城之図」((公財)前田育徳会蔵)



3 寛文8年~延宝年間(1668~1681) 「加賀国金沢之絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)



6 宝暦5年(1755) 「金沢城図」②三之御丸(金沢市立玉川図書館蔵)



9 文政8~天保3年(1825~1832) 「御城中老分基絵図」(横山隆昭家蔵)

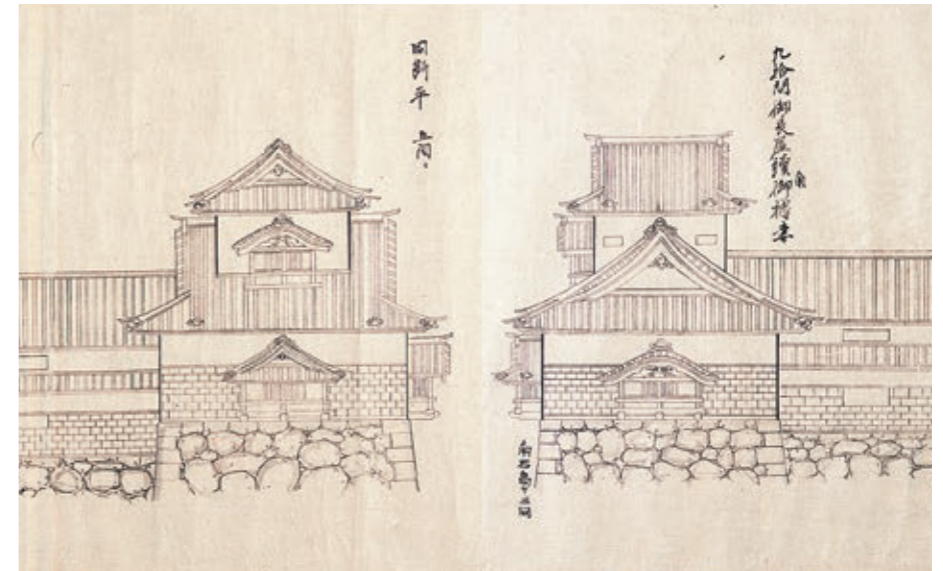
第6図 石川門附属太鼓塀関連絵図3 ※絵図の年代は景観年代を示す。



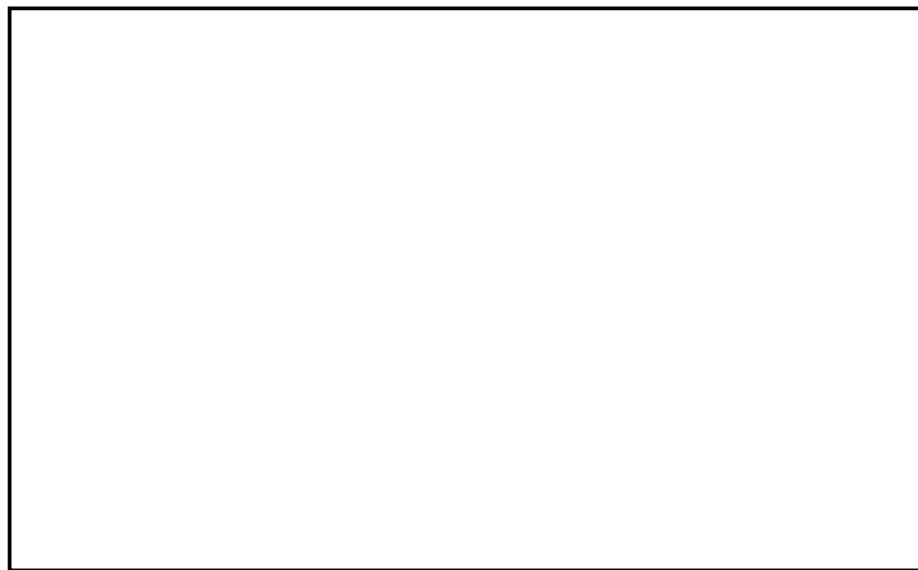
10 天保5～9年(1834～1838) 「金沢御城内外御建物図」((公財)前田育徳会蔵)



13 明治40年(1907) 「金沢旧城郭之図」(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵)



16 天保15年(1844) 「加州金沢御城来因略記」(石川県立図書館蔵)



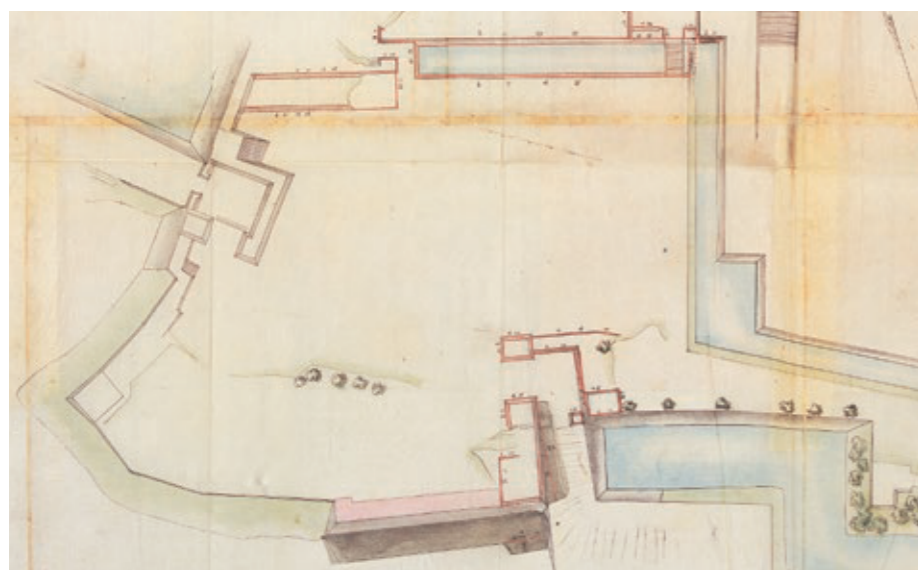
11 弘化2年～嘉永3年(1845～1850) 「御城分間御絵図」((公財)前田育徳会蔵)



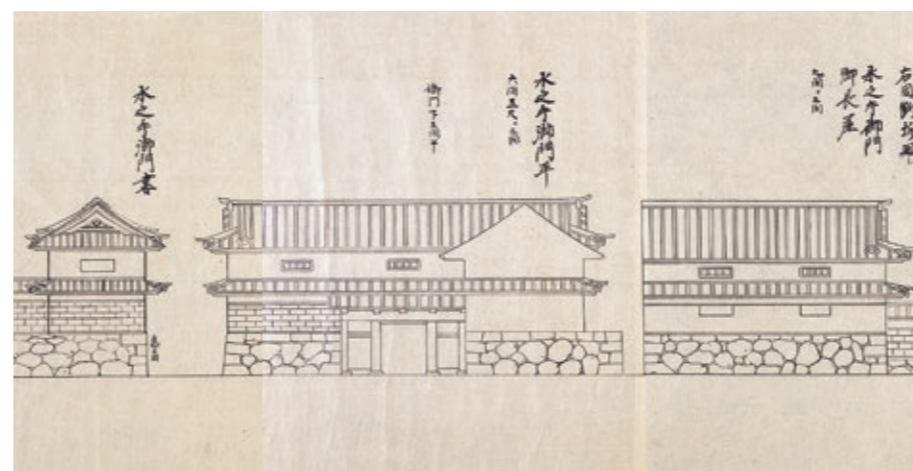
14 昭和20年(1945) 「歩兵第七連隊図」(石川県立歴史博物館蔵)



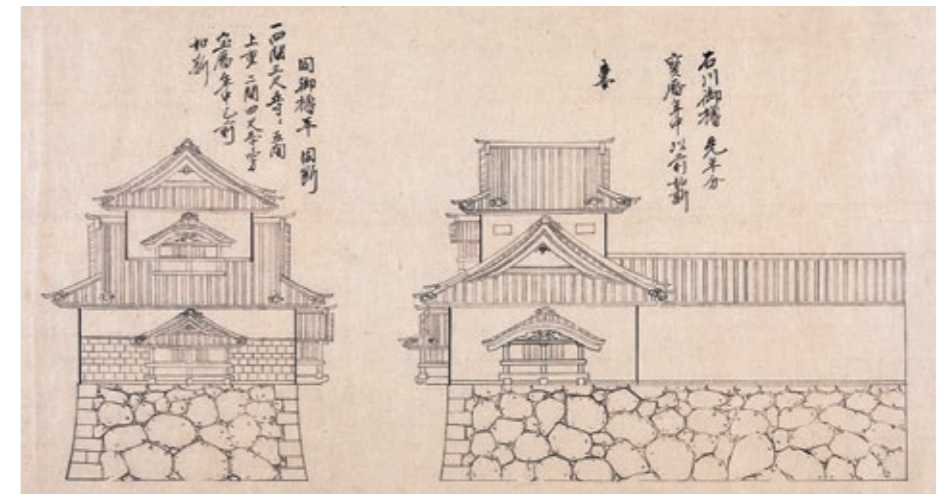
17 天保15年(1844) 石川門 正面(宝暦大火後) 「加州金沢御城来因略記」(石川県立図書館蔵)



12 明治9年(1876) 「金沢城三ノ丸之図」(防衛省防衛研究所戦史研究センター蔵)

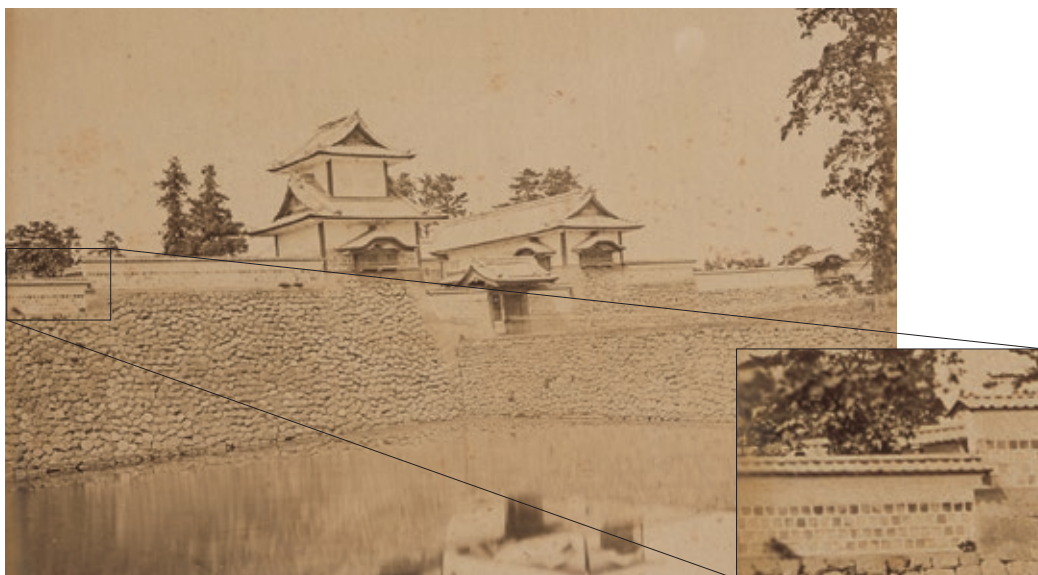


15 天保15年(1844) 「加州金沢御城来因略記」(石川県立図書館蔵)



18 天保15年(1844) 石川門 石川櫓(宝暦大火前) 「加州金沢御城来因略記」(石川県立図書館蔵)

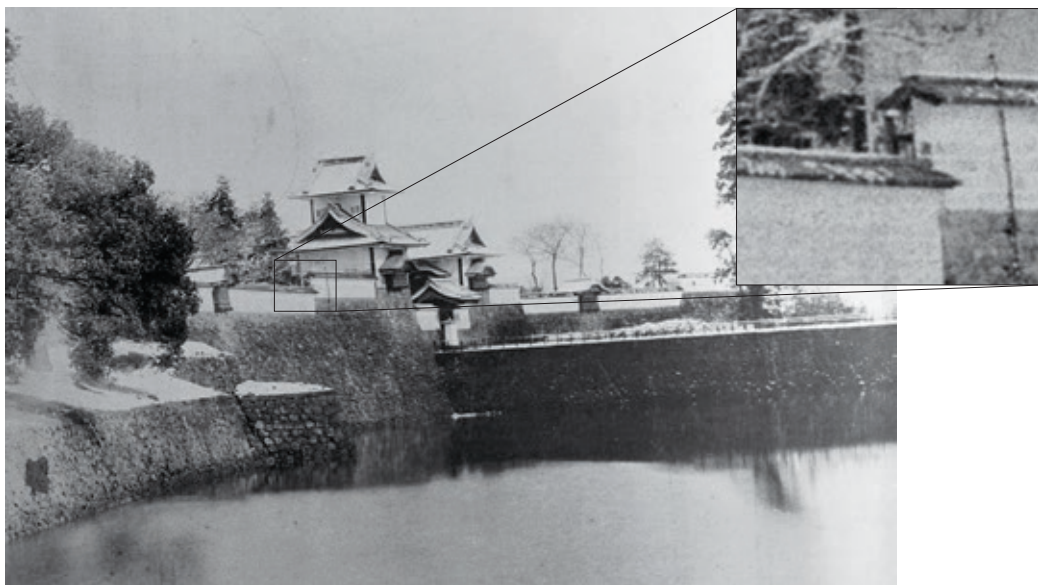
第7図 石川門附属太鼓塀関連絵図4 ※絵図(10・11)の年代は景観年代を示す。



1 「石川県下金沢旧城百間堀之図」『北陸東海両道写真』 (宮内庁書陵部図書寮文庫蔵)

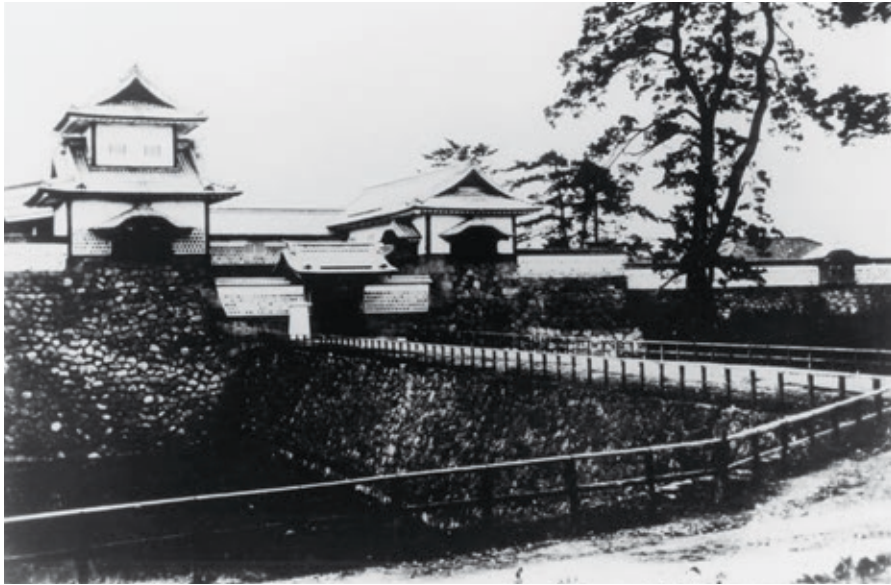


2 (金沢大学附属図書館蔵)



3 (独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所提供)

第8図 明治期石川門全景 古写真1



4

(『金沢城跡—金沢城跡遺構実態調査概要報告書—』より転載)



5

(大友佐俊蔵)



6

(個人蔵)

第9図 明治期石川門全景 古写真2



①檜台（西部）
扉上下の取付き



②檜台（東部）
海鼠塀の漆喰は上塗りのみ



③二ノ門脇外隅



④二ノ門脇（外側）
腰瓦は貝折れ釘にて留められている

※撮影箇所は第15図参照

第10図 昭和保存修理工事 右方太鼓塀修理前1



⑤新丸側太鼓塀（外側）



⑥檜台周辺



⑦新丸側太鼓塀（内側）

※撮影箇所は第15図参照

第11図 昭和保存修理工事 右方太鼓塀修理前2



⑧石川櫓（南側）
石垣の沈下箇所



⑨三ノ丸東石垣
塀上下の取付き



⑩水ノ手門周辺（外側）



⑪水ノ手門・右塀上下の取付き

※撮影箇所は第16図参照

第12図 昭和保存修理工事 左方太鼓塀修理前1



⑫水ノ手門周辺
石垣 (ID1221N)・塀の取付き



⑬水ノ手門 (正面)

※撮影箇所は第16図参照

第13図 昭和保存修理工事 左方太鼓塀修理前2

第4節 既往の調査成果

1. 金沢城の発掘調査

金沢城跡における埋蔵文化財調査は、昭和43年の金沢城学術調査委員会が実施した本丸・二ノ丸等の学術調査が端緒である。昭和50～61年には、金沢大学が主体となり大学施設設置工事に伴う事前調査が実施された。

平成4～6年には、石川県土木部が所管する都市計画道路整備に伴い、石川県立埋蔵文化財センターが石川門前土橋、車橋門の一部で調査を実施している。平成8年に石川県が金沢城跡の用地を国から取得したことに始まる金沢城公園整備事業に伴い、平成9～13年にかけて石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降、(財)石川県埋蔵文化財センター）が、二ノ丸内堀・菱櫓、本丸附段、三ノ丸等の調査を実施した。

平成13年には、石川県教育委員会文化財課に金沢城研究調査室（平成19年度に石川県金沢城調査研究所に改組）が開設され、絵図・文献、埋蔵文化財、建造物、石垣等伝統技術の4分野から総合的な調査研究が開始された。初期金沢城の解明を目的とした埋蔵文化財確認調査事業（国庫補助）は、平成14年度から継続的に実施されている。調査では、本丸・東ノ丸を中心にして、石垣の構築過程、本丸大手通路（虎口）の変遷過程、本丸の造成状況、庭園遺構の検出等、多くの成果がある。

平成15年度以降、公園整備事業に伴う調査が行われ、いもり堀・河北門・玉泉院丸・橋爪門で復元整備に係る確認調査が実施された。橋爪門は平成22年度からの調査で、既に復元整備された一ノ門以外の桁形部分と二ノ門部分を調査範囲とした。遺構は近代以降の改変により大きく失われていたが、柱の根固め痕跡や二ノ門下の石組暗渠、続櫓台石垣の痕跡から寛永以降の二ノ門の規模と変遷が確認された。玉泉院丸は平成20年度からの調査で、庭園を構成する池や島、滝石組、色紙短冊積石垣下滝壺の石組等の遺構を検出し、庭園最終段階の地形や池に至るまでの水の流れを明らかにした。

他に県教育委員会事業として石川門附属太鼓塀（本報告）、都心地区整備推進事業として、(財)石川県埋蔵文化財センターが城の外郭部にあたる堂形で調査を実施している。

2. 石川門附属太鼓塀周辺の調査

平成4～6年度（1992～94）調査（石川門前土橋） 石川門土橋は、兼六園と石川門を繋ぐ土橋である。県土木部が所管する都市計画道路寺町今町線道路整備事業に伴う調査を石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査により土橋は自然地形を利用したものではなく、盛土により形成されていることが判明し、変遷も明らかとなった。また、堀が形成される以前の遺構面では、鍛冶・铸造関連遺構が確認されていることから、近隣一帯に金属加工職人をはじめとした手工業生産者が集まっていたと考えられ、土橋構築以前の様相を知る貴重な資料である〔石川県立埋蔵文化財センター1997・1998〕。

平成9～11年度（1997～1999）調査（二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓） 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等建物復元に伴う調査を石川県立埋蔵文化財センター（平成10年以降、(財)石川県埋蔵文化財センター）が実施した。二ノ丸・鶴ノ丸と三ノ丸を画する二ノ丸内堀の調査では、明治期以後の埋土を除去し、延長約340mの堀が検出された。また、三ノ丸から橋爪門に架かる橋（内堀橋と呼称）の基礎構造の変遷等が判明した。橋周辺では近世段階の堆積土が遺存しており、架橋に係る儀礼により旧脚付近に置かれたと考えられる鏡・刀・銅銭の他、建築部材等が出土した。菱櫓・続櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓台の上面の調査では、明治

14年に焼失した建物の礎石が確認され、絵図との照合等から、基礎構造の在り方やおよその柱位置・柱筋が判明した。また菱櫓・五十間長屋北半では、宝暦9年の大火以前に遡る礎盤が検出された。これらは寛文8年櫓台修築後の建物基礎と判断され、近世前期の櫓・長屋の主たる基礎が掘立柱であったことが判明した。

櫓（長屋）台石垣の解体調査では、寛永8年構築・寛文8年修築・宝暦13年修築・文化5年修築の4つの段階について、範囲及び盛土・裏込め等を含む内部構造が確認され、郭整備と一体化した櫓（長屋）台の造成状況や、その後の修築過程が明らかになった。加えて石垣の構築・修築時期ごとの石垣の特徴が明らかとなり、金沢城石垣の編年の土台となった〔石川県金沢城調査研究所2011c・2012a〕。

平成10年度（1998）調査（三ノ丸第1次）（財）石川県埋蔵文化財センターによって三ノ丸北東部の公園施設建設予定地が調査された。絵図・文献から、天正期～慶長期にはこの付近は村井・横山といった重臣の屋敷地があり、江戸後期には「御鉄砲所」が置かれていたとされる。調査では、近世末期の層位から鍛冶関連遺構や火縄銃の部品が多数出土し、城内に鉄砲鍛冶場があったことが確認された。それ以前の遺構としては、初期金沢城～近世前期に遡るとされる石敷遺構や落ち込み等が検出された〔金沢城研究調査室2006a〕。

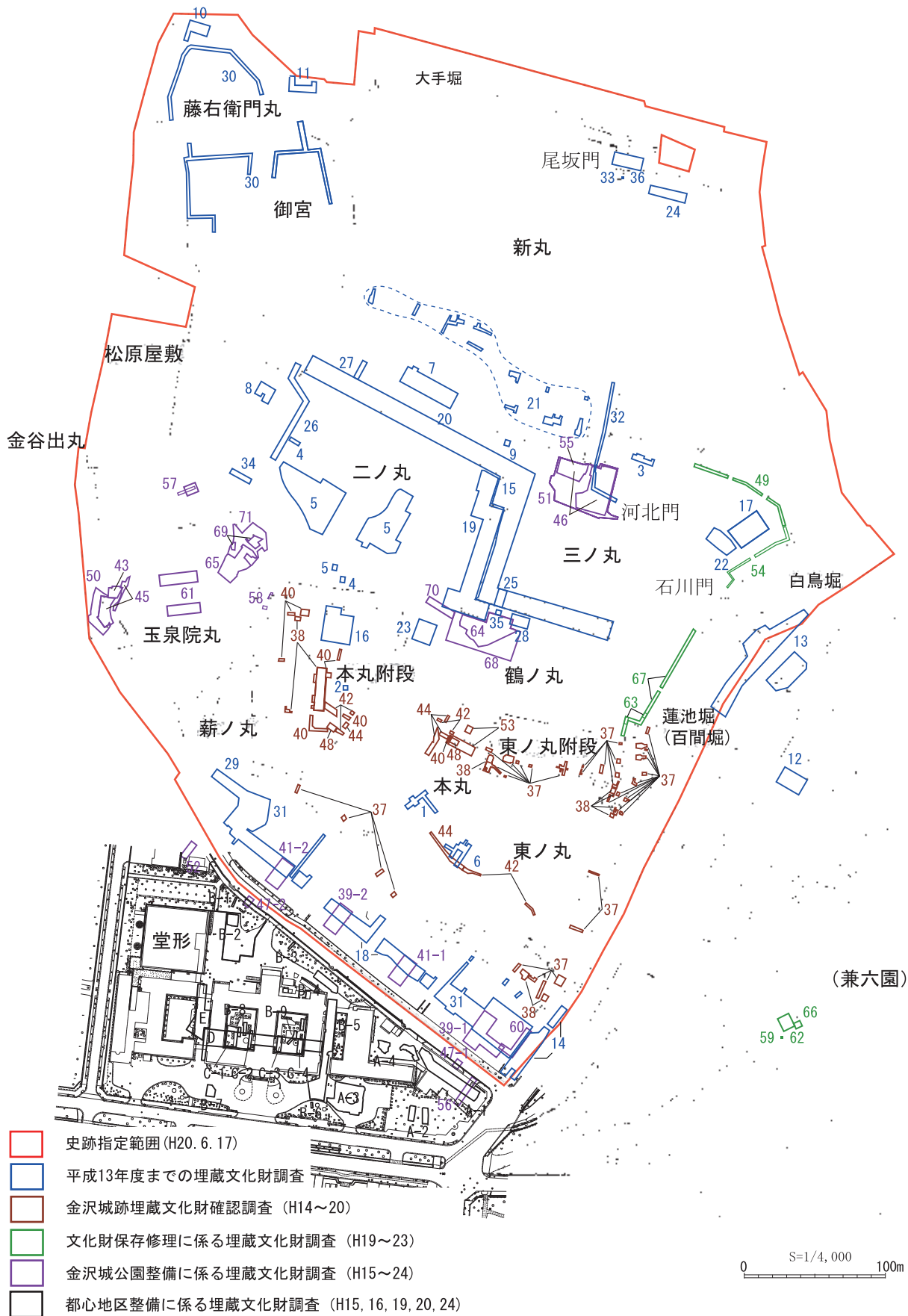
平成11年度（1999）調査（三ノ丸第2次）（財）石川県埋蔵文化財センターによって三ノ丸北東部の公園施設建設予定地が調査された。三ノ丸第1次調査地点と隣接しており、絵図・文献から重臣屋敷地の後に「御細工所」が設置され、17世紀後半頃に弓・鉄砲の修練場や与力番所が置かれていたとされる。調査では17世紀中頃と思われる石組井戸や石組の室状遺構、17世紀後半から明治初期まで機能していたと思われる建物の礎石を検出している。礎石は近代の盛土直下に展開していた遺構であり、絵図との比較からも与力番所の最終段階の遺構と判断された〔（財）石川県埋蔵文化財センター2002a〕。

平成14年度（2002）調査

（埋蔵文化財確認調査2002-1地点） 初期金沢城の構造解明を目的とした遺構確認調査で金沢城研究調査室が実施している。調査区は鶴ノ丸の南東部にあたる。近代以降の土層下で近世の路面とみられる整地層と水ノ手門東側の柱基礎となる戸室石の礎石を検出している。絵図との比較検討から近世前期の門に伴う礎石と考えられている〔石川県金沢城調査研究所2008a〕。

（埋蔵文化財確認調査2002-14地点） 調査区は蓮池堀縁の通称「おちよぼが井」といわれる井戸の周辺にあたる。近世末期以降の土砂の堆積が厚く、上部の凝灰岩製の井戸側は近世末期に遡らないことが判明した。また調査区南西では厚さ10cmを測る戸室石製の板石の一部が2段検出され、絵図で確認される階段の一角の可能性が指摘されている〔石川県金沢城調査研究所2008a〕。

平成18～20年度（2006～2008）調査（河北門） 河北門復元整備事業に伴い平成18～20年度に金沢城調査研究所が実施した。枅形門を構成した、二ノ門やニラミ櫓、土塀、土塁等の石垣根石部分や柱の礎石、礎石の基礎となる根固め、石組溝とそれに取り付く枅や暗渠、路面等を検出した。創建時期は石垣の根石と築石から慶長後期頃と推定され、その後、寛文期と宝暦の大火後の2回の改修があったことが確認された。二ノ門の内部では、礎石に残る錆の痕跡から側柱の規模や添え柱あったことが明らかとなった。枅形門が創建される以前は、大型土坑や土塁状の盛土等から郭として整備されていたと推定される。その後、河北坂から三ノ丸へ続く版築状盛土によって造成され、一ノ門付近で礎石根固と思われる集石遺構やニラミ櫓台以前から石垣台が存在していたことが確認されたことから、初期の絵図に見られる様な、坂下の門に坂上の平入り門といった河北門の姿が想定されている〔石川県金沢城調査研究所2011b〕。



第14図 金沢城跡発掘調査位置図 (～平成24年度)

第3表 金沢城跡発掘調査一覧(1)

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
1	本丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	四脚門・礎石建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
2	本丸附段	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査		井上1969・吉岡1985・増山1999
3	三ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	川原石石積	井上1969・吉岡1985・増山1999
4	二ノ丸	昭和43(1968)	金大金沢城調委	学術調査	能舞台跡・台所跡・極楽橋付近建物跡	井上1969・吉岡1985・増山1999
5	二ノ丸	昭和44(1969)	県教委・金大	校舎増築	殿舎跡・排水施設・用水路	県教委1970・吉岡1985・増山1999
6	本丸	昭和44(1969)	県教委・金大	学術調査	三階櫓・三十間長屋跡	県教委1970・吉岡1985・増山1999
7	四十間長屋	昭和50(1975)	金大	学生会館別館建設	長屋礎石・櫓石垣	上野1976・吉岡1985・増山1999
8	二ノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査	明治14年焼失の御殿跡	佐々木1981・吉岡1985・増山1999
9	三ノ丸～四十間長屋間通路	昭和54(1979)	金大考古学研究室	無線アンテナ設置	大型礎石	佐々木1980・吉岡1985・増山1999
10	藤右衛門丸北側法面裾部	昭和56(1981)	金大考古学研究室	擁壁設置	石垣列・瓦	貞末他1986・増山1999
11	黒門横北側懸崖部	昭和61(1986)	金大考古学研究室	境界崖部崩落防止工事	石垣列・切石側溝、瓦	貞末他1989
12	兼六園(江戸町推定地)	平成元(1989)	県埋文センター	店舗改築	17世紀初期の遺構面(礎石建物等)	県埋文センター1992
13	石川門前土橋(石川橋)	平成4 6(1992 94)	県埋文センター	道路整備	土橋の形成過程 16世紀後半頃の鍛冶関連遺構等	県埋文センター1997・1998
14	車橋	平成6(1994)	県埋文センター	道路整備	石垣	県埋文センター1996
15	内堀第1次・菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備(復元整備)	堀・橋脚(埋置された刀・鏡・銭)・菱櫓礎石等	金沢城調査研究所2011c・2012a
16	本丸附段	平成10・12(1998・2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	階段跡	滝川1999、湊屋・土田他2001
17	三ノ丸第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	鉄砲所跡(鍛冶場遺構)、鉄砲部品	金沢城研究調査室2006a
18	いもり堀第1次	平成10(1998)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	天正～元和頃の堀・土橋、元和以後の堀・櫓台	三浦1999
19	五十間長屋	平成10 11(1998 99)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	石垣内部構造 櫓・長屋礎石、17世紀初頭の遺構面	金沢城調査研究所2011c・2012a
20	内堀第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	西半北側石垣の構造把握	金沢城調査研究所2011c・2012a
21	新丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	近代に埋没した堀の範囲確定	土田2000
22	三ノ丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	礎石建物(番所跡)、石組井戸	(財)県埋文センター2002a
23	鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	木樋・石樋(辰巳用水)	土田2000
24	新丸第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(施設建設)	16世紀後半から末期頃の遺構面	(財)県埋文センター2002a
25	橋爪門外橋橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	橋脚基礎の構造把握	金沢城調査研究所2011c・2012a
26	二ノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	礎石、石組遺構	(財)県埋文センター2001
27	三ノ丸第3次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備(設備設置)	土坑	金沢城調査研究所2011c・2012a
28	鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(復元整備)	16世紀末期頃の遺構面	湊屋・土田2001
29	いもり堀第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	慶長後半から元和年間の石垣	湊屋・土田2001
30	北ノ丸第1次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園地整備)	火葬遺構、空堀跡、石瓦等	湊屋・土田2001
31	いもり堀第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	元和以前の堀・土橋・土俵護岸 金箔瓦	湊屋・土田他2001
32	三ノ丸第4次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	河北門石垣台・礎石、16世紀後半～末期頃の遺構面	加藤2001、金沢城調査研究所2011b
33	新丸第3次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	尾坂門石段、16世紀後半～末期頃の遺構面	湊屋・土田他2001
34	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	石段、石組溝	富田・湊屋2002
35	橋爪門枘形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(園路整備)	土坑、ピット	富田・湊屋2002
36	尾坂門	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備(植栽)	石組溝、路面	富田・湊屋2002
37	本丸周辺	平成14(2002)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸虎口変遷の把握	金沢城調査研究所2008a
38	本丸周辺	平成15(2003)	金沢城研究調査室	学術調査	三十間長屋統櫓台石垣の調査等	金沢城調査研究所2008a

金沢城跡発掘調査一覧（2）

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因	備考	文献
39	いもり堀	平成15(2003)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	鯉喉槽台の検出	金沢城研究調査室2004a
40	本丸周辺	平成16(2004)	金沢城研究調査室	学術調査	寛永大火以前の2面の遺構面	金沢城調査研究所2008a
41	いもり堀	平成16(2004)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	築城当初の堀の規模を確認	金沢城研究調査室2004a
42	本丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	学術調査	本丸三階槽石垣	金沢城研究調査室2006d
43	玉泉院丸	平成17(2005)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	近代の改修、石垣上部の二重塙の基礎構造の把握	金沢城調査研究所2010a
44	本丸	平成18(2006)	金沢城研究調査室	学術調査	元和期の大規模造成、初期金沢城の礎石建物	金沢城研究調査室2007a
45	玉泉院丸(南西石垣)	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(石垣修築)	部分修理の把握、初期金沢城石垣	金沢城調査研究所2010a
46	河北門	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	残存状況、規模、改修、創建時期の把握	金沢城研究調査室2007d・金沢城調査研究所2011b
47	いもり堀	平成18(2006)	金沢城研究調査室	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城研究調査室2007a
48	本丸	平成19(2007)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2008d
49	石川門(右方太鼓塙)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2008d・本報告
50	玉泉院丸(南西石垣)	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(石垣修築)	改修範囲と時期、初期金沢城石垣の変遷の確認	金沢城調査研究所2010a
51	河北門	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	桁形門創建前(慶長後期以前)の遺構確認	金沢城調査研究所2008d・2011b
52	いもり堀	平成19(2007)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	南岸の位置確認	金沢城調査研究所2008d
53	本丸	平成20(2008)	金沢城調査研究所	学術調査	寛永8年大火以前の大規模遺構	金沢城調査研究所2009b
54	石川門(右方太鼓塙)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2009b・本報告
55	河北門	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石垣解体調査(ニノミ槽台、ノ門類当)	金沢城調査研究所2009b・2011b
56	いもり堀	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	堀の南岸、辰巳用水石管、近世初期の石垣、石列等	金沢城調査研究所2009b
57	玉泉院丸(泉水)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	泉水北部の遺構確認	金沢城調査研究所2009b
58	玉泉院丸(いもり坂石垣)	平成20(2008)	金沢城調査研究所	公園整備(遺構確認)	石垣変形箇所の基底部試掘	金沢城調査研究所2009b
59	兼六園榮螺山	平成21(2009)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	金沢城調査研究所2010d・金沢城兼六園管理・調査研究所2012
60	いもり堀	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	鯉喉槽台石垣東部の残存状況確認、部解体	金沢城調査研究所2010d
61	玉泉院丸	平成21(2009)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	泉水中央部、北部の遺構確認(中島、出島、景石等)	金沢城調査研究所2009c・2010d
62	兼六園榮螺山	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣解体調査	金沢城調査研究所2011d・金沢城兼六園管理・調査研究所2012
63	石川門(左方太鼓塙)	平成22(2010)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2011d・本報告
64	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠	金沢城調査研究所2011d
65	玉泉院丸	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	泉水北東部の遺構確認(護岸石組・景石等)	金沢城調査研究所2010c
66	兼六園榮螺山	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(石垣修築)	石垣・石造物の解体調査	金沢城調査研究所2012b・管理事務所・調査研究所2012
67	石川門(左方太鼓塙)	平成23(2011)	金沢城調査研究所	文化財修理(建造物)	控柱跡の確認	金沢城調査研究所2012b・本報告
68	橋爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	二ノ門礎石根固坑、石組暗渠、近世初期遺構	金沢城調査研究所2012b
69	玉泉院丸	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	色紙短冊積石垣下の遺構確認	金沢城調査研究所2012b
70	橋爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	石組暗渠、石垣台、桁形路面	金沢城調査研究所2013b
71	玉泉院丸	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備(復元整備)	色紙短冊積石垣周辺と滝石組上部の遺構確認	金沢城調査研究所2013b
A	県庁跡地(堂形)	平成15(2003)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	焼米(堂形米蔵関連遺物)、近世初期以前土塁遺構	伊藤2004・(財)県埋文センター2010
B	県庁跡地(堂形)	平成16(2004)	(財)県埋文センター	都心地区整備(確認調査)	足輕番所、堂形馬場	伊藤2005・(財)県埋文センター2010
C	県庁跡地(堂形)	平成19(2007)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	古代～近世の遺構面	林2008・(財)県埋文センター2012
D	県庁跡地(堂形)	平成20(2008)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	堂形建物、石垣、堀跡、古代～中世の遺構面	加藤2009・(財)県埋文センター2012
E	県庁跡地(堂形)	平成24(2012)	(財)県埋文センター	都心地区整備(施設建設)	石列、石組遺構	熊谷2013

県教委:石川県教育委員会 県埋文センター:石川県立埋蔵文化財センター (財)県埋文センター:石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター(2013年度から公益財団法人)
 金沢城研究調査室:石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 金沢城調査研究所:石川県金沢城調査研究所
 管理事務所・調査研究所:石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所

第3章 調査の概要

第1節 調査の目的

附属太鼓塀の控柱は昭和保存修理工事（28～34年）前には既にコンクリート製控柱に変更されていた。コンクリート製控柱に変更される以前の構造は前回の保存修理の際に知られていたが、事前調査によって改めて太鼓塀の本柱に上下2段の貫穴が確認されたこと、金沢城建築物の雛形図集と考えられている「造作弁図解」から木製の控柱を垂直に掘立、上下2段の貫を通す構造であったと理解された。

埋蔵文化財調査は事前調査で明らかとなった控柱の構造が掘立であることから、コンクリート製控柱の設置に伴う掘削等の影響が及んでいなければ、控柱の抜取痕や掘方が検出されることが想定され、控柱の位置や構造を明らかにして現状変更の根拠を得ることが目的であった。また、控柱の付け替えによる掘削から遺構の保護を図るための確認調査でもあり、解体工事との調整を図りながら、実施した。

第2節 調査区の設定

調査範囲は太鼓塀控柱部分の全面を対象とし、調査区の幅は、木製控柱の付け替えによって埋蔵文化財に影響の受ける範囲である、太鼓塀の基礎石から2.4mとした。

右方太鼓塀 平成19・20年度（2007・2008）（第15図）

出し（石落）3棟と太鼓塀から構成される。調査区は1～6区に区分した。1～3区は三ノ丸北辺（新丸側太鼓塀）の2棟の出しを境とし、4区は隅櫓台（九十間長屋続櫓台）、5区は三ノ丸東辺（白鳥堀側太鼓塀）の九十間長屋台上、6区は石川門番所裏の高台とした。コンクリート製控柱には、（財）文化財建造物保存技術協会による解体番付に準拠して番号を付した。

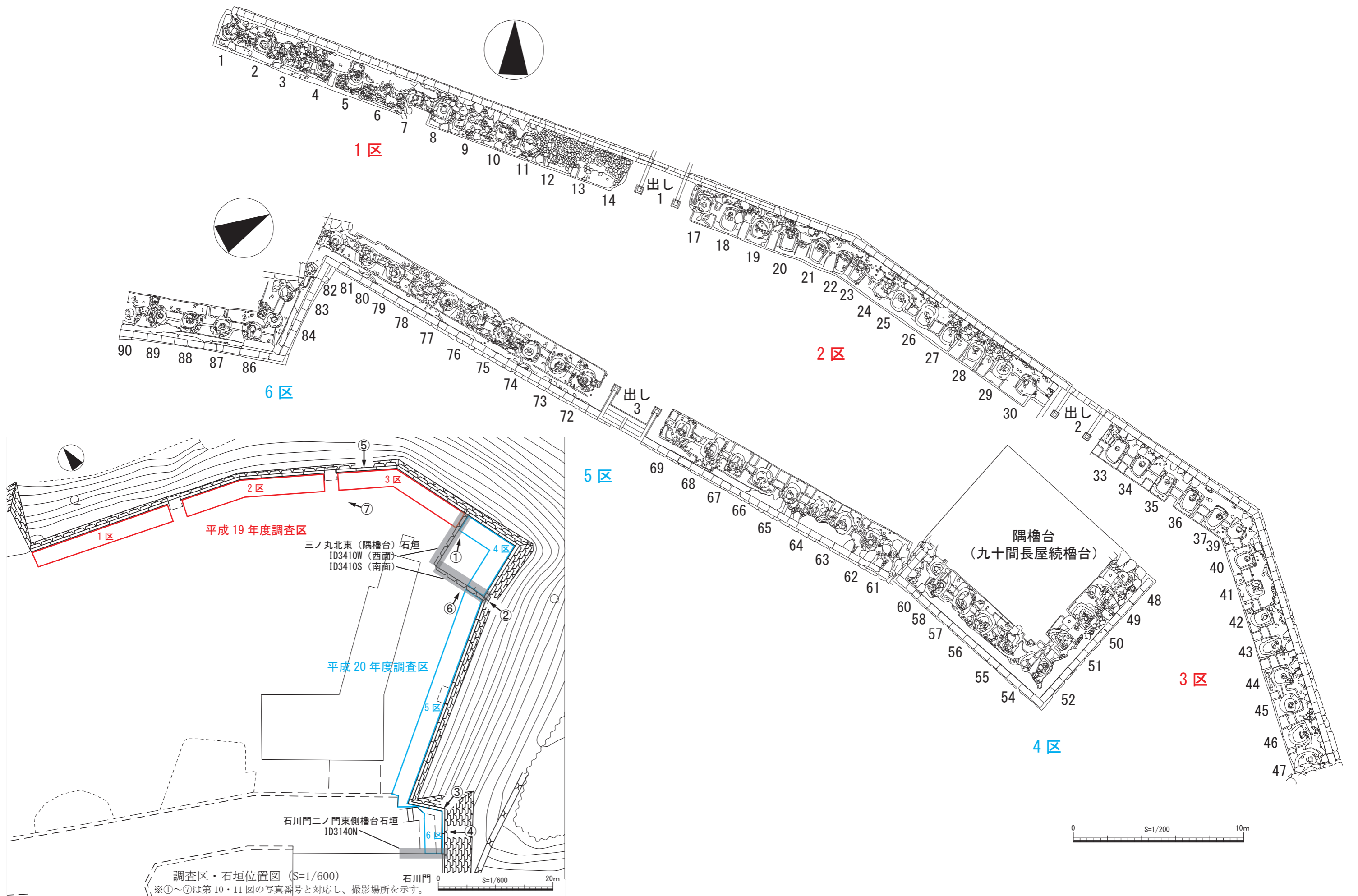
1区は1～14、2区は17～30、3区は33～37・39～47、4区は48～52・54～58・60、5区は61～69・72～81、6区は82～84・86～90とした。なお、15・16・31・32・70・71は出し、38・53・59・85は太鼓塀本柱に対してコンクリート製控柱がないため欠番とした。

左方太鼓塀 平成22・23年度（2010・2011）（第16図）

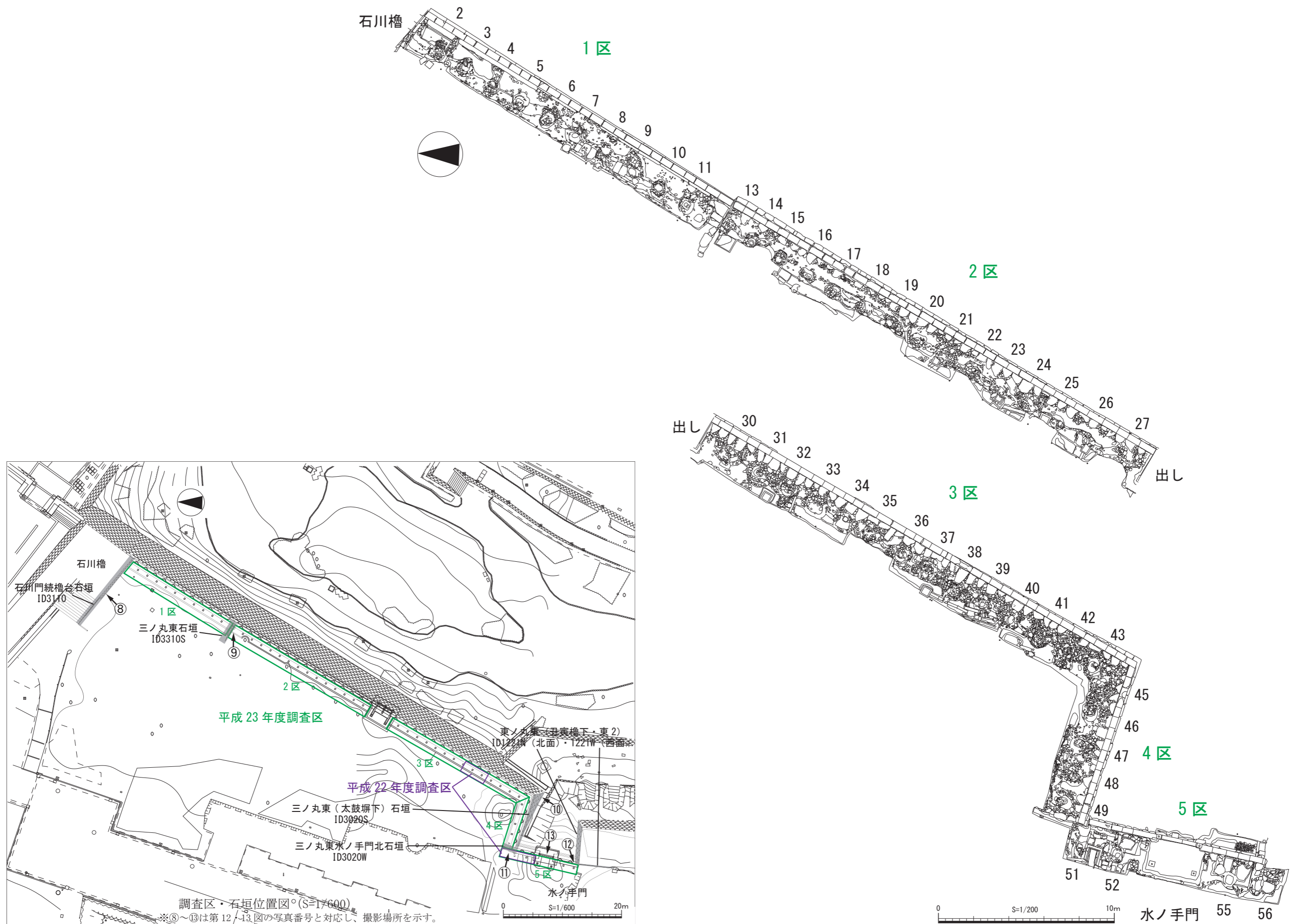
出し（石落）1棟と太鼓塀、南端の水ノ手門で構成される。調査区は1～5区に区分した。1区は石川櫓から三ノ丸と鶴ノ丸境の三ノ丸東石垣まで、2区は三ノ丸東石垣から出しまで、3区は出しから三ノ丸東（太鼓塀下）石垣の隅角部まで、4区は三ノ丸東（太鼓塀下）石垣の隅角部から水ノ手門まで、5区は水ノ手門と門の左右太鼓塀とした。コンクリート製控柱には右方太鼓塀同様に番号を付した。

1区は2～11、2区は13～27、3区は30～43、4区は45～49、5区は51・52・55・56とした。なお、28・29は出し、53・54は水ノ手門柱の控柱、1・12・44・50は本柱に対して控柱がないため欠番とした。

石垣については、調査で確認された部分を測量し、過年度に測量した部分と合成図化した。石垣の名称は金沢城内で統一したIDナンバーが付されている。



第15図 右方太鼓塀調査区全体図 (S=1/200)



第16図 左方太鼓塀調査区全体図 (S=1/200)

第4章 右方太鼓塀の調査成果

第1節 概要

右方太鼓塀は石川門表門（一ノ門）を正面にして右手にあたり、その範囲は三ノ丸北辺（新丸側太鼓塀）の鉢巻石垣上を隅櫓台まで至り、そこで屈曲して三ノ丸東辺（白鳥堀側太鼓塀）を石川門二ノ門まで至る。出し（石落とし）は北辺で2棟、東辺で1棟が配置されている。

宝暦の大火以前には、太鼓塀でなく、三ノ丸の北辺から東辺にかけて九十間長屋と隅櫓台には二重櫓（九十間長屋続櫓）があった。現況では九十間長屋の長屋台は、北辺（新丸側）では、郭内の嵩上げや削平によって、その痕跡を確認できないが、東辺（白鳥堀側）では部分的に長屋台石垣が確認される。宝暦の大火以降は、九十間長屋が河北門側の一部のみになり、長屋や櫓等が取り払われたところに太鼓塀が建てられた。調査で検出された控柱掘方の年代については、第2章3節石川門附属太鼓塀の沿革に従えば、宝暦大火後の太鼓塀創建、弘化5年の建て替え、明治中期頃の建て替えの3時期が少なくとも想定される。

既に刊行されている「金沢城石川門附属右方太鼓塀の発掘調査概要報告」[『金沢城の三御門』石川県金沢城調査研究所2010b]では、コンクリート製控柱以前の控柱掘方を昭和保存修理工事の際に出し2より発見された弘化5年建て替えの棟札により、「弘化控柱掘方」や「弘化以前の控柱掘方」として報告したが、古写真（第8図1）や解体修理の過程で、明治中期頃に建て替えが行われた可能性が生じ、左方の調査成果も含めた遺構・遺物の検討により、「控柱掘方」として報告する。

第2節 調査の方法

調査はすべて人力にて精査・掘削した。掘削土はベルトコンベアーにて搬出した。

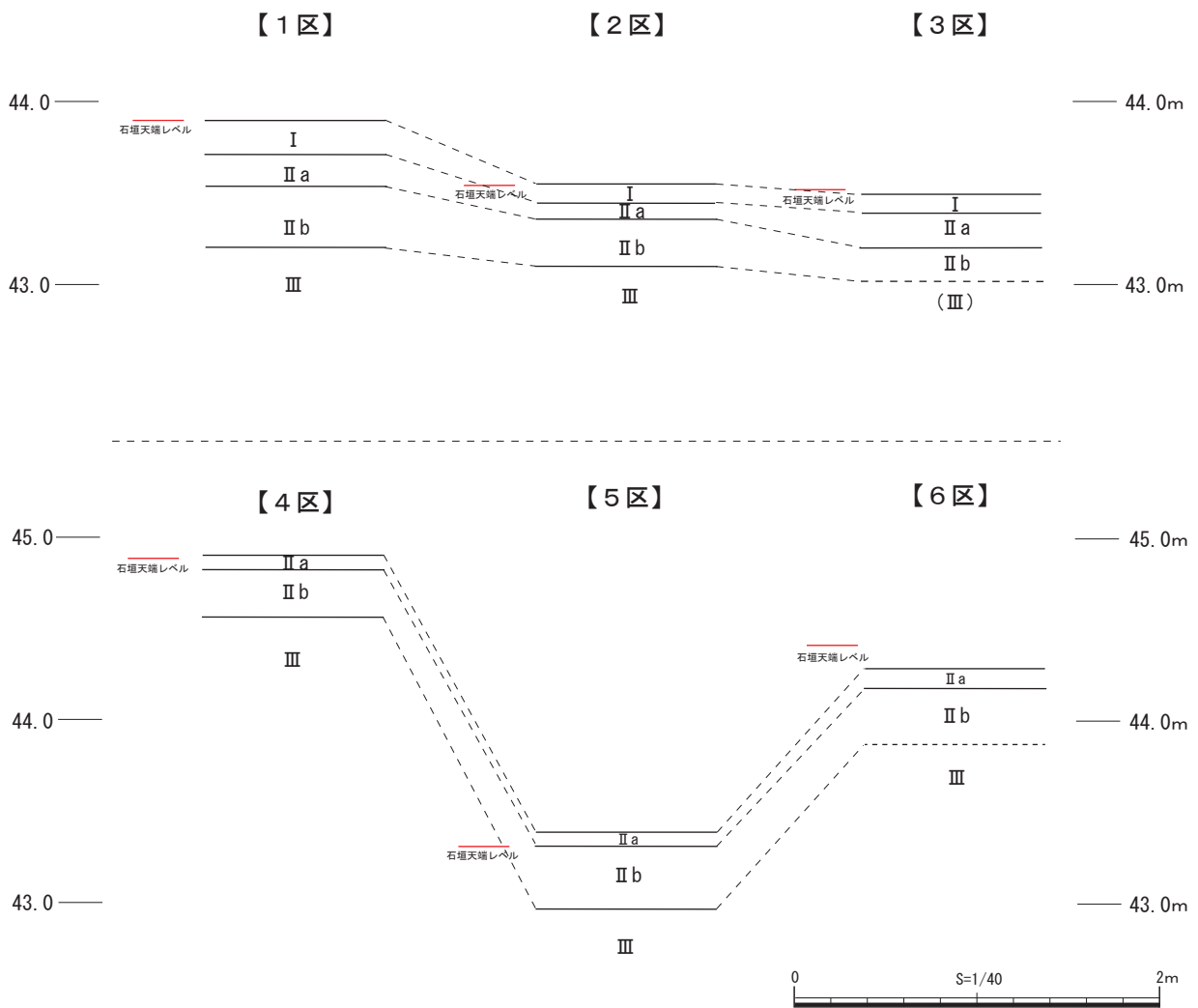
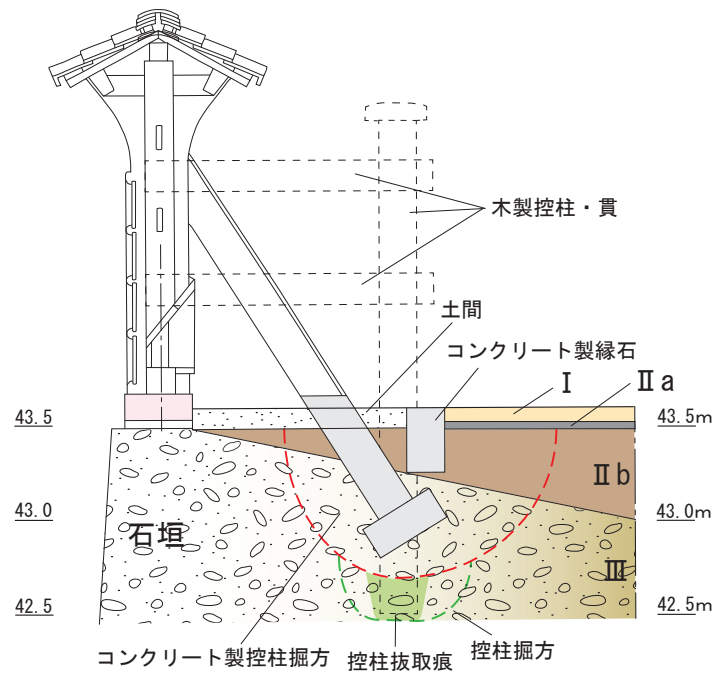
掘削はコンクリート洗い出し（土間）と縁石及びコンクリート製控柱とその基礎の撤去後（平成19年度は調査と並行して太鼓塀の解体が行われた）、昭和保存修理工事以降の公園整備整地土や表土層を掘削して、コンクリート製控柱掘方と縁石掘方を検出し、掘り下げた。その後、コンクリート製控柱掘方底面で精査し、控柱の抜取痕や掘方を検出した。コンクリート製控柱掘方底面という限られた検出範囲のために控柱掘方の全体形を検出した事例は少ない。控柱の掘方埋土については、検出にとどめたが、一部で構造や時期を推定する遺物を得る目的から半裁した。

調査記録については、各調査区に設定した控柱の掘方等の土層断面図作成、遺構の写真撮影以外の遺構平面図、石垣立面・断面図の測量図化は業者委託により実施した。

第3節 基本層序と時期区分（第17図）

調査区は長屋台や櫓台で高低差があり、基本層序は一様でない部分があるが、概ね大別4層に区分し、各々に時期を想定した。調査前の標高は1区が43.7～44.0m、2区が43.50～43.65m、3区が43.45～43.60m、4区が44.90～44.95m、5区が43.25～43.35m、6区が44.00～44.35mを測る。

I層は黄褐色土で、平成13年の全国都市緑化フェアに伴う公園整備土である。1～3区に約10～20cm程度で堆積する。3区に向かつては堆積が薄くなる。IIa層は黒褐色土で、昭和保存修理工事以降から金沢大学時代の旧表土である。約10cm程度で堆積している。IIb層は暗褐色土で近代～昭和保存修理竣工時までの堆積土である。約25cm～35cm程度で堆積する。コンクリート製控柱掘方・縁石掘方が上面で検出される。III層は黄褐色土または石垣裏込めの栗石で三ノ丸を形成する造成土と推定される。標高は不明確な部分もあるが、1区で43.2m、2区で43.1m、3区で43.0m（推定）、4区で45.6m、5区で42.9m、6区で43.9m（推定）を測る。太鼓塀が建っていた江戸期の景観を九十



第17図 太鼓塀断面・基本層序模式図 (S=1/40)

間長屋が取り払われた、長屋台上であると考え、石垣天端レベルより、1区で約70cm、2区で約45cm、3区で約50cm、4区で約30cm、5区で約25cm、6区で約55cm、近代以降の削平を受けたものと判断される。

第4節 遺構

コンクリート製控柱掘方と控柱抜取痕の深さは検出面からの数値であり、また「造作弁図解」と対比するため太鼓塀からの距離（位置）と深さを示した。距離は太鼓塀（基礎石の中心）から抜取痕の中心までの距離を算出し、深さは、近代以降の削平を受けていることを考慮して、石垣天端（6区のみ鬘石）レベルを近世面（長屋台上面）と想定して、その高さから深さを算出した。

調査では、九十間長屋に関連する遺構等は確認されなかった。太鼓塀控柱については、コンクリート製控柱掘方や変更前の控柱の抜取痕や掘方を検出した。コンクリート製控柱掘方の埋土は、黒褐色土ないし暗褐色土であった。抜取痕埋土はコンクリート製控柱掘方の埋土に近似するがしまりはない。

1区では、コンクリート製控柱掘方埋土が河原石を主体としたため、石垣裏込めの栗石との差異が明瞭でなく、掘方を検出するに至らなかった。そのために、コンクリート製控柱基礎周囲を全体的に掘り下げ、控柱の抜取痕や掘方を検出した。4区ではコンクリート製控柱以前の控柱の構造や年代を把握する目的で掘方埋土を半裁して断面を観察した。5～6区にかけては、コンクリート製控柱掘方のさらに外周で掘方とみられる遺構を検出しているが、コンクリート製控柱掘方との切り合い関係はなく、掘削も行っていないために判然としない。

石垣については控柱抜取痕の掘削により、三ノ丸北東（隅櫓台）石垣（ID3410W・ID3410S）、石川門二ノ門東側櫓台石垣（ID3140N）で新たに石垣の下部が検出された。

1. 1区 1～14（第18・19・23図）

1区-1 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約66cmまで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約58cm、深さは約39cmを測る。抜取痕の位置は約116cm、深さは検出面から約111cmを測る。大正6年まで存在した（本康2003）とされる九十間長屋との接続部にあたる。

1区-2 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約86cmまで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約48cm、深さは検出面から約19cmを測る。底面では、河原石が面を向けたように配されることから、礎盤の可能性もある。抜取痕の位置は約130cm、深さは約118cmを測る。

1区-3 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約93cmまで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約50cm、深さは検出面から約35cmを測る。抜取痕の位置は約118cm、深さは約132cmを測る。

1区-4 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約72cmまで掘り下げ、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕については埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約70cm、短軸約52cm、深さは検出面から約45cmを測る。抜取痕の位置は約130cm、深さは約129cmを測る。控柱掘方は、抜取痕の南側を取り囲むように検出した。規模は東西軸で約83cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土である。

1区-5（第23図）コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周辺を全体的に掘り下げた。コンク

リート洗い出し（土間）下から深さ約 76 cmまで掘り下げ、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕については埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 55 cm、深さは約 55 cmを測る。抜取痕の位置は約 124cm、深さは約 119cm を測る。控柱掘方は抜取痕の南側を取り囲むように検出した。規模は東西軸で約 90 cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色土で河原石が少なく、石垣裏込めとの違いが明瞭である。遺物は近代の磁器・ガラス等が出土したことから、コンクリート製控柱掘方の埋土が掘りきれていない可能性があるが、近代以降の太鼓塀の建て替えに伴い、控柱が新たに設置されていたとすれば、掘方から近代の遺物が出土する可能性もある。

1 区-6 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周辺を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 75 cmまで掘り下げ、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 45 cmを測る。抜取痕の位置は約 125cm、深さは約 117cm を測る。控柱掘方は、抜取痕を取り囲むように検出され、不整円形を呈するとみられる。規模は東西軸で約 71 cmを測る。

1 区-7 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 84 cmまで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 34 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 114cm、深さは約 119cm を測る。

1 区-8 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 88 cmまで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 25 cmを測る。抜取痕の位置は約 121cm、深さは約 120cm を測る。

1 区-9 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 71cm まで掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 50 cm、深さは検出面から約 35 cmを測る。抜取痕の位置は約 117cm、深さは約 118cm を測る。控柱掘方については、平面形や堆積状況が明確でないことから可能性を指摘するに留める。

1 区-10 (第 23 図) コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周辺を全体的に掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 54 cm掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 50 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。埋土は炭化物が多く含まれる。控柱掘方については、平面形や堆積状況が明確でないことから可能性を指摘するに留める。

1 区-11 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を掘り下げた。コンクリート洗い出し（土間）下から深さ約 76 cm掘り下げ、控柱抜取痕を検出して埋土を掘り下げた。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 44cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 15 cmを測る。抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 113 cmを測る。

1 区-12~14 調査前から昭和修理工事設置のコンクリート洗い出し部分とコンクリート製縁石が撤去されている状態であった。また、太鼓塀の基礎石は出しを越えた東側まで平滑に表面加工されたものに据え直され、その下の石垣石についても他の部分とは異なった表面加工が見られることから、昭和修理以後の修理痕跡と判断され、調査では表土層のみを取り除き終了した。

2. 2 区 17~33 (第 20・21・23・25 図)

2 区-17 コンクリート製控柱掘方の平面形は全体を検出していないが、楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 140cm、短軸約 100cm、深さは検出面から約 50cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を

呈する。規模は直径約 30cm、深さは検出面から約 15 cmを測る。抜取痕の位置は約 123 cm、深さは約 93 cmを測る。

2区-18 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 140 cm、短軸約 100 cm、深さは検出面から約 50cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 27 cmを測る。抜取痕の位置は太鼓塀より約 116 cmを測る。

2区-19 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 120cm、短軸約 100cm、深さは検出面から約 65 cmを測る。控柱抜取痕は検出されていない。

2区-20 (第 23 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 130 cm、短軸約 90 cm、深さは検出面から約 58cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 30 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 114 cm、深さは約 117 cmを測る。抜取痕周囲の河原石は面を向けて取り囲むように配されることから、控柱の根固めの可能性がある。控柱掘方については、平面形や堆積状況が明確でないことから、可能性を指摘するに留める。

2区-21 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 140cm、短軸約 70 cm、深さは検出面から約 63 cmを測る。控柱抜取痕は平面形が円形を呈する。規模は直径約 30 cm、深さは検出面から約 35 cmを測る。抜取痕の位置は約 108 cm、深さは約 113 cmを測る。

2区-22 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 140 cm、短軸約 70 cm、深さは検出面から約 65 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 116 cm、深さは検出面から約 102 cmを測る。

2区-23 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 120 cm、短軸約 70 cm、深さは検出面から約 68 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 25 cmを測る。抜取痕の位置は約 118 cm、深さは約 104 cmを測る。

2区-24 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 130 cm、短軸約 100 cm、深さは検出面から約 68 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。長軸約 40 cm、深さは検出面から約 23 cmを測る。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 104 cmを測る。

2区-25 (第 25 図) コンクリート製控柱掘方の埋土を掘り下げ、その掘方底面において、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 27cmを測る。控柱抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 105 cmを測る。底面には、河原石が面を向けて配されることから礎盤の可能性がある。控柱掘方の平面形は全体を検出していないが、隅丸方形を呈するとみられる。埋土は暗褐色砂質土が主体で河原石を多く含むが、断面観察から 3～5層と 6層に分けられる可能性がある。6層は鉛が溶着した河原石や焼壁が多く含まれており、3～5層に切られて掘方壁面に堆積する状況等から 2時期の可能性を指摘する。ただ、コンクリート製控柱掘方や近代以降の削平によって、平面での前後関係や掘り込み面が明確でないことから、3～6層を同一の掘方埋土と理解することもできる。

2区-26 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 120cm、短軸約 95 cm、深さは検出面から約 43 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 114cm、深さは約 114 cmを測る。

2区-27 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 128 cm、短軸約 93 cm、深さは検出面から約 81cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 43cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 13cmを測る。抜取痕の位置は約 114cm、深さは約 111cmを測る。

2区-28 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。長軸約 112 cm、短軸約 95 cm、深さは検出面から約 55 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径が約 32 cm、深さは検出面から約 9 cmを測る。抜取痕の位置は約 119 cm、深さは約 106 cmを測る。

2区-29 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 115 cm、短軸約 98 cm、深さは検出面から約 79 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径が約 32 cm、深さは検出面から約 17 cmを測る。抜取痕の位置は約 122 cm、深さは約 107 cmを測る。

2区-30 コンクリート製控柱掘方の平面形は全体形を検出していないが、不整楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 123 cm、短軸約 84 cm、深さは検出面から約 56 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 30 cm、短軸約 27cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。控柱抜取痕の位置は約 115 cm、深さは約 86 cmを測る。

3. 3区 33~47 (第22・23図)

3区-33 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 148 cm、短軸約 92 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 29cm、深さは検出面から約 43cmを測る。抜取痕の位置は約 130 cm、深さは約 103 cmを測る。

3区-34 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 120 cm、短軸約 86 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 34cm、深さは検出面から約 54cmを測る。抜取痕の位置は約 123 cm、深さは約 97 cmを測る。

3区-35 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 133 cm、短軸約 77 cm、深さは検出面から約 52 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 32cm、深さは検出面から約 29cmを測る。抜取痕の位置は約 134 cm、深さは約 97 cmを測る。

3区-36 (第23図) コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 138 cm、短軸約 101 cm、深さは検出面から約 47 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 39cm、深さは検出面から約 41cmを測る。抜取痕の位置は約 126 cm、深さは約 95 cmを測る。

3区-37 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 140 cm、短軸約 87 cm、深さは検出面から約 57 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 36cm、深さは検出面から約 32cmを測る。抜取痕の位置は約 130 cm、深さは約 94 cmを測る。

3区-39 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 114 cm、短軸約 95 cm、深さは検出面から約 45 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は不整円形を呈する。規模は直径約 34 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。抜取痕の位置は約 119 cm、深さは約 107 cmを測る。

3区-40 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 113 cm、短軸約 83 cm、深さは検出面から約 53 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 34cm、深さは検出面から約 34cmを測る。抜取痕の位置は約 127 cm、深さは約 68 cmを測る。

3区-41 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 99 cm、短軸約 93 cm、深さは検出面から約 52 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。直径約 31cm、深さは検出面から約 29cmを測る。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 102 cmを測る。

3区-42 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 120 cm、短軸約 87 cm、深さは検出面から約 51 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 35 cm、短軸約 30 cm、深さは検出面から約 24cmを測る。抜取痕の位置は約 129 cm、深さは約 98 cmを測る。

3区-43 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 136 cm、短軸約 76 cm、深さは検出面から約 56 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 35 cm、短軸約 30 cm、深さは検出面から約 39cmを測る。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 111 cmを測る。

3区-44 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 128 cm、短軸約 100 cm、深さは検出面から約 58 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 32 cm、深さは検出面から約 35 cmを測る。抜取痕の位置は約 126cm、深さは約 112 cmを測る。

3区-45 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 122 cm、短軸約 114 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 37 cm、短軸約 30 cm、深さは検出面から約 32cmを測る。抜取痕の位置は約 134 cm、深さは約 117 cmを測る。

3区-46 (第 23 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 128 cm、短軸約 111 cm、深さは検出面から約 61 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 39 cm、短軸約 35 cm、深さは検出面から約 39cmを測る。抜取痕の位置は約 126 cm、深さは約 118 cmを測る。

3区-47 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅檜台石垣に近接するために半円形を呈する。規模は長軸約 150 cm、深さは検出面から約 56 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は直径約 31cm、深さは検出面から約 28 cmを測る。抜取痕の位置は約 121 cm、深さは約 109 cmを測る。

4. 4区 48～60 (第 24～26 図)

4区-48 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を全体的に掘り下げ、控柱抜取痕を検出した。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 54cm、短軸約 50cm、深さは検出面から約 36 cmを測る。抜取痕の位置は約 132cm、深さは約 114cmを測る。抜取痕の位置は約 132 cm、深さは約 114 cmを測る。

4区-49 (第 25 図) コンクリート製控柱掘方の底面で、控柱抜取痕と掘方を検出した。控柱抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は直径約 34cm、深さは検出面から約 23cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色土と黒褐色土の混土でしまりが無い。抜取痕の位置は約 131 cm、深さは約 113 cmを測る。控柱掘方の平面形は全体を検出していないが、抜取痕を取り囲むように検出され楕円形を呈する。規模は長軸約 147 cm、短軸約 110 cm、深さは検出面から約 50 cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色土で層下位に礫を多く含む。断面観察から 4・5層は 3層に比べて、埋土に小礫を含む程度で抜取痕よりも、さらに掘り込まれていることから、2時期の可能性を指摘する。ただ、一部の掘削に留まっているために、掘方であるかは、判然としない。

4区-50 検出面でのコンクリート製控柱掘方と控柱掘方の検出状況は明らかではないが、コンクリート製控柱掘方底面で、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 39 cmを測る。底面では、河原石が面を向けたように配され、礎盤の可能性もある。抜取痕の位置は約 129 cm、深さは約 118 cmを測る。控柱掘方は抜取痕を取り囲むように検出される。規模は長軸約 69 cmを測る。

4区-51 (第 26 図) 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかでないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱抜取痕を検出した。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 45 cm、短軸約 28 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。埋土は、しまりのない暗褐色土である。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 109 cmを測る。控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 150 cm、短軸約 105 cmを測る。

4区-52 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかでないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱抜取痕を検出した。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 25cm、短軸約 20cmを測る。抜取痕の位置は約 116cmを測る。

4区-54 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかでないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱抜取痕を検出した。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 32cm、短軸約 28cm、深さは検出面から約 13 cmを測る。抜取痕の位置は約 116cm、深さは約 113 cmを測る。

4区-55 (第 26 図) 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかでないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱抜取痕と掘方を検出した。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は

長軸約 40cm、短軸約 38cm、深さは検出面から約 39 cmを測る。埋土は、しまりのない黒褐色土である。抜取痕の位置は約 122cm、深さは約 117 cmを測る。控柱掘方は抜取痕を取り囲むように検出され、不整形円形を呈する。規模は長軸約 83 cm、短軸約 58 cmを測る。埋土は礫を多く含む暗褐色土である。

4 区-56 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかでないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱の抜取痕と掘方を検出した。控柱抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 38 cm、短軸約 35 cm、深さは検出面から約 35 cmを測る。抜取痕の位置は約 116 cm、深さは約 108 cmを測る。控柱掘方は抜取痕を取り囲むように検出され、平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 88 cm、短軸約 73 cmを測る。

4 区-57 (第 26 図) 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかではないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱の抜取痕と掘方を検出した。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 60 cm、短軸約 54 cm、深さは検出面から約 20 cmを測る。抜取痕の位置は約 132 cm、深さは約 103 cmを測る。控柱掘方は抜取痕を取り囲むように検出され、平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 57 cm、短軸約 54 cmを測る。埋土は焼土・炭化物多く含む黄褐色土である。断面 2～5 層は堆積状況が層状を呈することから、控柱掘方としては考えにくく、石垣掘方等の可能性を指摘しておきたい。

4 区-58 検出面でのコンクリート製控柱掘方の検出状況は明らかではないが、コンクリート製控柱掘方の底面で控柱抜取痕と掘方を検出した。控柱抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 35 cm、深さは検出面から約 17 cmを測る。控柱掘方は北側で抜取痕を取り囲むように検出され、平面形は不整形円形を呈する。規模は東西軸で約 55 cmを測る。

4 区-60 コンクリート製控柱掘方を検出できず基礎周囲を掘り下げ、控柱抜取痕と掘方を検出した。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は直径約 29 cm、深さは検出面から約 15 cmを測る。抜取痕の位置は約 122 cm、深さは約 118 cmを測る。控柱掘方の平面形は全体を検出していないが、不整形円形を呈すると推測される。規模は直径約 59 cmを測る。

5. 5 区 61～69、72～82 (第 27～30・32 図)

5 区-61 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を掘り下げた。コンクリート洗い出し下から深さ約 59 cm掘り下げたところで控柱抜取痕を検出した。抜取痕の平面形は半円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、深さは検出面から約 44cm を測る。抜取痕の位置は約 125 cm、深さは約 107 cmを測る。

5 区-62 コンクリート製控柱掘方を検出できず、基礎周囲を掘り下げた。コンクリート洗い出し下から深さ約 60 cm掘り下げたところで控柱抜取痕を検出した。抜取痕の平面形は楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 67 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 122 cm、深さは約 100 cmを測る。底面には、面を向けた河原石が配されていることから礎盤の可能性はある。

5 区-63 コンクリート製控柱掘方の平面形はコンクリート洗い出し部分(土間)が残存していたため、全体形状は検出していないが楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 136 cm、短軸約 113 cm、深さは検出面から約 54 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 45 cm、深さは検出面から約 34cm を測る。抜取痕の位置は約 125cm、深さは約 114cm を測る。

5 区-64 コンクリート製控柱掘方の平面形はコンクリート洗い出し部分(土間)が残存していたため、全体形を検出していないが、楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 119 cm、短軸約 105 cm、深さは検出面から約 44cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 30 cmを測る。抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 105 cmを測る。

5 区-65 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 122 cm、短軸約 92 cm、深さは検出面から約 43 cmを測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは

検出面から約 26cm を測る。抜取痕の位置は約 125cm、深さは約 102cm を測る。

5 区-66 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 116 cm、短軸約 108 cm、深さは検出面から約 57 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸で約 50 cm、短軸約 40cm、深さは検出面から約 25cm を測る。抜取痕の位置は約 127cm、深さは約 116cm を測る。

5 区-67 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 115 cm、短軸約 82 cm、深さは検出面から約 45 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 44cm、深さは検出面から約 39cm を測る。抜取痕の位置は約 120cm、深さは約 113cm を測る。

5 区-68 (第 28 図) コンクリート製控柱掘方埋土を掘り下げ、掘方底面で控柱抜取痕と掘方を検出した。その後北側半分を調査区全体に断ち割り、断面にて掘方を確認した。

コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 118 cm、短軸約 96 cm、深さは検出面から約 48cm を測る。埋土は河原石を含む黒褐色砂質土である。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 32 cm、深さは検出面から約 31cm を測る。埋土はコンクリート製控柱掘方埋土と近似した、しまりのない黒褐色砂質土である。控柱掘方は抜取痕を取り囲むように検出され、平面形は楕円形を呈するとみられる。9 層については一部の掘削に留まっており、また平面形を検出しておらず、控柱掘方であるか、判然としない。

5 区-69 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 129 cm、短軸約 93 cm、深さは検出面から約 42 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 52 cm、深さは検出面から約 32 cm を測る。抜取痕の位置は約 140cm、深さは約 103cm を測る。

5 区-72 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 111 cm、短軸約 77 cm、深さは検出面から約 74cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 40 cm、深さは検出面から約 23cm を測る。抜取痕の位置は約 132cm、深さは約 96cm を測る。

5 区-73 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 128 cm、短軸約 100 cm、深さは検出面から約 50 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 39cm、深さは検出面から約 38cm を測る。抜取痕の位置は約 128 cm、深さは約 109 cm を測る。

5 区-74 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 124 cm、短軸約 114 cm、深さは検出面から約 46cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 47cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 38cm を測る。抜取痕の位置は約 117 cm、深さは約 107 cm を測る。

5 区-75 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 127 cm、短軸約 108 cm、深さは検出面から約 40 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 43cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 32 cm を測る。抜取痕の位置は約 126 cm、深さは約 100 cm を測る。

5 区-76 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 135 cm、短軸約 110cm、深さは検出面から約 59cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 42cm、短軸約 38cm、深さは検出面から約 9 cm を測る。抜取痕の位置は約 127cm、深さは約 84cm を測る。

5 区-77 (第 32 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 110 cm、短軸約 88 cm、深さは検出面から約 59 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 38cm、短軸約 35cm、深さは検出面から約 33cm を測る。抜取痕の位置は約 121 cm、深さは約 107 cm を測る。

5 区-78 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 131 cm、短軸約 89 cm、深さは検出面から約 56 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 40 cm、短軸約 35 cm、深さは検出面から約 40 cm を測る。抜取痕の位置は約 122 cm、深さは約 113 cm を測る。

5 区-79 (第 32 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は円形を呈する。規模は直径約 110 cm、深さは検出面から約 58 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 41 cm、短軸約 35 cm、

深さは検出面から約 29cm を測る。抜取痕の位置は約 125 cm、深さは約 110 cm を測る。

5 区-80 (第 32 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 110 cm、短軸約 97 cm、深さは検出面から約 59 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 44cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 29cm を測る。抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 27cm を測る。

5 区-81 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 108 cm、短軸約 95 cm、深さは検出面から約 49cm を測る。控柱抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は直径約 36cm、深さは検出面から約 27cm を測る。抜取痕の位置は約 114 cm、深さは約 90 cm を測る。

5 区-82 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 60 cm、短軸約 50 cm、深さは検出面から約 35 cm を測る。控柱抜取痕及び掘方は検出されなかった。

6. 6 区 83~90 (第 31・32 図)

6 区-83 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 94 cm、短軸約 81 cm、深さは検出面から約 60 cm を測る。控柱抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 35 cm、深さは検出面から約 25 cm を測る。抜取痕の位置は約 114 cm、深さは約 100 cm を測る。

6 区-84 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 104 cm、短軸約 84 cm、深さは検出面から約 62 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 36 cm、深さは検出面から約 24cm を測る。抜取痕の位置は約 133 cm、深さは約 93 cm を測る。底面では、河原石が面を向けたように配されることから、礎盤の可能性はある。

6 区-86 (第 32 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 110 cm、短軸約 88 cm、深さは検出面から約 64cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 46cm、深さは検出面から約 12cm を測る。底面では約 26 cm×約 30 cm の方形の戸室石を検出した。抜取痕の位置は約 136 cm、深さは約 93 cm を測る。

6 区-87 (第 32 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 116 cm、短軸約 104 cm、深さは検出面から約 55cm を測る。控柱抜取痕の平面形は円形を呈する。規模は直径約 35 cm、深さは検出面から約 36cm を測る。抜取痕の位置は約 128 cm、深さは約 109 cm を測る。

6 区-88 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 116 cm、短軸約 98 cm、深さは検出面から約 67 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 47cm、深さは検出面から約 31cm を測る。埋土には 5~10 cm 大の河原石が多く含まれる。抜取痕の位置は約 132 cm、深さは約 112 cm を測る。

6 区-89 コンクリート製控柱掘方の平面形は全体を検出していないが、楕円形を呈するとみられる。規模は長軸約 130 cm、短軸約 100 cm、深さは検出面から約 61 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 45 cm、短軸約 37cm、深さは検出面から約 30 cm を測る。抜取痕の位置は約 131 cm、深さは約 107 cm を測る。コンクリート製控柱掘方壁面では、釉薬に光沢がある瓦が多量に確認されることや調査前にはコンクリート製縁石やコンクリート洗い出し部分(土間)が撤去された状態にあったことから、昭和修理以降の修理痕跡と判断される。

6 区-90 コンクリート製控柱掘方は石川門の二ノ門石垣に近接するために半円形を呈する。規模は長軸約 116 cm、短軸約 73 cm、深さは検出面から約 77 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 45 cm、短軸約 34 cm、深さは検出面から約 14 cm を測る。埋土には漆喰が含まれる。抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 111 cm を測る。

7. 石垣 (第 33～37 図)

三ノ丸北東 (隅櫓台) 石垣西面・南面 (ID3410W・3410S) 4区に位置する。控柱抜取痕の掘削によって、下部2石程度を新たに確認した。城内側 (南西角) の隅角部は平成10年度 (1998) 三ノ丸1次調査で、石垣天端から3m程度下で確認している。

石垣は城内側と城外側で特徴が異なる。城外側の角石は、方形状に加工され算木積みとし、築石は割石を主体で乱積みとすることから、慶長期の特徴を持つと考えられる。城内側は角石が切石となり、築石は粗加工石で布積みとすることから、修築が行われたものと考えられる。石垣面には、宝暦の大火によるとみられる鉛の溶着が観察される。隅櫓台石垣と両側の鉢巻石垣との関係は、櫓台石垣の隅角部が埋められていることが観察できることから、創建時期は隅櫓台石垣が先行する。刻印は、図示した南面、西面では確認できなかったが、北面・東面では小型刻印が散見される。

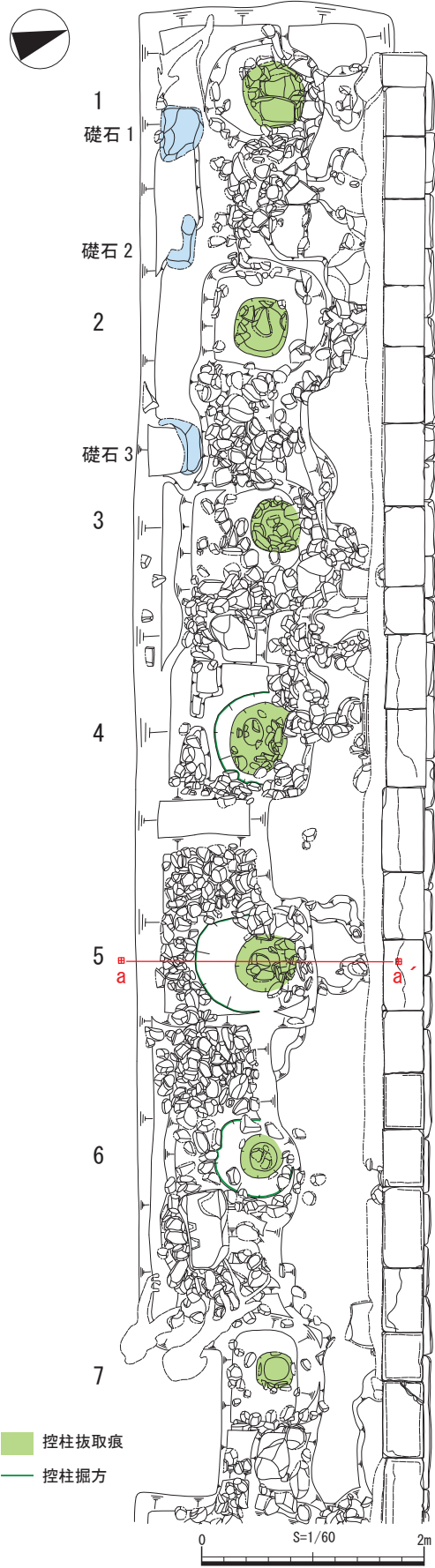
二ノ門東側櫓台石垣 (ID3140S) 6区に位置する。隅角部は切石で角脇石を伴う。築石は部分的には粗加工石が積まれるが、他は多角形の切石を乱積みする。切石は縁取り加工が施される。石垣の目地には、昭和保存修理工事によるモルタルが確認される。

文献史料では、宝暦の大火後の明和2年に門台石垣の修築に取り掛かっていることが知られ、当石垣に比定されると考えられる。

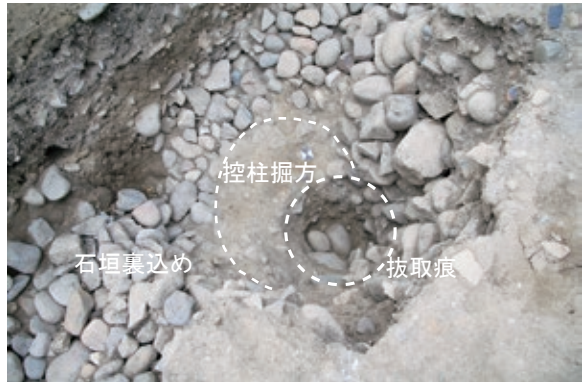
8. 礎石 (第 18・19 図)

礎石 1～7 1区に位置する。近代以降の層 (Ⅱ b 層) の上面で検出された河原石の礎石である。礎石上端の標高は約 43.5m を測る。規模は直径約 50cm である。いずれも、太鼓塀から約 210cm の距離にあることから、平行して建てられた軍隊期の建物跡と考えられる。

礎石 8・9 4区に位置する。近代以降の層 (Ⅱ b 層) で検出された戸室石の礎石である。規模は約 40 cm 四方である。中央には柱を据えるための直径約 15 cm の柄穴を穿つ。九十間長屋等に使用されていたものが移動してきた可能性がある。



1区-1 控柱抜取痕検出状況 南から



1区-5 控柱掘方・抜取痕検出状況 東から

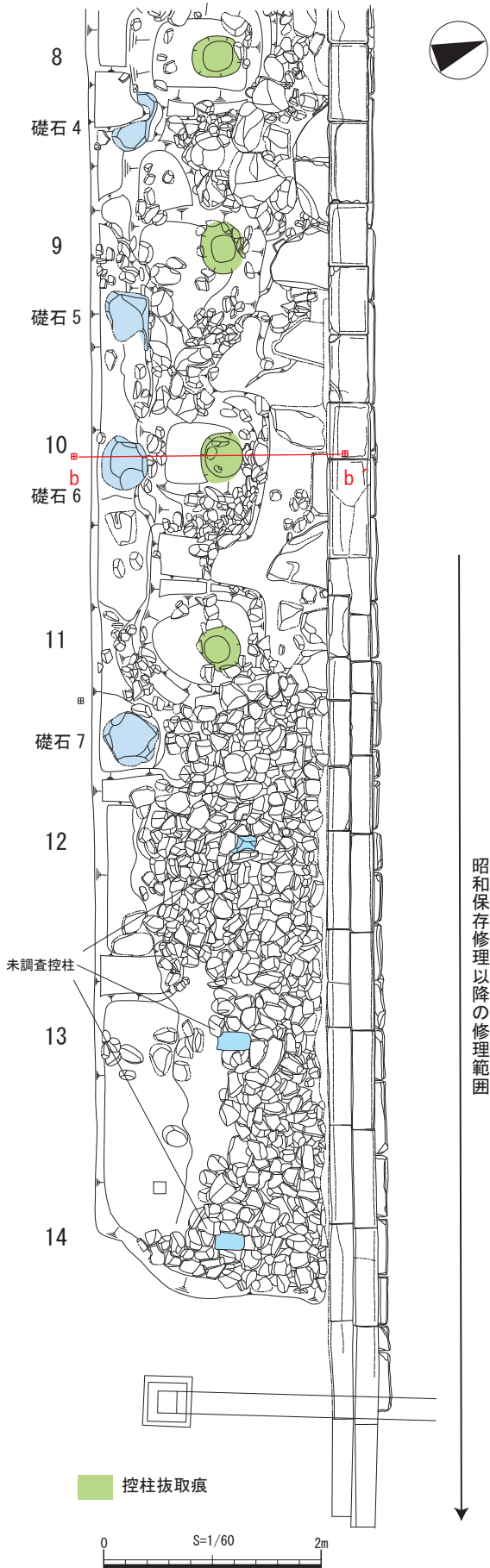


1区 礎石検出状況 東から



コンクリート製控柱・縁石解体中 南から

第18図 1区 遺構平面図1 (S=1/60)



1区-8 支柱抜取痕検出状況 南から



1区 礎石 4～7 検出状況 東から



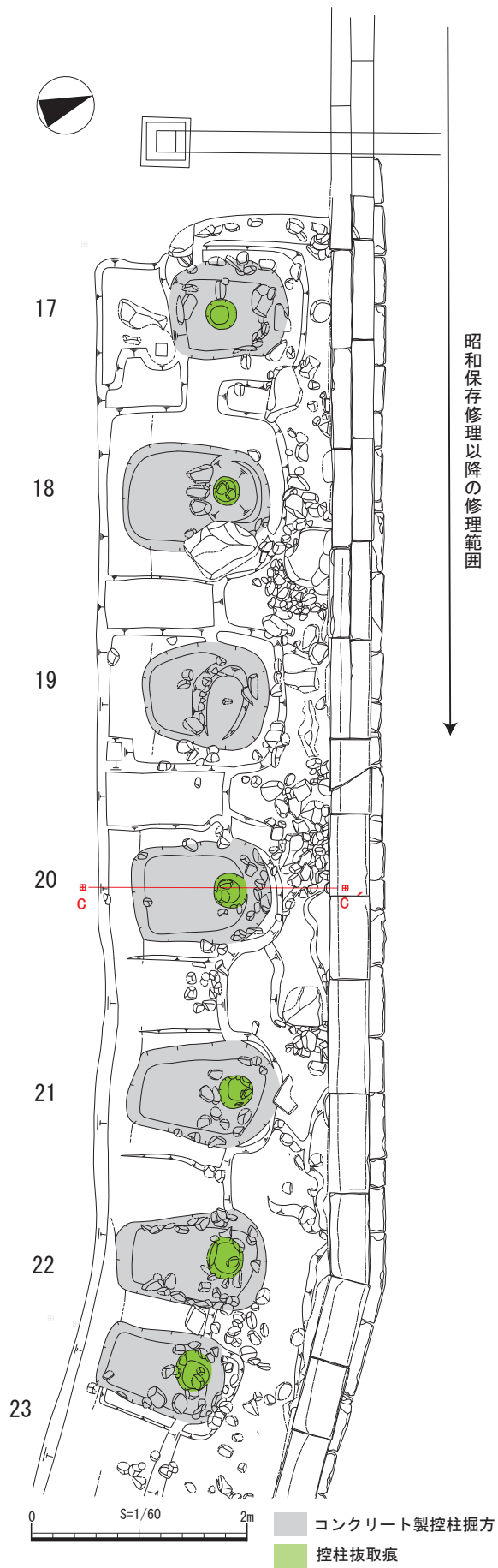
礎石 5 掘方断面 北から



昭和保存修理以降の修理痕跡 東から

昭和保存修理以降の修理範囲

第19図 1区 遺構平面図2 (S=1/60)



2区 コンクリート製控柱検出状況 西から



2区-19 コンクリート製控柱掘方掘削状況 南から

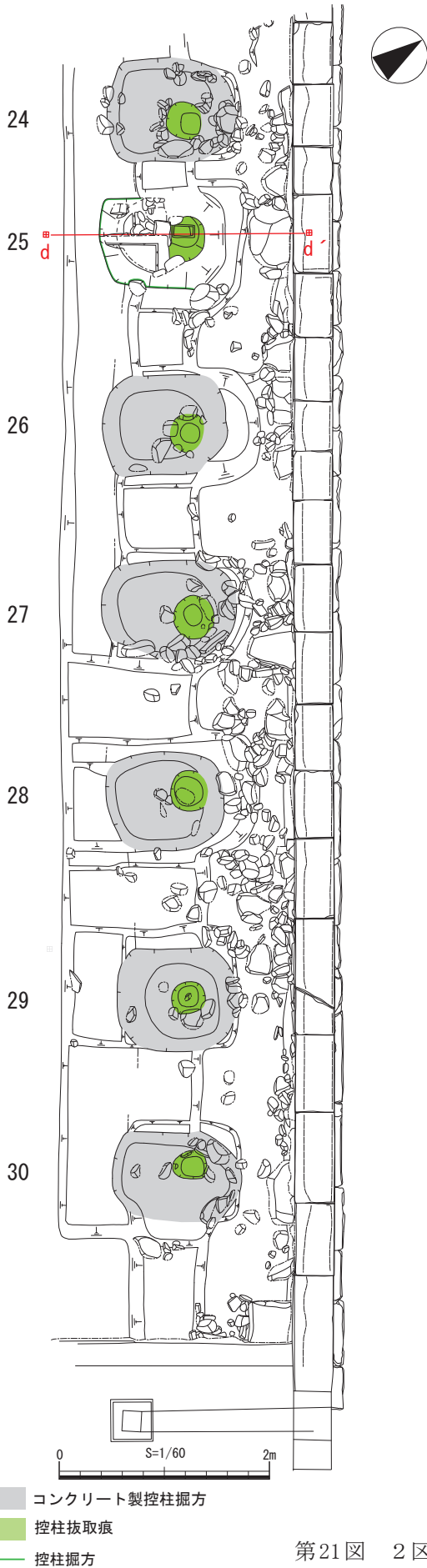


2区-20 控柱抜取痕検出状況 南から



2区-23 控柱抜取痕完掘状況 南から

第20図 2区 遺構平面図1 (S=1/60)



2区 コンクリート製控柱掘方検出状況 東から



2区-24 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から

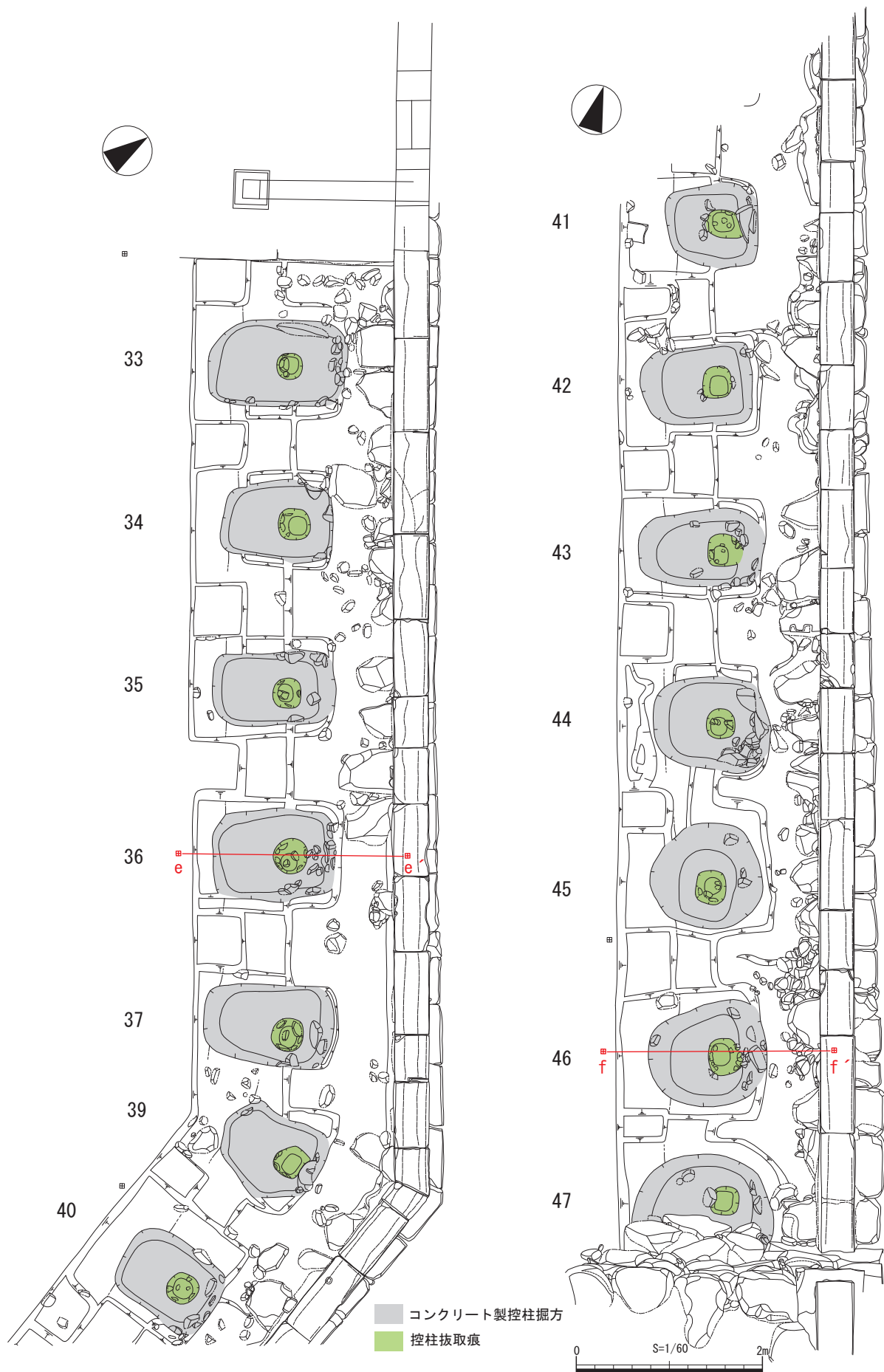


2区-25 控柱掘方半截状況 北から

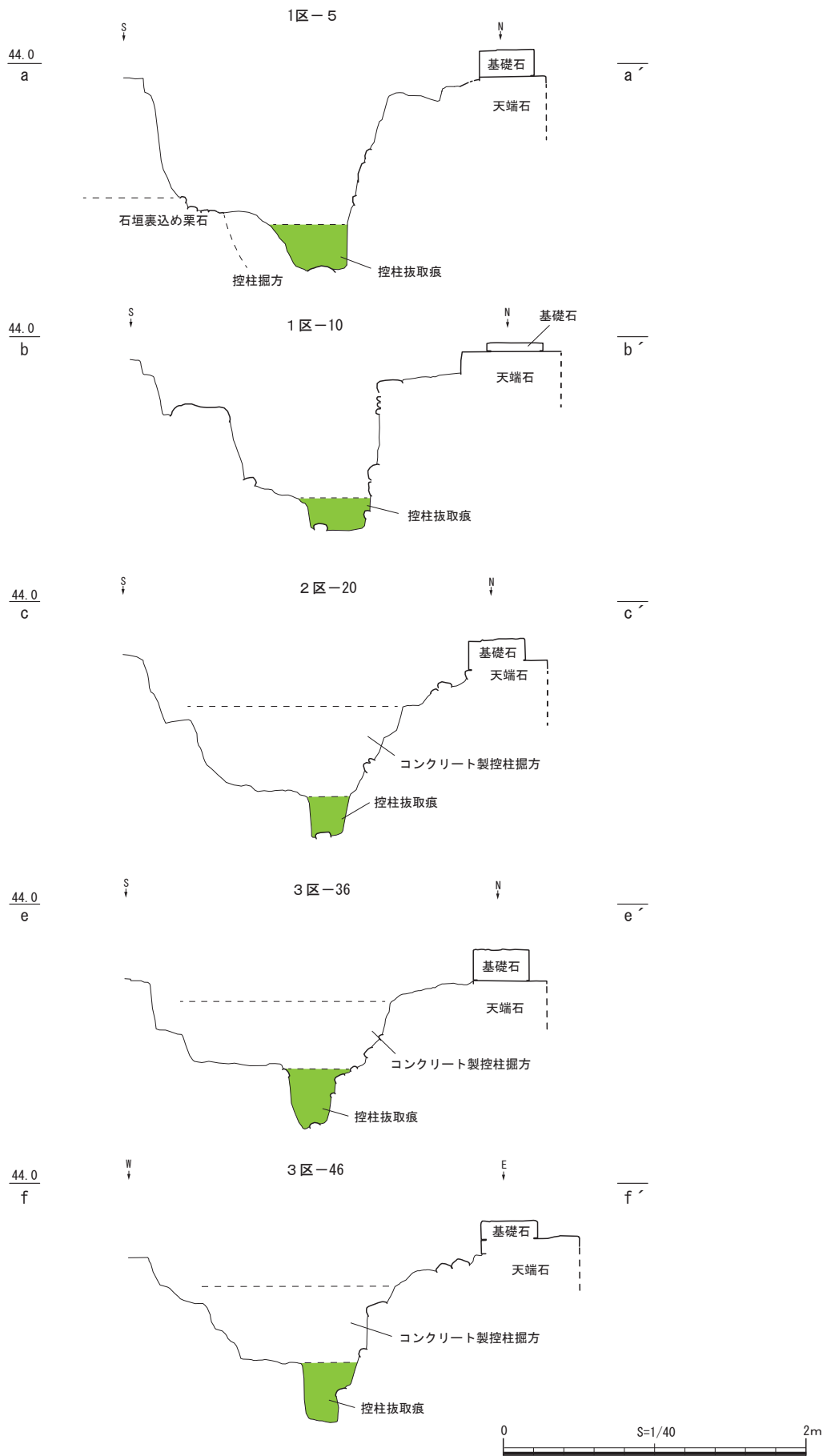


2区-25 控柱掘方・抜取痕断面 西から

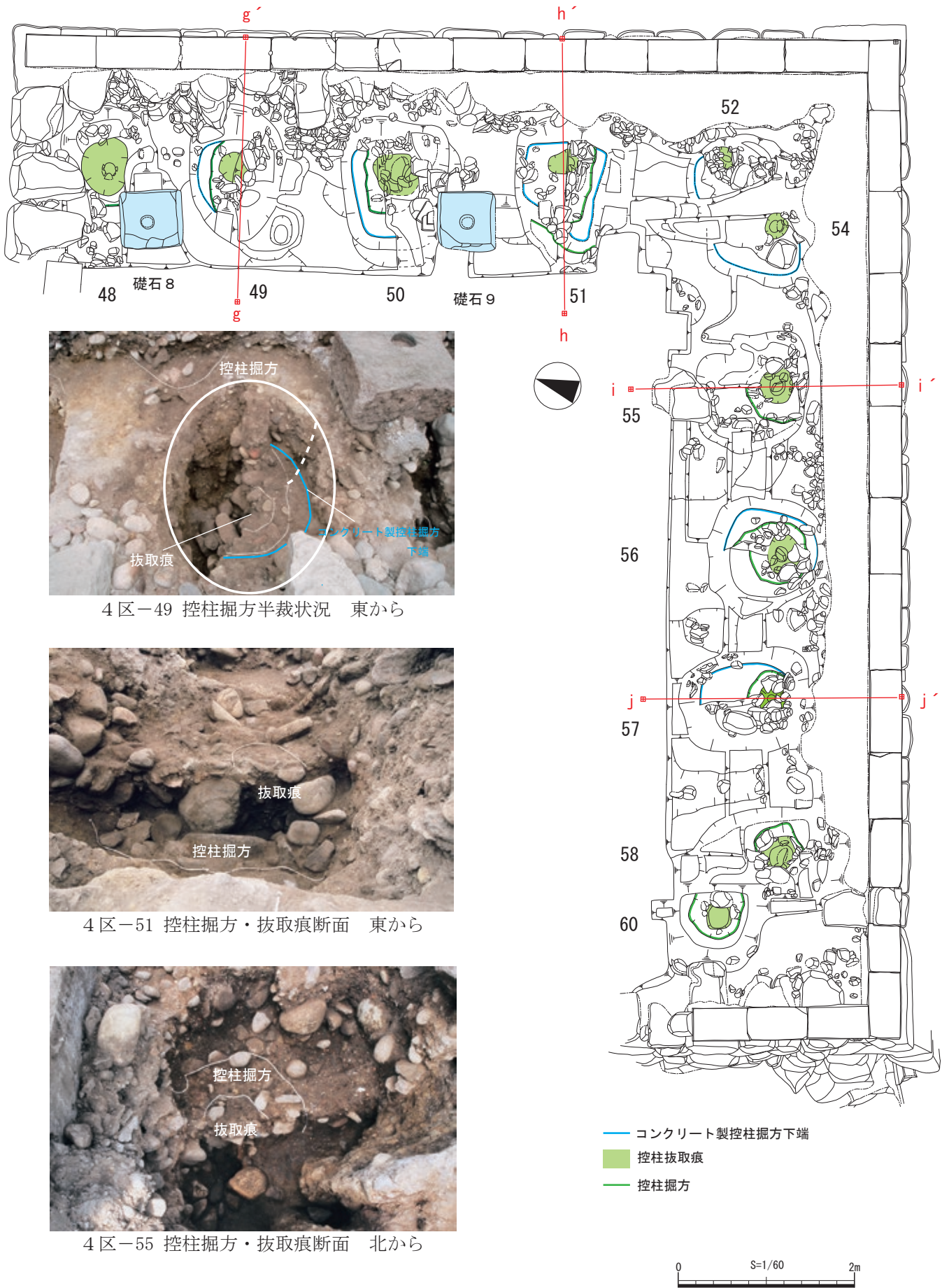
第21図 2区 遺構平面図2 (S=1/60)



第22図 3区 遺構平面図 (S=1/60)

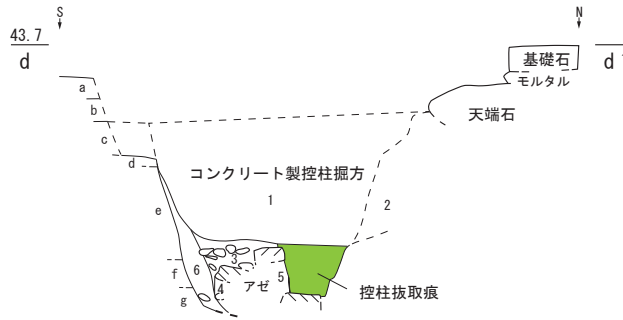


第23図 1～3区 遺構断面図 (S=1/40)



第24図 4区 遺構平面図 (S=1/60)

2区-25



- 1 コンクリート製控柱掘方埋土 (掘削済)
- 2 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色砂質土 (土と栗石の混土)
- 3 10YR4/3 ~ 4/4 暗黄褐～褐色砂質土 (5 ~ 10 cmの礫多く含む、焼壁少片含む)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質～砂質土 (5 cm以下の礫多く含む)
- 5 10YR4/3 ~ 4/2 暗黄褐色砂質土 (6層に色調が近似する、焼壁小片目立たない)
- 6 10YR4/2 ~ 3/3 暗灰黄褐色砂質土 (焼壁小片極めて多く含む、鉛溶着の礫含む、粘性あり)
- a 2.5Y7/4 ~ 6/4 淡黄～黄灰砂質土
- b 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
- c 10YR3/3 ~ 3/4 暗褐色砂質土 (5 ~ 10 cmの礫多く含む)
- d 10YR7/6 黄褐色礫混土 (5 cm以下の礫多く含む、礫で固めたように見える層)
- e 10YR6/2 灰黄褐色粘質～シルト質土 (黄褐色土ブロック状に含む、均質)
- f 7.5YR4/4 褐色砂質土 (5 cm以下の礫多く含む)
- g 7.5YR4/4 褐色砂質土 (上層より礫の混じり少ない)

※1・2 コンクリート製控柱掘方 3～6 控柱掘方

a 公園整備造成土 b 旧表土 c 近現代造成土 d～g 近世整地土か

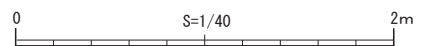
4区-49



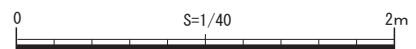
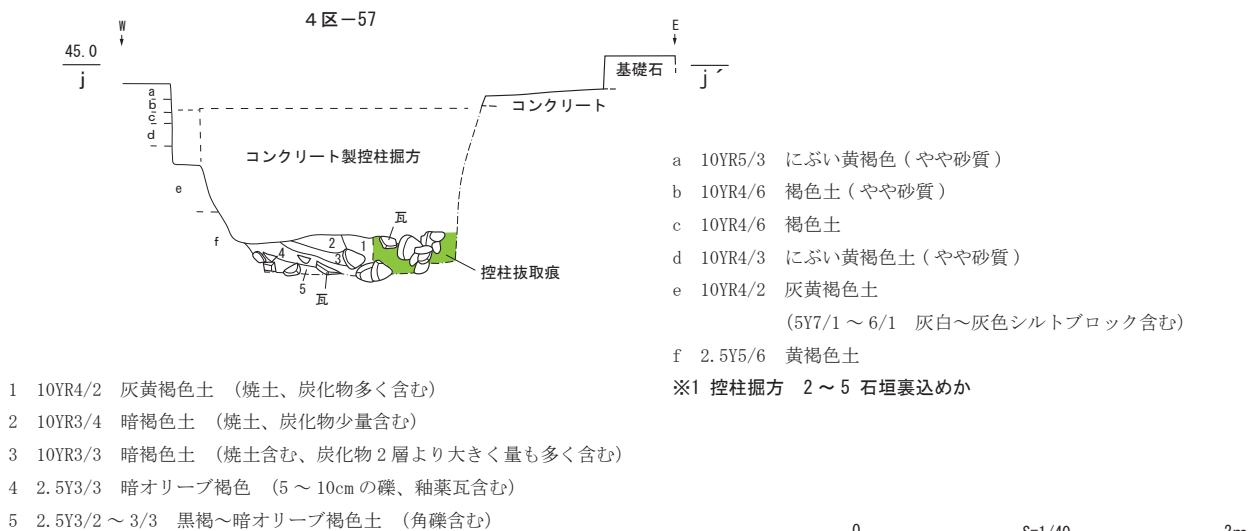
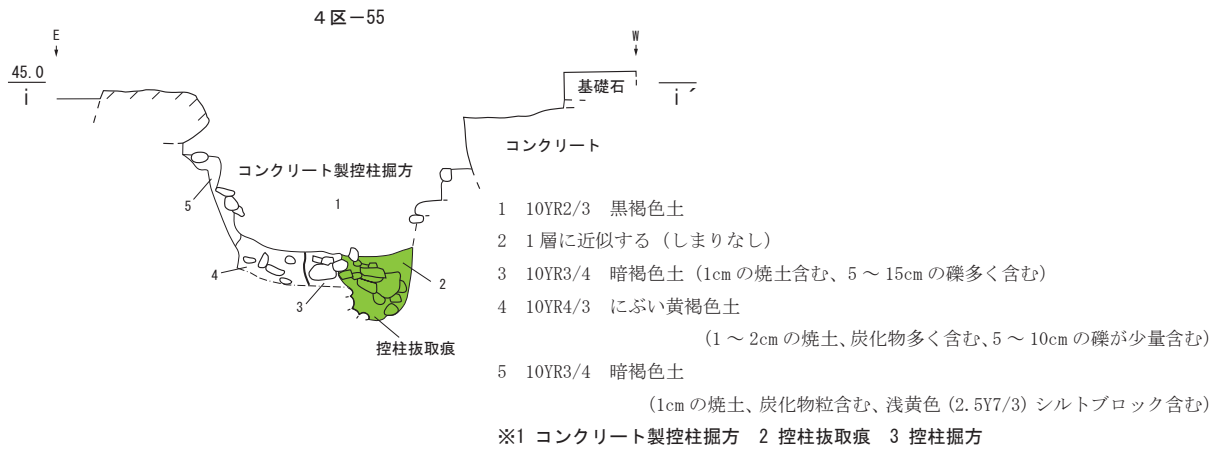
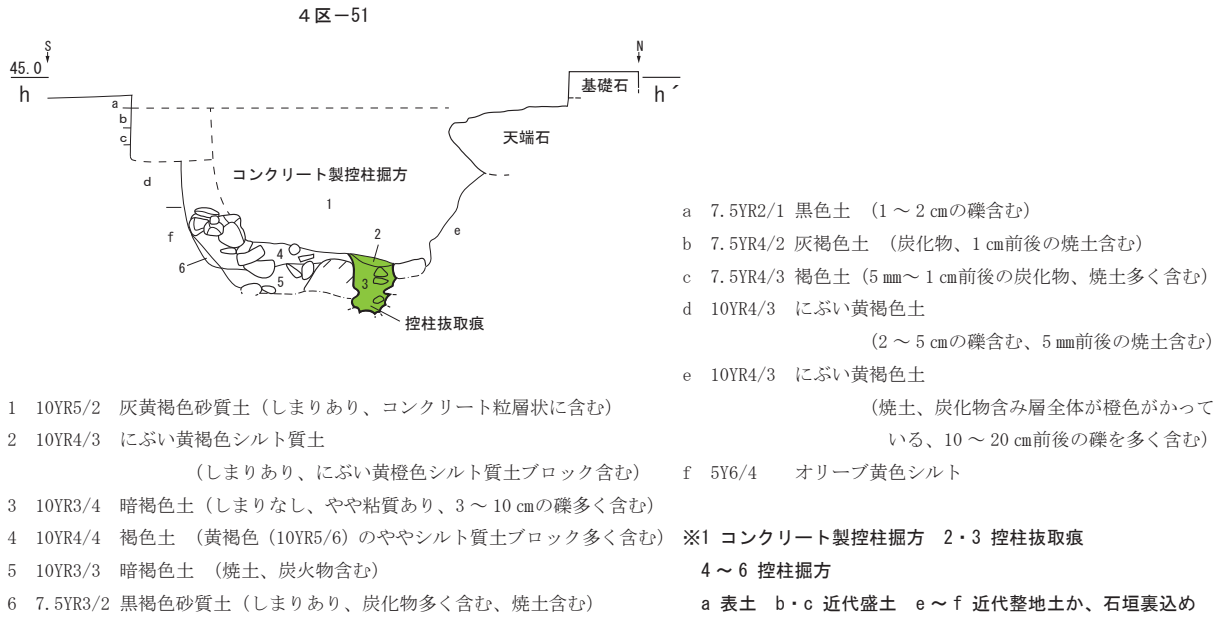
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (コンクリート細粒含む)
- 2 10YR4/3 ~ 3/2 にぶい黄褐色と黒褐色の混土 (しまりなし、焼土、炭火物少量含む、5 ~ 15 cmの礫多く含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (0.5 ~ 1 cmの炭化物を含む、層下位に5 ~ 20 cmの礫多く含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色土 (やや砂質、1 ~ 2 cmの焼土・炭化物を含む、1 ~ 2 cmの礫含む)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色土 (やや砂質、1 ~ 2 cmの焼土・炭化物を含む、1 ~ 2 cmの礫含む)
- a 7.5YR2/1 黒色土 (しまりなし、1 ~ 2 cmの礫含む)
- b 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (0.5 cmの焼土、0.5 ~ 1 cmの炭化物を含む、1 ~ 2 cmの礫含む)
- c 10YR6/2 灰黄褐シルト質土 (しまりなし、1 ~ 3 cmの礫含む、焼土粒少量含む)
- d 10YR7/3 にぶい黄褐色シルト質土 (3 ~ 10 cmの礫多く含む)
- e 10YR4/4 褐色シルト質土 (2 ~ 4 cmの礫少量含む)
- f 10YR4/4 褐色シルト質土 (5 ~ 10 cmの礫含む)

※1 コンクリート製控柱掘方 2 控柱採取痕 3 控柱掘方 4・5 控柱掘方・石垣掘方

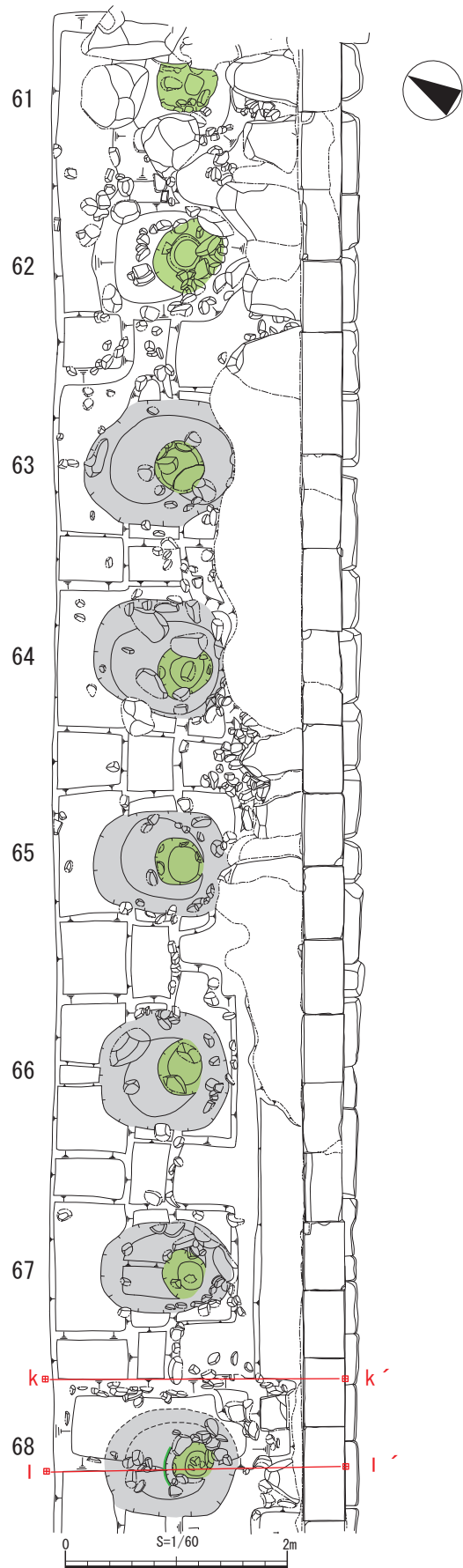
a 表土 b・c 近代盛土 d～f 近世整地土



第25図 2・4区 遺構断面図 (S=1/40)



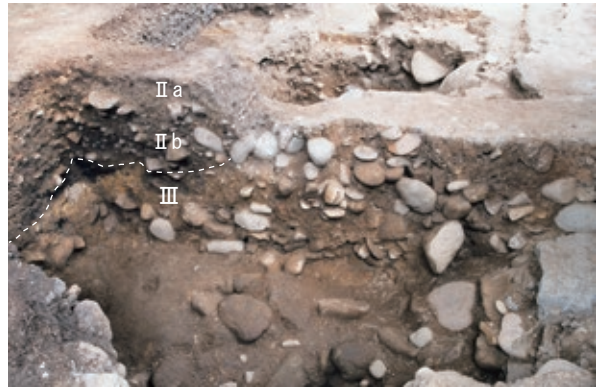
第26図 4区 遺構断面図 (S=1/40)



- コンクリート製控柱掘方
- 控柱抜取痕
- 控柱掘方



5区-62 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-68 調査区断割り断面 南から

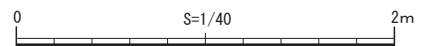
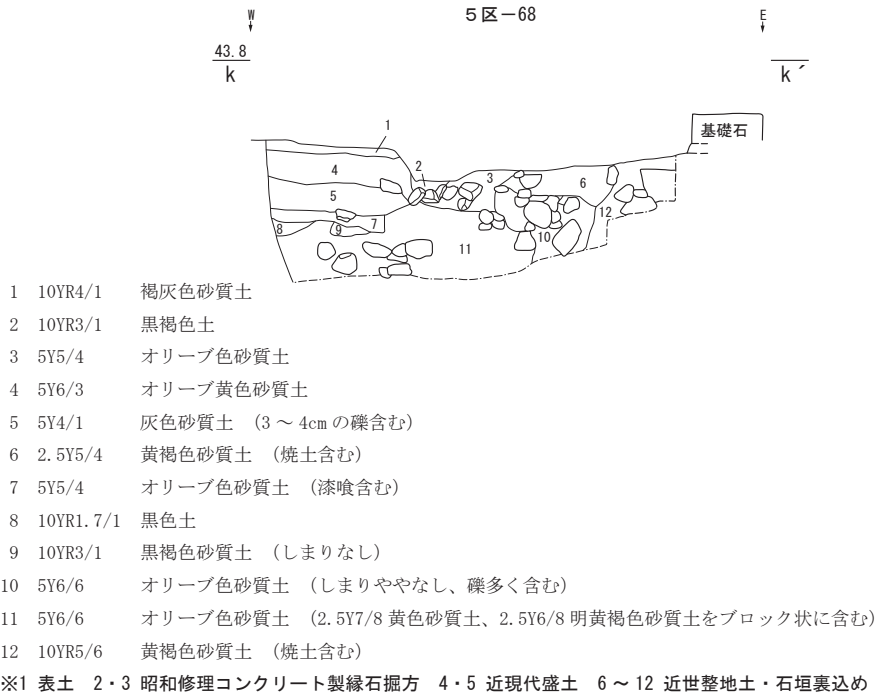


5区-68 控柱抜取痕検出状況 東から

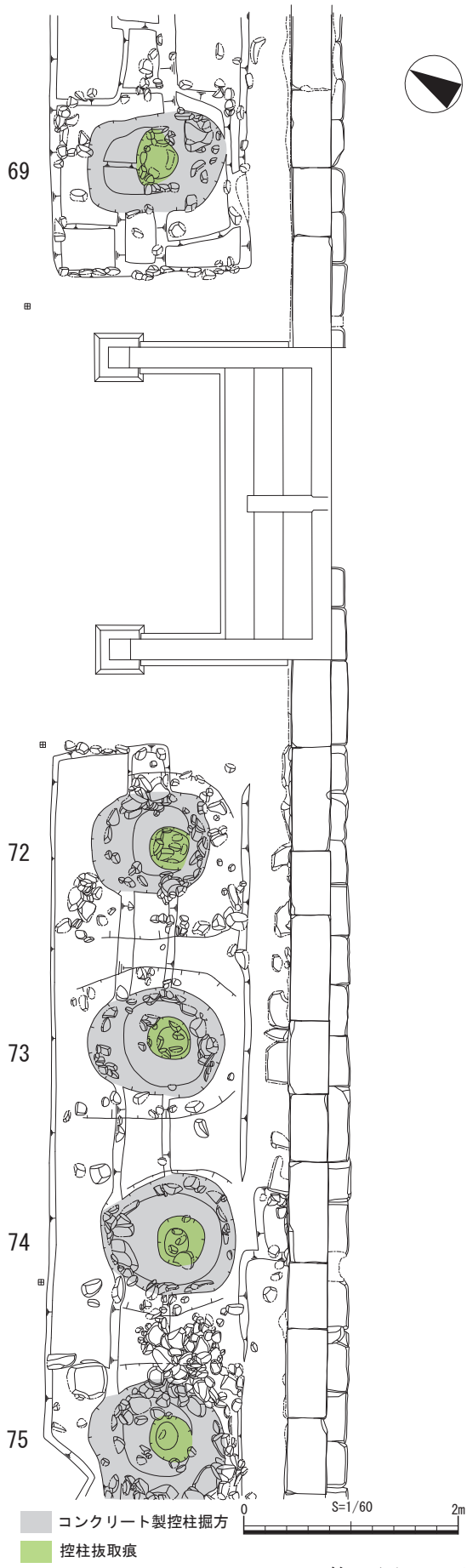


5区-68 控柱掘方・抜取痕断面 北から

第27図 5区 遺構平面図1 (S=1/60)



第28図 5区 遺構断面図 (S=1/40)



5区 コンクリート製控柱掘方完掘状況 北から



5区-69 控柱抜取痕完掘状況 北から

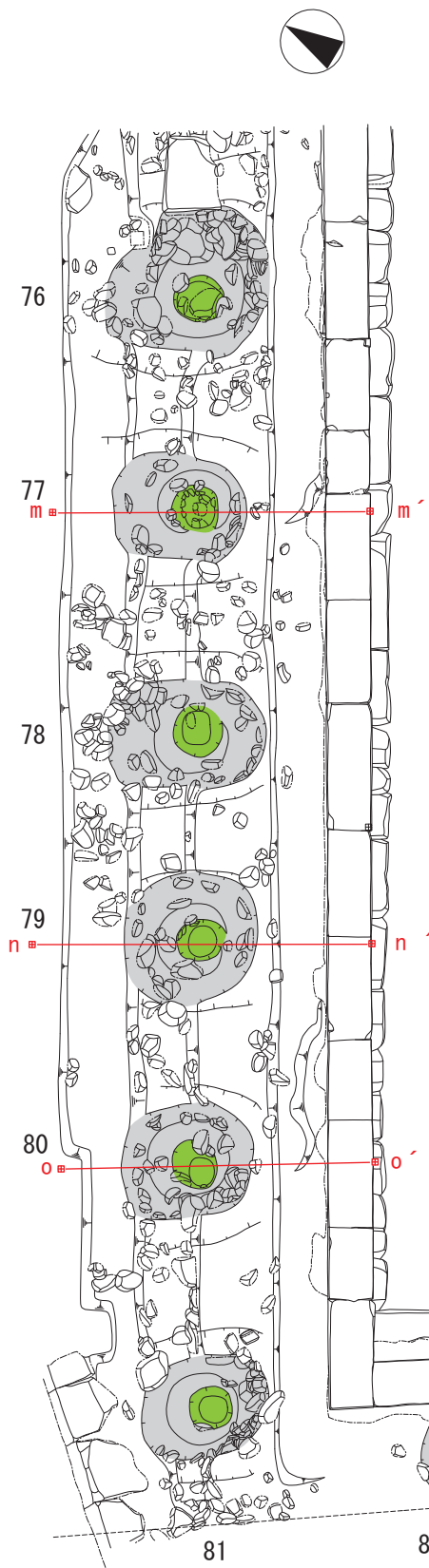


5区-69 控柱抜取痕検出状況 東から



5区-75 コンクリート製控柱掘方検出状況 西から

第29図 5区 遺構平面図2 (S=1/60)



5区-77 控柱抜取痕断面 北から

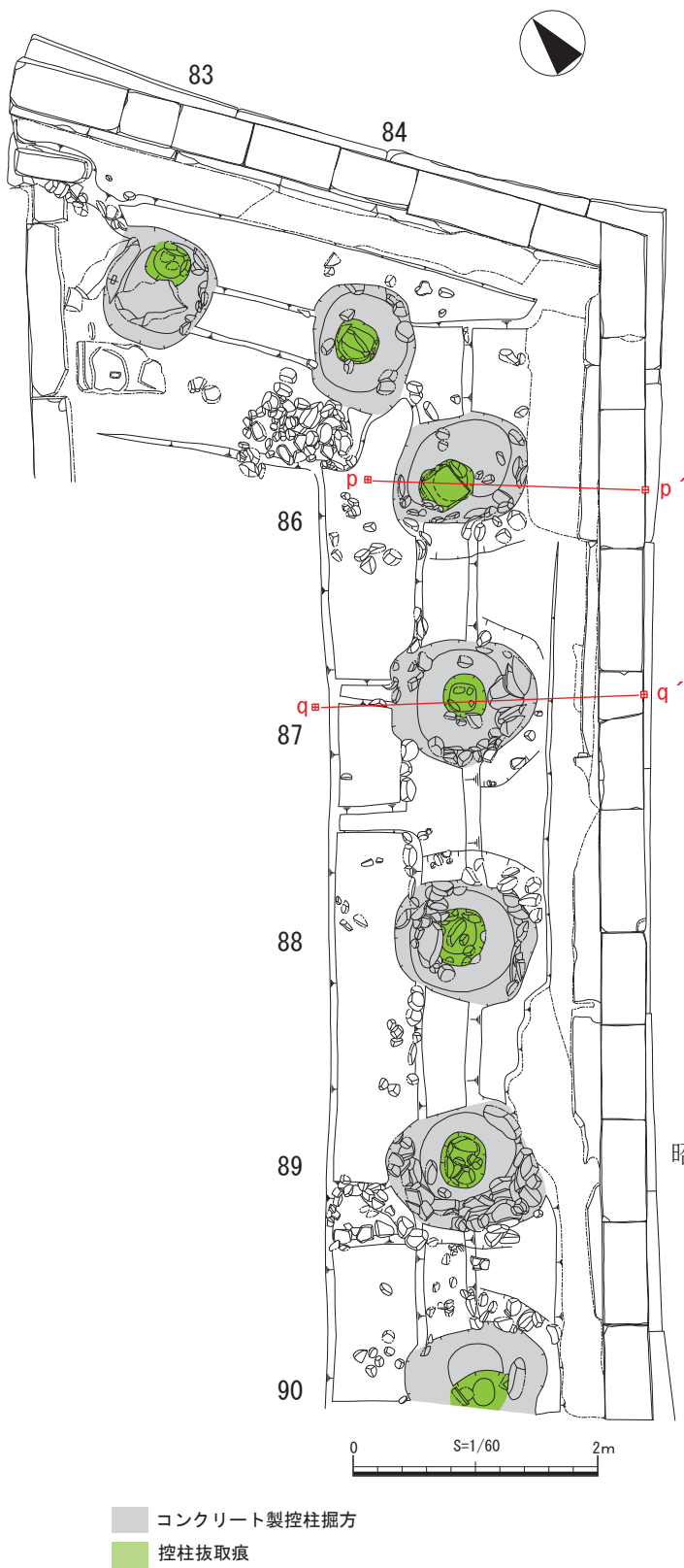


5区-79 控柱抜取痕断面 北から



5区-80 コンクリート製控柱検出状況 東から

第30図 5区 遺構平面図3 (S=1/60)



6区-84 控柱礎盤石検出状況 南から



6区-86 控柱抜取痕礎盤石検出状況 北から

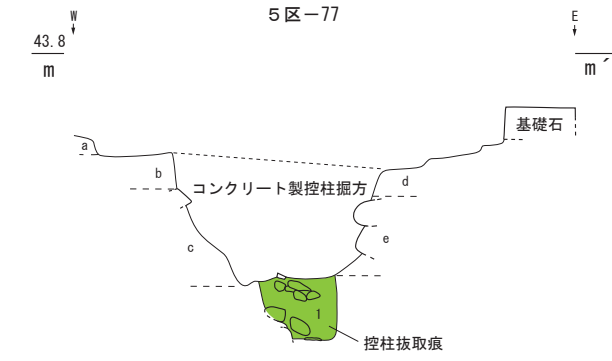


昭和修理コンクリート製土間破損状況（調査前） 北から

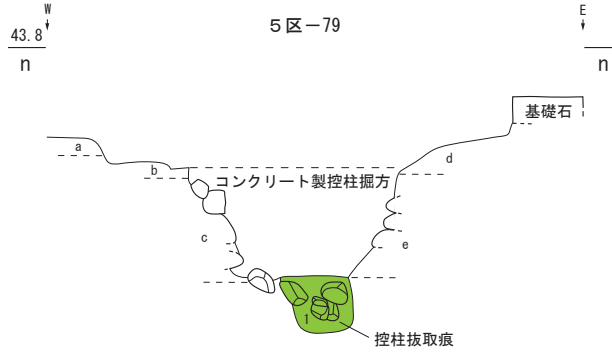


6区-89 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から

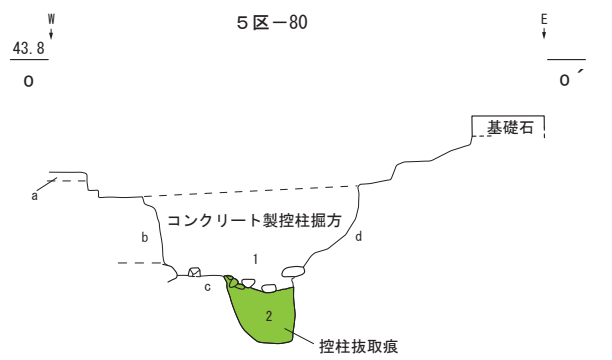
第31図 6区 遺構平面図 (S=1/60)



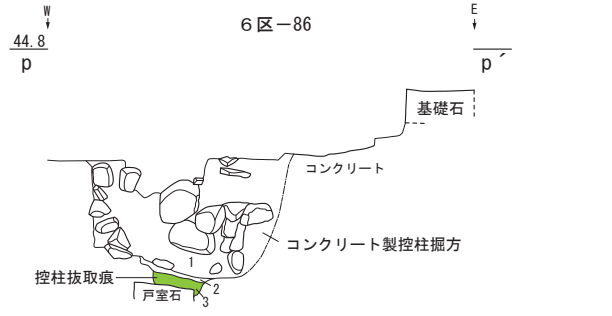
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 (5Y5/6 オリーブ色土、しまりなし、炭化物含む、10cm以下の礫多く含む)
- a 10YR2/3 黒褐色土 (小礫含む)
- b 5Y5/4 オリーブ色砂質土 (焼土含む)
- c 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (焼土、炭化物含む)
- d 10YR3/2 黒褐色砂質土
- e 5Y5/4 オリーブ色砂質土 (焼土含む)



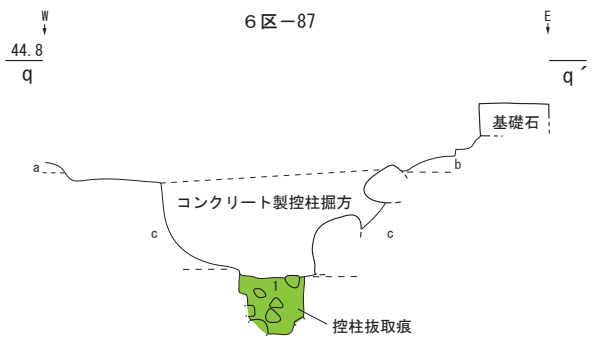
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 (しまりなし、炭化物含む)
- a 10YR2/3 黒褐色土 (小礫含む)
- b 5Y5/4 オリーブ色砂質土 (炭化物含む)
- c 10Y4/3 にぶい黄褐色焼土 (炭化物含む)
- d 10YR3/2 黒褐色土
- e 5Y5/4 オリーブ色土 (焼土含む)



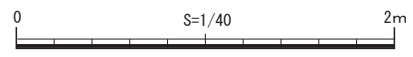
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 (炭化物、オリーブ色土含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質土
- a 10YR2/3 黒褐色砂質土 (小礫含む)
- b 5Y5/4 オリーブ色土
- c 5Y4/4 暗オリーブ色土 (やや粘性あり 小礫、炭化物含む)
- d 5Y4/3 暗オリーブ色土 (やや粘性あり)



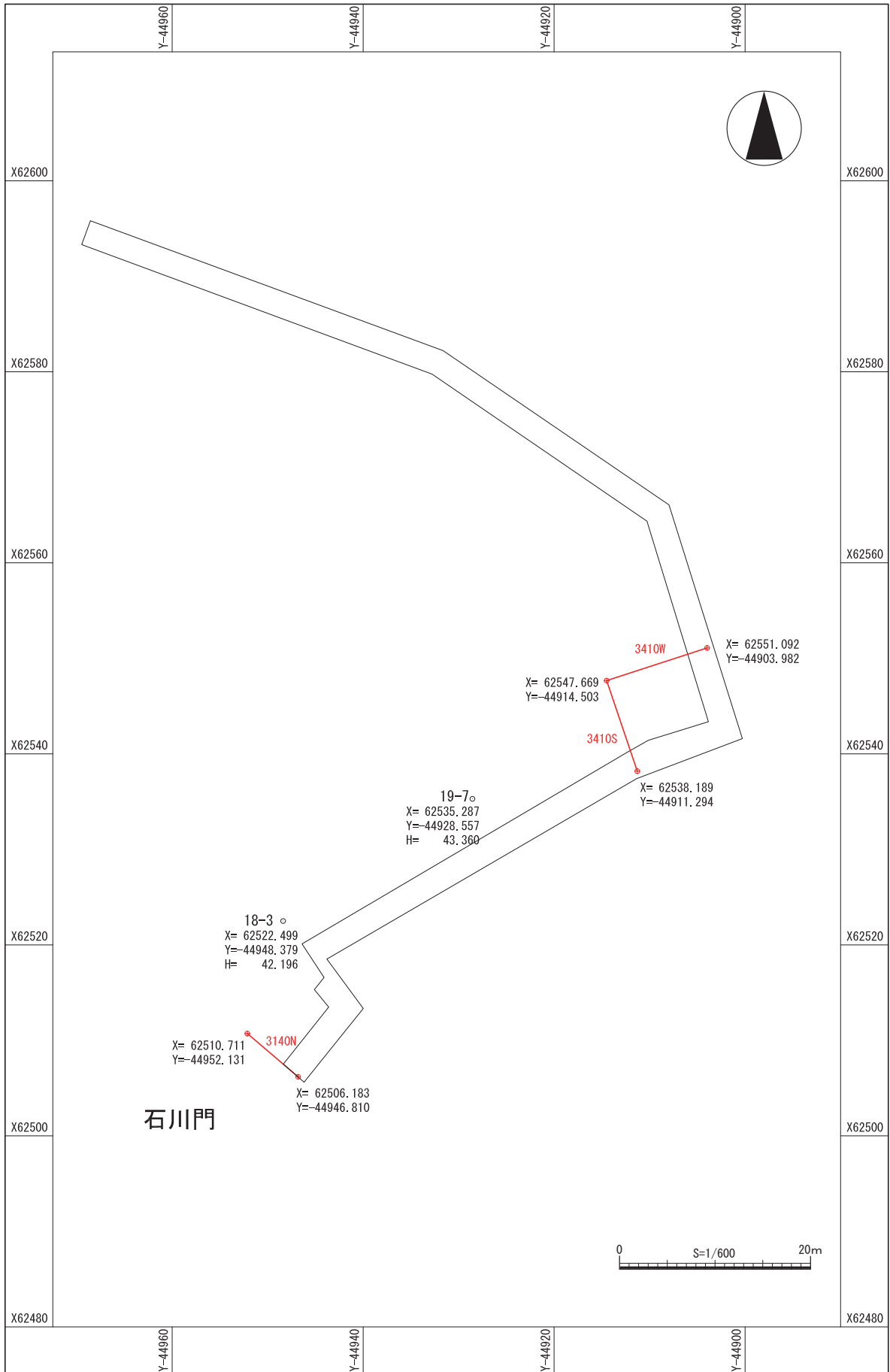
- 1 10YR3/2 黒褐色土
- 2 10Y3/2 黒褐色土 (コンクリートの粒含む)
- 3 1層に近似する。



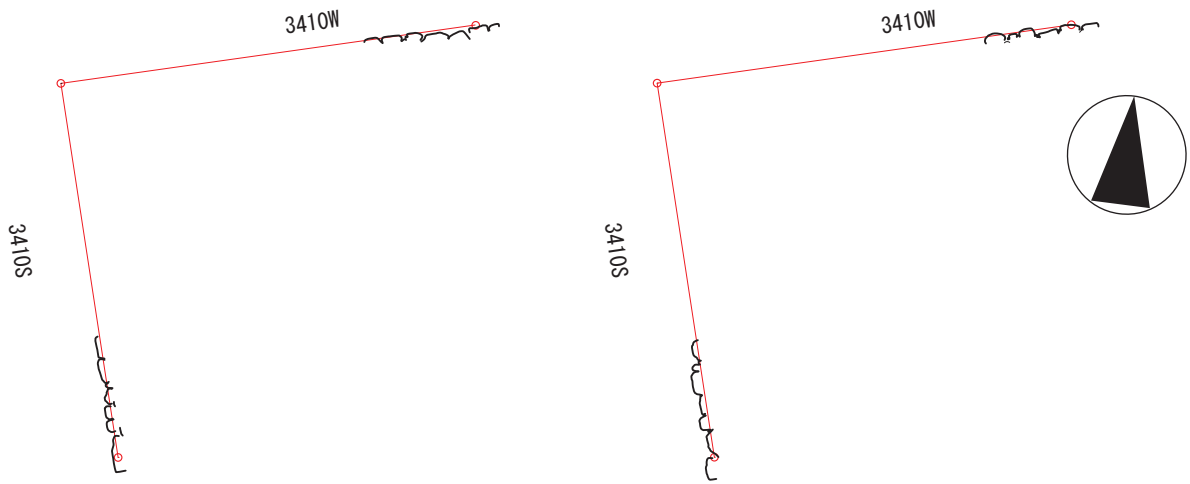
- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 (焼土含む、10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土含む)
- a 10YR2/3 黒褐色土 (小礫を多く含む)
- b 5Y4/3 暗オリーブ色砂質土
- c 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (焼土含む)



第32図 5・6区 遺構断面図 (S=1/40)

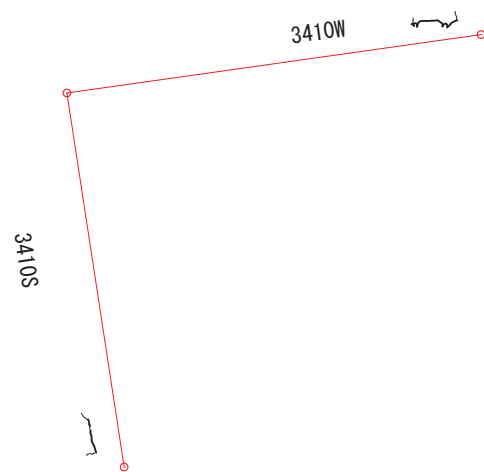
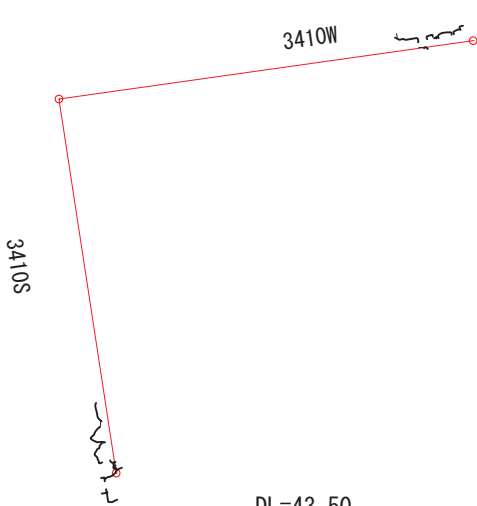


第33図 石垣水平断面図軸座標 (S=1/600)



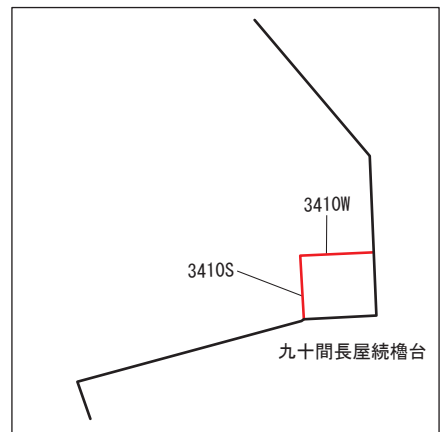
DL=44.50

DL=44.00



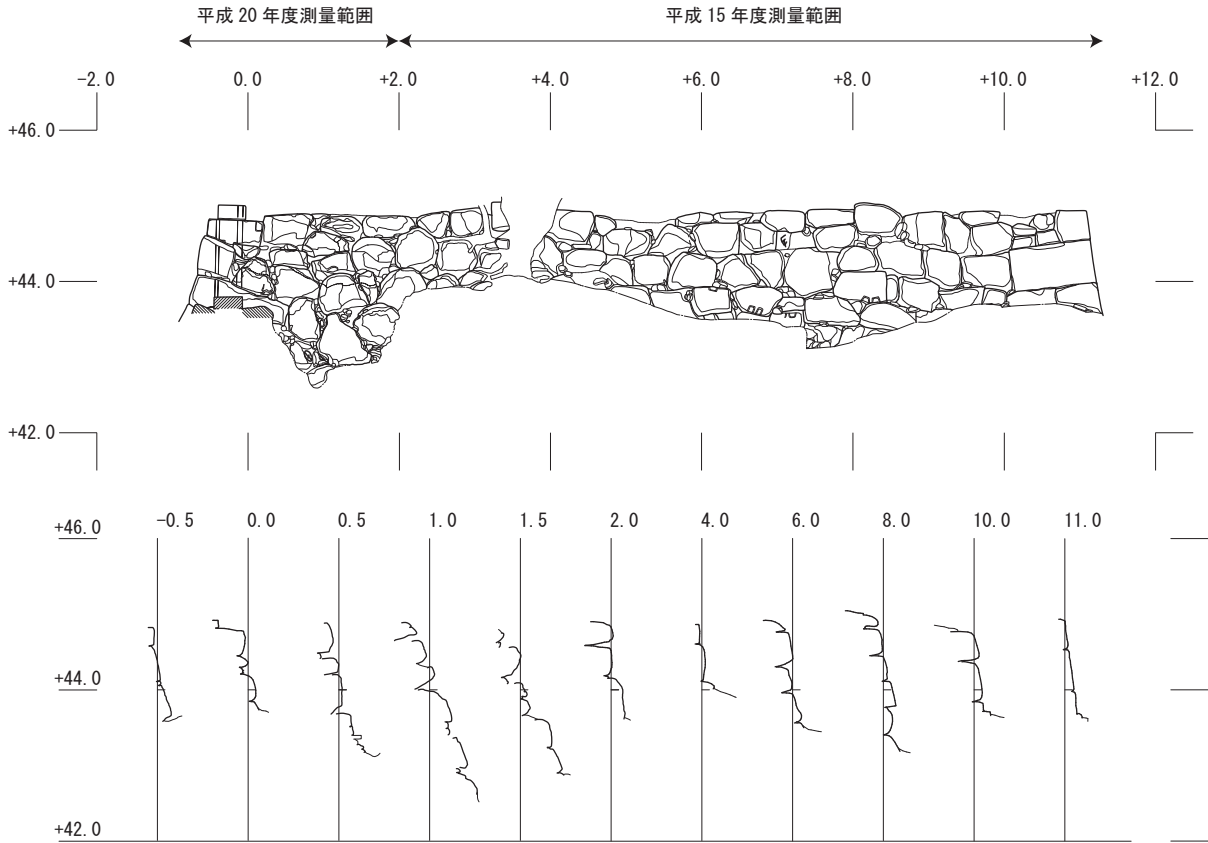
DL=43.50

DL=43.00

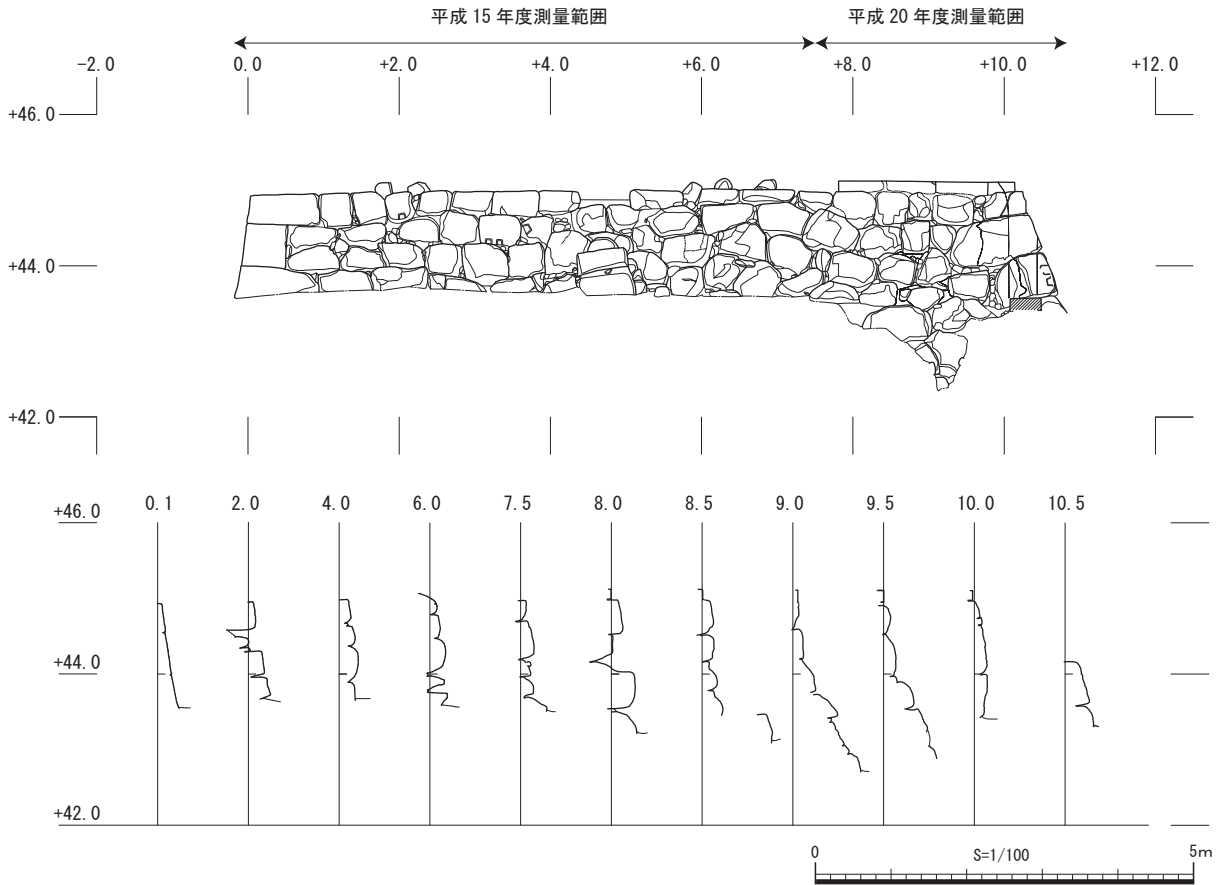


第34図 石垣 (ID3410W・3410S) 水平断面図 (S=1/200)

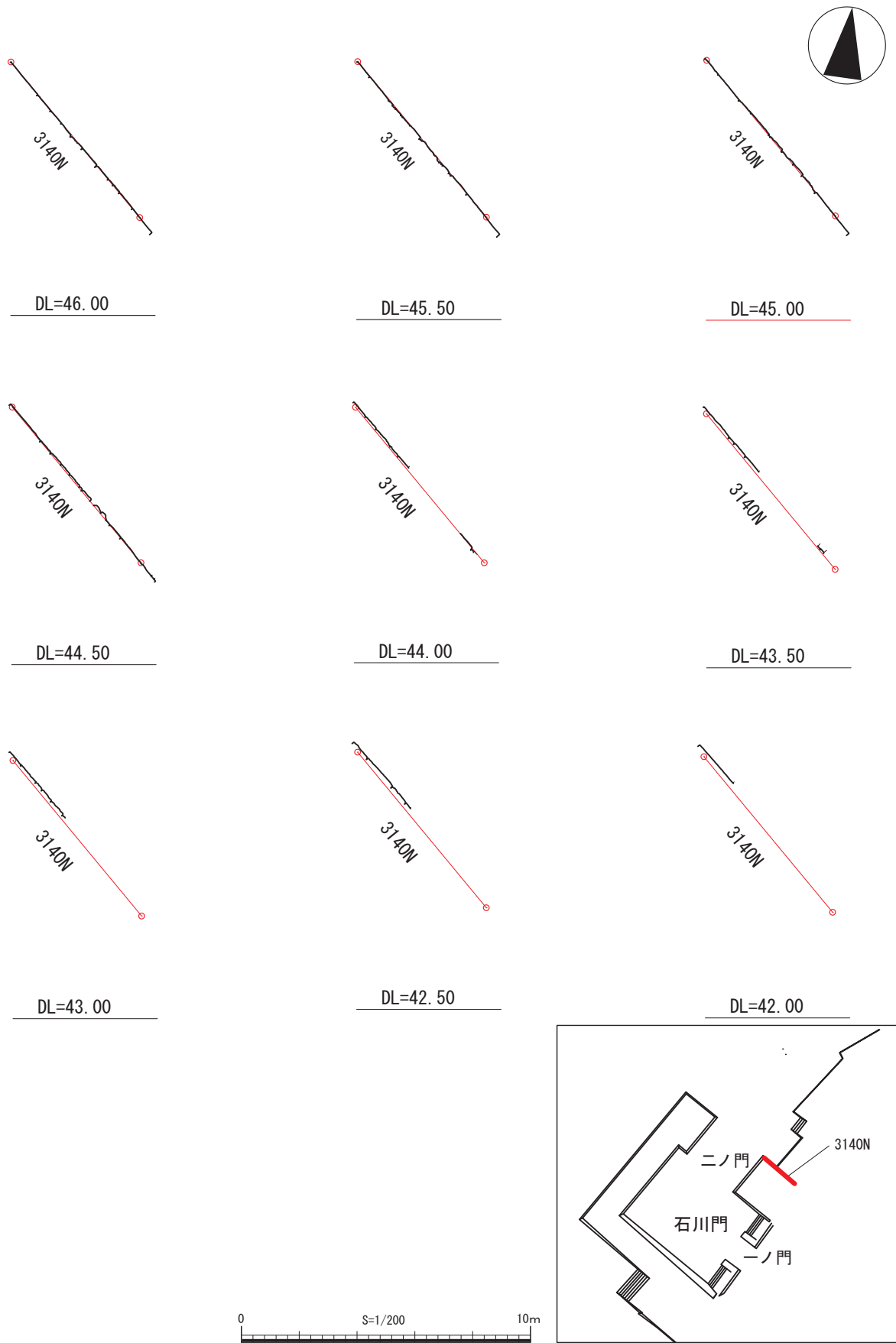
三ノ丸北東（隅櫓台）石垣（ID3410W）



三ノ丸北東（隅櫓台）石垣（ID3410S）

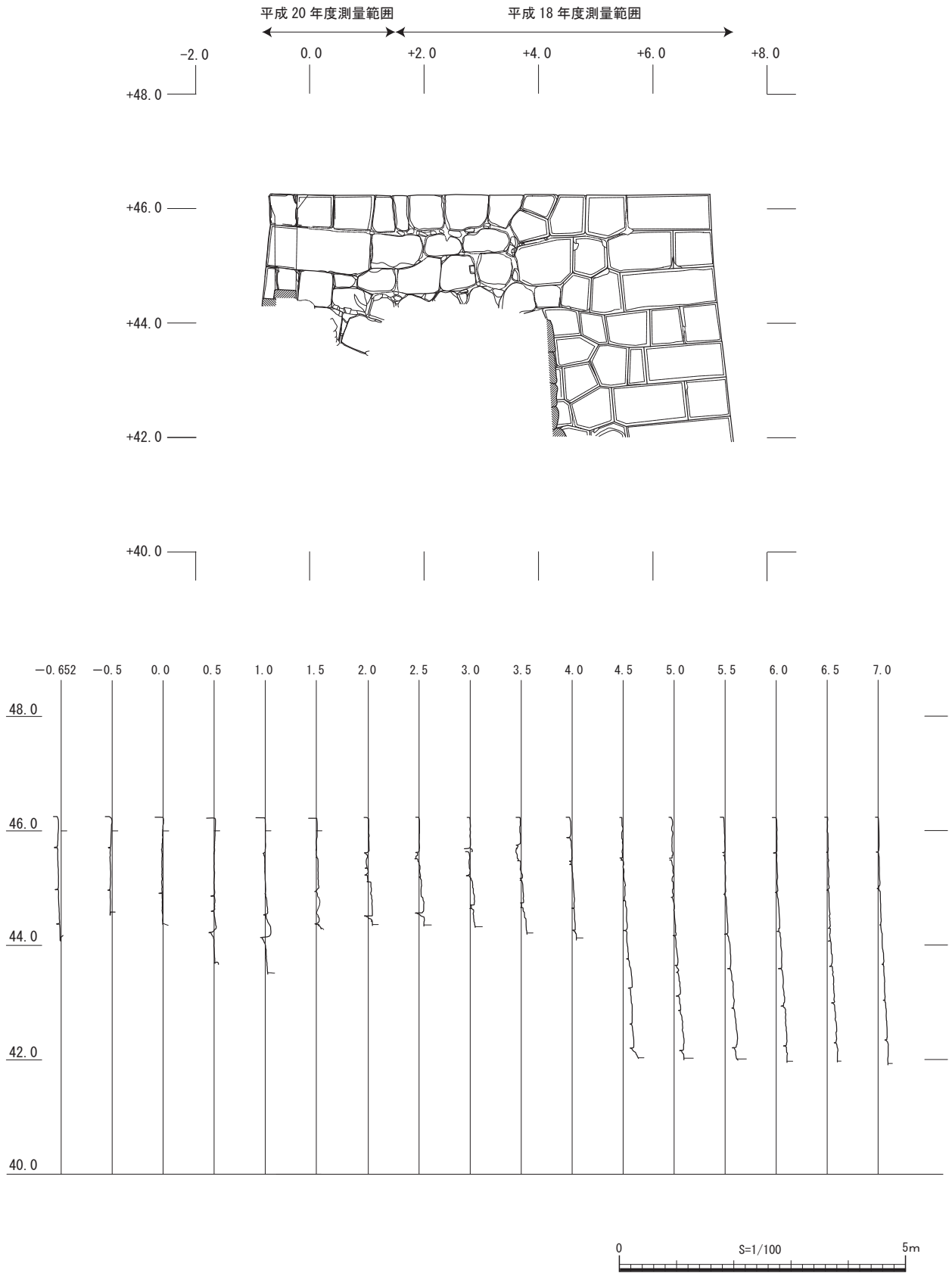


第35図 石垣（ID3410W・3410S）立面・垂直断面図（S=1/100）



第36図 石垣 (ID3140N) 水平断面図 (S=1/200)

石川門二ノ門東側檣台石垣 (ID3140N)



第37図 石垣 (ID3140N) 立面・垂直断面図 (S=1/100)

第5節 遺物

出土遺物は土器・陶磁器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品が出土し、パンケースにして約 160 箱を数える。その大半は瓦が占める。遺物観察表の層位区分は、整理の段階でⅠ～Ⅲ期に大別したものであり、Ⅰ期が表土からコンクリート製控柱掘方検出まで、Ⅱ期がコンクリート製控柱に係る遺構、Ⅲ期が控柱の抜取痕、Ⅳ期がそれ以外から出土したものである。コンクリート製控柱掘方、控柱抜取痕からの出土遺物には近代に属する型紙刷の磁器、瓦、ガラスがある。控柱掘方からは釉薬瓦が出土した。

瓦の種類・瓦当分類、釉薬の色調、胎土分類等については、『金沢城跡石垣修理工事報告書 玉泉院丸南西石垣』[石川県金沢城調査研究所 2010a] に拠った。

1. 土器・陶磁器 (第 38 図、第 4 表)

P 1～9 は表土からコンクリート製控柱掘方検出面までの出土である。P 1～3 は肥前の染付碗である。1 は筒形碗、2 は小型の広東碗、3 が丸碗で 18 世紀後半から 19 世紀に前半にかけての所産である。P 4・5 は土師器皿。P 4 には油煙痕がみられる。P 6～9 は瀬戸・美濃である。P 6 が小坏で口唇部に鉄錆釉を施す。P 7 は蛇の目凹形高台の皿。P 8 は反端碗。P 9 は赤上絵付が施された旧陸軍の食器である。いずれもコバルト顔料による染付である。

P 10～16 はコンクリート製控柱掘方埋土からの出土である。P 10 は肥前の丸碗で、18 世紀後半の所産。P 11 は漳州窯系の皿。P 12・13 は土師器皿。いずれも油煙痕がみられる。P 14 は皿でコバルト顔料による染付。P 15・16 は瀬戸・美濃の端反碗とみられる。コバルトによる染付が施される。

P 17～20 は控柱抜取痕埋土の出土遺物である。P 17 は P 9 と同様の旧陸軍の食器であるが、胎土は半磁胎で染付は粗雑である。P 18 は肥前の碗で、内面見込みにはコンニャク印判による五弁花文が施される。18 世紀中頃の所産である。P 19 は瀬戸・美濃の小坏でコバルトによる染付である。P 20 は型紙刷の蛇の目凹形高台の皿。P 21 は土師器皿。P 22 はコンニャク印判の碗で、近世造成土とみられる土層より出土。P 23～25 は調査段階では近世に相当する層からの出土として取り上げたが、出土状況(Ⅱb 層上面出土)や遺物整理作業の過程において、近代以降の型紙刷、ガラス等が伴うことから近代土層からの出土として報告する。P 23 は陶胎染付の碗、P 24 は外面が青磁釉の碗である。P 25 は鉄絵が施された瀬戸の瓶とみられる。

2. 瓦 (第 39 図、第 5～9 表)

図示した出土瓦は軒棧、軒丸、丸、熨斗、谷、面戸、棟、輪違がある。燻瓦の輪違以外は、釉薬瓦である。図示した以外には軒平瓦・平瓦・腰瓦・袖瓦などが出土している。このうち軒平瓦のすべてと軒丸瓦・平瓦、棧瓦などの一部にいぶし瓦が見られる以外は釉薬瓦が多数を占める。

T 1～6 は釉薬の軒棧瓦。T 1～4 は表土からコンクリート製控柱掘方が検出されるまでの出土遺物である。T 2 は瓦当の中心飾りが 8 弁の菊文、釉薬の掛り方Ⅲである。T 3 は瓦当の大部分が欠損するが、菊文とみられる。T 4 は 10 弁の菊文で、第二唐草が下を向く。菊Ⅱ類。釉薬の掛り方Ⅲである。T 5・6 はコンクリート製控柱掘方からの出土である。T 5 は丸みを帯びた 8 弁の菊文。瓦当上半部を欠損する。T 6 は瓦当の大半を欠損するが唐草から、中心飾りが玉形と推測される。T 7 は控柱掘方(断面 4・5 層)出土した棧瓦で釉薬は暗茶褐～暗紫色の色調で、釉薬の掛り方Ⅲである。T 8～10 はコンクリート製控柱掘方出土の軒丸瓦である。T 8 は巴文で、釉薬はオリーブ灰色の色調で、瓦当裏面は露胎としている。T 9 の瓦当文は劍梅鉢(梅鉢Ⅲ)。釉薬は光沢のある暗褐色の色調で、胎土はにぶい赤褐色である。T 10 の瓦当文は巴文で、釉薬はやや紫がかる黒褐色、胎土は明褐色の色調

である。T11はコンクリート製控柱掘方出土の丸瓦である。釉薬は暗赤褐色、胎土は橙の色調である。T12は控柱掘方出土の丸瓦である。釉薬はやや光沢のあるオリーブ黒色の色調で胎土は明赤褐色で白色の礫、粗砂含む。T13は控柱掘方ないし、石垣掘方から出土の丸瓦。釉薬はやや光沢がある黒褐色の色調、胎土はにぶい褐色で粗砂多く含む。T14～16は熨斗瓦である。T14は控柱掘方からの出土で、釉薬は光沢があり黒褐色の色調である。胎土はにぶい橙色で礫・粗砂を微量に含む。銅製の針金が残る。T15は明確な出土地点はわからないがIV層相当より出土している。釉薬は黒褐色の色調で胎土は淡橙色で、粗砂が少量含まれる。T16は控柱掘方ないし、石垣掘方から出土の丸瓦。釉薬はにぶい褐色の色調で、胎土は明褐色である。T17はコンクリート製控柱掘方出土の谷瓦で釉薬はやや光沢のある黒色の色調で、胎土は橙色で礫・粗砂を含む。T18は控柱掘方から出土している面戸瓦である。釉薬は表面のみに掛けられている。T19は輪違い。T20は棟瓦。いずれも控柱掘方上面からの出土である。

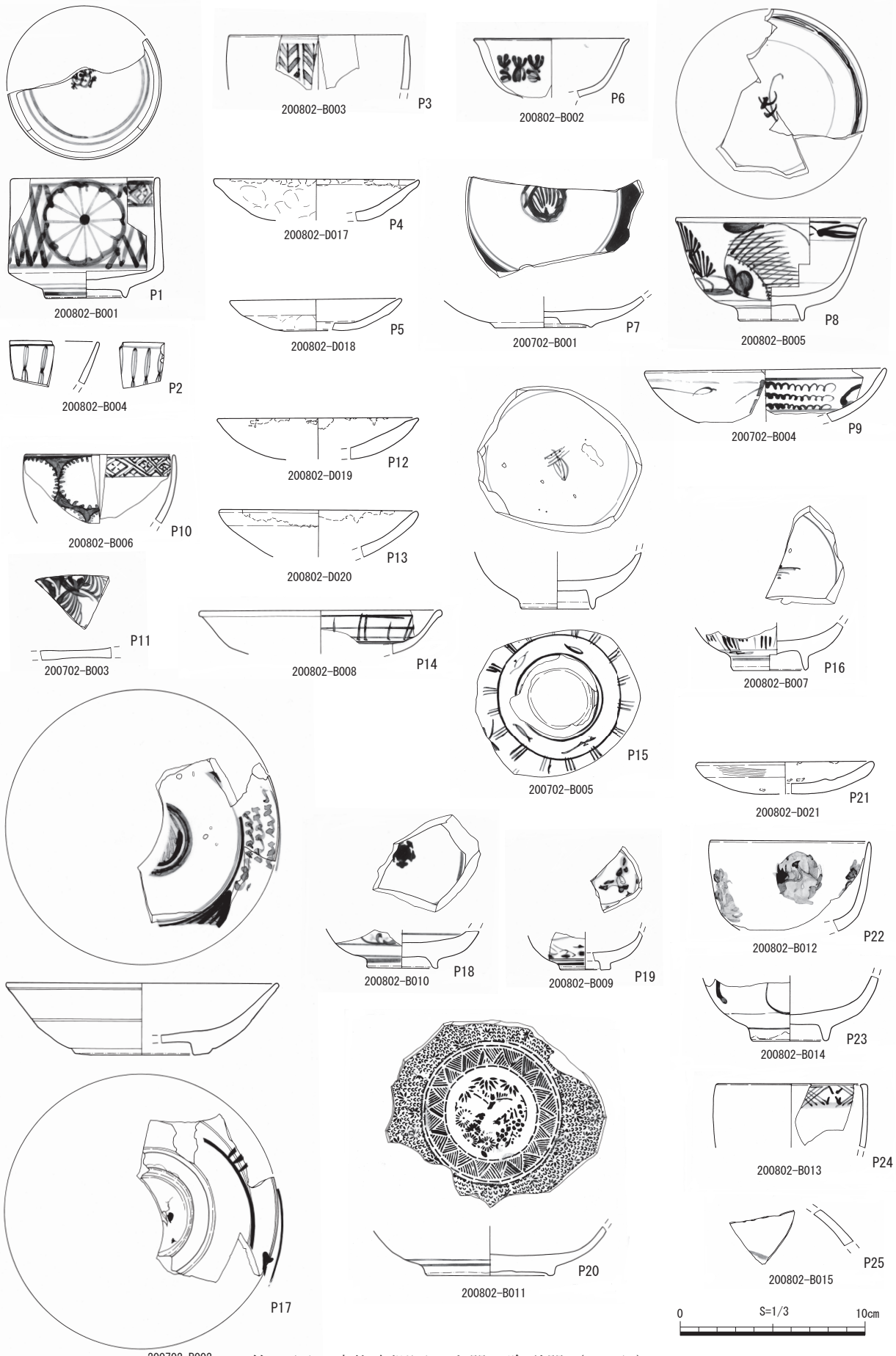
3. 金属製品・石製品（第40図、第10・11表）

M1、M2は鋊で、長さ、厚さはほぼ同じで、幅が異なり、大きいものは約17cm、小さいものは約12cmを測る。鋊の釘部分の断面及び釘の軸の断面部分は四角く、先端は尖っている。M3～7は釘である。M3は鉄製で、長さ約10cmを測る。昭和の保存修理工事に太鼓塀の外壁素材である腰瓦を留める際に利用されたものと同製品である。M4～7は銅製で、長さは約2～6cmを測る。

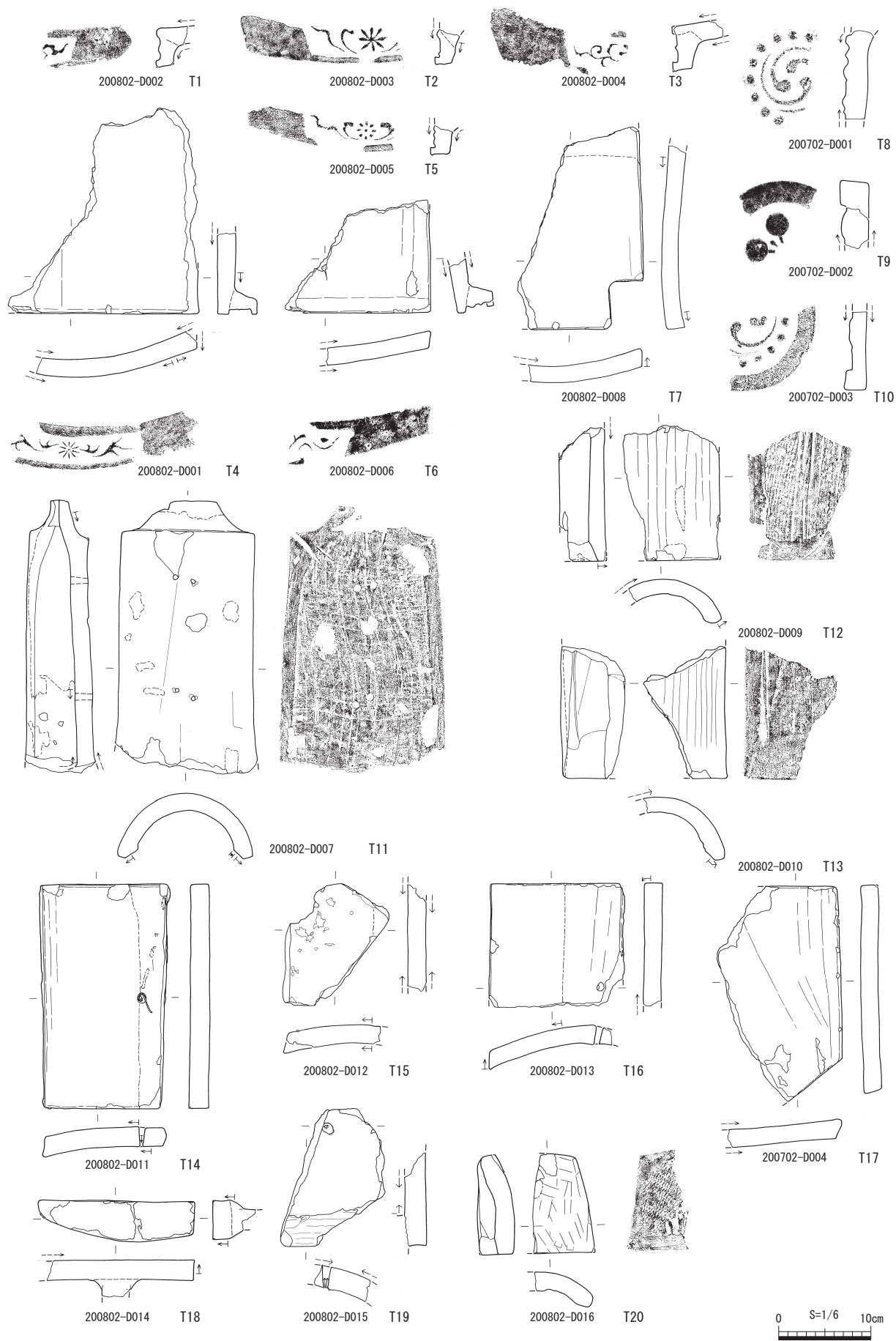
S1は側溝の部材で、凝灰岩である。外面はノミ痕、タタキ痕が見られ、内面は平滑である。S2～4の用途は基礎石や側溝の側石が考えられる。石材はS2が凝灰岩（笏谷石）、S3が安山岩（戸室石）、S4が凝灰岩である。ノミ痕が確認でき、タタキ痕、チョーナ痕の見られるものもある。

第6節 小結

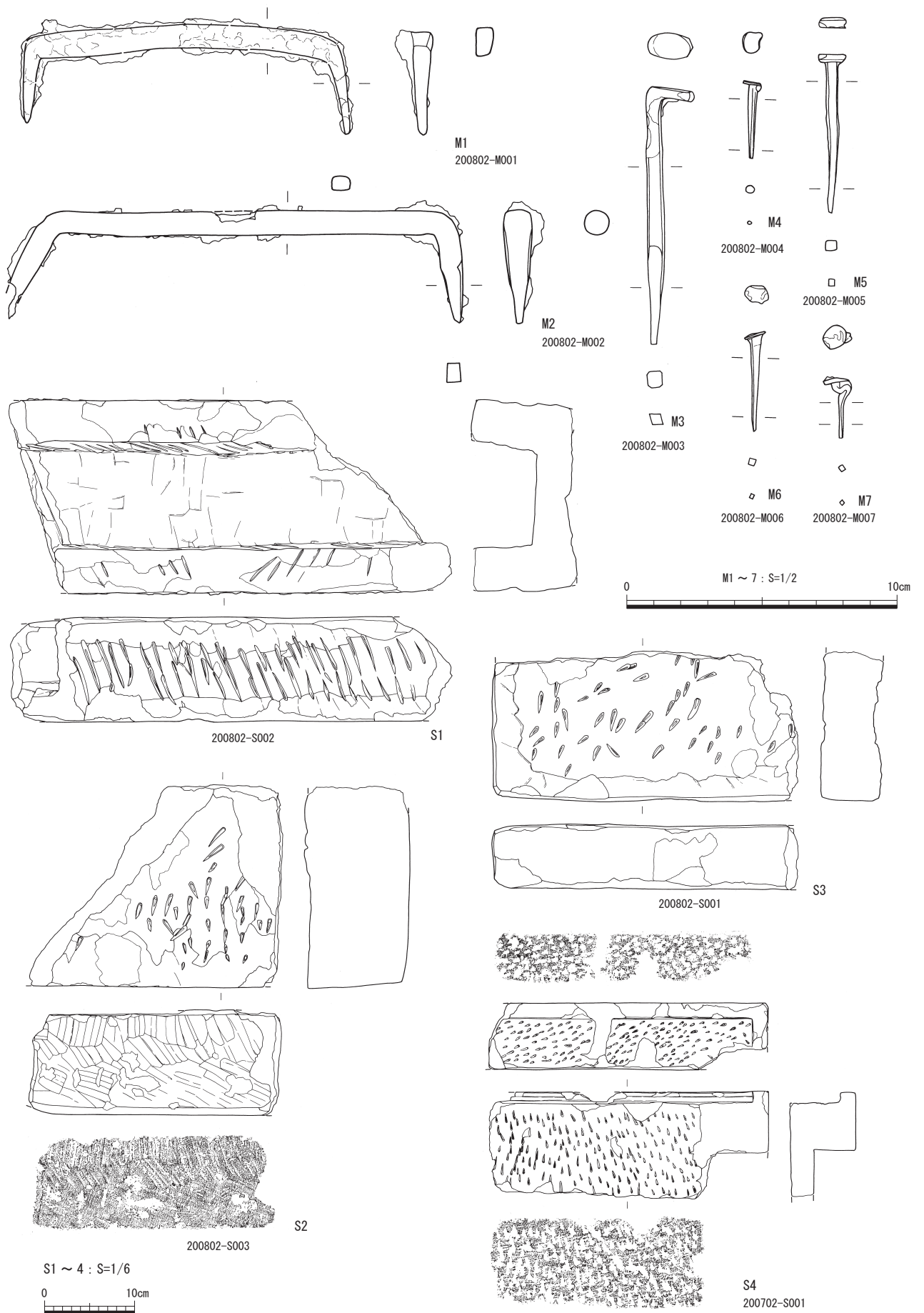
コンクリート製控柱掘方の底面で、控柱の抜取痕と掘方を検出した。抜取痕底面では、礎盤石とみられる、河原石や戸室石が面を向けて配されている箇所も確認された。掘方は抜取痕を取り囲むように検出された。掘方からの出土遺物には、時期を判断できる遺物はなかったが、近世後期以降に生産された釉薬瓦が出土している。出土した瓦の釉薬の色調は多様で、無光沢で赤褐色のものから光沢のある黒褐色のものまであり、焼成や釉薬の成分がことなることが考えられる。今後は釉薬瓦の変遷が課題となる。



第38図 遺物実測図 土器・陶磁器 (S=1/3)



第39図 遺物実測図 瓦 (S=1/6)



第40図 遺物実測図 金属・石製品 (S=1/2・1/6)

第4表 遺物観察表 土器・陶磁器

図版	標識番号	発掘番号	種別	器種	出土地点	層位	口径	底径	器高	成形・整形	釉薬・裝飾等	胎土・色調等	産地	備考
P1	200802-H001		磁器	碗	5-67	I	7.9	4.4	6.6	ロクロ	染付	灰白	肥前	18c後半
P2	200802-H004		磁器	碗	4-49	I			2.3	ロクロ		灰白	肥前	18c後半~19c初
P3	200802-H003		磁器	碗	5-89	I	(9.7)		3.0	ロクロ	染付	灰白	肥前	18c後半
P4	200802-H017		土器	土師器皿	4-58	I	(11.1)	(6.9)	2.2	手づくね		黄緑	在地	油煙痕
P5	200802-H018		土器	土師器皿	5-78	I	(9.2)	(4.5)	1.7	手づくね		浅黄緑	在地	
P6	200802-H002		磁器	小坏	6-88	I	(8.4)		3.2	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	口唇部線溝
P7	200702-H001		磁器	皿	3-36	I		5.3	2.7	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	蛇ノ目凹形高台
P8	200802-H005		磁器	碗	6-89	I	10.2	3.6	5.6	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	コハルト
P9	200702-H004		磁器	皿	6-89	I	(13.0)		2.8	ロクロ	内 染付外 染付、赤絵	灰白	瀬戸・美濃	コハルト
P10	200802-H006		磁器	碗	4-54	II	(8.0)		(3.8)	ロクロ	染付	灰白	肥前	18c中
P11	200702-H003		磁器	皿	1-7	II			0.6	ロクロ	染付	灰白	中国	
P12	200802-H019		土器	土師器皿	4-58	II	11.2		(2.2)	手づくね		浅黄	在地	油煙痕
P13	200802-H020		土器	土師器皿	4-60	II	(12.6)		2.5	手づくね		浅黄	在地	油煙痕
P14	200802-H008		磁器	皿	6-90	II	(13.1)		2.4	ロクロ	染付	灰白	肥前?	コハルト
P15	200702-H005		磁器	碗	3-36	II		3.9	(3.1)	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	
P16	200802-H007		磁器	碗	5-75	II		3.9	(2.6)	ロクロ	染付	灰白	瀬戸美濃	
P17	200702-H002		磁器	皿	3-34	III	(15.0)	(7.4)	4.0	ロクロ	内 染付 外 赤絵	灰白	瀬戸・美濃	半磁胎 軍隊食器
P18	200802-H010		磁器	碗	6-87	III		3.6	2.1	ロクロ	染付	灰白	肥前(遠在見)	コニエキク印判 18c中
P19	200802-H009		磁器	小坏	5-78	III		(2.8)	2.2	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	コハルト
P20	200802-H011		磁器	皿	5-77	III		7.1	(2.7)	ロクロ	印判染付	灰白	瀬戸・美濃	蛇ノ目凹形高台
P21	200802-H021		土器	土師器皿	4-50	IV	9.4		(1.8)	手づくね		黒緑	在地	
P22	200802-H012		磁器	碗	5-78	IV	(8.6)		4.9	ロクロ	染付	灰白	肥前	コニエキク印判
P23	200802-H014		陶器	碗	5-78	IV		4.0	3.4	ロクロ	染付(陶胎染付)	灰	肥前	18c
P24	200802-H013		磁器	碗	5-78	IV	7.9		(3.5)	ロクロ	内 染付 外 青磁釉	灰白	肥前	18c後半
P25	200802-H015		陶器	瓶	5-77	IV			(3.0)	ロクロ	内 釉(浅黄) 外 釉(浅黄)、赤絵	浅黄	瀬戸・美濃	

第5表 遺物観察表 瓦 (軒棧・軒平瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	種類	出土地点	階位	瓦当										胎土 色調	焼成 色調	瓦当分類	混和剤	備考		
						a	b	c	d	e	f	g	h	j	体部 厚さ							
39	T1	200802-1002	軒棧	5-72	I					2.3							類IV	良 褐色 (軸)	明赤褐	白色 灰色粗砂多量		
	T2	200802-1003	軒棧	5-73	I						1.8							良 黒褐 (軸)	明赤褐	白色細砂微量		
	T3	200802-1004	軒棧	6-88	I					2.9	2.8	2.1						良 黒褐 (軸)	橙	白色微少量、白色粗砂多量		
	T4	200802-1001	軒棧	5-65	I					2.3	4.3	2.4	1.6		1.9			類II	良 赤 (軸)	橙	白色微少量、黒色粗砂多量	
	T5	200802-1005	軒棧	4-48	II								2.1					良 黒褐 (軸)	明赤褐	白色微 粗砂微量		
	T6	200802-1006	軒棧	6-89	II					2.3	8.9	2.6			1.9			玉田	良 黒 (軸)	シヤ状 にふい橙	白色微少量、白色粗砂少量	

第6表 遺物観察表 瓦 (棧瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	種類	出土地点	階位	体部										胎土 色調	焼成 色調	瓦当分類	混和剤	備考		
						a	b	c	d	e	f	g	h	体部 厚さ								
39	T7	200802-1008	棧	4-51	IV			5.4	3.4										良 にふい赤褐色 (軸)	橙	白色粗砂微量、黒色粗砂多量	

第7表 遺物観察表 瓦 (軒丸瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	種類	出土地点	階位	瓦当										胎土 色調	焼成 色調	瓦当分類	混和剤	備考			
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	体部 厚さ								
39	T8	200702-1001	軒丸	1-4	II			11.0	6.2										巴目-2c	良 オリーブ灰 (軸)	明赤褐	白色 黒色粗砂少量	
	T9	200702-1002	軒丸	1-2	II			(6.3)											梅鉢皿	良 暗褐色 (軸)	にふい赤褐	白色微少量、白色粗砂多量	其当部分に欠あり
	T10	200702-1003	軒丸	3-47	II				2.4										巴目-1c	良 黒褐 (軸)	明赤褐	白色微少量、白色粗砂多量	

第8表 遺物観察表 瓦 (丸瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	種類	出土地点	階位	体部										胎土 色調	焼成 色調	瓦当分類	混和剤	備考		
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	体部 厚さ							
39	T11	200802-1007	丸	4-60	II			3.4	11.5	6.7	1.7	4.5							良 暗赤褐 (軸)	橙	白色微少量、白色粗砂多量	
	T12	200802-1009	丸	4-51	IV		(10.0)				1.5								良 オリーブ黒 (軸)	明赤褐	白色微少量、白色粗砂多量	
	T13	200802-1010	丸	4-57	IV		(14.0)	(8.9)		7.0	1.3								良 暗褐 (軸)	にふい褐	白色 黒色粗砂多量	

第9表 遺物観察表 瓦 (その他)

図版	掲載番号	発掘番号	遺種	出土地点	層位	形状	法量			物成・色調	胎土・色調	混和剤	備考
							最大長	最大幅	厚				
39	T14	200802-001.1	瓦斗	4-50	III IV	軸	24.7	14.2	2.1	黒 黒褐 (軸)	シマ状 にふい・橙	白色粗砂微量	突孔1カ所、斜念有り
	T15	200802-001.2	瓦斗	4-55	IV	軸	(13.4)	(11.5)	2.0	黒 黒褐 (軸)	シマ状 淡橙	粗砂少量含む	
	T16	200802-001.3	瓦斗	4-57	IV	軸	(14.9)	(13.6)	1.9	黒 にふい・褐 (軸)	明褐	白色粗砂量、白色 黒色粗砂少量	突孔1カ所
	T17	200702-0004	谷	2-29	II	軸	17.2	4.6	2.1	黒 黒 (軸)	シマ状 橙	白色粗砂少量、白色細砂少量	
	T18	200802-001.4	面戸	4-50	IV	軸	4.6	17.2	2.0	黒 黒褐 (軸)	シマ状 橙	白色粗砂量、白色細砂微量	
	T19	200802-001.5	輪遣い	4-58	IV	軸	(15.1)	(11.4)	2.3	黒 にふい・赤褐 (軸)	橙	白色粗砂量、白色粗砂少量	突孔1カ所
T20	200802-001.6	棟	4-58	IV	棟	(10.9)	(6.6)	2.1	灰 灰色 (棟)	灰白色	黒色 灰色粗砂微量		

第10表 遺物観察表 金属製品

図版	掲載番号	発掘番号	遺種	出土地点	層位	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考
40	M1	200802-0001	鉋	4-50	I	鉄	4.3	12.3	1.1		
	M2	200802-0002	鉋	6-89	I	鉄	4.2	16.8	0.96	83.7	
	M3	200802-0003	釘	5-65	I	鉄	9.6	1.6	1.0	18.67	
	M4	200802-0004	釘	5-65	I	銅	2.9	0.7	0.8	1.38	
	M5	200802-0005	釘	6-87	II	銅	5.9	1.0	0.4	3.75	
	M6	200802-0006	釘	6-86	II	銅	3.7	0.9	0.65	1.79	
	M7	200802-0007	釘	4-55	IV	銅	2.3	1.0	0.9	1.07	

第11表 遺物観察表 石製品

図版	掲載番号	発掘番号	遺種	出土地点	層位	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	備考
40	S1	200802-5002	削片	6-86	II	凝灰岩	(46.7)	22.2	11.8	8.80	
	S2	200802-5003	基礎石	5-66	I	凝灰石	(23.0)	(28.4)	11.9	(9.06)	
	S3	200802-5001	基礎石	5-81	II	芦室石	17.0	(34.4)	6.9	6.25	
	S4	200702-5001	基礎石	3-43	II	凝灰岩	(7.3)	(31.4)	7.4	2.15	

第5章 左方太鼓塀の調査成果

第1節 概要

左方太鼓塀は、石川門表門（一ノ門）を正面にして左手に配置され、三ノ丸と鶴ノ丸の東辺部に位置し、近世には蓮池堀（百間堀）に面していた。また、石川櫓に付属し、中間の出し1棟（宝暦大火前は中櫓）、南端の水ノ手門で構成する。石川櫓側の一段高い箇所（1区）では、近世に三ノ丸と鶴ノ丸を区画し、南門に接続する堀及び土塁上の二重塀（塀の呼称については、左方太鼓塀と区別するため、便宜上、二重塀とする）が分岐しており、橋爪一ノ門前面の内堀と食い違いによる虎口を形成していた。堀の構築年代は、内堀の調査成果によると寛永8年（1631）の二ノ丸造成に伴うものとしており、虎口の構造上、同時期に構築されたものと考えられ、廃絶時期は旧陸軍によって埋立てられた明治中期頃と推定する。今回の調査において、堀及び二重塀等に関わる遺構は、土塁に繋がる三ノ丸東石垣の一部（ID3310S）のみ検出した。

太鼓塀の様相は、宝暦大火（1759年）前後で異なり（第2章第3節）、中櫓は出しに、水ノ手門は櫓門で長屋を連結した城門であったものが高麗門に変更されている。明治に入ると、水ノ手門周辺は旧陸軍により、地盤の嵩上げや北面していた門を東面に変更する等の改変が行われ、大正～昭和初期にかけては、太鼓塀の控柱がコンクリート製に変更された。その後、昭和保存修理工事（28～34年）、それ以後の部分修理を経て、概ね現況の姿となった。調査において、水ノ手門周辺で近世前期（宝暦大火前）の門柱・礎石痕跡や三ノ丸東（太鼓塀下）石垣（ID3020S）の延長を確認した。

石垣については、先述の2面の他、石川門続櫓台石垣（ID3110S）の下部、水ノ手門の近代改変後に新設された三ノ丸東水ノ手門北石垣（ID3020W）を検出した。

第2節 調査の方法

右方太鼓塀の調査方法に倣い、コンクリート洗い出し（土間）、コンクリート製控柱とその基礎及び縁石の撤去後、昭和保存修理以降に堆積した表土等を掘削し、コンクリート製控柱・縁石掘方の検出・掘削を行った。その後、完掘したコンクリート製控柱掘方の底面において、控柱抜取痕を中心に精査を行い、絵図・文献史料も参考に調査を進めた。

調査記録については、各調査区に設定した控柱掘方や調査区壁面の土層断面図作成、遺構の写真撮影等を行い、調査区全体図、石垣立面・断面図の測量は業者委託により実施した。

第3節 基本層序と時期区分（第41・42図）

基本層序は、1～5区に設定した調査区壁面（西壁）の土層断面を基に、控柱掘方等の遺構断面も考慮に入れ、大別4層に区分し、各々に時期を想定した。各層の標高値については、Ⅲ層の一部を除き、概ね城内側の数値を示している。また、Ⅰ～Ⅲ層については、右方太鼓塀の層序と対応しており、各層の概要は、以下の通りである。

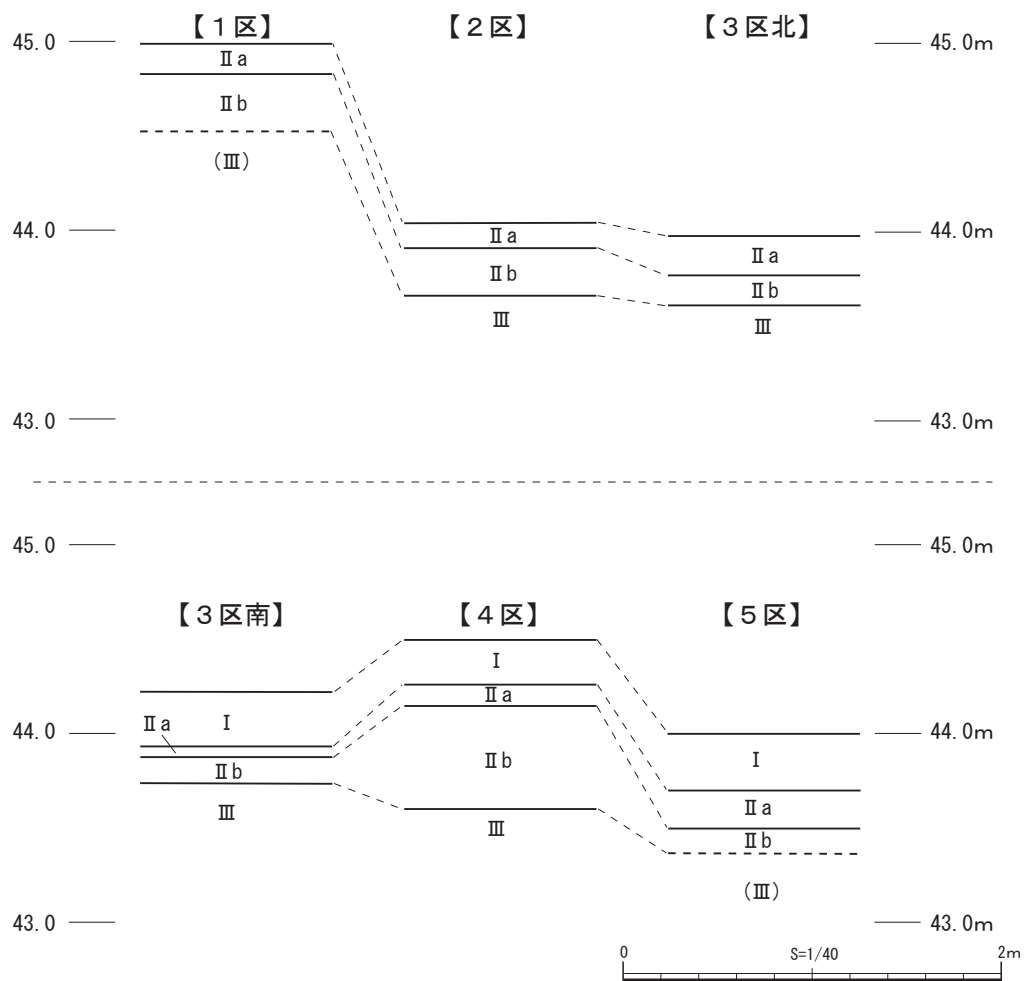
Ⅰ層は平成13年の全国都市緑化フェアに伴う公園整備土であり、5区を中心に3区南側まで約30cm堆積する。Ⅱa層は黒褐色土（部分的に小砂利が混じる）を呈する昭和保存修理工事以後から金沢大学時代の旧表土であり、1～5区全体に約10～20cm堆積する。Ⅰ・Ⅱa層は調査前の現況を示し、標高は1区が44.95m前後、2～5区が43.70～44.30mを測り、全体的に5区にかけて低くなる。

Ⅱb層は昭和保存修理竣工時までの堆積土であり、1～5区にかけて確認した。標高は1区が44.80

～44.90m、2区が43.72～43.82m、3区が43.70～44.00m、4区が44.06～44.24mを測り、概ね4区にかけて高くなり、1区においては、昭和保存修理に伴う造成の影響が多であったためか、修理以前の堆積土は確認できず、出土遺物等から明らかに修理以降の層が城内側を中心にみられた。コンクリート製控柱・縁石掘方はⅡb層上面で検出したものであり、これに伴う2・3区のコンクリート製柵も同様である。また、3区38の周囲では、検出した煉瓦製柵等の構造物や土層観察により、近代前半（明治）から昭和保存修理竣工時にかけての変遷が窺えた。

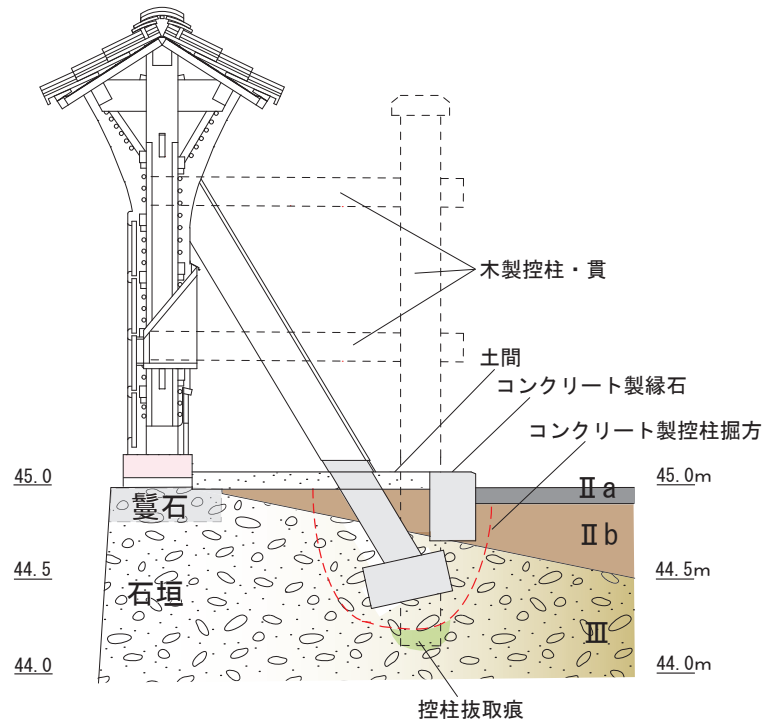
Ⅲ層はその直下に石垣の栗石を確認できることや石垣天端の標高値から、近世面のGLが推定でき、近代の削平等を考慮し、近世末から近代として捉えた。標高は1区が44.80～44.90m、2区が43.60～43.76m、3区が43.60～43.80m、4区が43.80m前後を測る。1区の標高値は、城内側がⅡb層で厚く堆積し、Ⅲ層が不明確であることから石垣側の数値を示した。また、5区においては、近代に嵩上げ等の改変が行われ、Ⅱb層が厚く堆積していることから、Ⅲ層面を捉えていない。

各調査区の層序と対応関係については、調査区西壁の土層断面を基に作成した第41図で示している。また、太鼓塀と控柱等との対応を、調査区の様相が異なることから、1区と2～4区に大別して模式的に示したものが第42図である。5区は先述の通り、近代の新設のため図化していない。

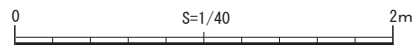
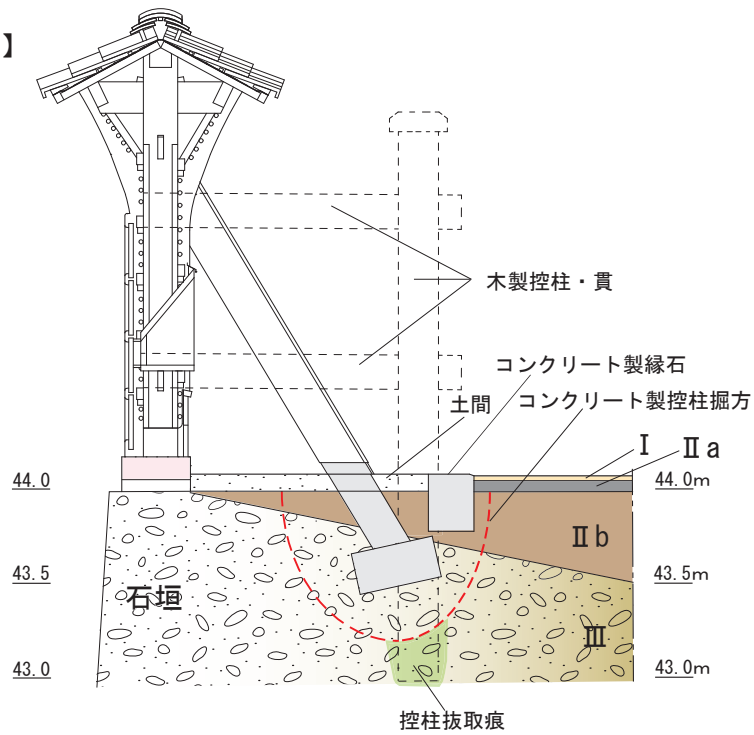


第41図 基本層序模式図 (S=1/40)

【1区】



【2～4区】



第42図 太鼓塀断面模式図 (S=1/40)

第4節 遺構

コンクリート製控柱掘方や変更前の控柱痕跡（以下、抜取痕）を中心に、5区では近代改変前の近世水ノ手門に関わる痕跡を確認した。抜取痕の検出は、コンクリート製控柱掘方底面の限られた範囲において、石垣の裏込めである栗石と控柱に伴う河原石を見極めつつ、「造作弁図解」（第5図）による太鼓塀（基礎石）からの距離・深さを参考に行った。抜取痕の埋土は、概ね堅くしめるコンクリート製控柱掘方の底面に対し、しまりがない砂系を主体とするものがみられ、内部には石垣の栗石と同じ河原石が混入しているものも確認できた。また、コンクリート製控柱掘方壁面にまで石垣の栗石が厚く広がっていること等から、コンクリート製に変更する以前の控柱掘方は確認できていない。

コンクリート製控柱掘方と抜取痕の深さは、検出面からの数値であり、「造作弁図解」と対比するため太鼓塀からの距離（位置）と深さを示した。距離は、太鼓塀（基礎石の中心）から抜取痕の中心までを算出し、深さは、その周囲の地盤が近代の改変等で削平を受けていることを考慮し、石垣天端（1区鬘石、2～4区築石）レベルを近世面と想定し、その高さから深さを算出した。5区については、改変が著しいため近世面を捉えることができず、太鼓塀自体も新設ではあるが、便宜上、現況の基礎石からそれぞれ算出した。

1. 1区 2～11（第43～45図）

1区-2（第45図） コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約108cm、短軸約102cm、深さは検出面から約40cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は直径約50cm、深さは検出面から約12cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。抜取痕の位置は基礎石中心部（以下、省略）から約176cm、深さは石垣天端の鬘石（以下、省略）から約104cmを測る。

1区では、石垣天端及び土層の堆積状況が2～5区と異なっている。石垣の天端石として鬘石が使用され、その上に基礎石が設置されている。鬘石の規模は長さ約110～200cm（平均144cm、32cmを測る極端に短いもの1石）、幅約60cm、高さ（石面）約30cmを測り、赤・青両方の戸室石が認められる。また、土層観察や遺物出土状況から、鬘石直下の築石上面まで昭和修理時の影響を受けていることが分かる。また、抜取痕についても他の調査区とは異なり、浅い窪み状を呈するものが多い。

1区-3 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約112cm、短軸約110cm、深さは検出面から約55cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約35cm、短軸約30cm、深さは検出面から約12cmを測る。埋土は多量の炭化物を含む黒褐色粘質土である。抜取痕の位置は約130cm、深さは約112cmを測る。

1区-4 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約90cm、短軸約86cm、深さは検出面から約46cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約44cm、短軸約36cm、深さは検出面から約8cmを測る。埋土は多量の炭化物を含む黒褐色粘質土である。抜取痕の位置は約140cm、深さは約105cmを測る。

1区-5 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約110cm、短軸約92cm、深さは検出面から約45cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約44cm、短軸約42cmを、深さは検出面から約7cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。抜取痕の位置は約154cm、深さは約96cmを測る。

1区-6（第45図） コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約122cm、短軸約78cm、深さは検出面から約46cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約40cm、短軸約34cm、深さは検出面から約13cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。城内側では、昭和修理時の盛土層（Ⅱb層）が厚く堆積していることからⅢ層は捉えていない。抜取痕の位置は約142cm、深さは

は約99cmを測る。

1区-7 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約114cm、短軸約94cm、深さは検出面から約65cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約72cm、短軸約52cm、深さは検出面から約10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。城内側で確認した河原石は、上面に平坦部を有し、両側面が研られており、抜取痕の規模に収まるものである。また、控柱8・9・11でも同様な河原石が近接して確認でき、石垣の栗石とは規模等が異なる。このことから、控柱の礎盤としての利用を推定するが、石上面に木柱痕を確認できているわけでない。河原石は少なくとも昭和修理時の盛土に覆われていることから、該期の際に取り除かれ埋められたものとする。抜取痕の位置は約144cm、深さは約103cm（礎盤を仮定した場合、約78cm）を測る。

1区-8 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約92cm、短軸約90cm、深さは検出面から約65cmを測る。抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約68cm、短軸約44cm、深さは検出面から約4cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。城内側では直径約30cmを測る河原石を確認した。抜取痕の位置は約160cm、深さは約105cm（礎盤を仮定した場合、約80cm）を測る。

1区-9 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約88cm、短軸約80cm、深さは検出面から約70cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は直径約48cm、深さは検出面から約10cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。城内側では縦・横約30cmを測る河原石を確認した。抜取痕の位置は約148cm、深さは約102cm（礎盤を仮定した場合、約82cm）を測る。

控柱7・8、8・9間に戸室石や凝灰岩が並置する。戸室石の平面形は方形が主体であり、青・赤色の両方が認められる。規模は長軸約60～75cm、短軸約40～50cm、厚さ約30cmを測る。凝灰岩の平面形は方形を呈し、規模は長軸約40cm、短軸約20～30cm、厚さ約20cmを測り、戸室石に接地する。昭和修理に伴うコンクリート製縁石の下部に位置し、凝灰岩・コンクリートブロックを併用していることから、縁石の基礎（土台）としての二次的利用が考えられる。ただ、昭和修理時の盛土が、戸室石等の上面を城内側半分程度覆って（第45図）おり、石の掘方も確認できていないことから、昭和修理以前（コンクリートの存在から大正～昭和初期頃）に既に置かれていた可能性もある。

南門に繋がる二重塀については、左方太鼓塀の下部構造と同様の基礎石は未検出であり、塀と塀の接続部においても鬘石等に痕跡を確認していない。また、修理時の新材への変更及び移設等の要因が考えられるが、文化財建造物保存技術協会向井氏によると本柱等の木部にも痕跡は無かったようである。近世後期の絵図（第7図11）を参考にすると、二重塀の分岐点は、三ノ丸東石垣（ID3310S）から約4.9m北に描かれており、調査区平面図との照合から控柱9・10間が該当することが分かる。二重塀の控柱は塀の南側に描かれ、太鼓塀から1本目のものが推定約2.6m北西に位置することになるが、調査区外となるため未検出である。

1区-10 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約95cm、短軸約85cm、深さは検出面から約69cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は長軸約42cm、短軸約40cm、深さは検出面から約5cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。抜取痕の位置は約142cm、深さは約97cmを測る。

1区-11（第45図） コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約88cm、短軸約86cm、深さは検出面から約52cmを測る。抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は縦・横約45cm、深さは検出面から約14cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。城内側では縦・横約40cmを測る河原石を確認した。抜取痕の位置は約140cm、深さは約107cm（礎盤を仮定した場合、約87cm）を測る。

2. 2区 13～27 (第46～48・51図)

2区-13 コンクリート製控柱掘方の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約85cm、短軸約55cm、深さは検出面から約42cmを測る。抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約50cm、短軸約37cm、深さは検出面から約16cmを測る。抜取痕の位置は約134cm、深さは約79cmを測る。

2区-14 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約88cm、短軸約78cm、深さは検出面から約58cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約35cm、短軸約27cm、深さは検出面から約8cmを測る。埋土は河原石を含む黒褐色砂質土である。抜取痕の位置は約142cm、深さは約91cmを測る。

2区-15 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約90cm、短軸約85cm、深さは検出面から約46cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約55cm、短軸約50cm、深さは検出面から約4cmを測る。抜取痕の位置は約148cm、深さは約88cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側において、埋甕を1基確認した。甕は小礫を含む粘質土に据え置かれ、その周囲を砂質土で埋め固めた状態にあり、内部は布切れと共に黒色粘質土が厚く堆積する。また、控柱15～18の城内側にかけては鉄筋コンクリートの残欠を確認し、これは金沢大学期(昭和前半)の建築物の一部と思われるが、建物取り壊しに伴い甕口縁部が内部に落ち込んでいる。甕は建物に伴うものであり、便所(便槽)であった可能性が高い。

2区-16 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約100cm、短軸約75cm、深さは検出面から約49cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約45cm、短軸約39cm、深さは検出面から約7cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約139cm、深さは約78cmを測る。

2区-17 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約100cm、短軸約85cm、深さは検出面から約40cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約45cm、短軸約30cm、深さは検出面から約20cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。抜取痕の位置は約145cm、深さは約90cmを測る。

2区-18 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約90cm、短軸約82cm、深さは検出面から約46cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約60cm、短軸約40cm、深さは検出面から約11cmを測る。抜取痕の位置は約130cm、深さは約90cmを測る。

2区-19 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約93cm、短軸約74cm、深さは検出面から約53cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は長軸約40cm、短軸約30cm、深さは検出面から約10cmを測る。埋土は河原石を多量に含む暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約132cm、深さは約89cmを測る。

2区-20 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約88cm、短軸約82cm、深さは検出面から約53cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約44cm、短軸約36cm、深さは検出面から約8cmを測る。抜取痕の位置は約137cm、深さは約83cmを測る。

コンクリート製控柱掘方に北接して、城内へ延びる土管とそれに接続する排水口を確認した。土管は昭和修理時にコンクリート洗い出し(土間)との同時施工で、控柱13～20間に敷設された排水溝につながるものであり、北方(控柱13)からの流水を土間上部に開口する排水口から土間下部の土管を通し、城内の溜枳へ流すものである。

2区-21 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約118cm、短軸約106cm、深さは検出面から約48cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約40cm、短軸約30cm、深さは検出面から約14cmを測る。抜取痕上面に河原石及び瓦の集積がみられた。抜取痕の位置は約164cm、深さは約71cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、鉄蓋を伴う縦・横約 40 cmを測るコンクリート製枡を確認しており、城内側へ延びる土管が接続する。昭和修理時に同時施工されたものであり、太鼓塀周辺の雨水等を排するものである。

2区-22 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約120cm、短軸約90cm、深さは検出面から約56cmを測る。抜取痕の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約35cm、短軸約30cm、深さは検出面から約20cmを測る。埋土は河原石を多量に含む暗茶砂質土である。抜取痕の位置は約150cm、深さは約99cmを測る。

2区-23 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 115 cm、短軸約 110 cm、深さは検出面から約 58 cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は直径約 32 cm、深さは検出面から約 19 cmを測る。埋土は炭化物を多量に含む暗茶色砂質土である。抜取痕の位置は約 142 cm、深さは約 96 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、鉄蓋を伴う縦・横約40cmを測るコンクリート製枡を2基確認した。コンクリート製縁石に接する枡ともう1基の枡（城内側）が土管により接続し、城内へ流水するものである。昭和修理時に同時施工されたものであり、太鼓塀周辺の雨水等を排するものである。

2区-24 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 150 cm、短軸約 110 cm、深さは検出面から約 50 cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 65 cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 25 cmを測る。埋土には河原石が多量に含まれる。抜取痕の位置は約 142 cm、深さは約 89 cmを測る。

2区-25 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 90 cm、短軸約 83 cm、深さは検出面から約 60 cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 46 cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 14 cmを測る。埋土には河原石が多量に含まれる。抜取痕の位置は約 138 cm、深さは約 94 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方に北接して、縦・横約 60 cmを測るコンクリート製枡を確認し、北・西方に延びる土管が接続する。北に延びる土管が、控柱 23 の西部で確認した枡の手前で割られていることや枡が昭和修理時のコンクリート製縁石下部に位置することから、昭和修理以前の施工（大正～昭和初期）のものであろう。

宝暦大火前の絵図（第6図7他）を参考にすると、太鼓塀の中間に中櫓の存在が窺えるが、その痕跡は確認できなかった。絵図から位置を算出すると、控柱 25～30 間が該当する。

2区-26（第51図） コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 115 cm、短軸約 98 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。抜取痕の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 44 cm、短軸約 38 cm、深さは検出面から約 10 cmを測る。抜取痕の位置は約 142 cm、深さは約 83 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、鉄蓋を伴う縦・横約 40 cmを測るコンクリート製枡を確認し、城内側に延びる土管が接続する。コンクリート製控柱と同様に、4層（IIb）から掘り込んでいることから、昭和修理時に同時施工されたものであり、太鼓塀周辺の雨水等を排するものである。

2区-27 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整方形を呈する。規模は長軸約 105 cm、短軸約 75 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は長軸約 54 cm、短軸約 20 cm、深さは検出面から約 7 cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約 142 cm、深さは約 62 cmを測る。

3. 3区 30～43（第49～51・54図）

3区-30 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は長軸約 152 cm、短軸約 122

cm、深さは検出面から約 47 cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は長軸約 55 cm、短軸約 50 cm、深さは検出面から約 31 cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約 110 cm、深さは約 100 cmを測る。

3区-31 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 148 cm、短軸約 143 cm、深さは検出面から約 63 cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 48 cm、深さは検出面から約 26 cmを測る。抜取痕の位置は約 132 cm、深さは約 98 cmを測る。

3区-32 コンクリート製控柱掘方の平面形は略円形を呈する。規模は長軸約 124 cm、短軸約 119 cm、深さは検出面から約 62 cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 65 cm、短軸約 48 cm、深さは検出面から約 35 cmを測る。抜取痕の位置は約 120 cm、深さは約 112 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、鉄蓋を伴う縦・横約 50 cmを測るコンクリート製枡を確認し、城内側に延びる土管が接続する。昭和修理時に同時施工されたものであり、太鼓塀周辺の雨水等を排水するものである。

枡の南側には、長さ 1 m以上、約 15 cm角の切石と鉄バンドによるボルト締めで固定した鉄筋コンクリートを確認した。鉄筋コンクリートと鉄バンドの間には河原石を入れ固定の補強を図っている。この構造物は、昭和 20 年の軍隊絵図（第 7 図 14）を参考にすると、当該付近に電柱及び架線の状況が窺えることや構造の仕組み等から、電柱の可能性はある。

3区-33 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 140 cm、短軸約 126 cm、深さは検出面から約 68 cmを測る。抜取痕は明確に検出できていない。

3区-34 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 134 cm、短軸約 122 cm、深さは検出面から約 63 cmを測る。抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 33 cm、短軸約 28 cm、深さは検出面から約 8 cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約 118 cm、深さは約 90 cmを測る。

3区-35 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 100 cm、短軸約 90 cm、深さは検出面から約 50 cmを測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は直径約 35 cm、深さは検出面から約 32 cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 104 cmを測る。

3区-36 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 120 cm、短軸約 108 cm、深さは検出面から約 67 cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 75 cm、短軸約 61 cm、深さは検出面から約 27 cmを測る。抜取痕上面において集石を確認した。抜取痕の位置は約 126 cm、深さは約 108 cmを測る。

3区-37 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 130 cm、短軸約 120 cm、深さは検出面から約 49 cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 78 cm、短軸約 62 cm、深さは検出面から約 21 cmを測る。抜取痕の位置は約 152 cm、深さは約 105 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、鉄蓋を伴う縦・横約 55 cmを測るコンクリート製枡を確認しており、控柱 38 の方向（南方）に延びる土管が接続する。2区 21・23・26、3区 32 で確認した枡とは異なり、城内側に土管は延びていない。

3区-38 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 124 cm、短軸約 114 cm、深さは検出面から約 56 cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 70 cm、短軸約 65 cm、深さは検出面から約 19 cmを測る。抜取痕の位置は約 150 cm、深さは約 93 cmを測る。

3区-39 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 132 cm、短軸約 114 cm、深さは検出面から約 47 cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 15 cmを測る。抜取痕の位置は約 138 cm、深さは約 84 cmを測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、縦・横約 55 cm を測るコンクリート製枘を確認し、検出時には既に鉄蓋は残存しておらず、枘内部に土砂が充満していた。コンクリート製枘の下部には、控柱 37 から延びる土管が接し、その土管の接続部分を除き、切石を組み合わせた石製枘を設置する。その下部には、10×20cm を測る煉瓦を積み上げ、内部に円筒状の排水口を北面に 2 基、西面に 1 基組み込んだ煉瓦枘を確認した。これらの構造物は基本層序 II b 層に包括し、煉瓦・石製枘は第 51 図 11 層上面から、コンクリート製枘は 3 層上面から、それぞれ掘り込んで設置されたものであり、近現代の変遷が窺える。

3 区-40 (第 54 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 121 cm、短軸約 113 cm、深さは検出面から約 63 cm を測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 40 cm、深さは検出面から約 15 cm を測る。埋土は炭化物や黄褐色粘質土ブロックを少量含む暗褐色粘質土である。抜取痕の位置は約 124 cm、深さは約 111 cm を測る。

3 区-41 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 150 cm、短軸約 142 cm、深さは検出面から約 55 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 50 cm、短軸約 32 cm、深さは検出面から約 27 cm を測る。埋土は暗褐色砂質土である。抜取痕の位置は約 126 cm、深さは約 106 cm を測る。

3 区-42 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 122 cm、短軸約 114 cm、深さは検出面から約 50 cm を測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 56 cm、短軸約 48 cm、深さは検出面から約 22 cm を測る。埋土は黄褐色土を少量含むしまりのない黒灰色砂質土である。抜取痕の位置は約 130 cm、深さは約 98 cm を測る。

コンクリート製控柱掘方の城内側で、長軸約 120 cm、短軸約 60 cm を測る土坑を確認し、内部には電柱の転用材と思われる鉄筋コンクリートを横たえ、それに鉄筋を巻きつけた構造物が置かれていた。昭和修理の盛土(第 54 図 2・3 層)を切り込んでいることから控柱設置後の施工と考える。

3 区-43 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 138 cm、短軸約 122 cm、深さは検出面から約 44 cm を測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 37 cm、短軸約 33 cm、深さは検出面から約 28 cm を測る。埋土はしまりのない暗褐色砂質土であり、河原石を含む。抜取痕の位置は約 112 cm、深さは約 109 cm を測る。

4. 4 区 45～49 (第 52・54 図)

4 区-45 コンクリート製控柱掘方の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 150 cm、短軸約 130 cm、深さは検出面から約 55 cm を測る。抜取痕の平面形は略円形を呈する。規模は直径約 48 cm、深さは検出面から約 34 cm を測る。埋土には河原石が入る。抜取痕の位置は約 130 cm、深さは約 114 cm を測る。

控柱 46～49 にかけての城内側において、河原石及び瓦の集積箇所を確認した。河原石は控柱 47 の城内側を中心に直径 20～30 cm を測る大型のものがみられ、瓦は区間全体に確認でき、釉薬瓦を主体とする。土層断面の観察から、昭和修理以前の近代整地土の一部と考える。

4 区-46 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 144 cm、短軸約 124 cm、深さは検出面から約 62 cm を測る。抜取痕の平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸約 60 cm、短軸約 53 cm、深さは検出面から約 17 cm を測る。埋土はしまりのない暗褐色砂質土であり、河原石を含む。抜取痕の位置は約 152 cm、深さは約 111 cm を測る。

4 区-47 (第 54 図) コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 138 cm、短軸約 120 cm、深さは検出面から約 64 cm を測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 65 cm、短軸約 45 cm、深さは検出面から約 33 cm を測る。抜取痕の位置は約 134 cm、深さは約 129 cm を

測る。

4区-48 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 122 cm、短軸約 115 cm、深さは検出面から約 53 cmを測る。抜取痕の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸約 46 cm、短軸約 35 cm、深さは検出面から約 27 cmを測る。抜取痕の位置は約 134 cm、深さは約 118 cmを測る。

4区-49 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 110 cm、短軸約 90 cm、深さは検出面から約 56 cmを測る。抜取痕の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 68 cm、短軸約 50 cm、深さは検出面から約 20 cmを測る。抜取痕の位置は約 145 cm、深さは約 120 cmを測る。

5. 5区 51～56 (第53～56図)

5区-51 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 102 cm、短軸約 82 cm、深さは検出面から約 45 cmを測る。コンクリート製に変更する前の控柱の痕跡として、縦・横約 30 cmを測る扁平な河原石を確認し、これを控柱の礎盤と仮定した場合、基礎石から約 170 cmに位置し、深さは約 98 cmを測る。基礎石は5区全体で2段確認している。

絵図(第6・7図)を参考にすると、近世期には蓮池堀縁の乳母ヶ池(井戸)付近からと東ノ丸東(丑寅櫓下・東2)東面石垣(ID1221E)下の平坦部からの2径路が合流する枡形が位置し、内部には水ノ手門に上る階段がみられる。明治期の旧陸軍による水ノ手門の移動や塀の新設等の改変を受ける以前は、控柱が存在しない場所であった。その時の塀の種類・基礎材等の施工状況は不明であるが、控柱の変遷過程、太鼓塀本柱に上下2つの貫穴を確認できること等から、他の区間と同様に太鼓塀、木製・垂直控柱と推定でき、検出した痕跡は近代に施工されたものとなる。

控柱51・52間の城内側において、排水枡を確認した。枡は三ノ丸東(太鼓塀下)石垣(ID3020S)(本調査の検出箇所)に添うように戸室石を約1.3m積み上げ、その最上部に縦約100 cm、横約90 cmを測るコンクリート製の枡を設置したものであり、内部の底面は石敷きである。城外への最終排水施設であり、三ノ丸東(太鼓塀下)石垣(ID3020S)に並走して水ノ手門下へ暗渠で延び、門外からは開渠となる。隅角部に至ると、蓮池堀に面する高石垣(ID3020E)に沿うように北側に折れ、蓮池堀に排水となる。コンクリート製の枡を後世の後付けとすれば、明治期の水ノ手門周辺の改変に伴うものと推定できるが、詳細は不明である。

5区-52 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形方形を呈する。規模は長軸約 98 cm、短軸約 78 cm、深さは検出面から約 57 cmを測る。コンクリート製に変更する前の控柱の痕跡として、縦30 cm、横25 cmを測る戸室石を確認し、これを控柱の礎盤と仮定した場合、基礎石から約 154 cmに位置し、深さは約 86 cmを測る。控柱については、控柱51と同様である。

5区-55(第54図) コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 88 cm、短軸約 75 cm、深さは検出面から約 65 cmを測る。控柱掘方の底面は、全体的に固くしまり小礫が含まれる。2～4区で指標とした石垣の栗石が底面に存在しないこと等から、抜取痕の検出には至っていない。また、控柱51・52で礎盤と推定した石材についても、コンクリート製控柱の設置時に撤去した可能性も指摘できるが、確認はできていない。

5区-56 コンクリート製控柱掘方の平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸約 107 cm、短軸約 68 cm、深さは検出面から約 61 cmを測る。2～4区で指標とした石垣の栗石が底面に存在しないこと等から、抜取痕の検出には至っていない。また、控柱51・52で礎盤と推定した石材についても、コンクリート製控柱の設置時に撤去した可能性も指摘できるが、確認はできていない。

控柱掘方の周辺では、近代以降の盛土や旧表土が約80～100 cm堆積しており、その下部でコンクリート洗い出し及び縁石を確認した。コンクリート洗い出し等を除去した直下に、長さ約10～20 cmを測る河原石や戸室石の破片が多量に認められる。これらは全体的に攪乱を受けてる可能性は高いが、コ

ンクリート製縁石等の施工の際に入れた栗石であるか、それとも近世門柱及び階段下部構造に伴うものであるかは判然としない。また、絵図（第55図）を参考にすると、幅約6.6m、長さ約5.4mを測る階段が描かれているが、明治期の改変時に江戸期の面を約3m以上嵩上げしていることから、今回は明確な遺構の検出に至っていない。

6. 石垣（第57～67図）

石川門続櫓台石垣（ID3110S） 1区に位置する。コンクリート洗い出し土間等を除去後、下部2段程度を新たに確認した。隅角部については、上から3段目の角脇2石を確認し、共に面の縁取り加工と内側は粗い調整となる。角石は稜線が通っているが、角脇2石では上段の石面が約4～12cmセットバックして積まれており、周囲の築石についてもセットバックした石に面が通ることから、角脇を動かさずに積み直した痕跡が窺える。築石は粗加工石であり、横目地は比較的通りが良く、部分的に石の長軸を斜め方向に落とす積み方が認められる。築石の1段目と2段目の間には、河原石と戸室石が多量に間詰めされており、下段の石口や間詰めの状況（河原石のみ）とは様相が異なる。昭和修理の記録『報告書稿本』によると、「菱櫓、石垣の沈下した南側中央を石を取り替え裏込も「コンクリート」を以て積み直し」との記述があり、修理前の写真（第12図⑧）においても間詰めが認められないことから、修理範囲（特に隅角部）は明確でないが、間詰めにより沈下箇所を嵩上げしたと推定でき、記載内容に該当すると考える。

三ノ丸東石垣（ID3310S） 1・2区間に位置する。コンクリート製控柱掘方の掘削後、下部2段分を新たに確認した石垣であり、近・現代の改修等により横目地の通りは悪い。昭和修理前の工事記録写真（第12図⑨）等を参考にすると、築石の天端石が抜けて存在していないが（第64図赤線）、昭和修理以降、その箇所を追加したことが分かる。写真からは赤線上部を全て追加したかの判断はできないが、少なくとも、石上面にコンクリート製縁石痕が遺存する隅角部側2石は追加されたものであり、その他の箇所についても、石の規格が不揃いであることや目地にモルタルが確認できることから昭和修理時に積み直されている可能性は高い。

昭和修理以前から残る石の様相として、角石には縁取り加工が施され、面に鑿加工が顕著に認められる。角石の横には1段目に2石、2段目に1石、規格の合わない切石を据えており、変則的な角脇の形態をとる。築石は鑿加工がみられる粗加工石であり、今回検出した下部2段では、自然面を部分的に残す。近世後期の絵図を参考にすると、総延長約7.2mを測り、南門に延びる二重塀が設置された土塁につながる石垣であり、今回の検出範囲は延長約3.8mである。

三ノ丸東水ノ手門北石垣（ID3020W） 4・5区境に位置する。明治期の水ノ手門周辺の改変に伴い、新設された近代の石垣である。三ノ丸東（太鼓塀下）石垣を分断し、その西端部に切石を使用した角石2段を新設する。天端及び下段の一部に河原石が認められるものの、戸室石を主体とする2段の石垣であり、延長約3.2mを測る。

三ノ丸東（太鼓塀下）石垣（ID3020S） 5区に位置する。コンクリート製控柱掘方の掘削後、下部4石、延長約1.7mを新たに確認し、その上段は近代の改変により遺存しない。石材は戸室石の自然石であり、金沢城石垣編年1期・文禄期の特徴をもつ。絵図（第6・7図）を参考にすると、水ノ手門に連結する長屋台に延びる枅形を構成する石垣であり、検出箇所はその一端となる。

今回の検出箇所を含めた石垣全体を概観すると、隅角部は切石を利用した出角の稜線加工が施されており、角脇2石を伴う。築石部は、粗加工石で刻印をもつ元和から寛永期を特徴とする石材がみられる。築石部については、石の形状・加工・積み方の差異により区分けを行った。角石3・4段を境に上段部(①)・下段部(③)、上段部はさらに角石から3石目までの箇所(②)に細分し、文禄期(④)、近代改変により新設された箇所(⑤)となる。①は②・③と比較して、築石の規格が一回り小さいも

のが混じり、横目地の通りが悪い。また、間詰めは主に河原石が利用されているが、やや大きい傾向がみられ、築石とともに乱雑な積み方の感があり、比較的新しい様相を示すと考える。②は③と同規格の石であり、横目地の通りは良い。③は部分的に落とし積みが認められるものの、横目地の通りが比較的良く、間詰めには河原石が多用される。これらの石垣石の特徴や積み方等の様相の違いが修築範囲をある程度反映している可能性があり、初期金沢城の様相を示す文禄期、多用する石材が示す元和から寛永期、そして、後藤小十郎「石川御櫓下等御石垣積直絵図」(第4図)を参考にすると、文化4年(石川門から水ノ手門周辺にかけて広範囲な修築)、その後、明治期の水ノ手門改変に伴う石垣の新設等、少なくとも4時期の変遷はたどることが可能である。

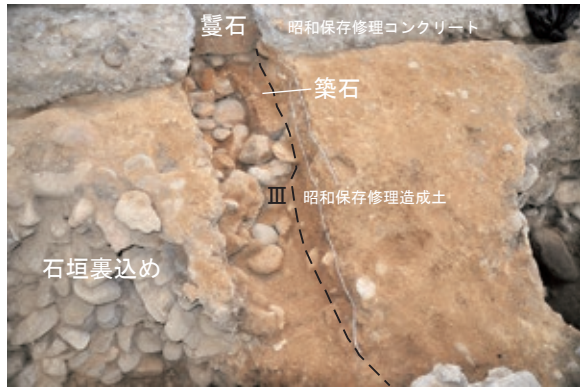
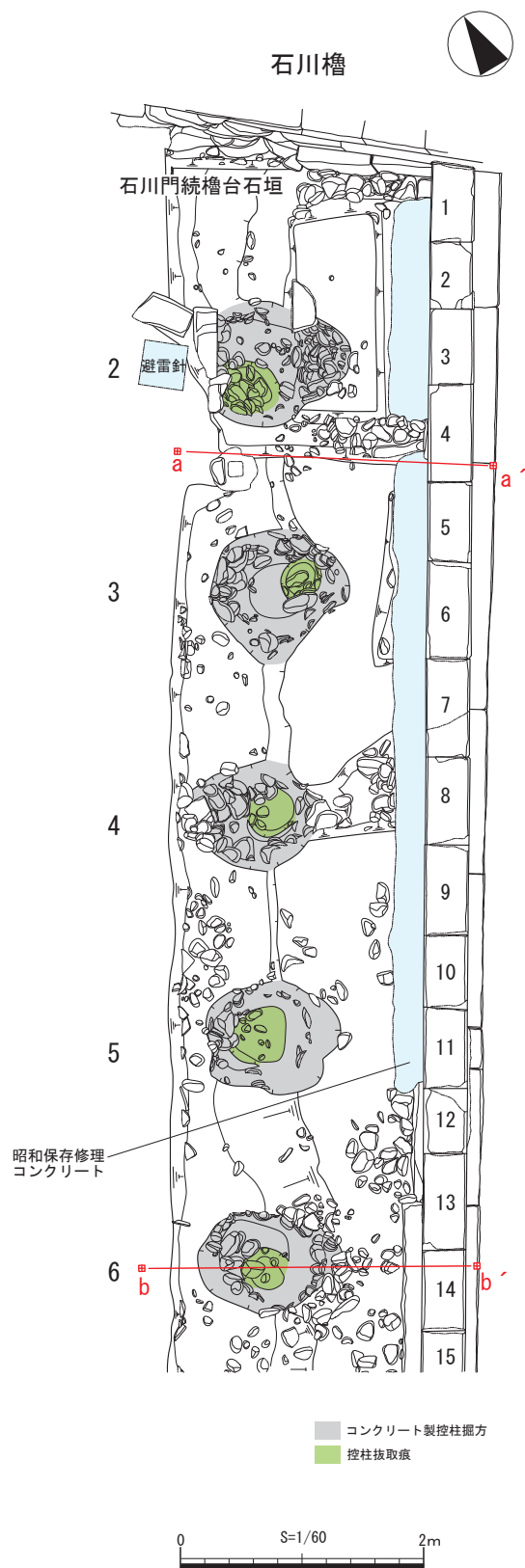
東ノ丸東(丑寅櫓下)石垣西面(ID1221W)・北面(ID1221N) 5区に位置する。石垣(ID1221W)石表面において礎石の加工痕が確認でき、標高は下端が43.75m、上端が推定約44mを測り、平成14年度調査2001-1地点[石川県金沢城調査研究所2008a]で検出した礎石の上面(標高約44m)と符合する。これらの礎石及び礎石痕跡の上部には、共に脇柱の加工痕跡が確認でき、その中間にも認められることから、門は脇柱3本を持つ構造であり、桁行は推定で北からそれぞれ約2.5mと約2.6mを測る。宝暦大火前の絵図(第55図)を参考にすると、水ノ手門は鏡柱2本、その両側に脇柱が描かれていることから、検出遺構(石垣の痕跡)は江戸前期の様相を示すものと考えられる。

隅角部は、礎石の加工痕を確認した角石(大面)の下段に、小面約20cmを測る板状の(角)石と全掘していないため規模は不明であるが、小面20cm以上を測るものの2石が認められる。この2石から約10cmセットバックして上段の石が積まれている。また、礎石痕跡の下部に根石等がさらに存在していたかは、コンクリート製縁石の設置時に削平を受けていることから不明である。

7. 基礎石(第44・52図)

基礎石 太鼓塀設置に伴い、石垣天端の上部に置かれた基礎石である。左方太鼓塀で確認した基礎石は総数130点を数え、各調査区内訳は1区28、2区37、3区39、4区14、5区10となる。石材は全て戸室石を利用し、その内の8割程度が赤戸室石、残りの2割が青戸室石であった。石面の調整は、側面は城内側が粗いツル加工を主体とするに対し、城外側はツルによる粗ハツリの後、ビシャン等による細かい調整が施されており、太鼓塀下部に位置する土間等の構造により、見える外部と隠れる内部の違いが調整の違いを反映しているものと考えられる。上面はツル加工が認められ、下面は修理に伴い新材に据え替えられるものだけの確認ではあるが、縁部を10cm前後残し、内側を粗研りにより抉られるものが大半であった。刻印については49点確認でき、1・2区で42点を数え集中する。全体の内訳は「七」29、「〇」14、「△」3、「▽」3であり、その8割程度を内側の側面で確認した。特異な例として、5区の基礎石1に「七」の変形と考えられるものが上面に施される。

基礎石の設置時期については、不明な点が多い。据え替え箇所のみ確認であるが、石垣天端上部に基礎石を安定させるために置いたと考えられる煉瓦が確認できること、調整にビシャンが使用されていること、総体的にモルタル等で固定され、刻印が集中していることから、近代以降の太鼓塀修理に伴い、移設等が行われていることは想像できる。今回の確認では天端石に塀を設置する柄穴は確認できておらず、基礎石の設置が近世に遡るものであるかは今後の調査事例に拠る所が大きい。



1区-2~3 土層断面 西から



1区-3 控柱採取痕断面 北から

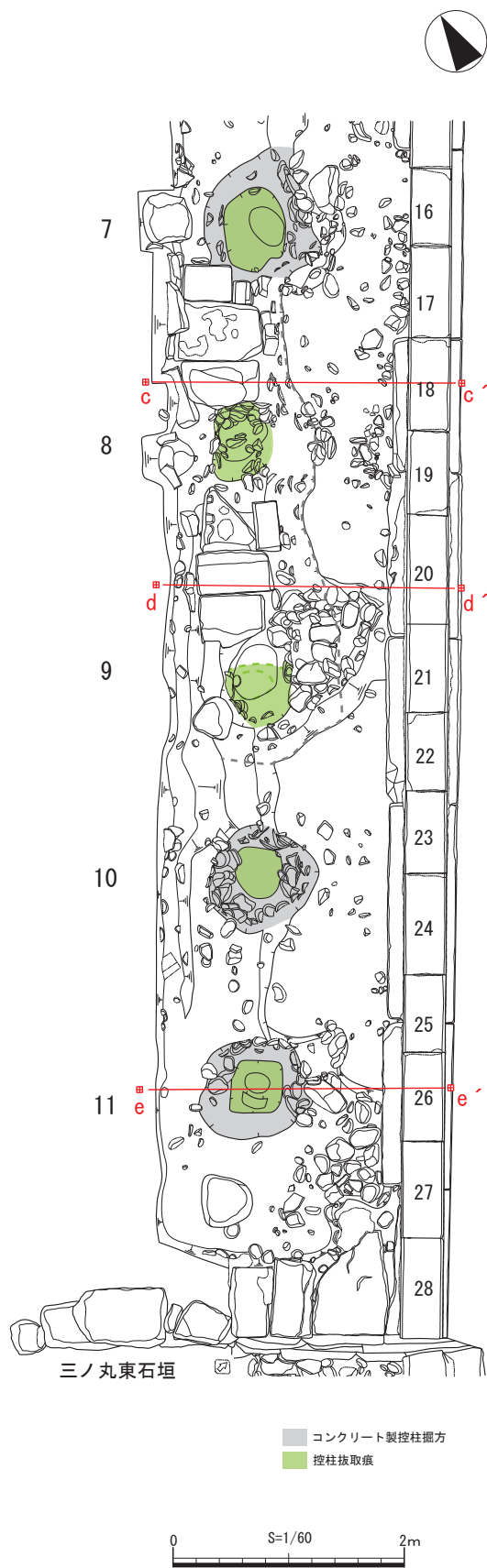


1区-4 控柱採取痕断面 南から



1区-6 土層断面 南から

第43図 1区 遺構平面図1 (S=1/60)



1区-8~9 土層断面 (東側) 西から



1区-11 土層断面 南から

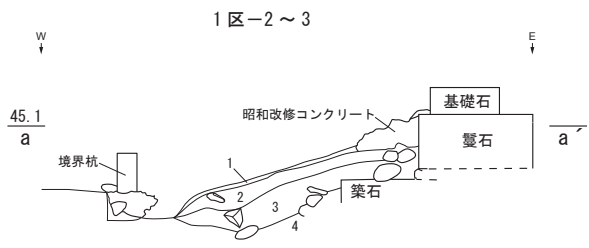


基礎石 (26・27・28) 刻印 西から

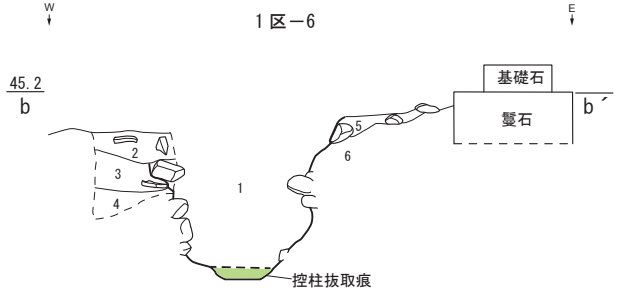


1区 鬘石 南から

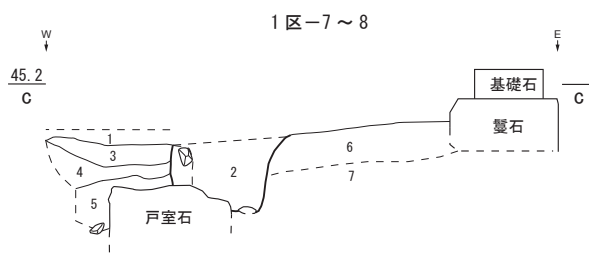
第44図 1区 遺構平面図2 (S=1/60)



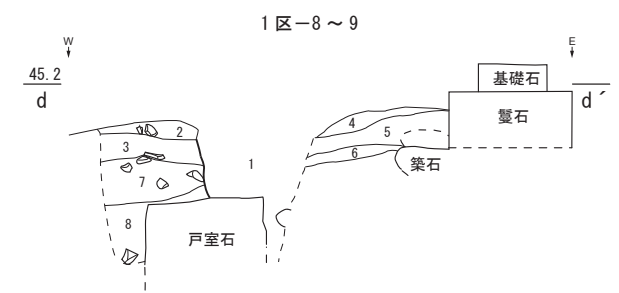
- 1 10YR5/8 黄褐色粘質土 (礫・戸室チップ・凝灰岩片を多量含む)
 - 2 10YR4/6 褐色砂質土 (炭化物多量に含む)
 - 3 10YR3/4 暗褐色砂質土 (しまりなし、炭化物少量含む)
 - 4 暗黄褐色粘質土
- ※ 1・2 昭和改修整地土 3 昭和改修盛土 4 近世整地土



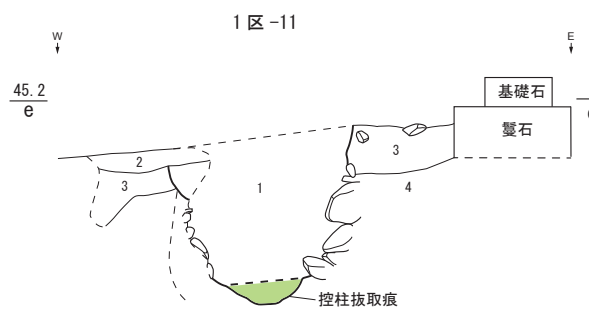
- 1 10YR3/4 暗褐色土 (しまりなし)
 - 2 10YR3/2 黒褐色砂礫土
 - 3 10YR3/2 黒褐色砂質土 (しまりあり、10YR4/6 褐色粘砂土多量に含む)
 - 4 10YR3/2 黒褐色砂質土
 - 5 10YR4/6 褐色砂質土 (炭化物多量に含む)
 - 6 暗黄褐色粘質土
- ※ 1 コンクリート製控柱掘方 2 表土 3~5 昭和改修盛土 6 近世整地土



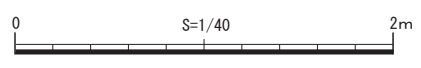
- 1 10YR3/2 黒褐色砂礫土
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 (しまりなし)
 - 3 10YR3/2 黒褐色砂質土 (しまりあり、10YR4/6 褐色粘砂土多量に含む)
 - 4 10YR3/2 黒褐色砂質土
 - 5 10YR2/3 黒褐色砂質土 (しまりなし、炭化物少量含む)
 - 6 10YR5/8 黄褐色粘質土 (炭化物・礫多量に含む)
 - 7 暗黄褐色粘質土
- ※ 1 表土 2 コンクリート製縁石掘方 3~5 昭和改修盛土 6 昭和改修整地土 7 近世整地土



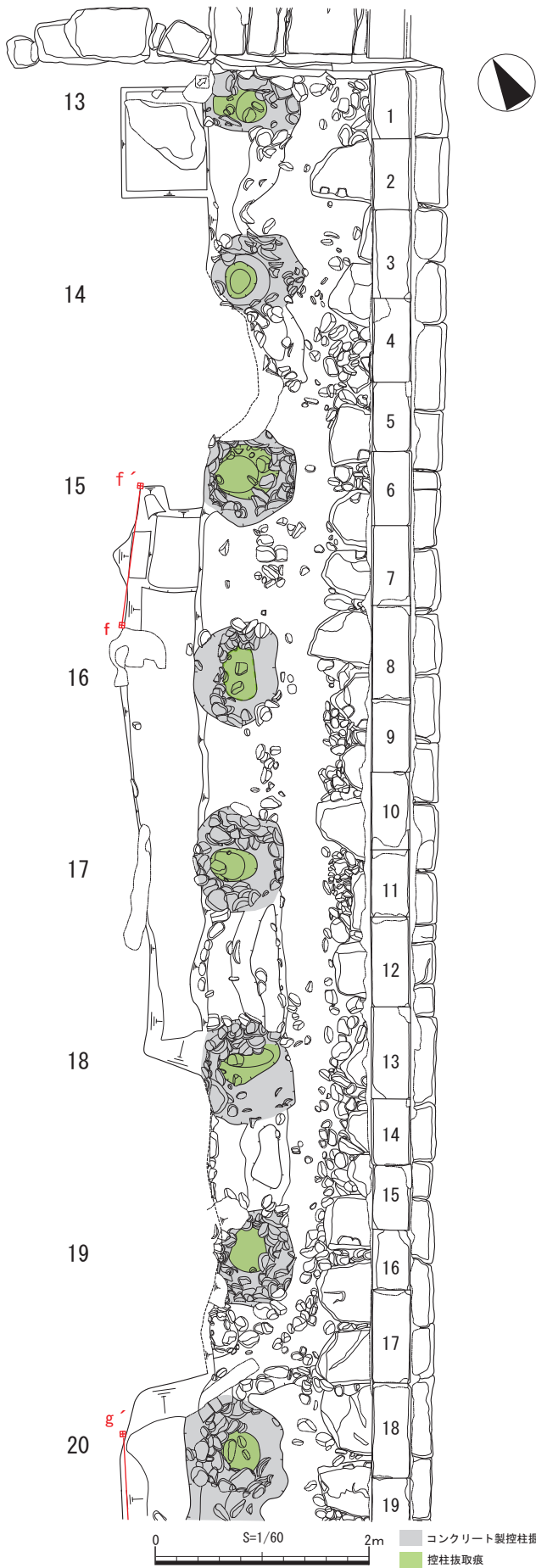
- 1 10YR3/4 暗褐色土 (しまりなし)
 - 2 10YR3/2 黒褐色砂礫土
 - 3 10YR3/2 黒褐色砂質土 (しまりあり、10YR4/6 褐色粘砂土多量に含む)
 - 4 10YR4/6 褐色砂質土 (炭化物多量に含む)
 - 5 10YR5/8 黄褐色粘質土 (礫・戸室石チップ・凝灰岩片多量に含む)
 - 6 暗黄褐色粘質土
 - 7 10YR2/3 黒褐色砂質土 (しまりあり)
 - 8 10YR2/3 黒褐色砂質土 (しまりなし)
- ※ 1 コンクリート製縁石掘方 2 表土 3~5・7・8 昭和改修盛土 6 近世整地土



- 1 10YR3/4 暗褐色土 (しまりなし)
 - 2 10YR3/2 黒褐色砂礫土
 - 3 10YR3/2 黒褐色砂質土 (しまりあり、10YR4/6 褐色粘砂土多量に含む)
 - 4 暗黄褐色粘質土
- ※ 1 コンクリート製控柱掘方 2 表土 3 昭和改修盛土 4 近世整地土



第45図 1区 遺構断面図 (S=1/40)



2区-17 控柱抜取痕検出状況 東から



2区 土間・排水溝の基礎部検出状況 北から

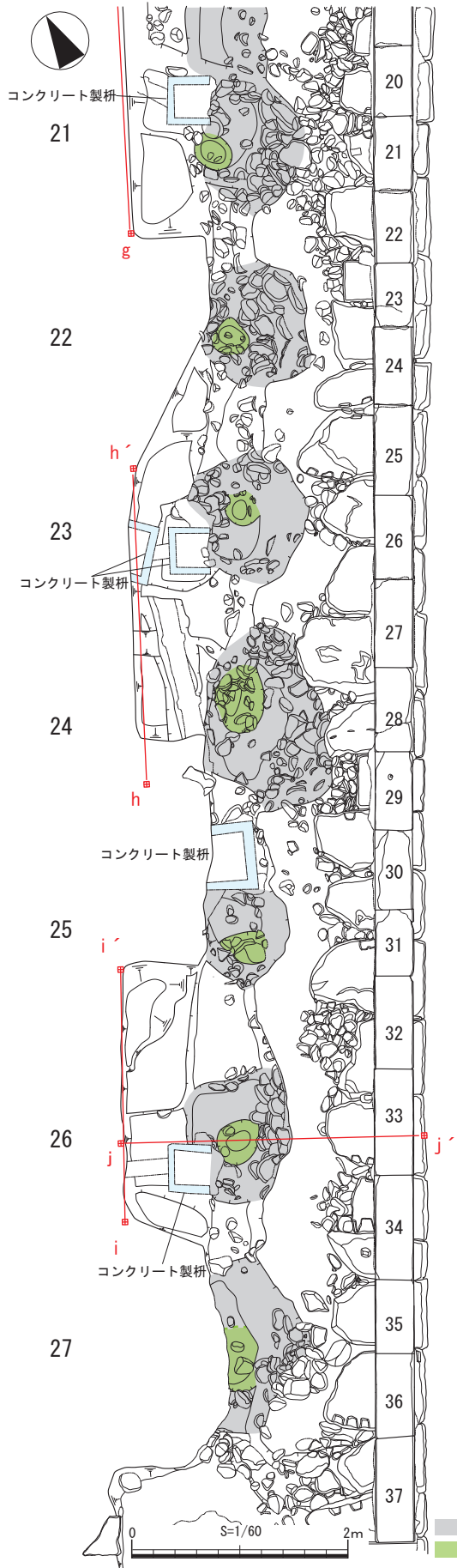


2区-15～16 埋甕検出状況 東から



2区-20～22 調査区西壁土層断面 東から

第46図 2区 遺構平面図1 (S=1/60)



2区-22 控柱抜取痕断面 東から



2区-23 控柱抜取痕検出状況 東から

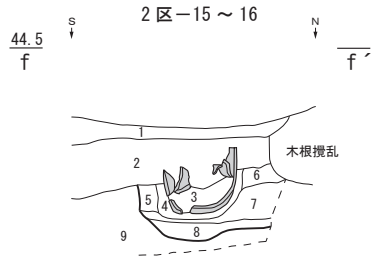


2区-23～24 調査区西壁土層断面 東から

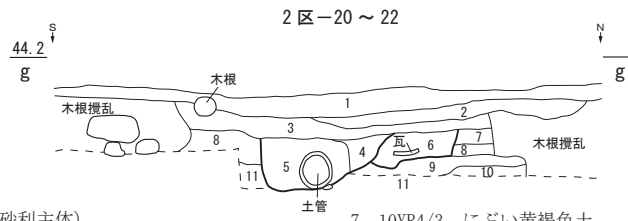


2区-26 控柱抜取痕検出状況 東から

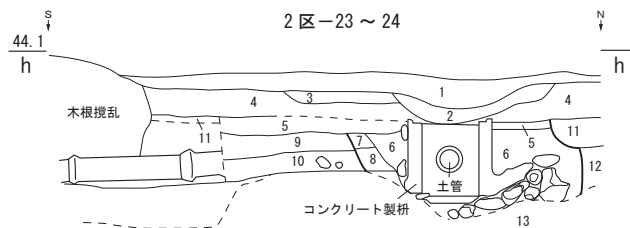
第47図 2区 遺構平面図2 (S=1/60)



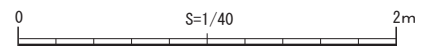
- 1 10YR2/3 黒褐色砂質土
 - 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
(粘性なし、しまりなし、礫 10 ~ 30 mm大極少量、コンクリートブロック含む)
 - 3 10YR3/3 暗褐色土 (粘性ややあり、固くしまる、甕底に 10YR2/1 黒色粘質土堆積)
 - 4 10YR3/2 黒褐色砂質土 (粘性なし、しまりなし)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (粘性なし、しまりあり)
 - 6 10YR3/3 暗褐色土 (粘性なし、しまりなし、礫 10 ~ 20mm 大極少量含む)
 - 7 10YR4/4 褐色砂質土 (粘性なし、固くしまる)
 - 8 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (粘性あり、しまりあり、礫 5 ~ 10mm 大極少量含む)
 - 9 10YR3/3 暗褐色土 (粘性ややあり、しまりなし、礫 5 ~ 10mm 大極少量含む)
- ※ 1 表土 2 金沢大学建物取り壊し攪乱 3 甕埋土 4~8 甕掘方 9 近世整地土



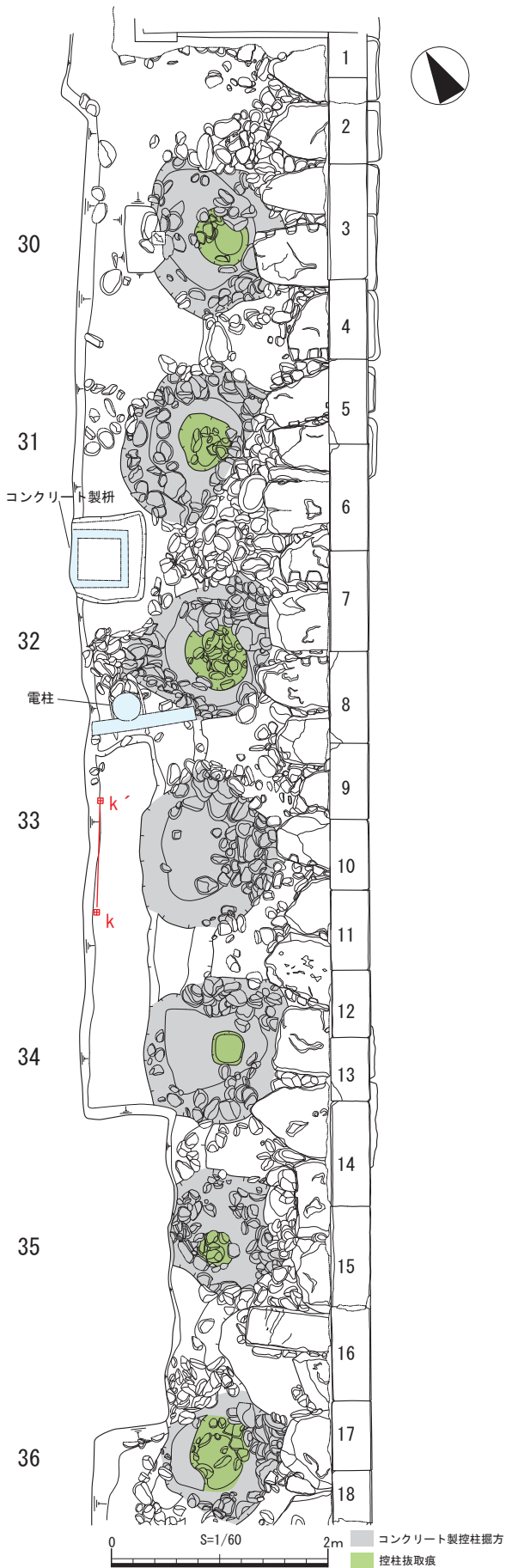
- 1 10YR2/3 黒褐色砂礫土 (小砂利主体)
 - 2 10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土
(しまりややあり、暗灰色砂質土少量含む)
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
(粘性なし、しまりなし、礫 5 ~ 20 mm大少量含む)
 - 4 10YR3/4 暗褐色土
(粘性ややあり、しまりあり、礫 5 ~ 20mm 大少量、炭化物極少量含む)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色土
(粘性ややあり、しまりあり、礫 5 ~ 10mm 大極少量含む)
 - 6 10YR4/2 にぶい黄褐色土
(粘性ややあり、しまりあり、礫 5 ~ 20mm 大少量含む)
 - 7 10YR4/3 にぶい黄褐色土
(粘性ややあり、しまりあり、3層に近似するが層の色味はやや暗い)
 - 8 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (粘性なし、しまりあり)
 - 9 10YR4/4 褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物極少量含む)
 - 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (粘性なし、しまりあり)
 - 11 10YR3/3 暗褐色土
(粘性ややあり、しまりあり、炭化物・礫 10 ~ 50 mm大少量含む)
- ※ 1 表土 2・3 昭和改修盛土 4・5 土管掘方 6 近代遺構 7~11 近代盛土



- 1 10YR2/3 黒褐色砂質土 (粘性なし、しまりなし、上面に小砂利)
 - 2 10YR2/3 黒褐色砂質土 (1層の小砂利をブロック状に含む)
 - 3 10YR5/2 灰黄色シルト
(10YR5/6 明黄褐色シルトブロック状に含む)
 - 4 10YR4/2 灰黄色砂質土
(粘性なし、しまりあり、礫 5 ~ 10mm 大極少量含む)
 - 5 10YR4/2 灰黄色砂質土
(粘性なし、しまりあり、4層に比べてやや暗い)
 - 6 10YR3/2 黒褐色砂質土
(粘性なし、しまりあり、礫 20 ~ 70mm 大含む)
 - 7 10YR4/2 にぶい黄褐色土 (粘性なし、しまりあり)
 - 8 10YR3/3 にぶい黄褐色土 (粘性なし、しまりあり)
 - 9 10YR3/2 黒褐色砂質土 (粘性なし、しまりあり)
 - 10 10YR3/2 黒褐色砂質土 (9層に比べてやや暗い)
 - 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (粘性なし、しまりあり)
 - 12 10YR3/3 暗褐色土
(粘性なし、しまりなし、礫 30 ~ 50mm 大極少量含む)
 - 13 10YR3/3 暗褐色土
(粘性なし、固くしまる、炭化物・礫 20 ~ 40mm 大少量含む)
- ※ 1・2 表土 3・4 昭和改修後盛土 5 昭和改修整地土 6~8 コンクリート製枘掘方 9・10 コンクリート製縁石埋土 11・12 近代整地土 13 近世整地土カ



第48図 2区 遺構断面図 (S=1/40)



3区-30 調査区西壁土層断面 東から



3区-33～34 調査区西壁土層断面 東から

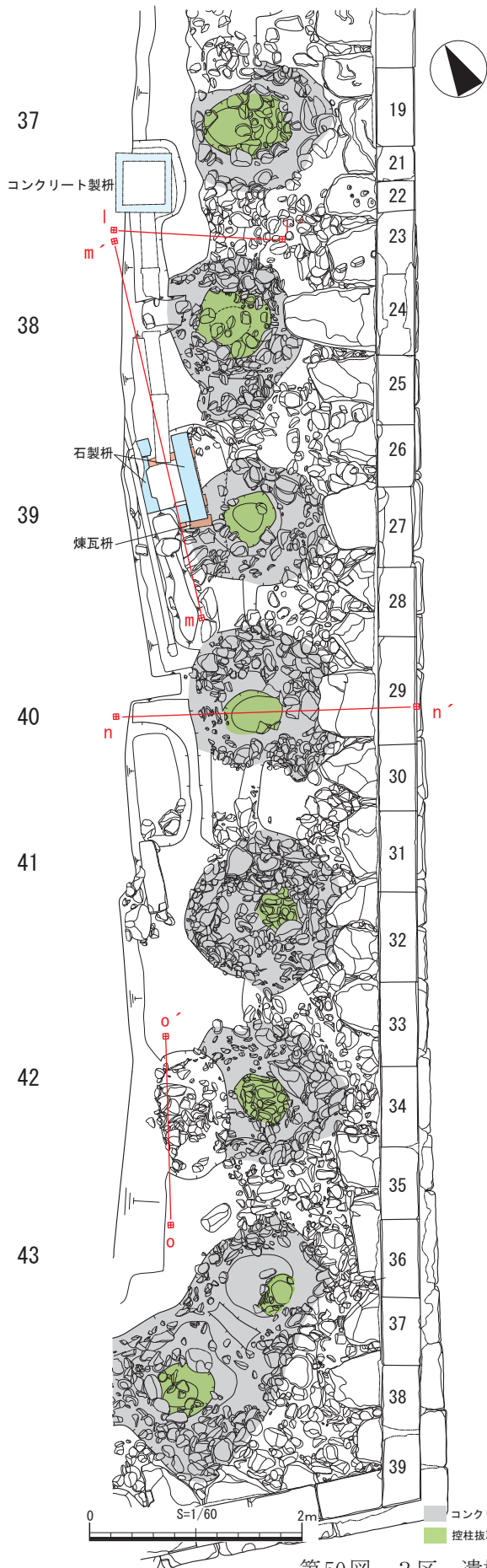


3区-31～33 コンクリート製柵・
電柱検出状況 東から



3区-35 控柱抜取痕検出状況 東から

第49図 3区 遺構平面図1 (S=1/60)



3区-38～39 調査区西壁土層断面 東から



3区 石製柵・煉瓦柵検出状況 南から

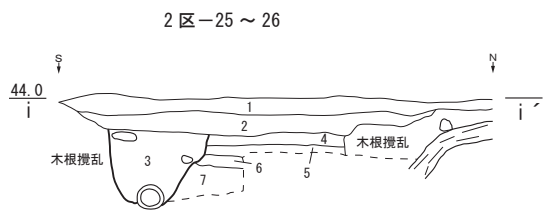


3区-42 調査区西壁土層断面 東から



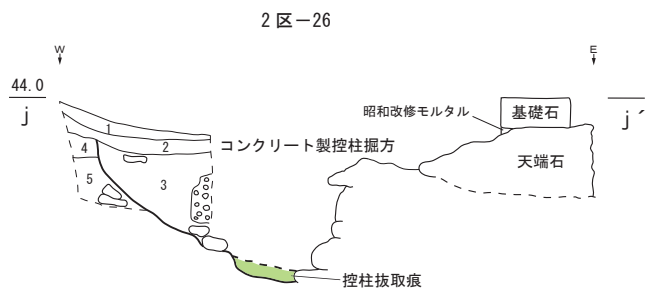
3区-42 控柱抜取痕断面 北から

第50図 3区 遺構平面図2 (S=1/60)



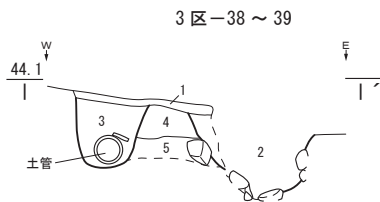
- 1 10YR2/3 黒褐色砂礫土 (小砂利を主体)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
(粘性なし、しまりなし、礫5~10mm大極少量含む)
- 3 10YR3/4 暗褐色土 (粘性ややあり、しまりあり、礫少量含む)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
(粘性なし、しまりあり、礫10~30mm大極少量含む)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (4層に比べてやや明るい)
- 6 10YR3/3 暗褐色土
(粘性ややあり、しまりなし、礫10~30mm大極少量含む)
- 7 10YR3/3 暗褐色土 (粘性ややあり、しまりなし、4層に近似する、
礫10~40mm大・灰白色砂礫ブロック極量含む)

※ 1 表土 2 昭和改修後整地土 (盛土) 3 土管掘方
4~7 近代盛土



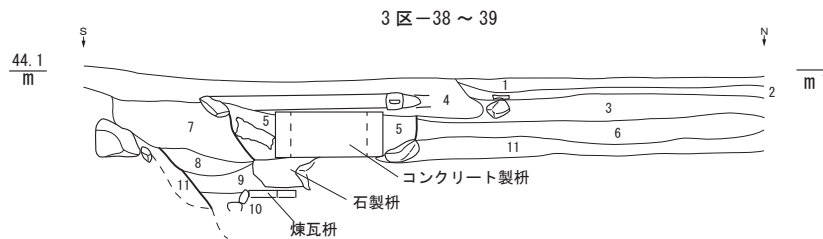
- 1 10YR2/3 黒褐色砂質土
(粘性なし、しまりなし、上面に小砂利)
- 2 10YR3/3 暗褐色土
(粘性なし、しまりなし、礫20~30mm大極少量含む)
- 3 10YR3/2 黒褐色砂質土
(粘性なし、しまりあり、礫10~30mm大含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂質土
(粘性なし、しまりなし、礫10~30mm大極少量含む)
- 5 10YR3/3 暗褐色土
(粘性なし、固くしまる、礫20~50mm大少量含む)

※ 1 表土 2 昭和改修後盛土 3 コンクリート製枳掘方
4・5 近代盛土



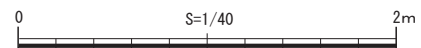
- 1 10YR3/2 黒褐色砂礫土
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質土 (粘性なし、しまりなし)
- 3 10YR3/3 暗褐色土 (粘性なし、しまりなし、礫10~30mm大少量含む)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土
- 5 10YR4/3 暗褐色土

※ 1 表土 2 コンクリート製縁石掘方 3 土管掘方
4・5 近代整地土

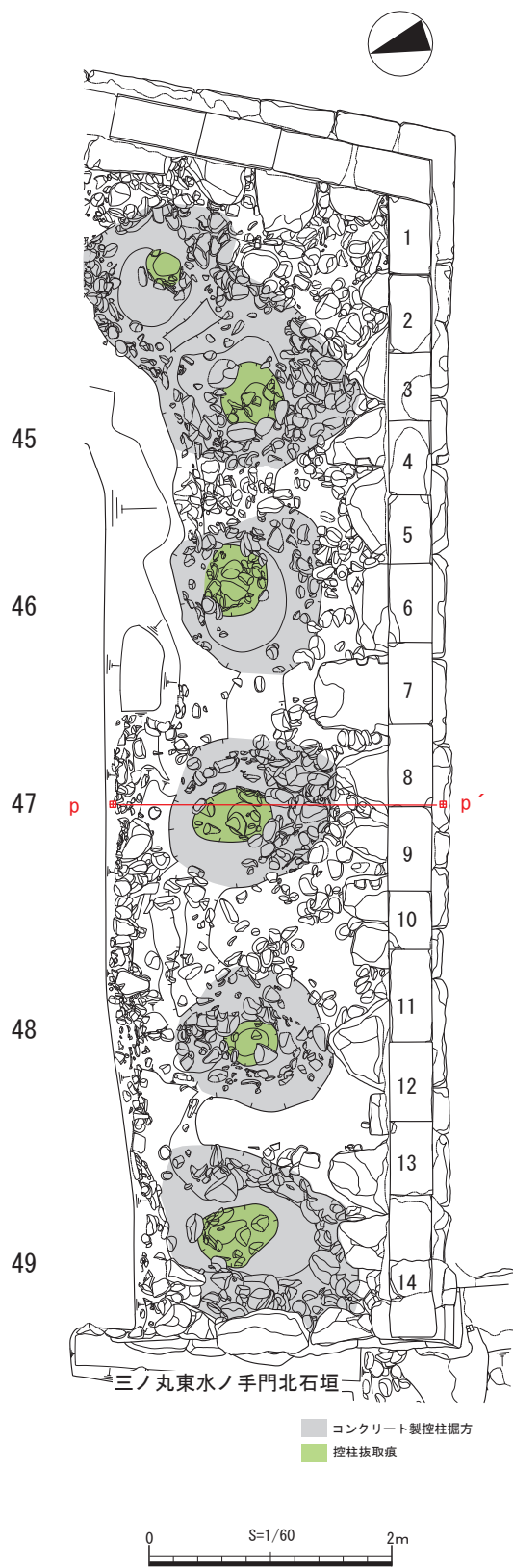


- 1 10YR3/2 黒褐色砂礫土 (小砂利を主体)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色土 (粘性なし、礫少量含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色土
(10YR5/6 黄褐色土ブロック状に少量含む、礫少量含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色土 (粘性なし、しまりあり)
- 5 10YR3/3 暗褐色土 (粘性ややあり、しまりあり、コンクリートブロック片含む、4層土よりやや明るい)
- 6 10YR3/3 暗褐色土 (粘性なし、礫30~50mm大・釉薬瓦多量含む)
- 7 10YR3/2 黒褐色土 (粘性なし、層上位は礫・瓦多量含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色土
(粘性なし、しまりなし、11層土含む、小礫少量含む)
- 9 10YR3/1 黒褐色土
(粘性なし、しまりなし、小礫少量含む、炭化物少量含む)
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (粘性あり、しまりあり)
- 11 10YR4/3 暗褐色土
(粘性なし、しまり強い、礫10~30mm大少量含む)

※1 表土 2・3・6・7・11 近代整地土 4 鉄管掘方
5 コンクリート製枳掘方 8・9 石製枳掘方 10 煉瓦枳掘方



第51図 2・3区 遺構断面図 (S=1/40)



4区 瓦・河原石集積状況 東から



4区-47 コンクリート製控柱掘方検出状況
南から

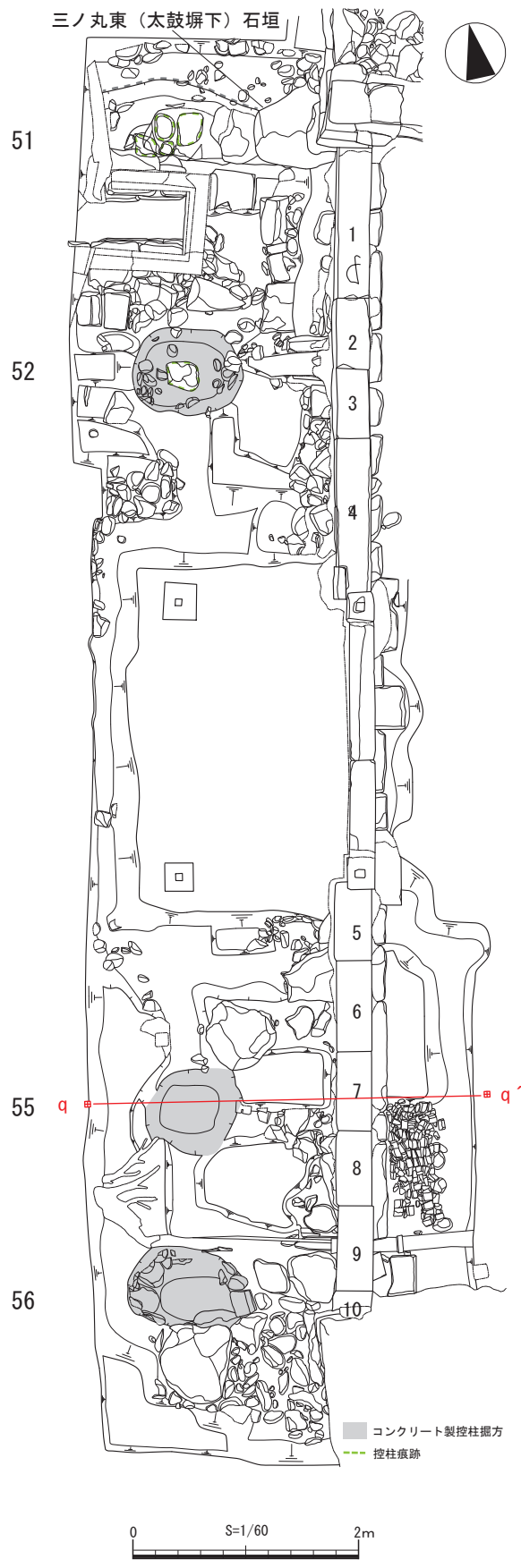


4区 石垣（天端石）刻印 北から



4区 基礎石（11～13）刻印 北から

第52図 4区 遺構平面図 (S=1/60)



5区 三ノ丸東（太鼓塀下）石垣検出状況①
南から



5区 三ノ丸東（太鼓塀下）石垣検出状況②
南から

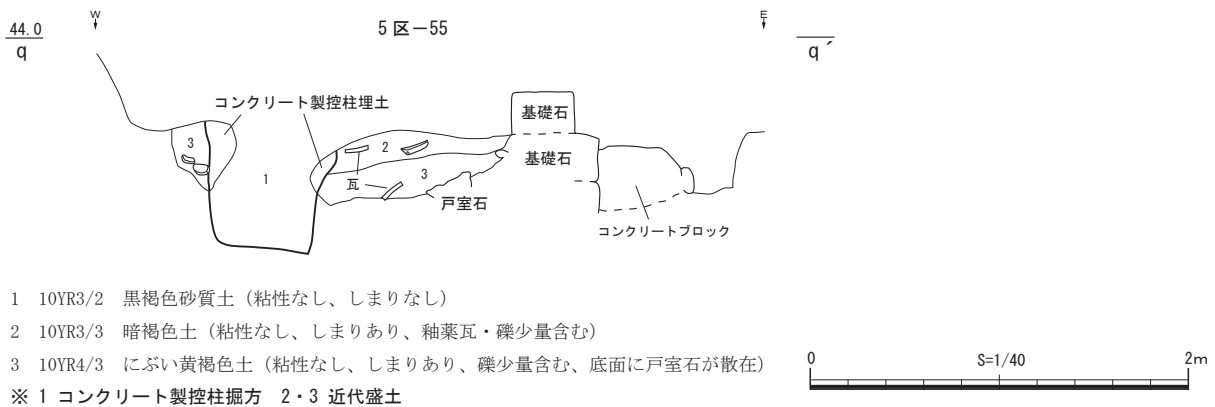
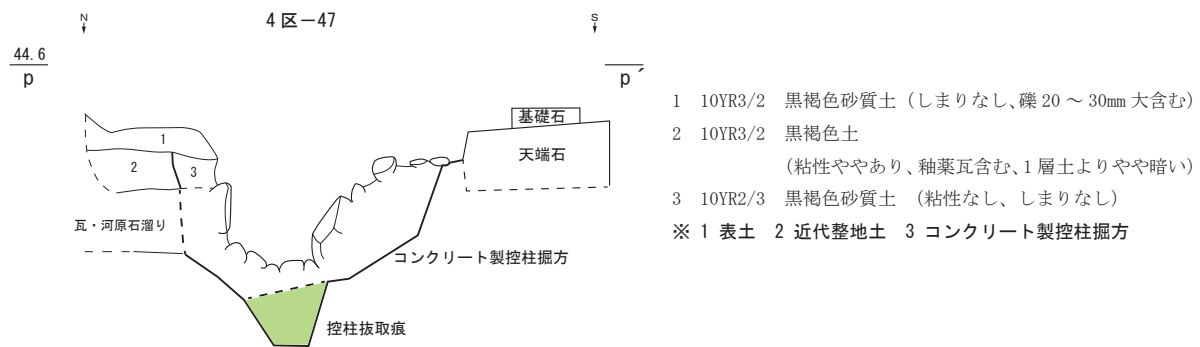
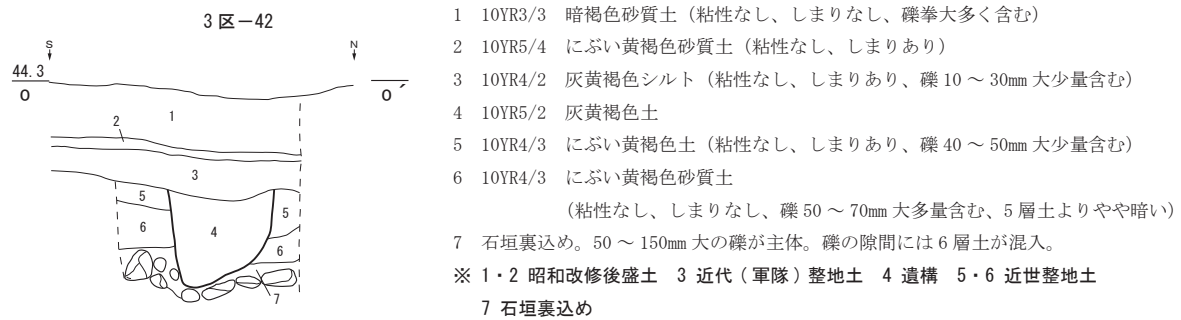
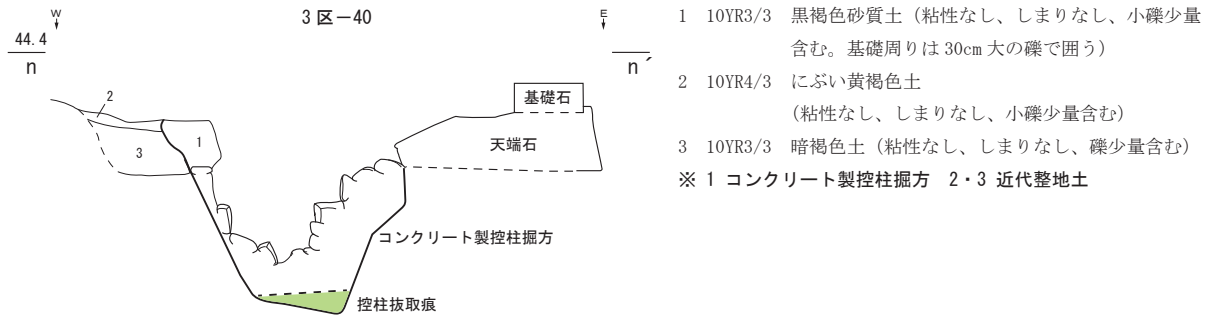
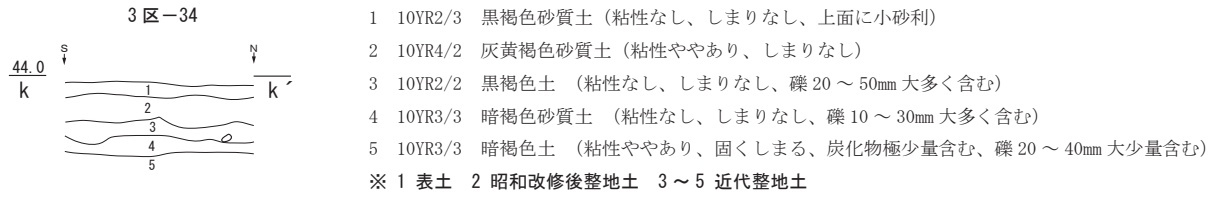


5区 三ノ丸東（太鼓塀下）石垣検出状況③
北から



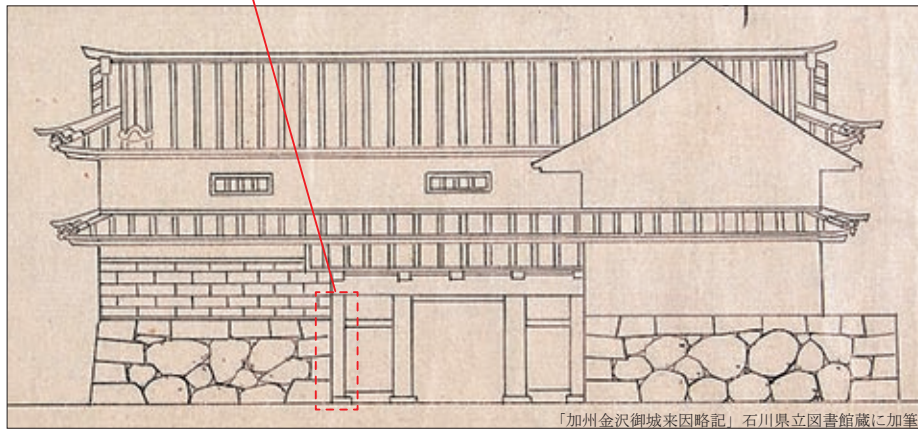
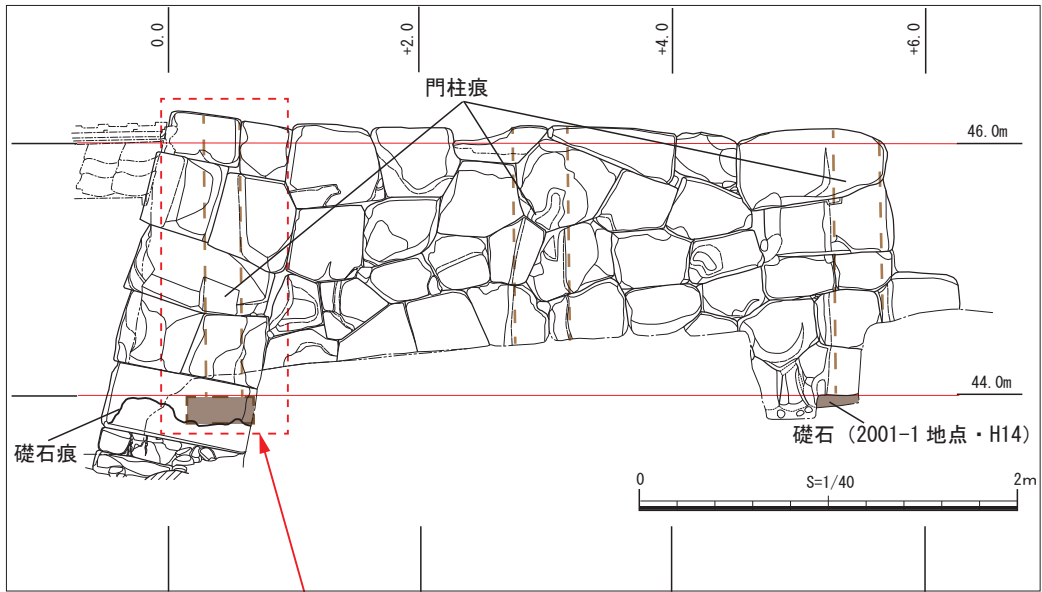
5区 水ノ手門礎石痕検出状況 西から

第53図 5区 遺構平面図 (S=1/60)

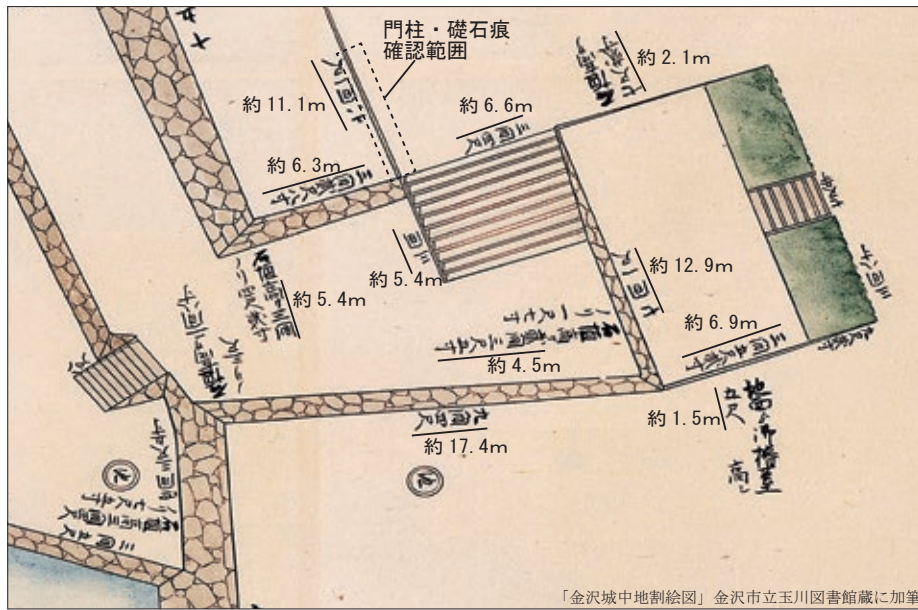


第54図 3～5区 遺構断面図 (S=1/40)

東ノ丸東（丑寅櫓下・東2）西面（ID1221W）

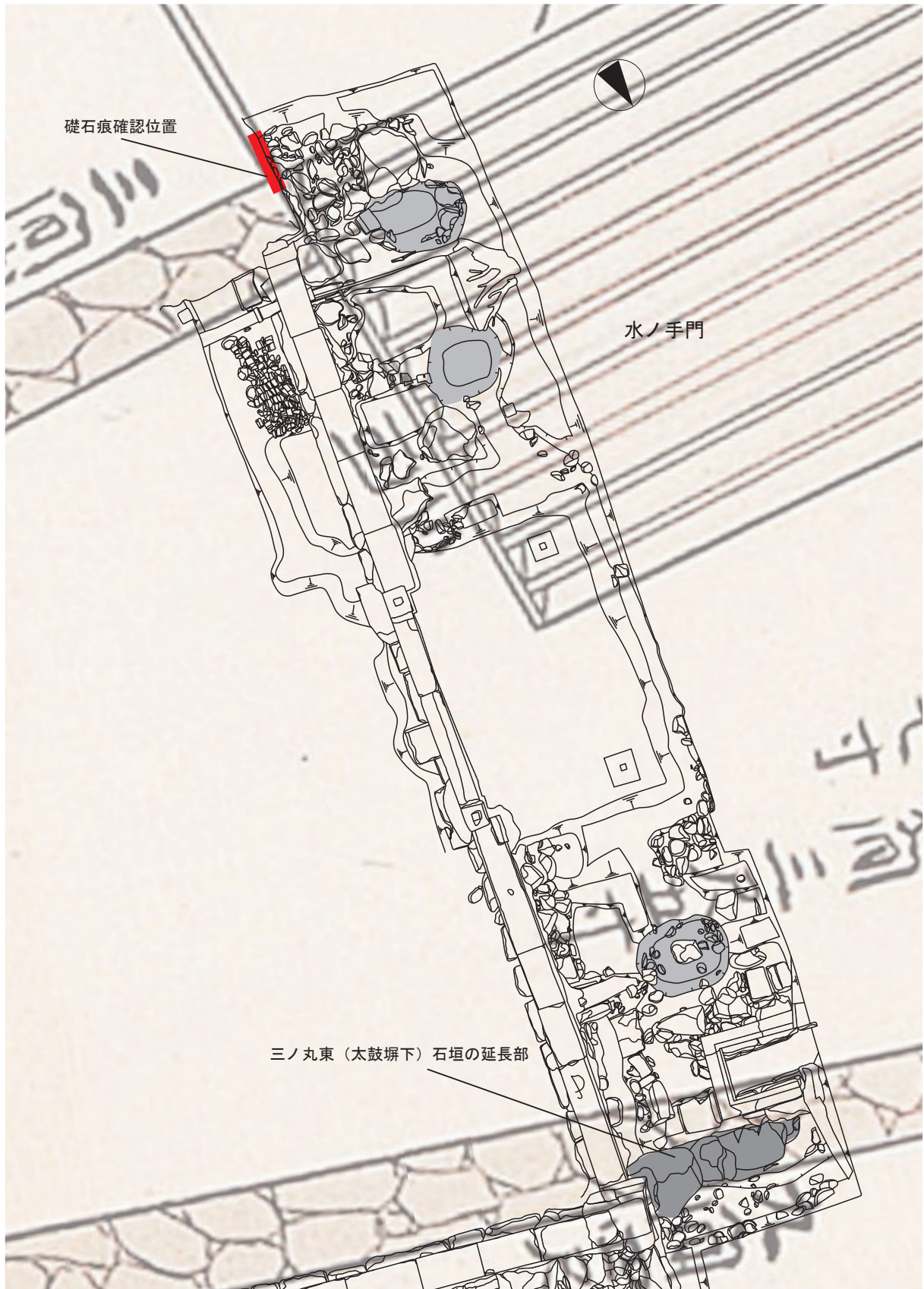


水ノ手門（櫓門と長屋で構成）



水ノ手門周辺（石垣高等の規模を明記）

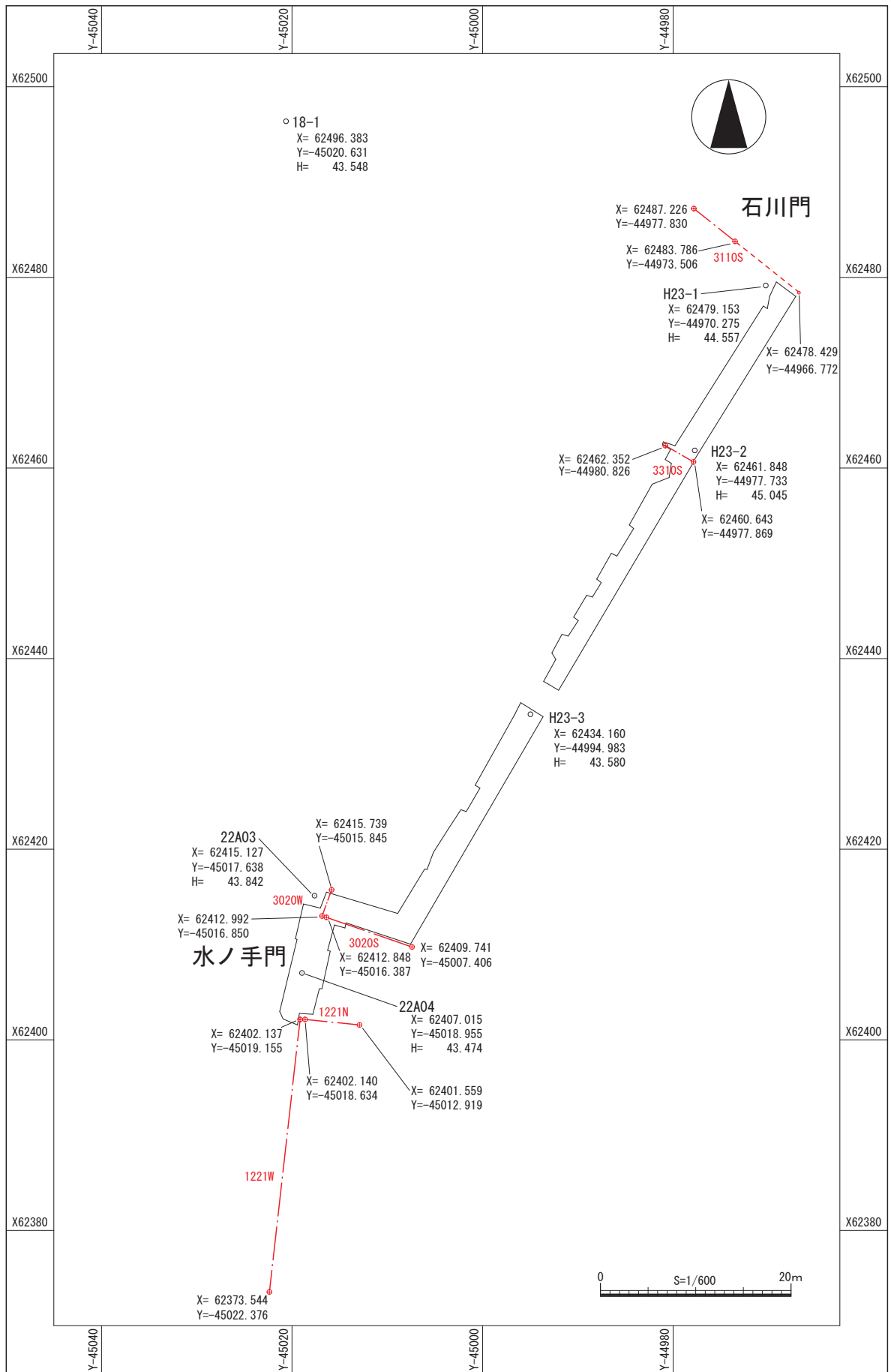
第55図 宝暦大火前の水ノ手門



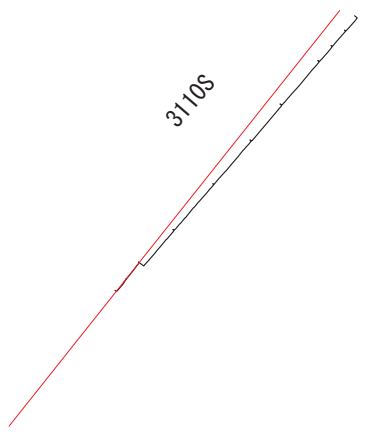
「金沢城中地割絵図」金沢市立玉川図書館蔵に加筆

0 S=1/60 2m

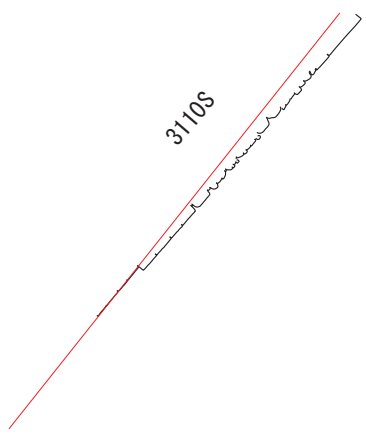
第56図 調査区（5区）と絵図の照合図



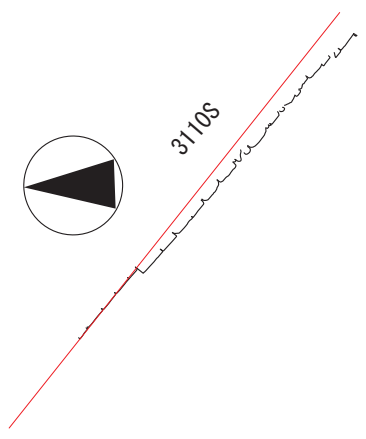
第57図 石垣水平断面図軸座標 (S=1/600)



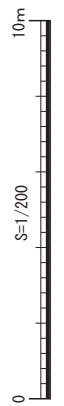
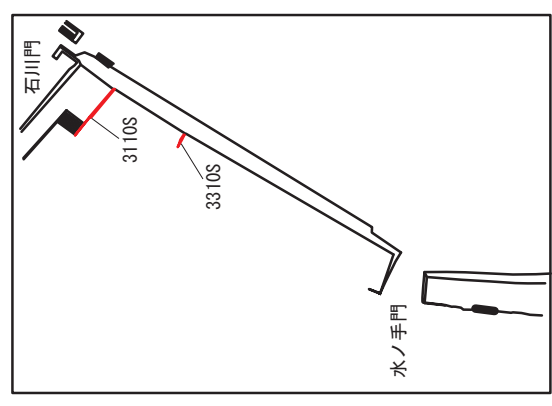
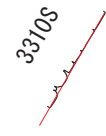
DL=46.0



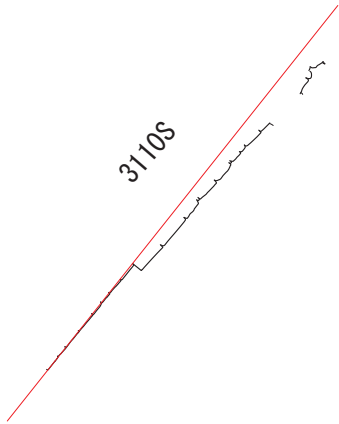
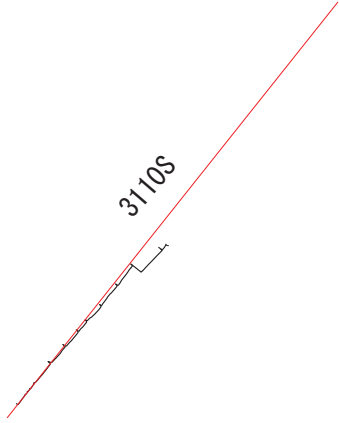
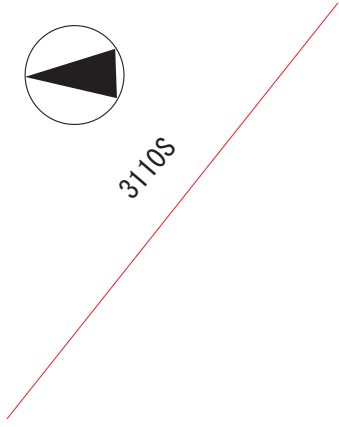
DL=45.5



DL=45.0



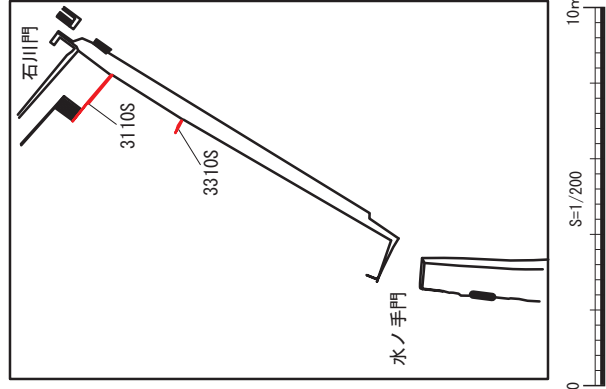
第58図 石垣 (ID3110S・3310S) 水平断面図1 (S=1/200)



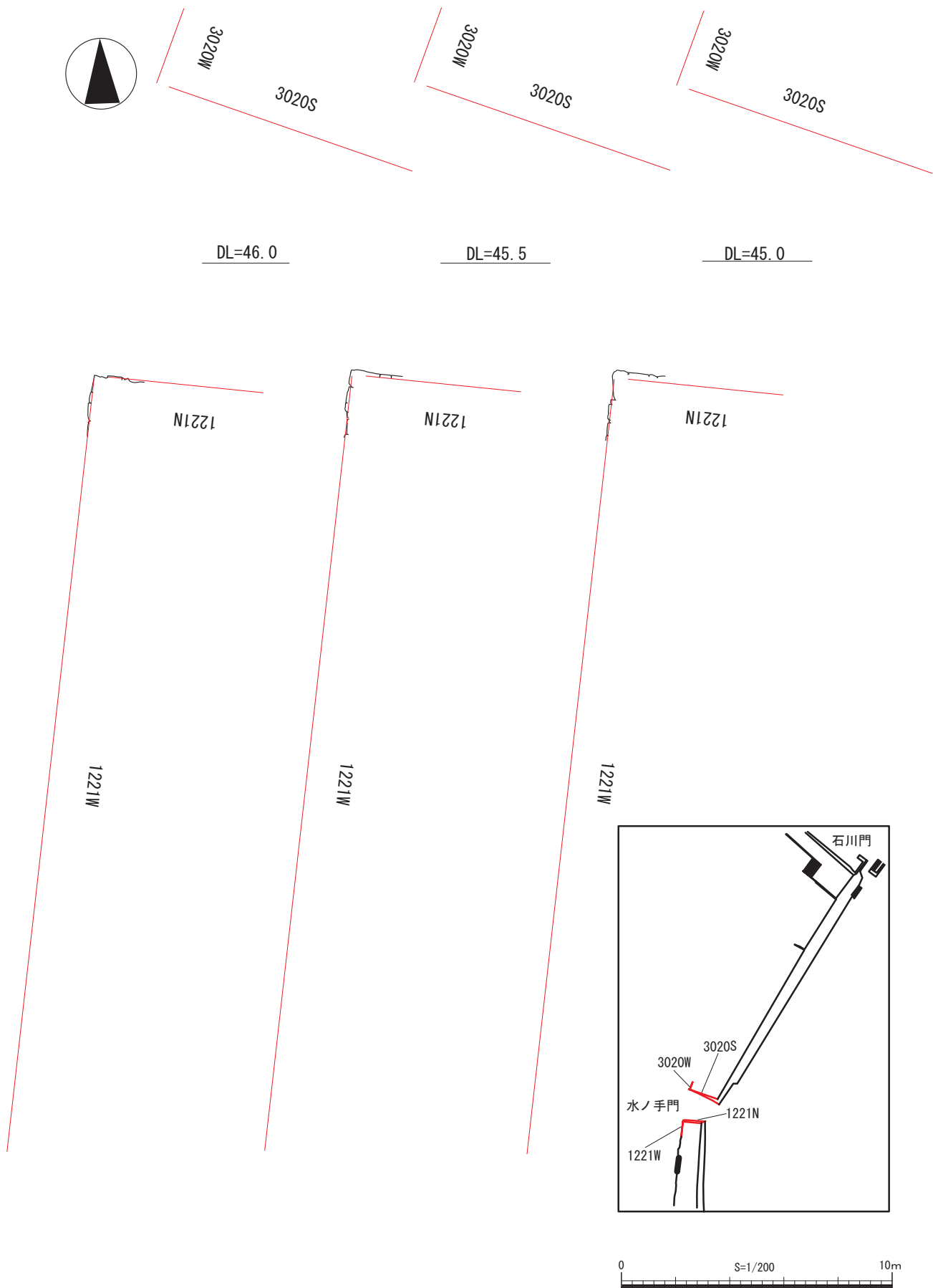
DL=44.5

DL=44.0

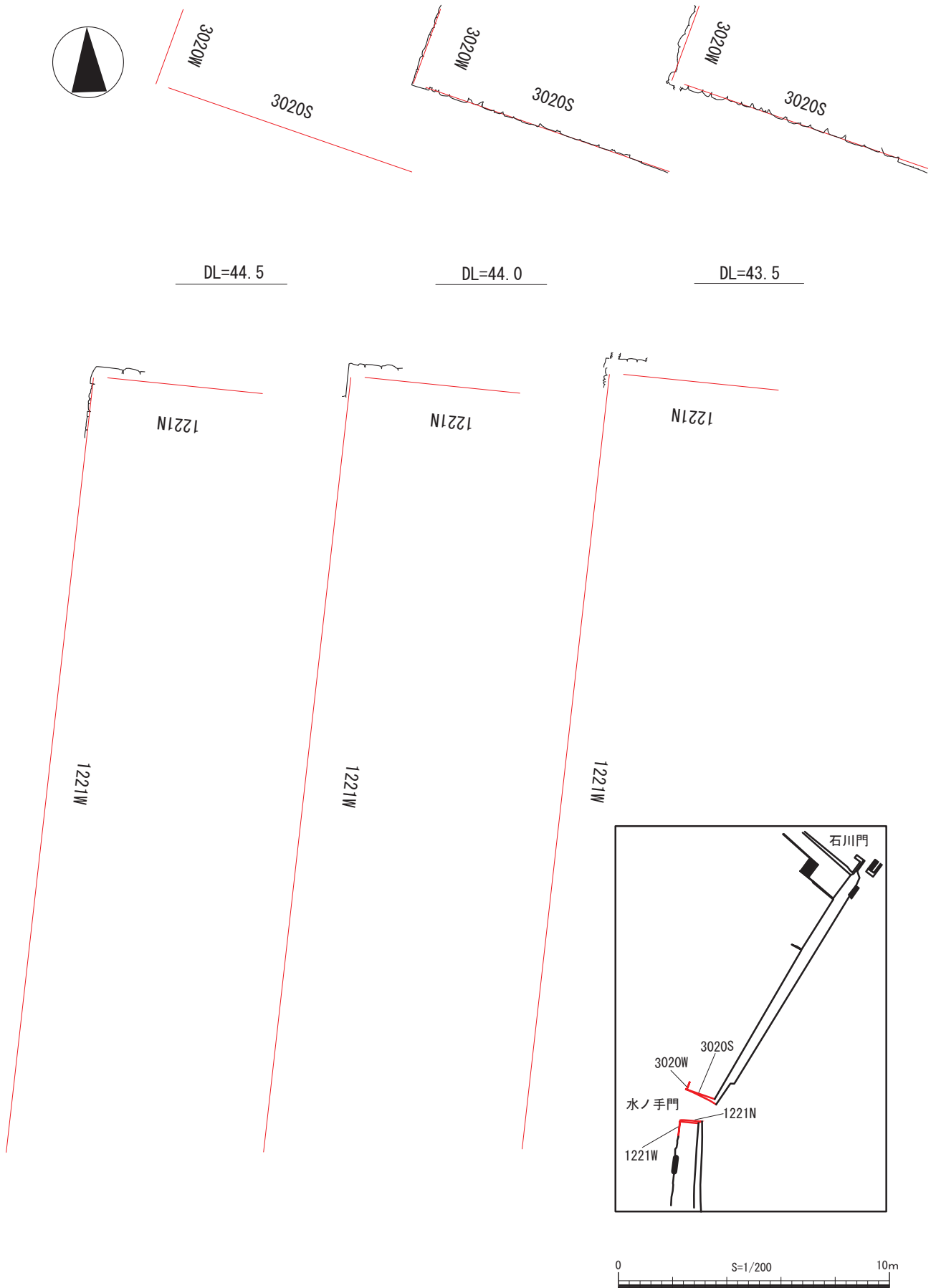
DL=43.5



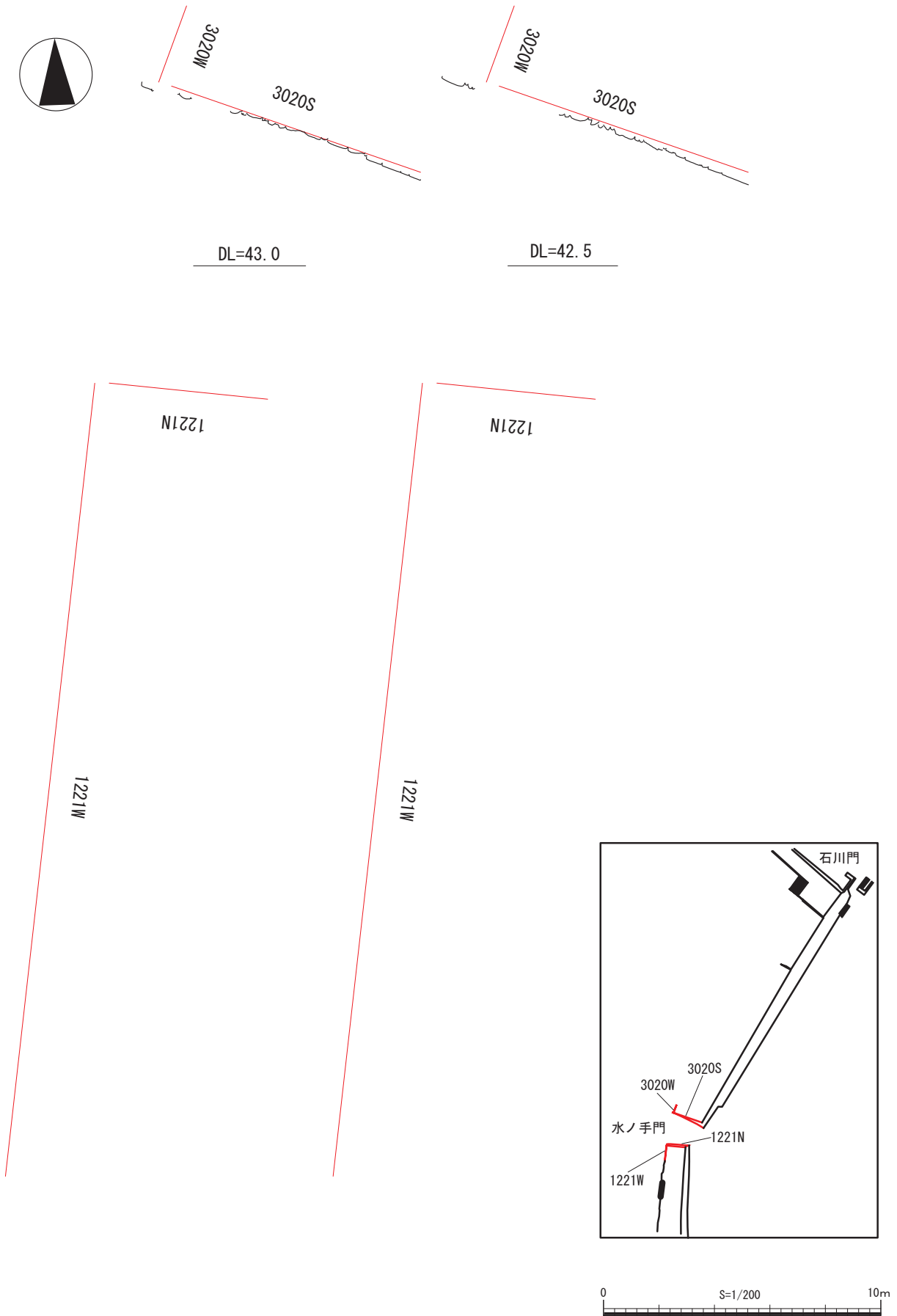
第59図 石垣 (ID3110S・3310S) 水平断面図2 (S=1/200)



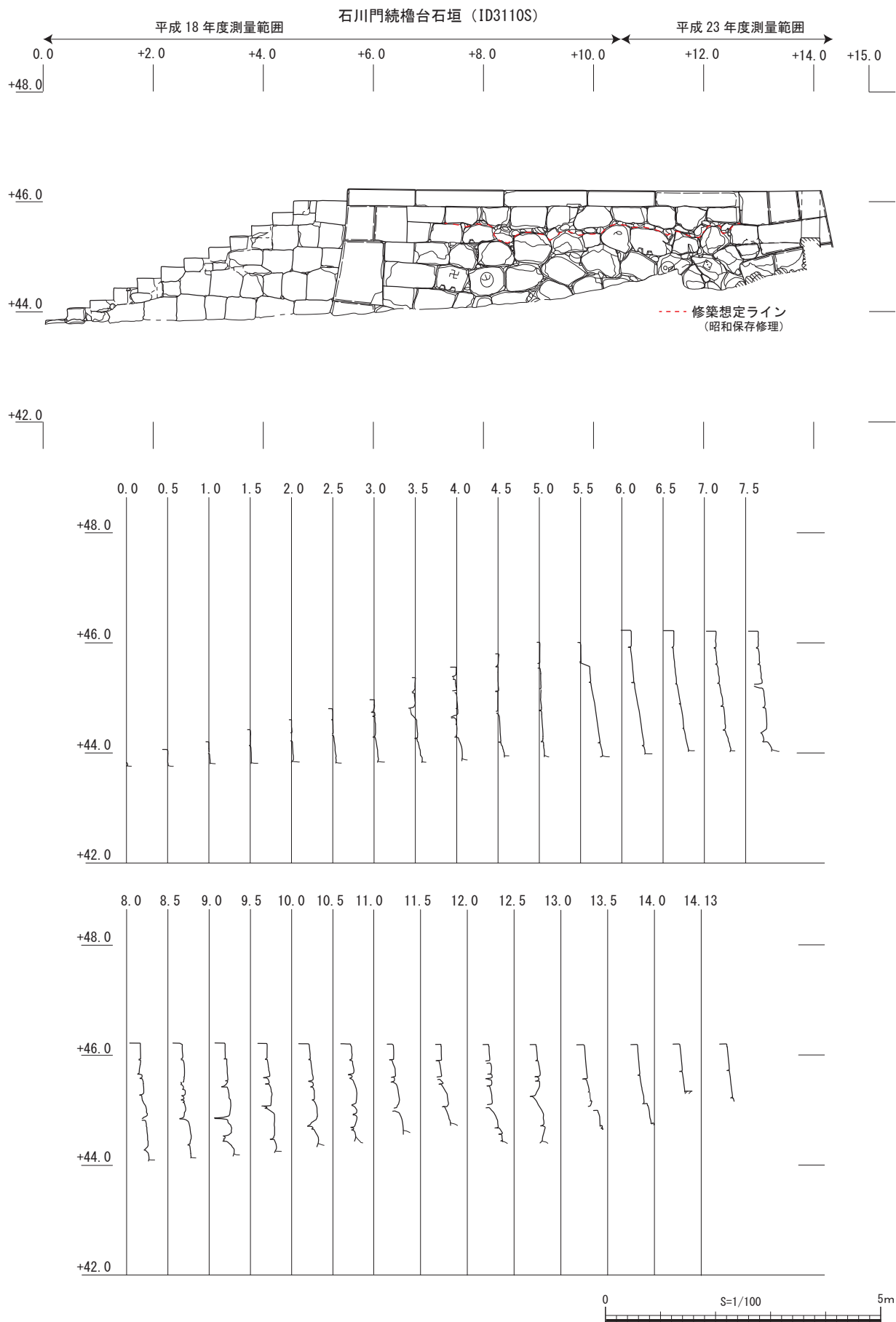
第60図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図1 (S=1/200)



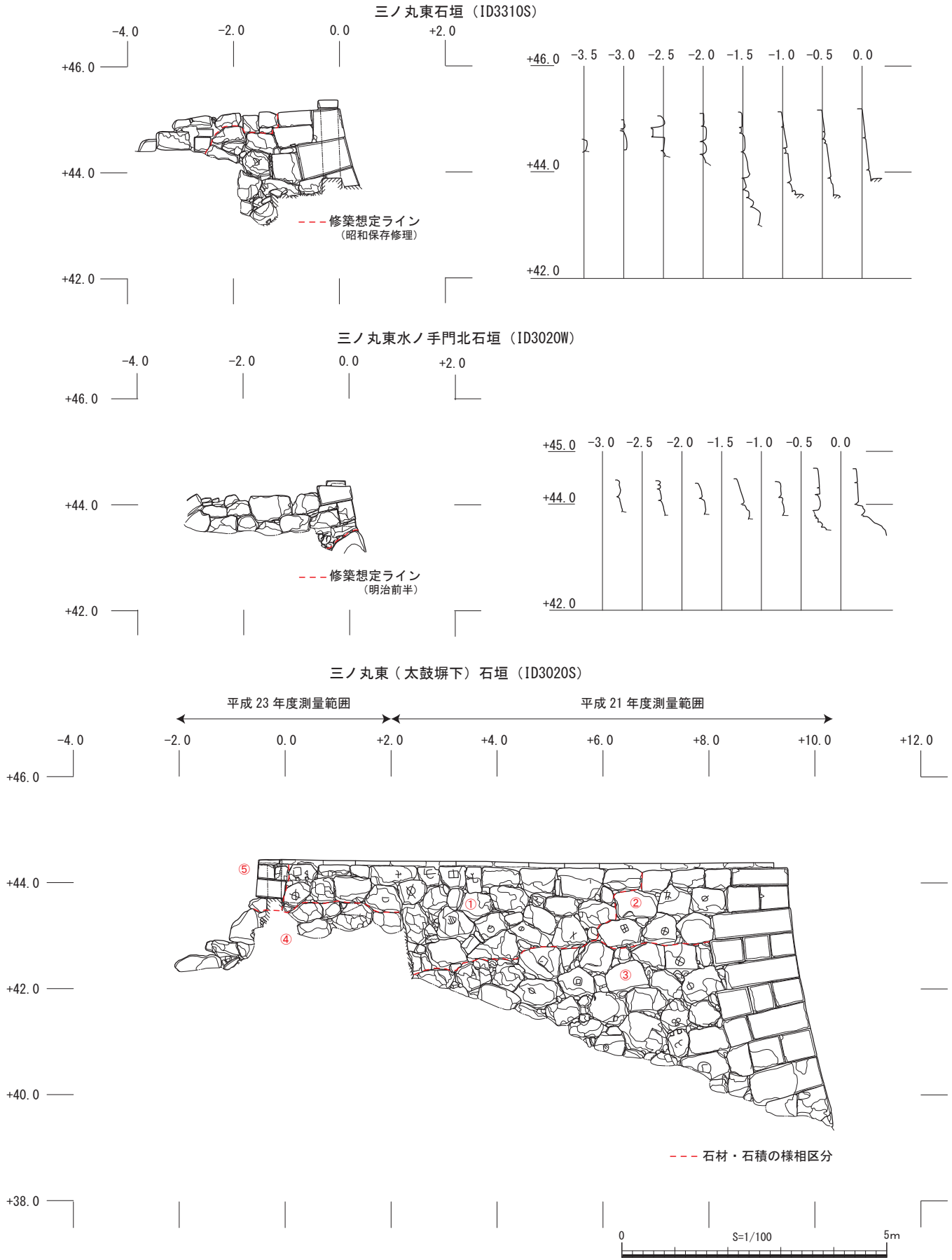
第61図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図2 (S=1/200)



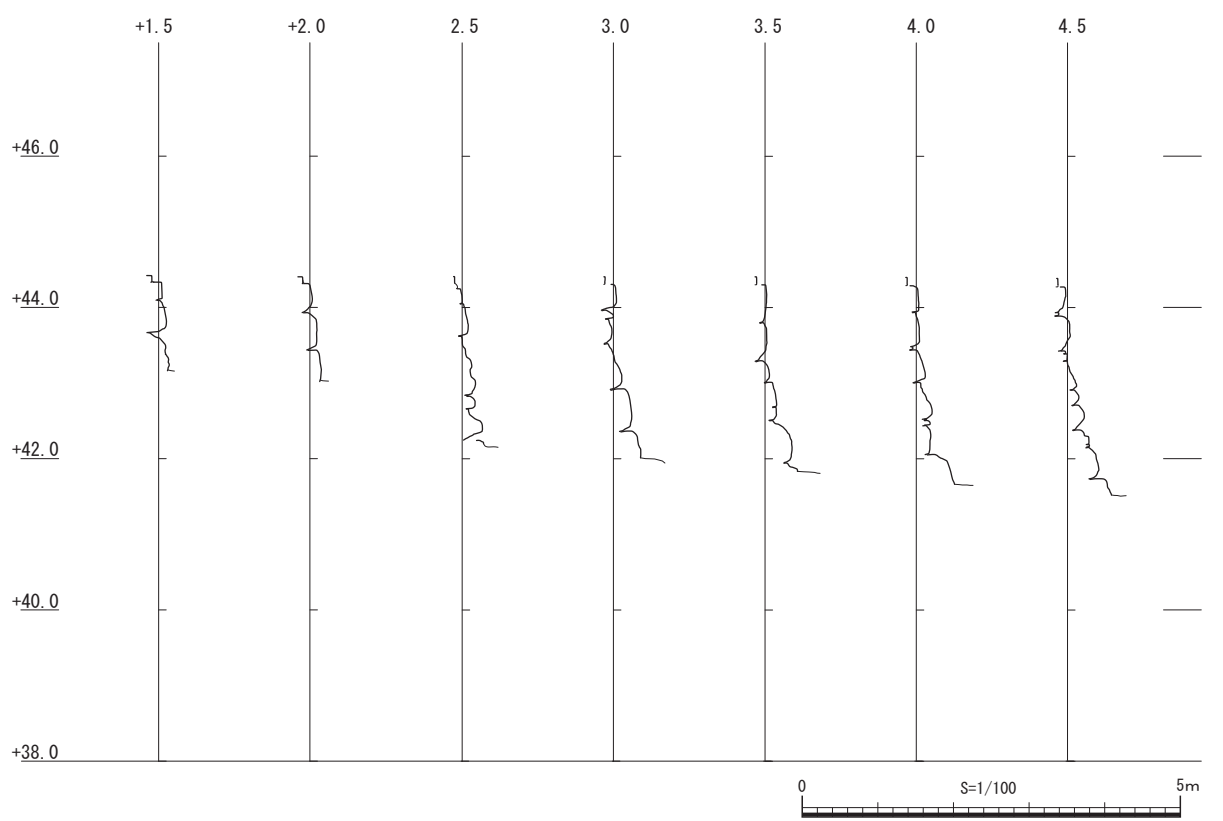
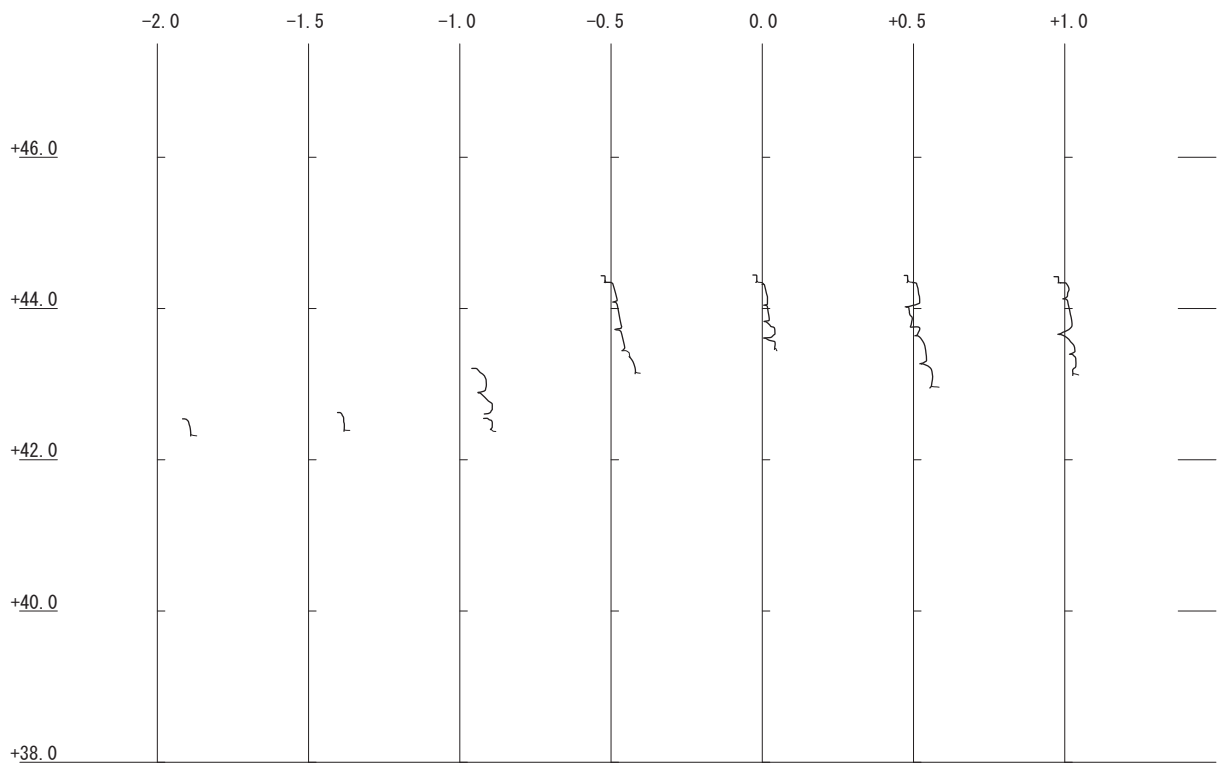
第62図 石垣 (ID3020S・3020W・1221N・1221W) 水平断面図3 (S=1/200)



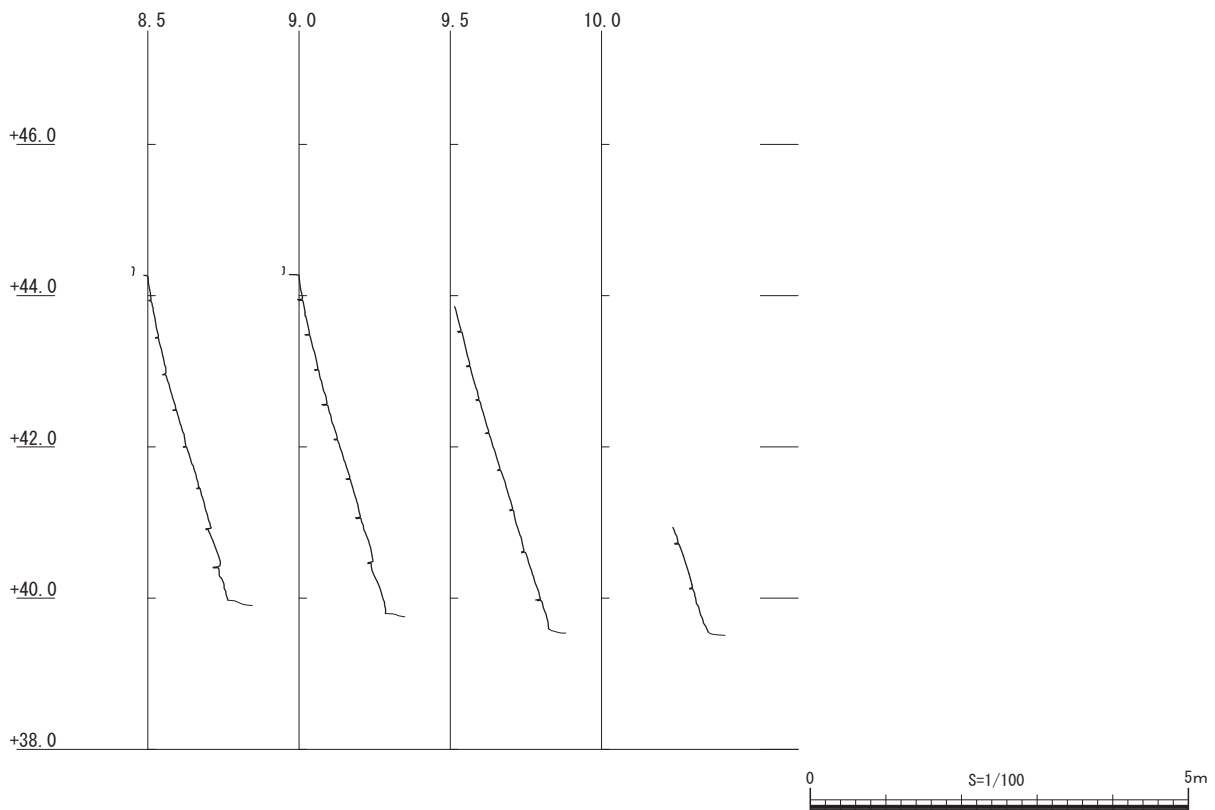
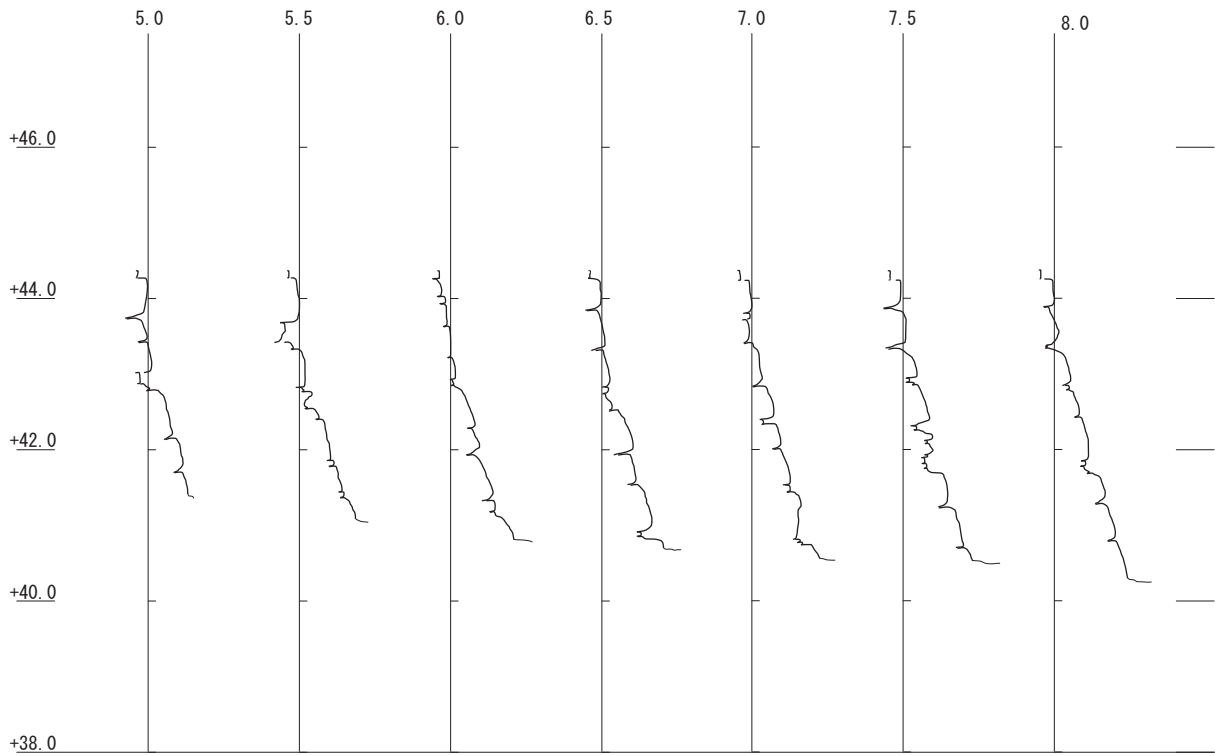
第63図 石垣 (ID3110S) 立面・垂直断面図 (S=1/100)



第64図 石垣 (ID3310S・3020W・3020S) 立面・垂直断面図 (S=1/100)

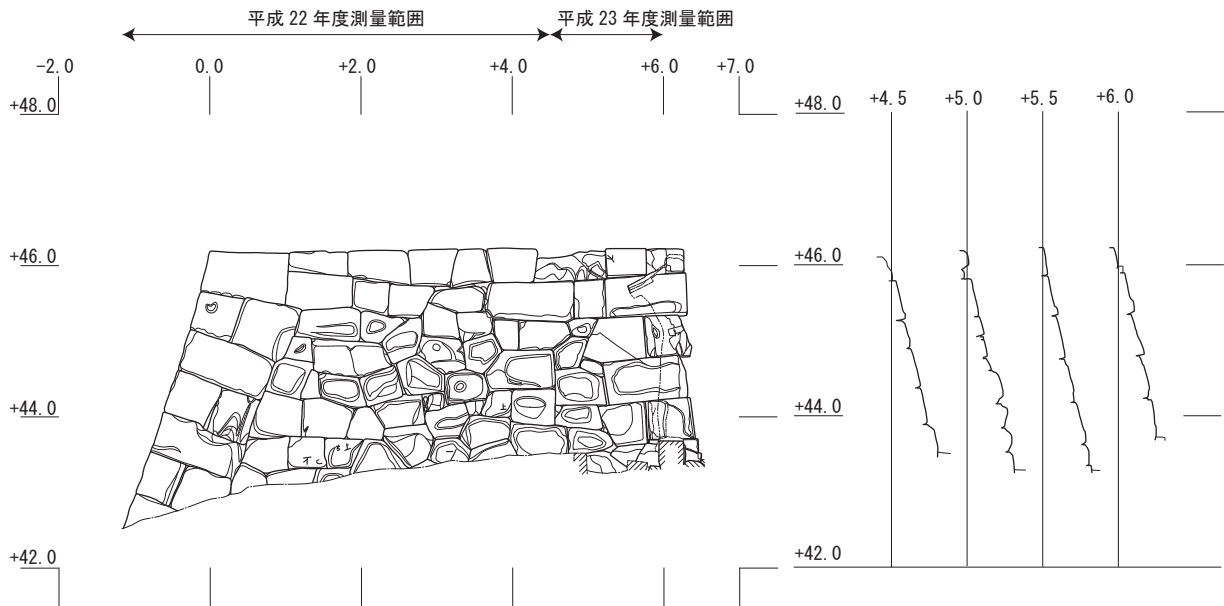


第65图 石垣 (ID3020S) 垂直断面图1 (S=1/100)

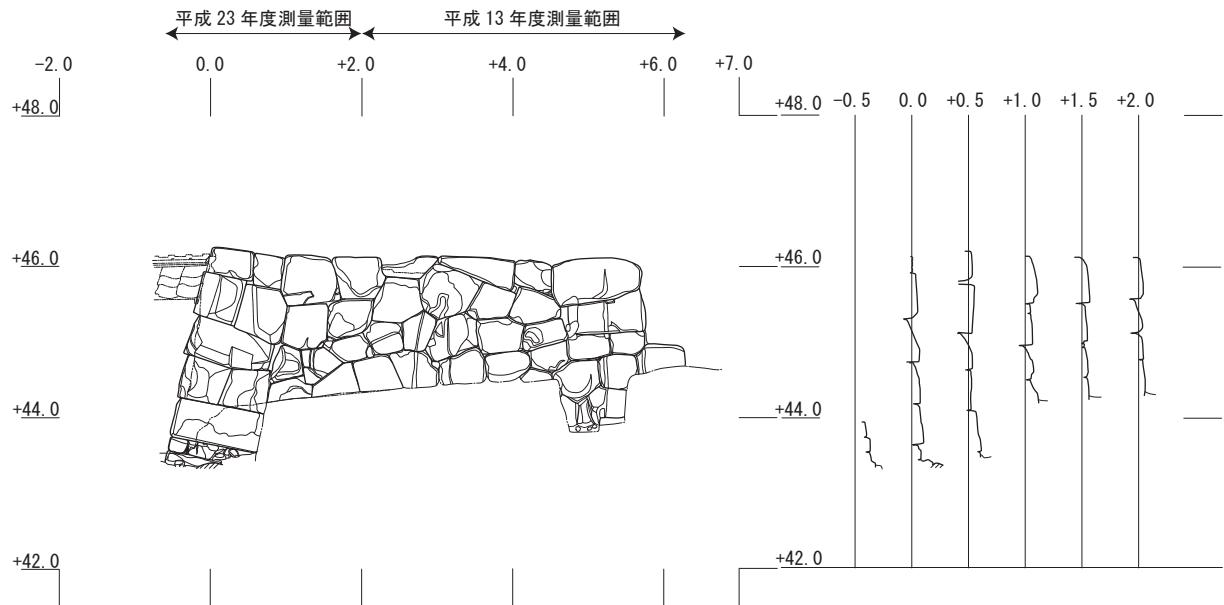


第66图 石垣 (ID3020S) 垂直断面图2 (S=1/100)

東ノ丸東（丑寅櫓下・東2）北面石垣（ID1221N）



東ノ丸東（丑寅櫓下・東2）西面石垣（ID1221W）



0 S=1/100 5m

第67図 石垣（ID1221N・1221W）立面・垂直断面図（S=1/100）

第5節 遺物

土器・陶磁器、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品等が出土し、パンケースにして約70箱を数える。その大半は瓦が占めるが、近代の遺構が主体であったことから、近世から現代までにわたる陶磁器や金属・ガラス製品等が出土し、時期幅は広範囲にわたる。近代以降の太鼓塀修理や公園整備前の利用状況等が影響しているものとする。

遺物観察表の層位区分は、整理段階でⅠ～Ⅲ期に大別したものであり、Ⅰ期が表土、Ⅱ期がコンクリート製控柱に係る遺構、Ⅲ期が抜取痕の出土である。基本層序との対応は、概ねⅠ期がⅠ・Ⅰa層、Ⅱ・Ⅲ期がⅡb層であり、凶化遺物は、Ⅰ・Ⅱ期のみである。

抜取痕の出土遺物は、釉薬瓦・燻瓦、陶磁器、金属製品（銅釘等）であり、釉薬瓦は昭和修理の際に葺き替えられた釉調が光沢のある黒色を呈するものは出土しておらず、黒褐色及び濃紫色系で、釉掛けは部分的であるものが主体となる。陶磁器は出土量が少なく、型紙摺りの染付碗・皿等の近代のものが主体である。

なお、瓦の種類・瓦当分類、釉薬の色調、胎土分類等については、釉薬瓦を『金沢城跡石垣修築工事報告書 玉泉院丸南西石垣』[石川県金沢城調査研究所 2010a]及び右方太鼓塀を中心とした瓦の整理作業の蓄積、燻瓦を『金沢城跡 河北門』[石川県金沢城調査研究所 2011b]に拠った。

1. 土器・陶磁器（第68図・第12表）

近世・近代の陶磁器が出土し、土器は極少量である。そのうち第68図P1～21を凶化した。瀬戸・美濃、肥前、中国の染付碗・皿を中心に、播鉢や水鉢、土瓶（蓋）、土師器皿等であり、時期は近世から近代と幅が広い。

P1・18は土師器皿。口縁部に油煙痕が認められ、外面には指頭圧痕が残る。P2は漳州窯系の皿。見込みに鳳凰の色絵、素地と釉の間には化粧土を施す。高台はロクロ削り出しで、裏面に「天□年□」（天啓年製カ）銘がみられる。P3は景德鎮系の染付皿。小野B1群。P4・5は肥前の染付皿。P6は内・外面に灰釉を施し、高台を有す皿。P7は蛇ノ目凹形高台を有す染付皿。P8～10は染付碗。コバルト顔料を使用し、P9は既製品の染付に、圏線と縦3本線、アラビア数字「3」を赤色で後絵付を施している。明治以降に城内を管轄した旧陸軍に関連するものである。P11は龍泉窯系の青磁碗。体部外面に線描蓮弁文が認められる。P12は陶胎染付碗。P13は碗。高台はロクロ成形であり、露胎する。P14は播鉢。口縁部の断面形は三角形を呈し、端部に平坦面を持つ。縁帯部には2条の凹線が認められる。内面には擦り目9条を施す。P15は水鉢。口縁部内面に蓋受け用のかえりが認められる。外面に流水文がみられる。P16は三彩土瓶。P17は三彩土瓶の蓋。P20は灰釉の香炉。口縁上部が面取りされ内傾し、削り込み高台を有す。P21は瓶類の底部。内面に鉄釉が厚くみられるが、上部からの釉垂であろうか。

2. 瓦（第69～71図・第13～18表）

瓦の分類では、軒棧瓦・棧瓦・軒平瓦・平瓦・軒丸瓦・丸瓦・腰瓦・熨斗瓦・面戸瓦・鬼瓦等の釉薬瓦・燻瓦を確認した。そのうち第69～71図T1～62の凶化等を行った。

釉薬瓦については、釉調が黒色及び黒褐色系を主体に、明らかに新しい時期の光沢のある黒色のものも確認でき、胎土は縞状を呈するものが多い。

T1～9・14・31～36は釉薬軒棧瓦。釉薬の色調は黒色系で、胎土は縞状を呈するものが多い。瓦当はT1・2の中心飾りに桃型・丸型の形状を有し、その両側に延びる唐草で構成する玉文、T3の梅鉢文、T4～9・14の中心飾りの花卉とその両側に延びる唐草で構成する桜文がみられる。その他

に、T32～35 にみられる中心飾りが菊様な花卉を持つ菊文を確認した。

T10・11 は釉薬軒平瓦。釉薬の色調は黒色系で、胎土は縞状を呈する。瓦当では桜文がみられる。T12・13・15・37・38 は燻軒平瓦。瓦当はT13の梅鉢文やT15・37・38の三葉文がみられる。

T16・27 は釉薬棧瓦。T16は「○大」の可能性のある刻印を持つ。T52～56も同様の刻印がみられ、釉薬の色調は黒褐色で胎土は縞状を呈する等、共通要素が認められる。

T17～19・21 は釉薬軒丸瓦。釉薬の色調は明赤褐色・褐色で、胎土は縞状を呈する。瓦当は巴文がみられる。T20・39～41 は燻軒丸瓦。瓦当は梅鉢文の他、T39～41の巴文もみられる。

T22 は釉薬、T23 は燻の丸瓦。T24～28 は釉薬道具瓦である。T24 は熨斗瓦。裏面に波状条痕がみられ、類似品としてT62の輪花状のものがある。T25 は不明。T26 は袖瓦。T28 は鯉タイプの面戸瓦。T29・30 は燻道具瓦で、T29 は腰瓦、T30 は鬼瓦である。

刻印については、燻瓦はT43～51の「□上」が主体を成し、T61の「□十」もみられ、平瓦や丸瓦の他に腰瓦にも確認できる。釉薬瓦はT52～59の「○大」、「○八」、「○カ」が確認できる。

3. 金属製品 (第72図・第19表)

釘、鏝、瓦を留める銅線等が出土した。そのうち第72図M1～8を図化した。M1～6は銅釘。全長2・3cm前後を測る。その他、4cm以上を測るものも確認した。M7は鉄製釘。全長9.3cmを測り、頭部を折り曲げた貝折れタイプの釘である。

M8は鏝。全長11.6cmを測り、表土(I層)からの出土である。その他、同規格のものを1点、14cmを2点、16cmを1点、18cmを2点確認し、全て1区の表土(I層)からの出土である。

4. 石製品 (第72～74図・第20表)

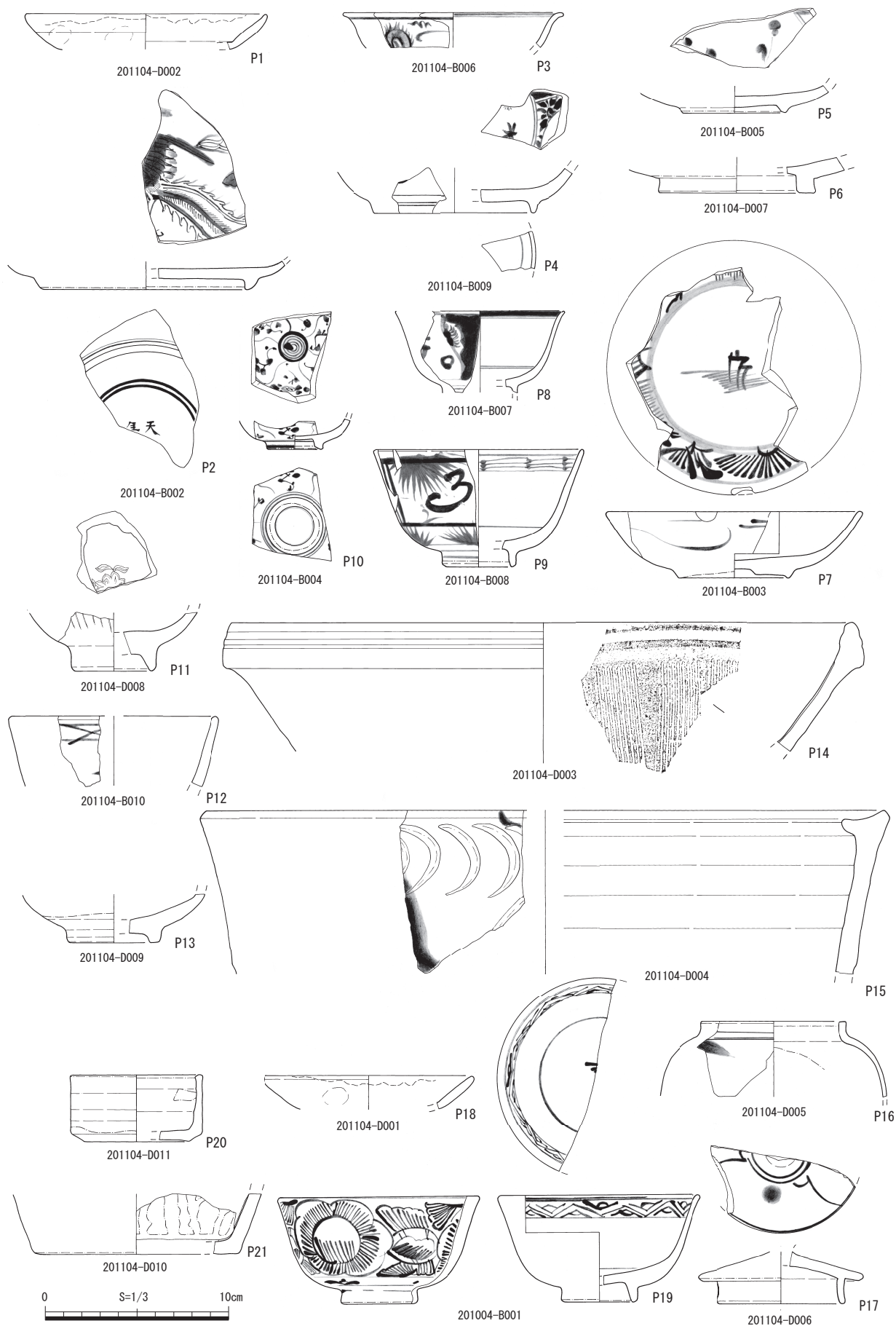
戸室石や凝灰岩の破材が主体で、完形品は少ない。そのうち第72～74図S1～4を図化した。S1・2は、ほぼ同規格の硯である。S2は裏面に凹みが確認でき、砥石に転用された可能性がある。

S3・4は太鼓塀の基礎石。破損により新材に据え替えられた箇所のものであり、S3は2区10、S4は3区23に該当する。S3は石材が赤戸室石、調整は上面がツル、内側側面がツル、外側がツルの後ビシャンである。内側側面に「七」の刻印が確認できる。S4は石材が赤戸室石、調整は上面がツル、内側側面がツル、外側がツルの後ビシャンであり、下面は縁部を8cm程度残し内部を抉っている。内側側面に「△」の刻印が確認できる。

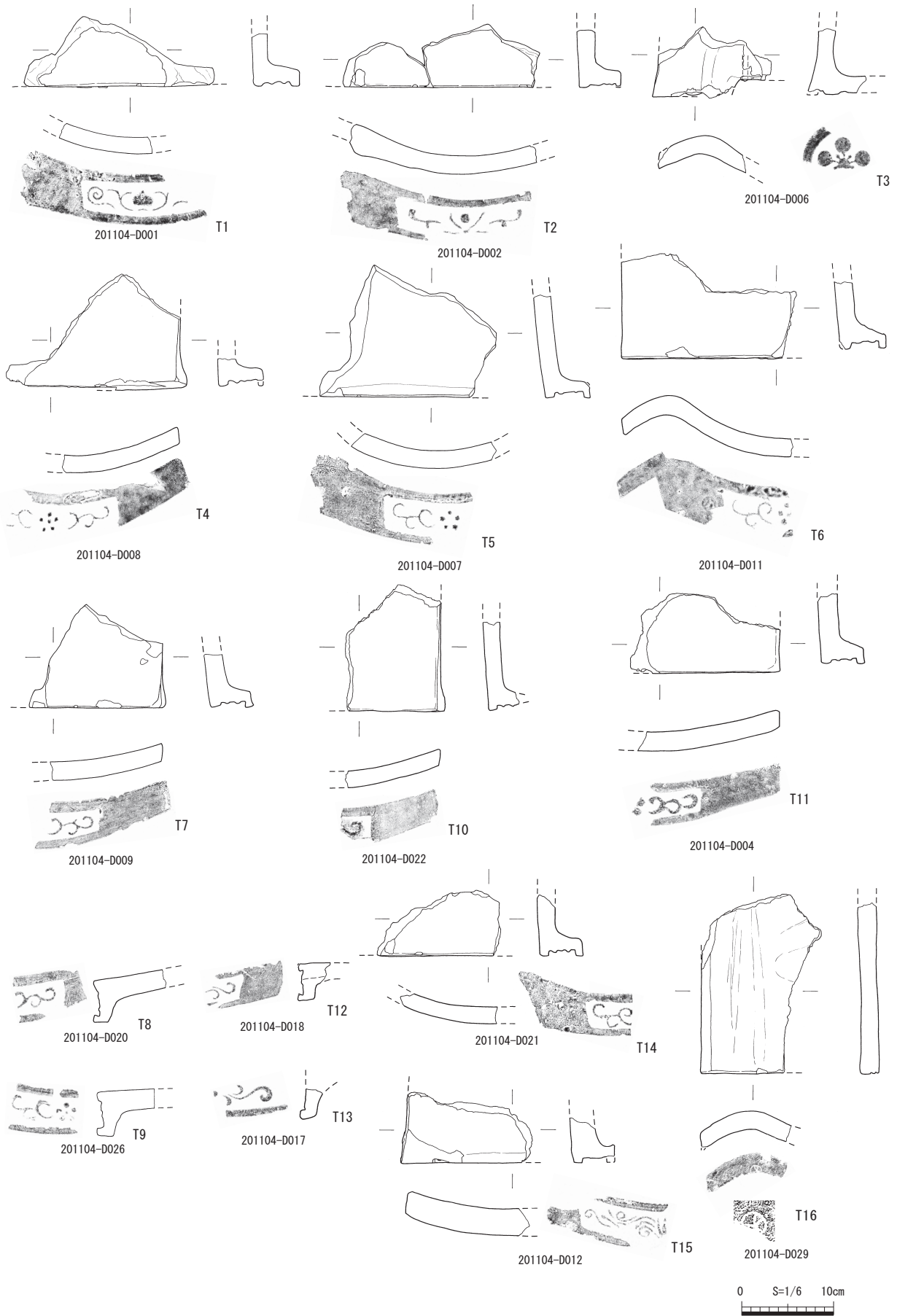
第6節 小結

控柱抜取痕は、コンクリート製控柱掘方の直下で検出され、1区、2～4区、5区の各調査区において、規模等に様相の異なりを確認した。これは各調査区の立地や近代以降における改変等の諸条件が要因と考えられ、時期については、出土遺物から判断できなかったが、木製からコンクリート製控柱に変更したとされる時期や古写真等から、大正～昭和13年以前と捉えられる。

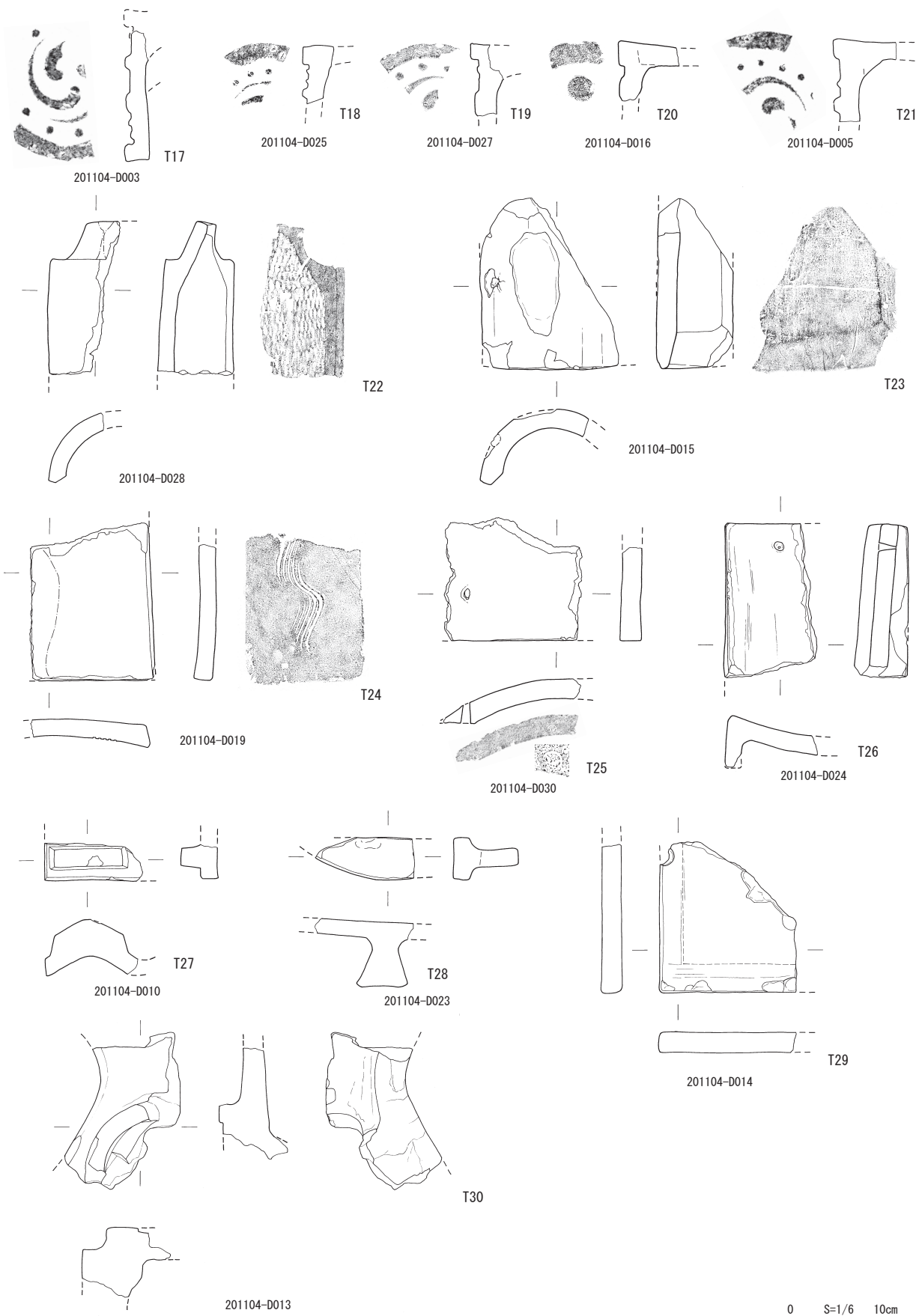
その他、水ノ手門周辺では近代改変前の様相の一端が窺え、近世前半(宝暦大火前)の痕跡を確認した。北面する門柱痕やそれに伴う礎石痕、枡形の北辺を画す三ノ丸(太鼓塀下)石垣の延長部を確認した。



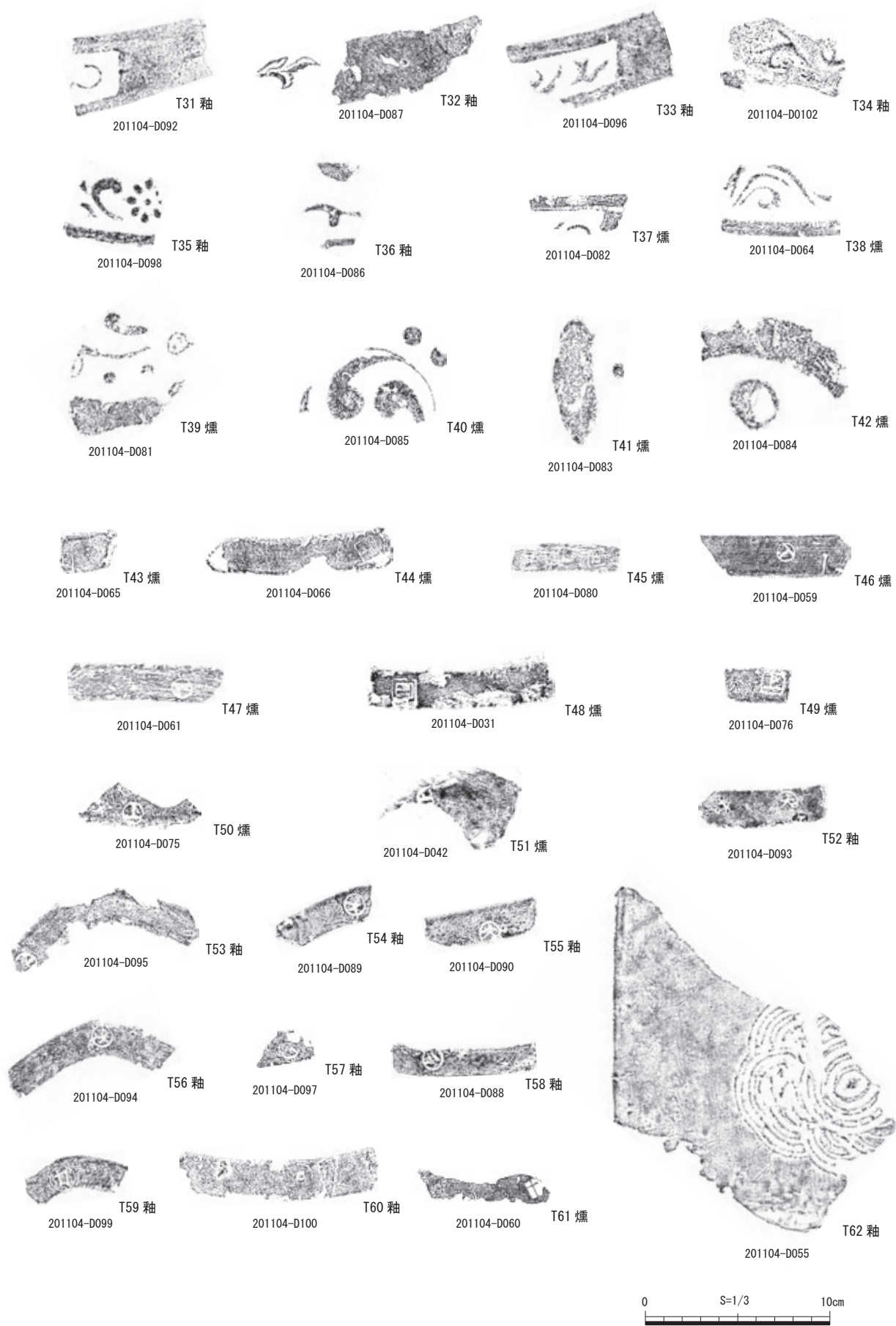
第68図 遺物実測図 土器・陶磁器 (S=1/3)



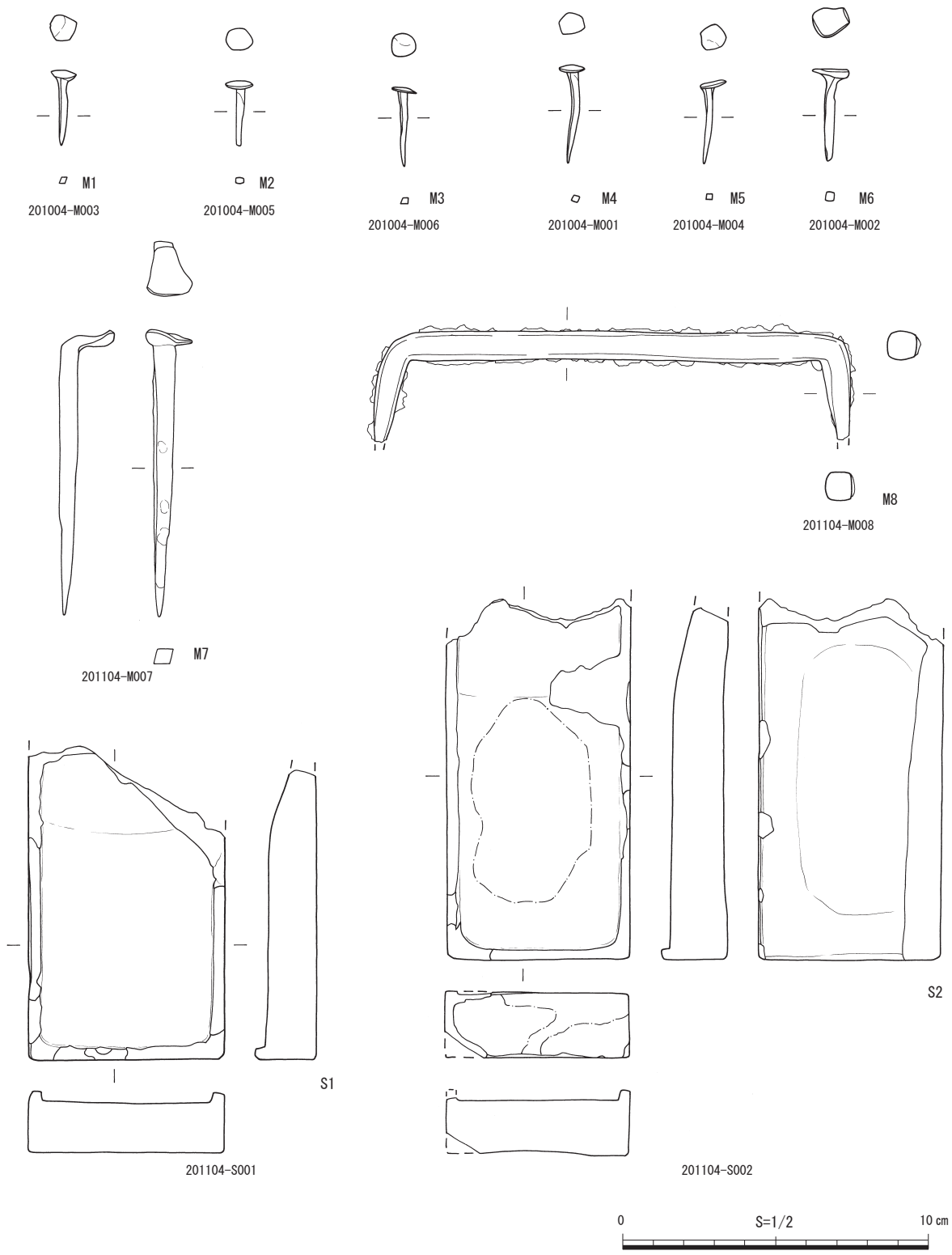
第69図 遺物実測図 瓦1 (S=1/6)



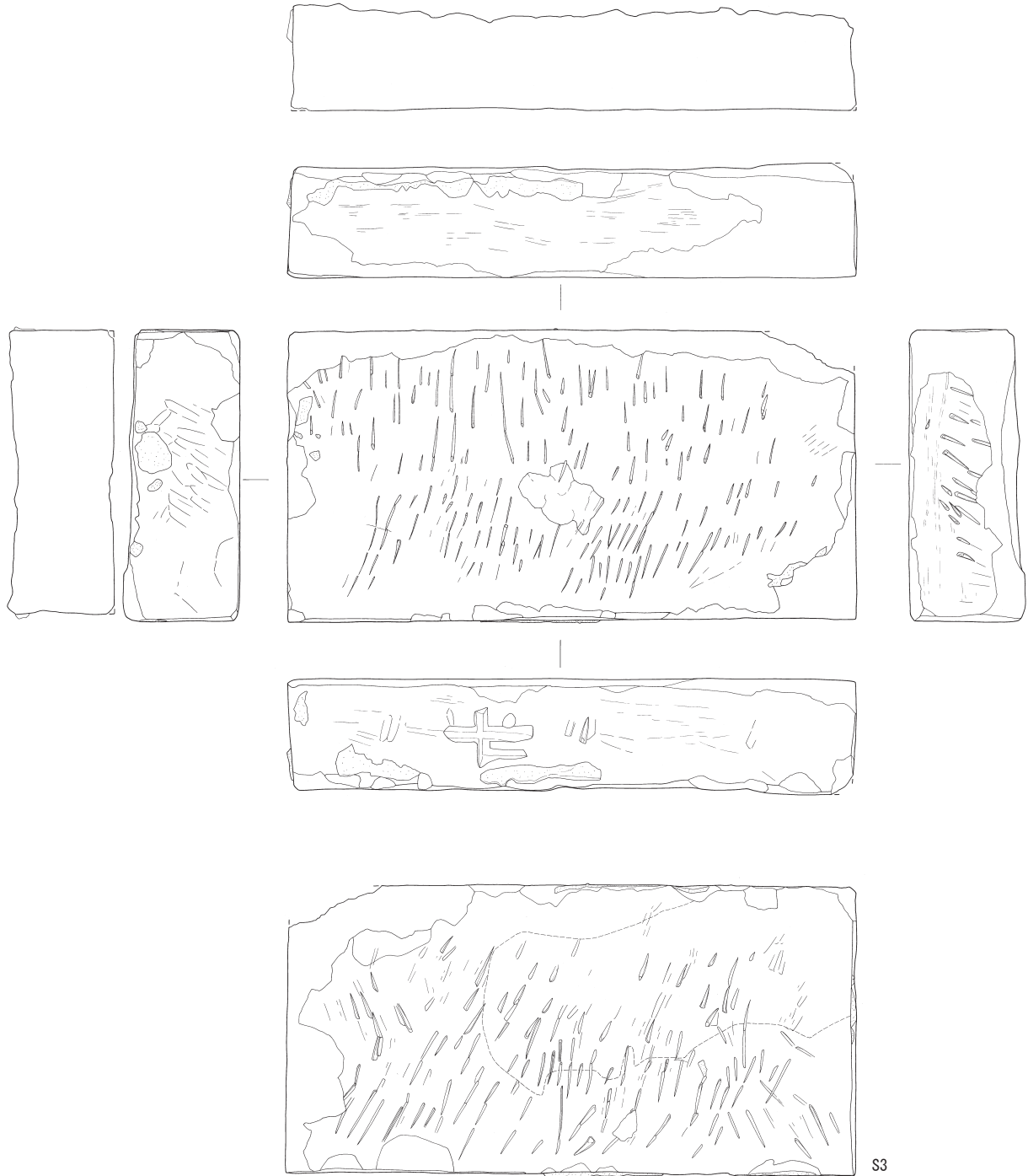
第70図 遺物実測図 瓦2 (S=1/6)



第71图 瓦当·刻印拓本 (S=1/3)



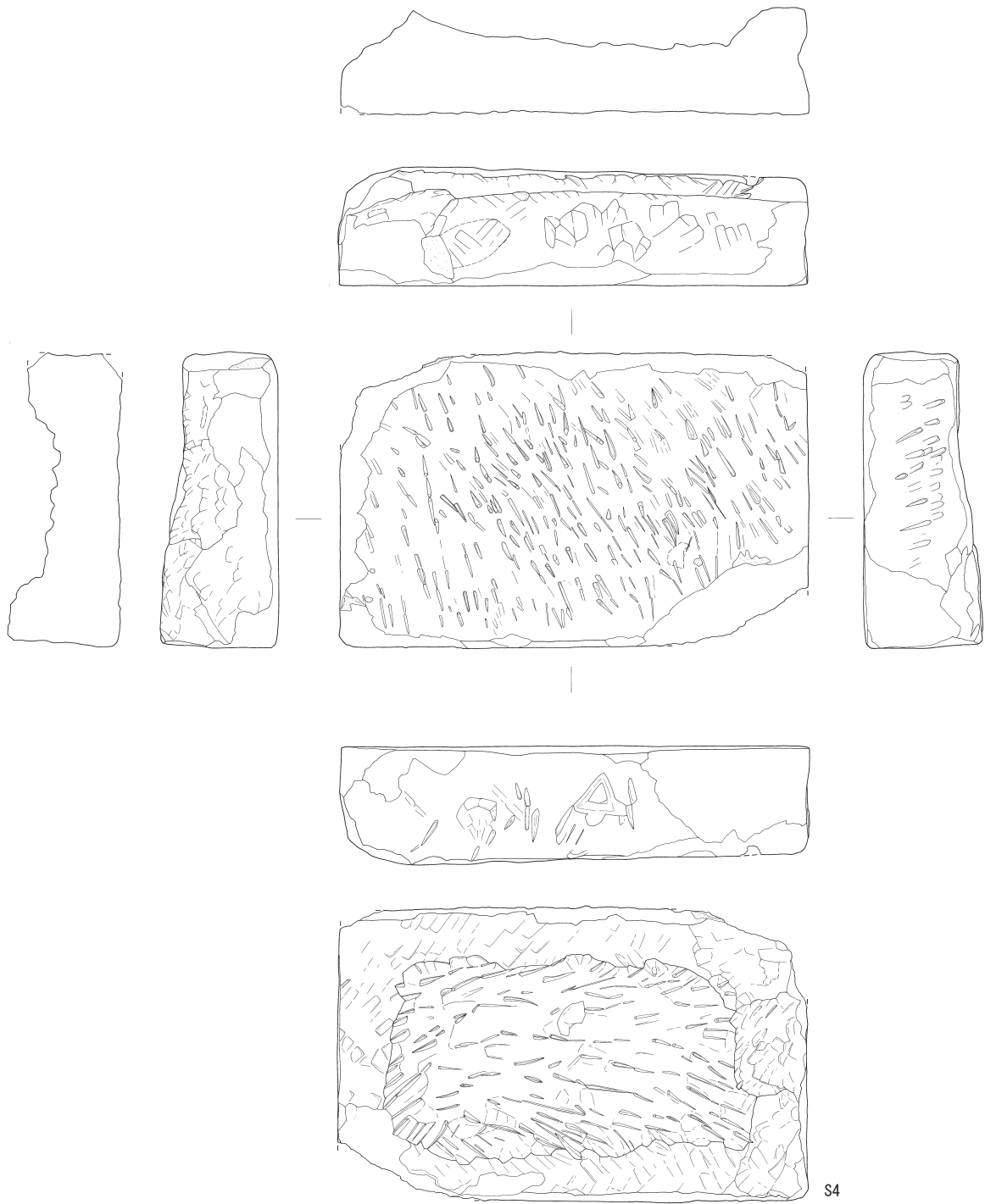
第72図 遺物実測図 金属・石製品 (S=1/2)



201104-S003

0 S=1/8 20cm

第73図 遺物実測図 石製品 1 (S=1/8)



第74図 遺物実測図 石製品2 (S=1/8)

第12表 遺物観察表 土器・陶磁器

図版	掲載番号	発掘番号	種類	器種	出土地点	層位	口径	底径	高さ	成形・整形・調整	釉薬・裝飾等	胎土・色調	産地	備考
P1	201104-0002		土器	皿	3-30	I	13.0		(1.9)	手づくね		黒色透明・透明粒子多、淡赤橙	在地	油煙痕、外面指頭圧痕
P2	201104-0002		磁器	皿	1-7	I		11.6	(1.5)	ロクロ	色絵	灰白	中国(漳州窯系)	高台裏「天口年口」款(天祿年製?)、高台ロクロ削り出し
P3	201104-0006		磁器	皿	2-27	I	11.8		(1.9)	ロクロ	染付	灰白	中国(景德鎮系)	小野B1群
P4	201104-0009		磁器	皿	3-31	I		8.8	(2.5)	ロクロ	染付	灰白	肥前	凝熱(透明釉溶解)
P5	201104-0005		磁器	皿	3-32	I		5.6	(1.5)	ロクロ	染付	灰白	肥前	17c中明頃
P6	201104-0007		陶器	皿?	3-34	I		8.4	(1.9)	ロクロ	灰釉	白色細砂、淡黄		
P7	201104-0003		磁器	皿	3-40~44	I	13.6	6.1	3.6	ロクロ	染付	灰白	肥前	肥ノ目皿形高台、19世紀
P8	201104-0007		磁器	端反碗	1-7	I	9.1		(4.45)	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	コバルト、近代
P9	201104-0008		磁器	端反碗	3-40	I	11.2	3.6	6.4	ロクロ	内:染付 外:赤絵、染付	灰白	瀬戸・美濃	赤絵で「3」、コバルト、瀬際茶碗、近代
P10	201104-0004		磁器	小碗	5	I		3.1	(1.6)	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	コバルト、近代
P11	201104-0008		磁器	青磁碗	1-9	I	4.2		3.2	ロクロ	外面:蓮弁文	黒色粒子微、灰白	中国(龍泉窯系)	高台内面ロクロ削り出し、15c後半~16c
P12	201104-0010		陶器	碗	3-38	I	(11.1)		(3.8)	ロクロ	染付	灰	肥前	陶胎染付、18c~
P13	201104-0009		陶器	碗	5-51	I		5.0	(2.6)	ロクロ	鉄釉	細砂微、黄褐	肥前	高台ロクロ削り出し、17C前半
P14	201104-0003		陶器	摺鉢	3-40	I	(33.8)		(7.0)	ロクロナデ・摺り目		黒色粗砂少、白色粗砂多、灰	備前系	摺り目9条
P15	201104-0004		陶器	水鉢	4-45~47	I	(37.0)		(8.9)	ロクロナデ	灰釉 外:流水文	白色粗砂・細砂微、灰白	瀬戸・美濃	18c後半~
P16	201104-0005		陶器	土瓶	1-7	I	7.8		4.1	ロクロ	内:無釉 外:白濁釉・上絵	細砂微、黄色橙		19c~
P17	201104-0006		陶器	蓋	4-45~47	I	6.8		(2.85)	ロクロ	内:無釉 外:白濁釉・上絵	白色細砂微、灰		かえり様0、19c~
P18	201104-0001		土器	皿	2-23	II	11.3		(1.8)	手づくね		黒色透明・透明粒子多、灰白	在地	油煙痕、外面指頭圧痕
P19	201004-0001		磁器	端反碗	3-39	II	10.7	4.2	5.8	ロクロ	染付	灰白	瀬戸・美濃	19c
P20	201104-0011		陶器	香炉	1-11	II	6.8	5.7	3.6	ロクロ	灰釉	細砂微、灰白	瀬戸・美濃	19c
P21	201104-0010		陶器	瓶	2-17	II		11.2	(3.3)	ロクロナデ	内:無釉 外:灰釉	細砂微、灰白	肥前?	底部被熱

第13表 遺物観察表 瓦 (軒棧・軒平瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	器種	出土地点	階位	五当										胎土・色調	焼成・色調	瓦割分類	胎土・色調	混和剤	備考
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
	T1	20104+2001	軒瓦	4-45~46	I						2.8	5.0	3.5	1.7				にぶい赤褐	良 黒 (輪)	白色緑灰、褐色、白色、白色粗砂少	
	T2	20104+2002	軒瓦	3-37	I					2.7	4.5	2.7	1.8					明赤褐	褐色色緑灰、褐色、白色粗砂少		
	T3	20104+2005	軒瓦	2-15	I													にぶい黄緑	白色緑灰、白色粗砂少		
	T4	20104+2008	軒瓦	1-2	I				6.5		3.2	4.9	3.0	(1.2)	(3.0)			シマ状 にぶい橙	白色粗砂少、白色緑灰		
	T5	20104+2007	軒瓦	1-2~3	I					3.0	4.9	3.3	1.7					シマ状 橙	黒色粗砂 白色粗砂少	分析№.1	
	T6	20104+2011	軒瓦	1-4	I			7.3		(6.9)	2.9	5.1	3.5	1.5	4.6			シマ状 橙	褐色色粗砂		
	T7	20104+2009	軒瓦	2-17	I				7.5		2.6	4.7	3.0	1.7				シマ状 橙	褐色粗砂、白色、褐色色粗砂少		
69	T8	20104+2020	軒瓦	1-5	I					2.6	4.5	2.15	1.6					シマ状 明赤褐色	褐色色緑灰、白色、褐色色粗砂少		
	T9	20104+2026	軒瓦	3-32	I					2.7	4.8	2.8	1.8					シマ状 橙	白色、褐色色粗砂少		
	T10	20104+2022	軒瓦	1-3	I				7.5		2.45		1.35					シマ状 橙	白色粗砂少		
	T11	20104+2004	軒瓦	4-47	I				8.3		2.5	4.7	2.75	1.7				シマ状 橙	褐色色緑灰、白色粗砂少		
	T12	20104+2018	軒瓦	4-45~47	I				5.1		2.5	4.0	1.7	1.6				シマ状 (部分) 灰	白色粗砂		
	T13	20104+2017	軒瓦	4-46	I								1.8					灰白	黒色、灰白粗砂多		
	T14	20104+2021	軒瓦	5-55	II			7.5			3.0	4.7	3.0	1.9				シマ状 にぶい橙	白色粗砂少、褐色緑灰		
	T15	20104+2012	軒瓦	1-5	II						2.9	4.55	1.5	0.9				灰白	黒色緑灰、白色粗砂少		

第14表 遺物観察表 瓦 (棧瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	器種	出土地点	階位	体部										胎土・色調	焼成・色調	胎土・色調	混和剤	備考	
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						厚さ
69	T16	20104+2025	棧瓦	1-5	I															白色粗砂少、褐色色緑灰	
70	T27	20104+2010	棧瓦	3-33	I															シマ状 橙	細印「〇大」?
																				白色粗砂少、赤色灰子少	
																				浅黄	

第15表 遺物観察表 瓦 (軒丸瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	器種	出土地点	階位	五当										胎土・色調	焼成・色調	瓦割分類	胎土・色調	混和剤	備考
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						
	T17	20104+2003	軒丸瓦	3-31	I							8.3	2.6							良 明赤褐、黒褐～オリーブ黒 (輪)	
	T18	20104+2025	軒丸瓦	3-41	I															巴文	シマ状 にぶい赤褐～灰
70	T19	20104+2027	軒丸瓦	1-3	I															良 明赤褐、灰オリーブ (輪)	シマ状 灰～にぶい橙
	T20	20104+2016	軒丸瓦	5-51	I															良 褐 (輪)	シマ状 褐色～にぶい橙
	T21	20104+2005	軒丸瓦	2-15	II															良 灰	灰
																				良 灰褐 (輪)	シマ状、浅黄緑

第16表 遺物観察表 瓦 (丸瓦)

図版	掲載番号	発掘番号	器種	出土地点	階位	体部										胎土・色調	焼成・色調	胎土・色調	混和剤	備考	
						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j						厚さ
70	T22	20104+2028	丸瓦	4-47	I							4.0								良 黄灰	にぶい赤褐
	T23	20104+2015	丸瓦	4-47	I															良 灰	灰白
																				8.1	2.4
																					白色粗砂多
																					白色粗砂多、鐵(1mm以下)含む

第17表 遺物観察表 瓦 (その他)

図版	掲載番号	発掘番号	器種	出土地点	階位	厚	最大長	最大幅	胎土・色調			混和剤	備考
									表面	表面	表面		
	T24	20104+2019	瓦	1-8	I	2.0			良 黒 灰 (輪)	良 黒 灰 (輪)	良 黒 灰 (輪)	褐色茶灰	
	T25	20104+2030	棟瓦	1-9	I	2.2			良 黒褐 (輪)	シマ状 にぶい橙	白色粗砂多	刻印不明、孔径0.5~1.0	
	T26	20104+2024	相瓦	4-48	I	1.9			良 黒 (輪)	良 黒 (輪)	白色粗砂多	孔径0.9 下径0.2	
70	T28	20104+2023	前戸	1-8	I	6.85	4.5		良 黒 (輪)	黄緑	白色粗砂、赤色灰子少		
	T29	20104+2014	腰瓦	1-4	I	2.3			良 黒褐～灰白	砂っぽい、灰白	黒色粗砂、白色粗砂多		
	T30	20104+2013	瓦	1-11	II				良 灰	砂っぽい、灰白	黒色粗砂少		

第18表 遺物観察表 瓦 (拓本)

図版	複製番号	東洋館番号	整理	出土地点	層位	表面	瓦当分類	法量	刻印	焼成 色調	胎土 色調	混和剤	備考
T31	20104-1092		軒棧	5-55	I	釉	椀I?	踏下部厚1.7、踏下部幅0.7、体部厚1.9		良 黒褐 (釉)	シヤ状 橙	白色細砂少	
T32	20104-1087		軒棧	3-40	I	釉	椀?	右端縁7.0		良 オリーブ黒 (釉)	明赤褐	透明黒微、白色細砂少	
T33	20104-1096		軒棧	4-45~46	I	釉	椀?	踏下部厚2.1、踏上部幅1.1、踏下部幅0.8、体部厚1.9		良 明赤褐 (釉)	橙	白色細砂微	
T34	20104-1012		軒棧	3-43	I	釉	椀?			良 褐灰 (釉)	橙	白色麻微、白色粗砂少	
T35	20104-1098		軒棧	3-36	II	釉	椀	踏下部厚1.8、踏下部幅0.7		良 黒褐 (釉)	赤褐	白色麻微、白色粗砂少	
T36	20104-1086		軒棧	4-45	II	釉	?	踏下部厚1.6		良 オリーブ黒 (釉)	明赤褐	白色麻微、白色粗砂少	
T37	20104-1082		軒平	2-25	I	焼	三葉文IV?	踏上部幅0.9		良 明灰	シヤ状 灰白	白色麻微、白色粗砂多	
T38	20104-1064		軒平	5-51	I	焼	三葉文III?	踏下部厚1.8、踏下部幅0.9		良 灰	灰白	灰 白色粗砂微	
T39	20104-1081		軒丸	2-25	I	焼	巴文	瓦当厚2.2、踏下部幅2.1		良 明灰	灰白	白色、褐灰色粗砂少	
T40	20104-1085		軒丸	2-27	I	焼	巴文			良 灰	シヤ状 灰白	滑片状 (白色) 透明粗砂多	透明粗砂は表面に多くみられる。
T41	20104-1083		軒丸	3-31	I	焼	巴文?	踏下部幅2.4		良 灰	灰白	褐灰色 白色麻微、白色粗砂多	
T42	20104-1084		軒丸	3-43	I	焼	象轡文?	踏下部幅2.4		やや良 灰白	シヤ状 灰白	白色粗砂少、透明細砂少	
T43	20104-1065		平	3-42~43	I	焼		体部厚2.0	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂少、黒色粒子少	透明細砂は表面にみられる。
T44	20104-1066		平	3-42~43	I	焼		体部厚2.0	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂微、黒色粒子少	
T45	20104-1080		平	3-46	I	焼		体部厚1.8	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	黒色粗砂少	刻印シヤープ
T46	20104-1059		平	4-47	I	焼		体部厚2.1	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂微、黒色粒子微	
T47	20104-1061		平	4-47	I	焼		体部厚2.1	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂微	
T48	20104-1031		平	5-51	I	焼		体部厚2.1	「口上」陰刻	良 灰	灰白	黒色 白色粗砂多	
T49	20104-1076		平	3-40	II	焼		体部厚2.1	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂微、黒色粒子少	
T50	20104-1075		丸	3-42	I	焼		体部高5.0、体部厚2.0	「口上」陰刻	良 灰	シヤ状 灰白	白色粗砂微	
T51	20104-1042		丸	5-52	II	焼			「口上」陰刻	不良 灰白	シヤ状 灰白	白色粗砂多	
T52	20104-1093		棧	1-3	I	釉		体部厚2.1	「O大」陰刻	良 黒褐 (釉)	シヤ状 にぶい橙	白色麻微、白色粗砂少	
T53	20104-1095		棧	1-6	I	釉		体部厚2.0	「O大」陰刻	良 黒褐 (釉)	シヤ状 橙	白色粗砂少	
T54	20104-1089		棧	3-30	I	釉		体部厚2.1	「O大」陰刻	良 黒褐 (釉)	シヤ状 橙	褐灰色麻微、白色粗砂微	
T55	20104-1090		棧	3-32	I	釉		体部厚2.0	「O大」陰刻	良 明褐 (釉)	にぶい橙	褐灰色 白色粗砂少	
T56	20104-1094		棧	3-33	I	釉		体部厚2.0	「O大」陰刻	良 黒褐 (釉)	シヤ状 にぶい橙	黒色 白色粗砂少、白色粗砂微	
T57	20104-1097		平	3-32	II	釉		体部厚1.7	「O大」?	良 黒褐 (釉)	灰白	白色粗砂少	分析No.4
T58	20104-1088		棧	1-7	I	釉		体部厚1.8	「O大」陰刻	良 黒 (釉)	淡黄橙	赤色粗砂子少、白色粗砂少	
T59	20104-1099		棧	2-21	II	釉		体部厚1.7	「O大」?	良 黒褐 (釉)	シヤ状 にぶい橙	白色粗砂 褐色細砂少	分析No.3
T60	20104-1010		棧	2-20	II	釉		体部厚2.2	不明	良 黒褐 (釉)	にぶい橙	白色粗砂 黒色細砂少	分析No.2
T61	20104-1060		平	4-54	II	焼		体部厚1.9	「口上」陰刻	良 灰	灰白	白色粗砂微	
T62	20104-1055		軒棧	3-38	II	釉		体部厚1.9		良 黒褐 (釉)	シヤ状 明赤褐	白色 黒色粗砂微、白色粗砂多	表面に梅花状刻線 (滑り止め)

第19表 遺物観察表 金属製品

図版	掲載番号	IDNo.	器種	出土地点	層位	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
72	M1	201004-0003	釘	3-38	I	銅	2.45	0.9	0.25	0.97	
	M2	201004-0005	釘	5-50	I	銅	2.15	0.9	0.25	0.77	
	M3	201004-0006	釘	5-50	I	銅	2.6	0.8	0.3	0.87	
	M4	201004-0001	釘	3-39	II	銅	3.2	0.8	0.3	1.30	
	M5	201004-0004	釘	5-51	II	銅	2.75	0.8	0.2	0.96	
	M6	201004-0002	釘	5-52	II	銅	3.0	1.2	0.3	2.51	
	M7	201104-0007	釘	1-9	I	鉄	9.3	1.65	0.65	18.52	
M8	201104-0008	錠	1-11	I	鉄	(11.6)	(3.6)	0.95	84.14		

第20表 遺物観察表 石製品

図版	掲載番号	IDNo.	器種	出土地点	層位	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
72	S1	201104-3001	硯	3-42~43	I		(0.3)	6.4	2.0	(181.8)	
	S2	201104-3002	硯	4-45	I		(11.8)	6.05	2.15	(270.6)	裏面に印あり(砥石に転用?)
73	S3	201104-3003	基礎石	2-10	-	戸塚石	71.2	36.4	14.4	590	
74	S4	201104-3004	基礎石	3-23	-	戸塚石	58.4	36.8	14.4	390	

第6章 自然科学的調査

金沢城跡石川門出土瓦の胎土材料と釉薬成分

藤根・米田・竹原（パレオ・ラボ）

1. はじめに

金沢城跡石川門より出土した瓦について、材料の粘土および砂粒組成の特徴について調べた。また、表面の釉薬についても検討した。なお、瓦の偏光顕微鏡観察は藤根と米田、胎土および釉薬の蛍光X線分析は竹原がそれぞれ担当し、全体を藤根がまとめた。

2. 試料と方法

試料は、金沢城跡石川門で出土した瓦4点である（第21表）。いずれも黒褐色の釉薬がかけられている。薄片観察および蛍光X線分析の試料は、同一部分から採取した。なお、試料は、瓦の文様部分を避けて採取した。以下に、各分析の方法について述べる。

第21表 分析試料

分析No.	種類	出土地点（遺構）	刻印	瓦当分類	釉薬の特徴
1	軒棧瓦	1区-2・3 表土（石垣側）	「○大」	桜	光沢のある黒褐色（厚塗り）
2	棧瓦	2区-20 コンクリート製控柱掘方	「○○」カ	—	一部に光沢のある黒色
3	棧瓦	2区-21 コンクリート製控柱掘方	「○カ」	—	やや光沢のある黒色
4	平瓦	3区-32 コンクリート製控柱掘方	「○八」	—	やや光沢のある黒褐色

薄片の偏光顕微鏡観察

これら瓦は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。

試料は、岩石カッターを用いて切断し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着して平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドガラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各試料の薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴について観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。以上のことから、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を観察対象とした。

[孢子化石]

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10~30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で見られ、土壌中に多く含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものとに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は、火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的に淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、 $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩や斑れい岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴出物と考えられる。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。なお、角閃石類などの有色鉱物から構成される粒子は、複合鉱物類（角閃石類など）とした。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[流紋岩質]

流紋岩質は、全体的に白色を呈し、斑晶部分と石基のガラス質部分からなり、時として石基部分において流理構造が見られる。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物などから構成され、非晶質でモザイクな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は、斑晶部分と石基のガラス質部分からなる斑晶構造を持つ岩石で、完晶質は主に大部分が結晶からなり、石基の部分が見られない完晶構造を持つ岩石である。これらの斑晶質や完晶質の粒子は、主として玄武岩、安山岩などの火山岩類を起源とする。

[不透明・不明]

下方ポーラー、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

胎土の蛍光X線分析

瓦胎土の蛍光X線分析は、土器よりガラスビードを作製し、蛍光X線分析を行った。

試料は、薄片試料と同一部分から採取し、表面の汚れや釉薬等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を取り除いた後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をセラミック乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デンケータ内で放冷し、1.8000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $\text{Li}_2\text{B}_4\text{O}_7$ と、メタホウ酸リチウム LiBO_2 を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX (PW2424型)にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、二酸化ケイ素 (SiO_2)、酸化リン (P_2O_5)、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO_2)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) の主成分10元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) の微量成分2元素の計12元素である。

釉薬の蛍光X線分析

瓦表面の釉薬の蛍光X線分析には、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による半定量分析を実施した。胎土の蛍光X線分析用に採取した瓦破片より、釉薬の付着した表面に近い部分だけを切り取り、精製水で超音波洗浄を行った上で、測定試料とした。

分析は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200V Xにて、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。なお、得られる半定量値は、同装置での測定結果を相対的に比較するための値で、上述の胎土の測定と異なり正確度は低い。

3. 結果

以下に、薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析による結果を述べる。

薄片の偏光顕微鏡観察

瓦胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。

第22表に、各試料の粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは微化石類などの記載結果を示す。

薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、微化石類として骨針化石あるいは植物珪酸体化石が検出された。また、堆積岩類や深成岩類あるいは凝灰岩類などの岩石片のほか、輝石や雲母類などが検出された。ただし、高温による粒子の熔融が随所で見られた。

なお、第22表中の不等号は概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

第22表 胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析No.	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	50~150 μm	0.45mm	骨針化石	石英・長石類》複合石英類（微細）複合石英類（小型）、ガラス質、複合石英類（中型）、凝灰岩質、斜長石（双晶）、複合石英類（大型）、雲母類
2	50~350 μm	0.85mm		石英・長石類》複合石英類（微細）複合石英類（大型）、複合石英類（小型）ジルコン、カリ長石（パーサイト）
3	30~120 μm	0.58mm		石英・長石類》複合石英類（微細）複合石英類（中型）、複合石英類（大型）凝灰岩質、単斜輝石
4	200~450 μm	0.92mm	骨針化石 植物珪酸体化石	石英・長石類》複合石英類（微細）、複合石英類（大型）複合石英類（小型）単斜輝石、カリ長石（パーサイト）、凝灰岩質、ジルコン

胎土の蛍光X線分析

第23表に、蛍光X線分析の測定結果を示す。

分析の結果、酸化ナトリウム (Na₂O) が0.09~0.70%、酸化マグネシウム (MgO) が0.61~1.03%、酸化アルミニウム (Al₂O₃) が18.8~23.5%、二酸化ケイ素 (SiO₂) が68.9~71.8%、酸化リン (P₂O₅) が0.025~0.044%、酸化カリウム (K₂O) が1.44~2.26%、酸化カルシウム (CaO) が0.05~0.27%、酸化チタン (TiO₂) が1.00~1.05%、酸化マンガン (MnO) が0.013~0.033%、酸化鉄 (Fe₂O₃) が2.70~4.81%、ルビジウム (Rb) が68~102ppm、ストロンチウム (Sr) が38~74ppmであった。

第23表 瓦胎土の蛍光X線分析による化学組成（主成分:%、微量元素:ppm）

分析No.	種類	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb	Sr	Total
1	軒棧瓦	0.70	1.03	18.8	71.1	0.040	2.26	0.27	1.00	0.033	3.28	102	74	98.5
2	棧瓦	0.22	0.61	21.3	68.9	0.026	1.84	0.13	1.01	0.013	4.81	82	50	98.9
3	棧瓦	0.09	0.70	23.2	71.8	0.025	1.44	0.05	1.01	0.013	2.70	68	38	101.0
4	平瓦	0.20	0.63	23.5	71.1	0.044	1.66	0.06	1.05	0.015	3.21	94	51	101.5
	最小値	0.09	0.61	18.8	68.9	0.025	1.44	0.05	1.00	0.013	2.70	68	38	
	最大値	0.70	1.03	23.5	71.8	0.044	2.26	0.27	1.05	0.033	4.81	102	74	

釉薬の蛍光X線分析

第24表に、蛍光X線分析による半定量値を示す。

分析の結果、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、二酸化ケイ素 (SiO₂)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃) 等が主に検出された。

第24表 釉薬の蛍光X線分析半定量分析結果（単位:%）

分析No.	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	Ga ₂ O ₃	Rb ₂ O	SrO	Y ₂ O ₃	ZrO ₂	BaO	PbO	total
1	1.10	14.33	63.93	0.73		3.90	1.72	0.09	0.02	9.20	4.45	0.01	0.03		0.02	0.02	0.01	0.05	0.39	0.01	100.01
2	1.41	22.85	60.54	0.52		3.32	1.10	0.76	0.03	0.20	8.68	0.01	0.04		0.01	0.01	0.01	0.05	0.45	0.03	100.02
3	1.67	18.53	63.99	0.81		3.31	2.18	0.40	0.03	0.19	7.59		0.01		0.01	0.01	0.01	0.04	1.19	0.01	99.98
4	0.71	19.40	62.49	0.44	0.07	3.79	1.32	0.74	0.03	0.06	10.39		0.03	0.01	0.01	0.01	0.01	0.05	0.43	0.02	100.01
	最小値	0.71	14.33	60.54	0.44	0.07	3.31	1.10	0.02	0.06	4.45	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.04	0.39	0.01	
	最大値	1.67	22.85	63.99	0.81	0.07	3.90	2.18	0.03	9.20	10.39	0.01	0.04	0.01	0.02	0.02	0.01	0.05	1.19	0.03	

4. 考察

各瓦の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類と砂粒組成について検討した。また、蛍光X線分析による分類を行った。さらに、釉薬についても化学組成の特徴について検討した。以下に、瓦胎土の粘土の分類、砂粒組成による分類、化学組成の特徴について述べる。

微化石類による粘土の分類 (第25表)

微化石類により、1)水成粘土を用いた胎土、2)その他の粘土を用いた胎土に分類された。

1)水成粘土を用いた胎土 (分析No. 1、No. 4)

これら瓦胎土中には、少ないものの骨針化石のみ含まれていた。

2)その他の粘土を用いた胎土 (分析No. 2、No. 3)

これら瓦胎土中には、珪藻化石あるいは骨針化石は含まれていなかった。

第25表 土器胎土中の粘土および砂粒組成の特徴

分析No.	種類	粘土の特徴							砂粒の特徴							鉱物の特徴					植物珪酸体化石	その他の特徴			
		種類	放射虫化石	珪藻化石	海水種珪藻化石	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	石英	(双斜長石・累帯)	(カリ長石)			ジルコン	角閃石類	輝石類
1	瓦	水成					△		C	△	○			△		△	◎	△					△		熔融粒子多い
2	瓦	その他							C	△	○					◎		△	△						熔融粒子多い
3	瓦	その他							C	△	○		△			○						△			熔融粒子多い
4	瓦	水成					△		C	△	○		△		○			△	△		△		△		熔融粒子多い

砂粒組成による分類 (第25表)

瓦薄片の砂粒組成は、大型粒子に注目して分類群に従って大まかな量比を調べた (第25表)。砂粒物のうち、複合石英類 (大型) が深成岩類、複合石英類 (微細) や複合石英類 (小型) が堆積岩類、凝灰岩質が凝灰岩、ガラス質がテフラである。なお、砂粒の組み合わせは、第26表に従った。

第26表 岩石片の起源と組み合わせ

		第1出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg

胎土の化学組成による分類

各元素の分布図を第75図に、酸化アルミニウム (Al₂O₃) 二酸化ケイ素 (SiO₂) 分布図を第76図に示す。第76図は、酸化アルミニウム (Al₂O₃) が主に粘土成分を表し、二酸化ケイ素 (SiO₂) が主に砂粒成分を表し、土製品の粘土と砂粒の混合割合を示すと考えられている [小村・藤根2002]。

なお、第75・76図は、これまで筆者らが測定した金沢城跡出土瓦および土師器の測定結果を示した図にプロットした図である [藤根ほか未刊行]。

第75図の各元素分布図では、本報告の石川門出土瓦は、これまでの金沢城跡瓦と比較すると、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カルシウム (CaO) 酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃) において低い傾向が見られ、また、酸化アルミニウム (Al₂O₃) において高い傾向が見られた。

一方、粘土と砂粒の混合割合を示す第76図では、分析No. 1とNo. 2がa列内にプロットされ、分析No. 3とNo. 4がa列より右上にプロットされた。

なお、これまでの金沢城跡出土瓦の分析において、生産地資料として小松市日末地内で表採資料1点のみ分析しているが（藤根ほか未刊行の分析 No. 14）、現段階で他の金沢城出土瓦との明瞭な化学組成の差は認められていない。

釉薬の化学組成

釉薬については、二酸化ケイ素 (SiO_2) が最も多く、ついで酸化アルミニウム (Al_2O_3) が多い。釉薬に関係する成分としては、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) がやや多い。酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO) が多いため、釉薬の基礎成分は、植物灰や石灰石、長石類等を用いた灰釉と考えられる。分析 No. 1 は、他試料の釉薬と比較して酸化マンガン (MnO) が明らかに多く検出されている。釉薬の黒色や黒褐色は、マンガンや鉄による着色と考える。

5. おわりに

金沢城跡石川門から出土した瓦の胎土分析と釉薬の成分分析を行った。

胎土分析のうち、薄片の偏光顕微鏡観察では、いずれも高温焼成により、一部の砂粒が溶融していたが、骨針化石を含む水成粘土を用いた瓦が検出された。また、砂粒は主に堆積岩類が含まれていた。

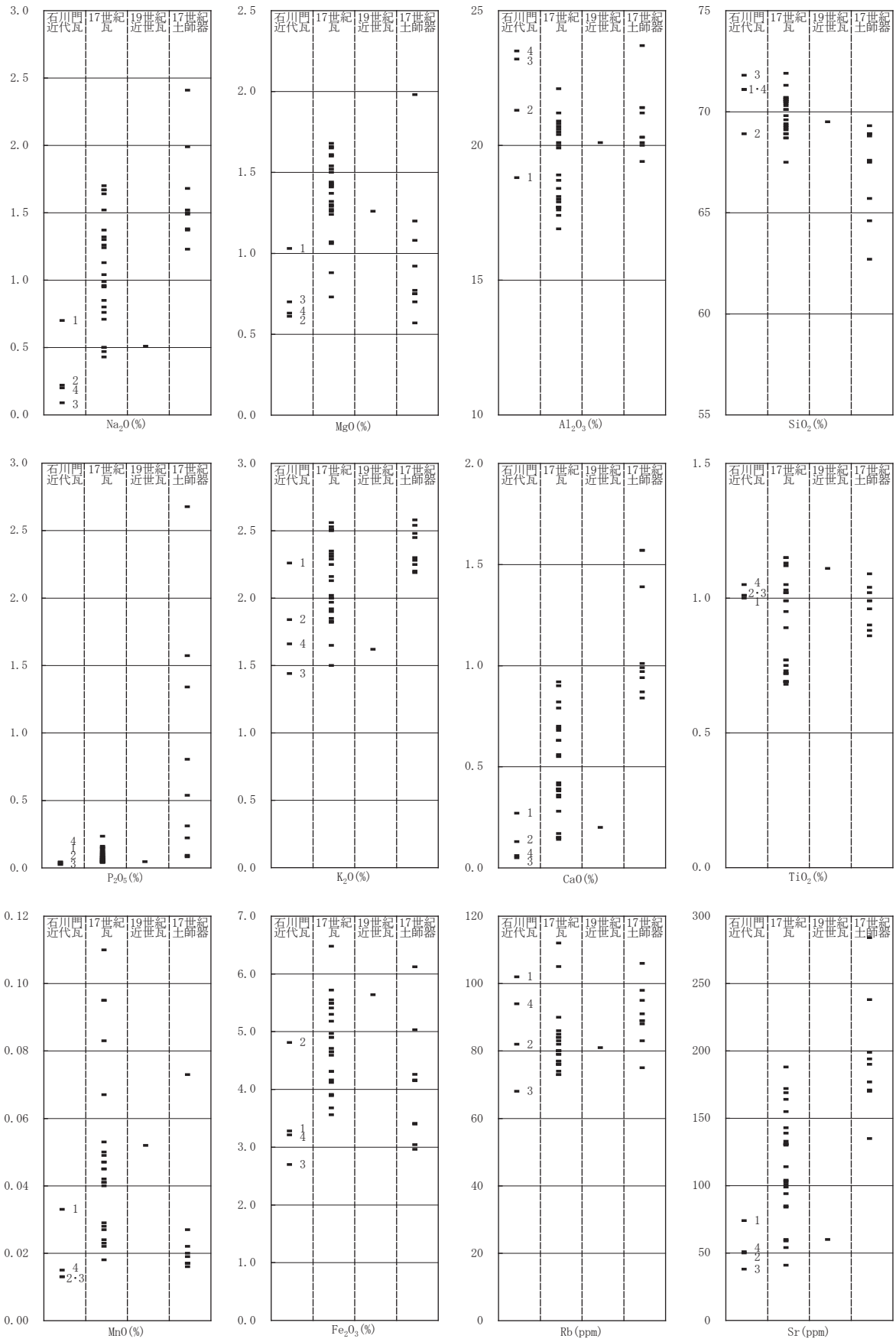
一方、蛍光X線分析では、粘土と砂粒の混合割合により、分析 No. 1 と No. 2、分析 No. 3 と No. 4 の2群に分類された。

釉薬の化学組成は、酸化カリウム (K_2O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化鉄 (Fe_2O_3) がやや多い。釉薬の基礎成分は灰釉で、着色剤は分析 No. 1 はマンガンと鉄、分析 No. 2～No. 4 は鉄であった。

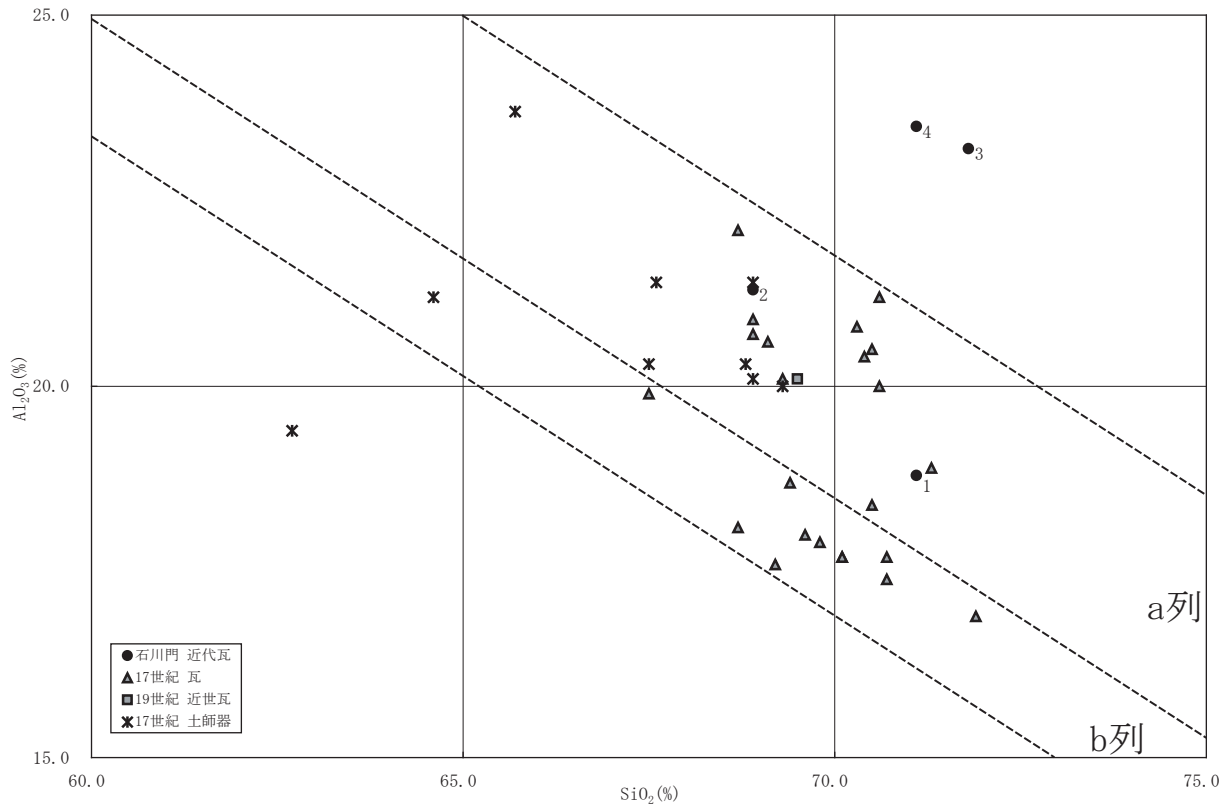
引用・参考文献

小村美代子・藤根 久 (2002) 山茶碗胎土の化学的評価. 日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 60-61, 日本文化財科学会.

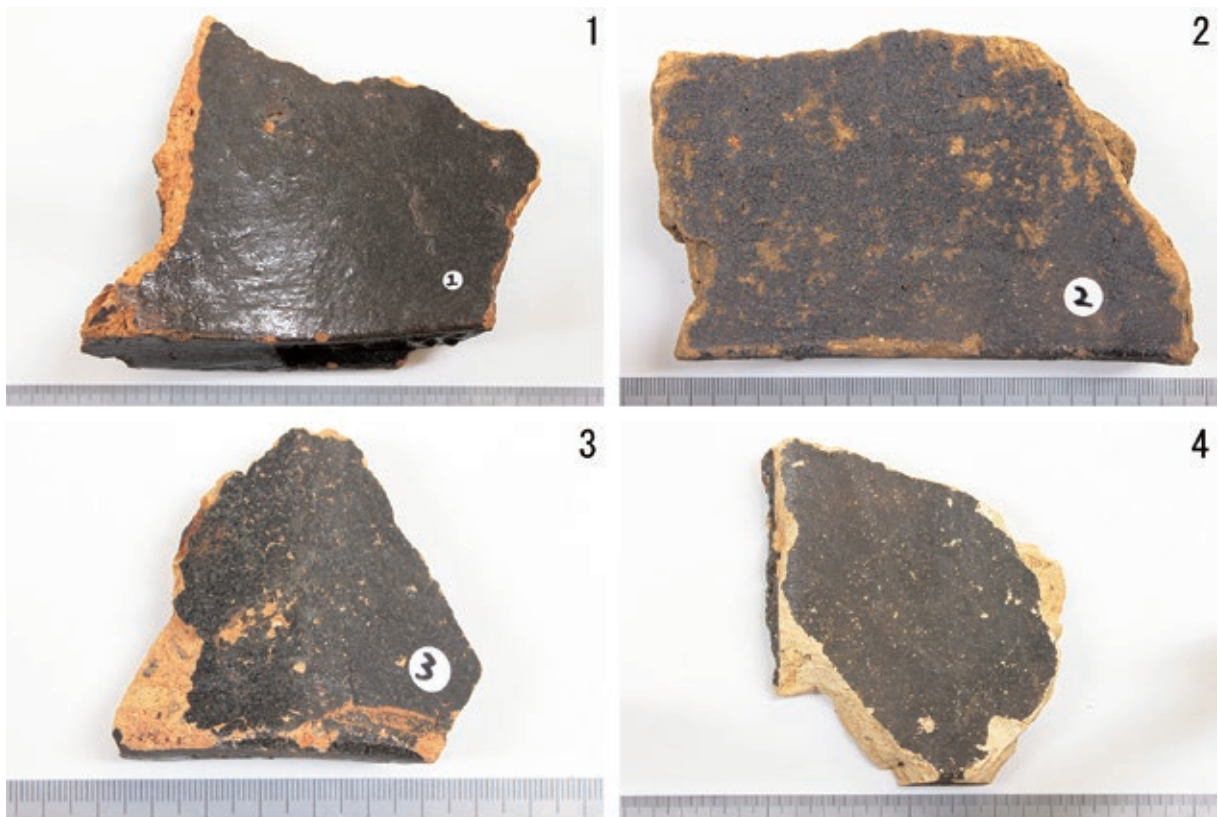
矢部良明ほか23名編 (2002) 角川日本陶磁大辞典. 1484p, 角川書店.



第75図 瓦胎土の蛍光X線分析による各元素分布図

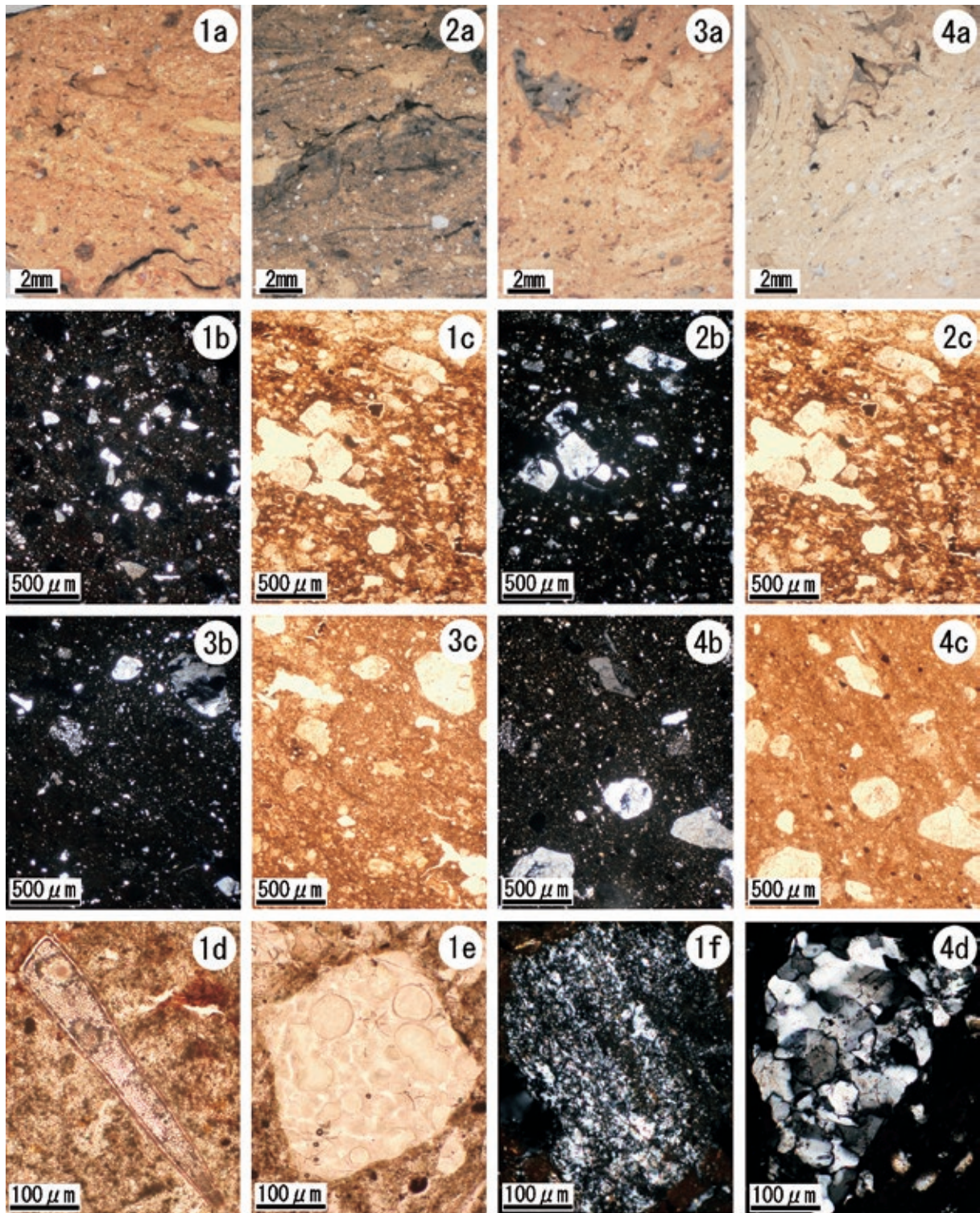


第76図 瓦胎土の蛍光X線分析による Al_2O_3 - SiO_2 分布図



1. 分析No.1 (軒棧瓦) 2. 分析No.2 (棧瓦) 3. 分析No.3 (棧瓦) 4. 分析No.4 (平瓦)

第77図 胎土分析および釉薬の成分分析を行った瓦



1a-1c. 分析No.1 (軒棧瓦) 2a-2c. 分析No.2 (棧瓦) 3a-3c. 分析No.3 (棧瓦) 4a-4c. 分析No.4 (平瓦)

1d. 骨針化石 1e. 発泡ガラス質 1f. 複合石英類 (微細) 4d. 複合石英類 (小型)

(a: 切断面、b: 直交ニコル、c: 開放ニコル、番号は分析No. に対応)

第78図 瓦胎土の偏光顕微鏡写真

第7章 総括

右方・左方太鼓塀の変遷については、「石川門附属太鼓塀の沿革」(第2章)に詳しく、ここでは発掘調査成果を基に、コンクリート製に変更される以前の控柱痕跡である抜取痕を中心に、控柱の変遷について整理し、まとめとしたい。併せて、城内における釉薬瓦の分類等の参考として、保存修理時に葺かれていた瓦を掲載した。

1. 抜取痕について

概要

抜取痕は、概ねコンクリート製控柱掘方の直下で検出され、平面形は方形・円形を基本とし、規模は直径(1辺)約30~50cmを測る。基本的には柱穴の形態をなし、右方74、左方45を数える。底部の状況としては、右方では方形の戸室石(2区 28、6区 86)や河原石(1区 2、4区 50、5区 62、6区 84他)を控柱の礎盤として据え置き、面を内側に向けた河原石を方形(4辺)に配置(2区 20)し、控柱の沈下や押えとした施工を確認するが、左方では抜取痕内部から明らかに礎盤と考える石材の検出はない。

抜取痕の間隔は、石垣及び出しが横に位置するものは総じて距離が短いため、それを除き算出すると、右方が1区184cm(平均値、以下省略)、2区162cm、3区173cm、4区160cm、5区181cm、6区177cmを測り、調査区によって数値の変動が大きく、これは太鼓塀にコーナー部が多いことから、控柱を近接して設置せざるを得ない箇所が生じたためと考えられ、その箇所の間隔は100~150cmを測り、他より6~8割程度短くなる。左方は1・2区183cm、3区185cm、4区174cmを測り、近代に新設された5区を除き、距離に大きな隔たりはみられない。

抜取痕の検出により、木製控柱の位置や下部(基礎)構造等の所見が得られ、右方と左方の比較では、形状・規模に大きな差異は認められないものの、基礎構造や控柱の間隔に相違点がみられた。また、石川門以外の検出事例として、玉泉院丸南西石垣の調査[石川県金沢城調査研究所2010a]では、塀の構造が異なる二重塀の控柱抜取痕(近代)が確認されており、抜取痕の間隔約2.5~3m、基礎石からの距離約1.5m前後を測る。

絵図との比較

「造作弁図解」(第5図)を参考にすると、太鼓塀本柱から控柱までの距離が、4尺5寸(約136cm)、深さが4尺(約121cm)、控柱が7寸角(約21cm)と明記されており、調査で得た基礎石中央部からの距離と石垣天端からの深さを比較対象とし、各調査区で平均値を算出した(第27表)。

右方は距離122~129cm、深さ102~120cm、左方は距離129~149cm、深さ86~108cmを測る。右方は距離と深さが、「造作弁図解」より全体的に短く・浅いものの、ある程度まとまりがみられ、左方は近代に新設の5区を除いても、数値幅が大きい傾向がみられる。

「造作弁図解」が特定の建造物の指図等でなく、加賀藩の建造物に特化した雛形図集であったと考えられる[正見2008]ことから、調査成果の数値は現

第27表 造作弁図解との比較

調査区	距離 (cm)		深さ (cm)		
	基礎石中央部	造作弁図解との差	石垣天端	造作弁図解との差	
右方	1	122	14	120	1
	2	117	19	105	16
	3	127	9	102	19
	4	125	11	112	9
	5	123	13	104	17
	6	129	7	104	17
左方	1	149	13	103	18
	2	142	6	86	35
	3	129	7	102	19
	4	139	3	108	13
	5	162	26	92	29

地合わせによる施工の結果を反映しているものと捉えることができ、また、右方・左方の様相の違いを、抜取痕の間隔を含め、太鼓塀の立地する石垣の形状（郭）に伴う施工方法等の制約が影響したものと理解したい。

次に、控柱の位置等を江戸後期の絵図「金沢御城内外御建物図」（景観年代：天保5～9年（1834～38）（第7図10）と調査区平面図及び昭和保存修理の記録『報告書稿本』掲載の平面図を参考に検討する。控柱の形態を確認すると、絵図が木製で垂直、『報告書稿本』がコンクリート製で斜めのものを描いたものである。木製からコンクリート製に変更した時期は、旧陸軍の資料や金沢市内で最初のコンクリート建物（旧県庁）の竣工が大正13年であること、昭和13年の古写真にコンクリート製控柱が確認できることから、大正から昭和13年以前と推定する。コンクリート製控柱は、昭和28～34年の修理時には取り替えがなく、再利用したものとされることから、控柱の位置・数量は初めにコンクリート製控柱に変更したとされる時期を反映していると考えられ、右方・左方共に保存修理前のコンクリート製控柱が『報告書稿本』のものと同位置であり、調査区図面とも整合する。また、控柱と太鼓塀本柱は貫で接続する関係から、本柱の貫穴の有無等も考慮に入れるべきであり、ここでは対象となる箇所を写真等で確認し、照合を行った。

左方は木製控柱（絵図）と抜取痕（調査区平面図）の位置・数量が一致しており、抜取痕がコンクリート製控柱の直下で検出できたことから、控柱の形態が変更されるものの、基本的には同じ箇所に設置していたと考えられる。

右方は絵図の歪みが原因と考えられるが、全体的に整合しないため、調査区ごとに照合を行うと、控柱の位置や数量に相違点がみられた。ただ、左方の整合具合を考え、歪みの無いことを前提とした場合、天保以後の解体修理時に、若干位置をずらして控柱を設置したことにより生じた可能性があり、その痕跡がコンクリート製以前と推定する控柱掘方に対応するものであろうか。照合の結果、新規に控柱を設置した箇所が1区 1、5区 61であり、明らかに位置の相違がみられる箇所が2区 22、3区 39・47、4区 48、6区 90である。1区 1、5区 61については、控柱が絵図に描かれていないこと、対応する太鼓塀本柱にも下段の貫穴が認められないことから、本来は木製控柱が存在しない箇所である。しかしながら、調査において抜取痕が確認されており、太鼓塀本柱が昭和修理時に新材に変えられた可能性が高いことから、本柱の貫との関係性を不要と考えた場合、太鼓塀の解体修理の時期に推定される景観年代（絵図）の約10年後の弘化5年（1848）もしくは明治中期頃の再建時に新設された控柱痕跡の可能性はある。それぞれに近接する九十間長屋や櫓台石垣と太鼓塀との取付きが弱いことから、補強のために追加したものと考えられ、以後、その箇所を踏襲してコンクリート製にまで至ったと想定される。

時期

太鼓塀の解体修理は、石垣修築と連動したものと想定し、それに関連する絵図及び文献、古写真の観察から、①宝暦大火後の再建（右方・左方）、②文化3年（1806、「石川御櫓下等石垣積直絵図」）の石垣修築に伴う建替え（左方）、③弘化4年（1847）の石垣修築（「奥源兵衛家系」）に伴う弘化5年建替え（棟札）（右方）、④明治中期（1880～90年代）頃（古写真）（右方・左方）と4時期を推察できる。①～④の太鼓塀についての修理記録が無いため、解体範囲・方法等は不明であるが、①～③の控柱は太鼓塀本柱の貫や抜取痕の存在から「造作弁図解」で描かれる形態のものと考えられ、④は同形態のものが古写真により視認できる。抜取痕は概観した控柱痕跡の配置状況や近世・近代の釉薬・燻瓦、土器・陶磁器等の出土遺物のうち、近代（明治）に属する型紙摺の碗・皿が新しい指標であり、その当該期の一端（下限）を示すものと考えられることから、木製の最終段階と推定する明治期の控柱痕跡（柱穴）の可能性はある。

2. 瓦について

太鼓塀の瓦 (第79～83 図)

本事業の太鼓塀解体修理以前の屋根瓦は全てが、釉薬の棧瓦葺きであった。釉薬瓦が採用される以前は、鉛瓦葺きであったらしく、右方太鼓塀の白鳥堀側の出し(出し3)の柄振板に、鉛瓦の取り付けに腐食痕と鉛板を留めていた釘痕が、解体調査により確認されている。釉薬瓦に変更された時期については、附属太鼓塀の沿革で触れたように、明治中期頃が想定されることから、主体は近代以降に生産された瓦と理解される。

ここでは、その屋根瓦を瓦当文の中心飾りの共通性がみられたまとまりごとに集成し、今後の釉薬瓦分類の一助としたい。また、解体した腰瓦には墨書や楡描があり、併せて掲載した。

屋根瓦について概観すると、釉薬の色調は、光沢のある暗褐色のものから、明らかに近年生産されたとみられる光沢の強い黒色で、瓦当文様も多様であることから、適時、瓦の葺き替えが行われてきたことが想定される。

主体を占める瓦当文は右方太鼓塀では 21・7・8、左方太鼓塀では 7・8 であり、昭和の保存修理工事前の写真で、既に葺かれていたことが確認される。他の瓦当文は右方・左方太鼓塀を合わせた全体でも 10 枚にも満たないものが、ほとんどである。玉泉院丸分類との対応を試みると、8 が桜 I 類である他は、21 が玉 IV 類に近似するぐらいで、合致するものは少ない。これが玉泉院丸南西石垣の遺物と時期的な差を示すのか、塀の構造の違いの差を示すのかは、今後の課題としたい。



柄振板の鉛の腐食痕跡と鉛板を留めていた釘痕



昭和保存修理工事前の屋根瓦



第79図 附属太鼓塀の屋根瓦 1



第80図 附属太鼓塀の屋根瓦 2



第81図 附属太鼓塀の屋根瓦 3



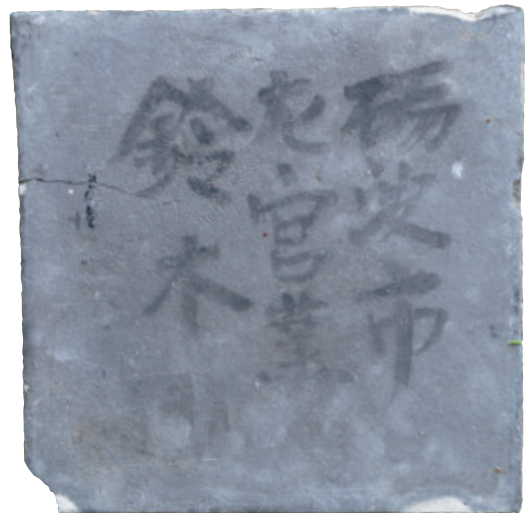
第82図 附属太鼓塀の屋根瓦 4



25



26



27



28

第83図 附属太鼓塀の腰瓦

引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館 2005 『桃山陶の華麗な世界』
- 荒木麻理子 2011 「小立野ユミノマチ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第26号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 石川県金沢城・兼六園管理事務所 石川県金沢城調査研究所 2012 『特別名勝兼六園 栄螺山石垣等修復工事報告書』
- 石川県金沢城調査研究所 2008a 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』
- 石川県金沢城調査研究所 2008b 『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』
- 石川県金沢城調査研究所 2008c 『絵図でみる金沢城』
- 石川県金沢城調査研究所 2008d 『金沢城調査研究所年報Ⅰ』
- 石川県金沢城調査研究所 2008e 『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』
- 石川県金沢城調査研究所 2009a 『よみがえる金沢城Ⅱ』
- 石川県金沢城調査研究所 2009b 『金沢城調査研究所年報Ⅱ』
- 石川県金沢城調査研究所 2009c 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報』(現地説明会資料)
- 石川県金沢城調査研究所 2010a 『金沢城跡石垣修築工事報告書 玉泉院丸南西石垣』
- 石川県金沢城調査研究所 2010b 『金沢城の三御門 河北門・橋爪門・石川門』
- 石川県金沢城調査研究所 2010c 『金沢城跡玉泉院丸遺構確認調査概報Ⅱ』(現地説明会資料)
- 石川県金沢城調査研究所 2010d 『金沢城調査研究所年報Ⅲ』
- 石川県金沢城調査研究所 2011a 『金沢城石垣構築技術史料Ⅱ』
- 石川県金沢城調査研究所 2011b 『金沢城跡 河北門』
- 石川県金沢城調査研究所 2011c 『金沢城跡 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅰ』
- 石川県金沢城調査研究所 2011d 『金沢城調査研究所年報Ⅳ』
- 石川県金沢城調査研究所 2012a 『金沢城跡 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ』
- 石川県金沢城調査研究所 2012b 『金沢城調査研究所年報Ⅴ』
- 石川県金沢城調査研究所 2012c 『城郭石垣の技術と組織』
- 石川県金沢城調査研究所 2013a 『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅱ』
- 石川県金沢城調査研究所 2013b 『金沢城調査研究所年報Ⅵ』
- 石川県金沢城調査研究所 2013c 『金沢城普請作事史料Ⅰ』
- 石川県教育委員会 1970 『金沢城二ノ丸跡発掘調査概報』
- 石川県教育委員会 2001 『金沢城フォーラム いま甦る金沢城』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター1998 『金沢城跡を掘る 1998』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター1999a 『金沢城跡を掘る 1999』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター1999b 『金沢城跡を掘る 1999』vol.2
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2000 『金沢城跡を掘る 2000』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2001 『金沢市 三社町遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002a 『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002b 『金沢市 木ノ新保遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002c 『金沢市 経王寺遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002d 『金沢市 高岡町一ツ水溜跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002e 『金沢市 前田氏(長種系)屋敷跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2007 『金沢市 三社町遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2008 『七尾市 小島西遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2010 『金沢市 金沢城跡Ⅰ』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2012 『金沢市 金沢城跡Ⅱ 堂形(第3・4次調査)』
- 石川県教育委員会文化財課 1969 『重要文化財金沢城 石川門・三十間長屋保存修理工事報告書』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2003a 『年報Ⅰ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004a 『年報Ⅱ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2004b 『御造営方日並記』上巻
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005a 『年報Ⅲ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005b 『御造営方日並記』下巻
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2005c 『金沢城フォーラム 記録集 石垣の匠と技』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006a 『金沢城跡Ⅱ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006b 『よみがえる金沢城Ⅰ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006c 『金沢東照宮(尾崎神社)の研究』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2006d 『年報Ⅳ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007a 『年報Ⅴ』
- 石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室 2007b 『金沢城代と横山家文書の研究』

石川県教育委員会文化課・金沢御堂金沢城調査委員会 1991『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』文献史料編(2分冊)
 石川県土木部営繕課 2001『金沢城公園菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等復元工事報告書』
 石川県立埋蔵文化財センター1990『元菊町遺跡』
 石川県立埋蔵文化財センター1992『特別名勝 兼六園(江戸町推定地)発掘調査報告 附 本多家上屋敷跡発掘調査報告』
 石川県立埋蔵文化財センター1996『金沢城跡車橋門発掘調査報告書』
 石川県立埋蔵文化財センター1997『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告書Ⅰ』
 石川県立埋蔵文化財センター1998『金沢城跡石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告書Ⅱ』
 (財)石川県埋蔵文化財センター2001『年報2(平成11年度)』
 伊藤さやか 2004「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第12号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 伊藤さやか 2005「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第14号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 井上鋭夫 1969『金沢城跡の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会
 上野佳也 1976「金沢城四十間長屋跡発掘調査概報」『日本海文化』No. 3 金沢大学法文学部日本海文化研究室
 魚水 環 2012「金沢城下町遺跡(丸の内7番地点)」『石川県埋蔵文化財情報』第27号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 小野正敏 1985「出土陶磁器よりみた15・16世紀における画期の素描」『MUSEUM』416号 東京国立博物館
 学習院大学史料館編 2006『写真集 明治の記憶』吉川弘文館
 加藤克郎 2001「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 加藤克郎 2009「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第22号 (財)石川県埋蔵文化財センター
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2002『石川県金沢市 彦三町遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅱ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003b『石川県金沢市 高岡町遺跡Ⅱ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅲ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2003d『野田山墓地』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004a『石川県金沢市 昭和町遺跡Ⅲ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅰ(測量図編)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2004c『石川県金沢市 久昌寺遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005a『石川県金沢市 片町二丁目遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅱ(古代・中世編、測量図編2)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005c『石川県金沢市 木ノ新保遺跡Ⅱ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2005d『平成16年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006a『石川県金沢市市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006b『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅲ(近世編1)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2006c『石川県金沢市 本町一丁目遺跡Ⅳ』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007a『石川県金沢市 兼六元町遺跡 彦三町一丁目遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007b『石川県金沢市 下堤・青草町遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2007c『石川県金沢市広坂遺跡(1丁目)Ⅳ(近世編2)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008a『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅰ～西外惣構跡・東内惣構跡発掘調査報告書～』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2008b『野田山・加賀藩主前田家墓所調査報告書』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009a『平成20年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009b『辰巳用水調査報告書』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2009c『石川県金沢市 広坂遺跡(1丁目)Ⅴ(金沢能楽美術館地点)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2010a『平成21年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2010b『石川県金沢市 東山一丁目遺跡』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011a『平成22年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011b『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅱ～西内惣構跡(主計町地点)発掘調査報告書～』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011c『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅲ～西外惣構跡(武蔵町地点)発掘調査報告書～』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2011d『石川県金沢市 土清水塩硝蔵跡調査報告書』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012a『本多家上屋敷関連遺構調査報告書』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012b『石川県金沢市 金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012c『野田山・加賀八家墓所調査報告書』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2012d『石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ 金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点)発掘調査報告書 遺構編』
 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター) 2013『石川県金沢市 小立野四丁目遺跡 天徳院前田家墓所』
 金沢市・金沢市教育委員会 1991『瓢箪町遺跡』
 金沢市・金沢市教育委員会 1995『金沢市本町一丁目遺跡』
 金沢市・金沢市教育委員会 1997『安江町遺跡』
 金沢市教育委員会 1997『金沢市本町一丁目遺跡Ⅱ 鍛冶片原地点』

- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001a『金沢市醒ヶ井遺跡』
- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001b『金沢市昭和町遺跡Ⅰ』
- 金沢市教育委員会（金沢市埋蔵文化財センター）2001c『金沢市高岡町遺跡Ⅰ』
- 金沢市埋蔵文化財センター1998『長田町遺跡 長町遺跡 穴水町遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター1999『下本多町遺跡』
- 金沢市役所 1973『稿本 金澤市史』市街編第四 名著出版
- 金沢大学金沢城学術調査委員会 1967『金沢城 その自然と歴史』金沢大学生協同組合
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2000『金沢大学文化財学研究』2
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2001・2002『金沢大学文化財学研究』3・4
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター2003『金沢大学文化財学研究』5
- 金沢御堂・金沢城調査委員会 1993『金沢城跡 金沢城跡遺構実態調査概要報告書』石川県教育委員会
- 木越隆三 2003「元和～寛文期の金沢城修築について」『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 木越隆三 2004「金沢城全域絵図の編年と分類」『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 木越隆三 2005a「金沢城の地割図と二の丸御殿絵図」『研究紀要 金沢城研究』第3号 金沢城研究調査室
- 木越隆三 2005b「金沢城下 内惣構築造時期について」『陶磁器の社会史』桂書房
- 木越隆三 2007「近世後期、石垣構築技術「秘伝」の形成過程」『研究紀要 金沢城研究』第5号 金沢城研究調査室
- 木越隆三 2008「後藤彦三郎の石垣技術書と初期秘伝の読み方」『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ』石川県金沢城調査研究所
- 木越隆三 2013「金沢の惣構創建年次を再検証する」『日本歴史』第780号 日本歴史学会
- 北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版局
- 北野博司 1999「〔発掘余話〕金沢城跡五十間長屋出土の「鋹始」刻石」『石川県埋蔵文化財情報』第2号
（財）石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 2000「〔発掘余話〕金沢城跡五十間長屋出土の「鋹始」刻石」『石川県埋蔵文化財情報』第3号
（財）石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 2003「金沢城石垣の変遷Ⅰ」『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室
- 北野博司 2004「金沢城石垣の変遷Ⅱ」『研究紀要 金沢城研究』第2号 金沢城研究調査室
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10周年記念』
- 久保智康 2005「日本海域をめぐる赤瓦」『日本海域歴史体系』第四巻 近世篇Ⅰ 清文堂
- 熊谷葉月 1999「金沢城跡（三の丸東調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 熊谷葉月 2013「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第30号 （公財）石川県埋蔵文化財センター
- 佐々木達夫 1980「金沢城跡の発掘 一九七九年」『日本海文化』No. 7 金沢大学文学部日本海文化研究室
- 佐々木達夫 1981「金沢城跡の発掘 1977年」『金沢大学日本海域研究所報告』第13号
- 貞末堯司・石崎俊哉・前田清彦 1986「金沢城の発掘 1981 藤右衛門丸北側法面裾部発掘報告」『金沢大学日本海域研究所報告』第18号
- 貞末堯司・前田清彦・児玉剛 1989「金沢城の発掘 1986年 黒門横北側懸崖部発掘調査報告」『日本海文化』No. 15
金沢大学文学部日本海文化研究室
- 白峰 旬 1998『日本近世城郭史の研究』校倉書房
- 正見 泰 2008「『造作辨圖解 上下』と『加州金澤御城来因略記』 金沢城石川門・河北門整備の根拠史料に関する検証」
『研究紀要 金沢城研究』第6号 石川県金沢城調査研究所
- 庄田知充 2012「金沢・城と城下町の調査成果」『考古学ジャーナル』No. 623 ニューサイエンス社
- 瀬戸 薫 2000「『北信愛覚書』について 天正十五年の金沢城」『加能史料研究』第12号 石川県地域史研究振興会
- 千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 高沢裕一監修 1989『加賀藩御細工所の研究（一）』金沢美術工芸大学美術工芸研究所
- 高沢裕一監修 1993『加賀藩御細工所の研究（二）』金沢美術工芸大学美術工芸研究所
- 田川捷一 1980「金沢と尾山の地名について」『北陸史学』第29号 北陸史学会
- 滝川重徳 1999「金沢城跡（本丸附段調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 滝川重徳 2000「金沢城跡（五十間長屋調査区）」『石川県埋蔵文化財情報』第3号 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 竹間芳明 1999「金沢御堂の再考」『加能史料研究』第11号 石川県地域史研究振興会
- 田中徳英 1996「宝暦大火後の金沢城再建における造営組織について」『日本建築学会計画系論文集』480号
- 田中徳英 2005「金沢城二の丸御殿の用途による部屋の構成」『研究紀要 金沢城研究』第3号 金沢城研究調査室
- 田中徳英 2008『加賀藩大工の研究』桂書房
- 土田友信 2000「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第4号 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 出越茂和 2006「金沢城五十間長屋石垣鋹始に係る神具機について 金沢市波自加弥神社所蔵神具機裏書の調査」
『研究紀要 金沢城研究』第4号 金沢城研究調査室
- 栃木英道 1998「金沢城跡」『石川県立埋蔵文化財センター年報』19号 石川県立埋蔵文化財センター
- 富田和気夫・湊屋玲美 2002「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第7号 （財）石川県埋蔵文化財センター

- 成瀬晃司 1997 「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷 文様、銘款を中心に」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
東京大学埋蔵文化財調査室
- 中村洋介・金幸隆・岡田篤正・竹村恵二 2003 「金沢市街地における河成段丘の形成時期と森本 富樫断層帯野町撓曲の第四
紀後期における上下変異速度」『活断層研究』23号
- 日本海文化研究室編 1976 『金沢城郭史料』日本海文化叢書第三巻 金沢大学法文学部日本海文化研究室
- 林 大智 2008 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第19号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 藤 則雄 1975 「河岸段丘」『金沢周辺の第四系と遺跡』
- 藤 則雄 1999 「金沢城跡「百間堀」の断層とその周辺の地形」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会々誌第42号 石川考古
学研究会
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市史編纂委員会
- 藤澤良祐 1998 『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市史編纂委員会
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』東京大学埋蔵文化財調
査室
- 増山 仁 1999 「金沢城跡」『金沢市史』資料編19 考古 金沢市史編さん委員会
- 三浦ゆかり 1999 「金沢城跡いもり堀発掘調査」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 見瀬和雄 2000 「金沢城の創建と前田利家」『石川県史だより』第39号 石川県立図書館史料編さん室
- 湊屋玲美・土田友信 2001 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第5号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 湊屋玲美・土田友信他 2001 「金沢城跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 向井 禪 2007 「石川県 重要文化財金沢城石川門 現場の紹介」『文建協通信』No.88 (財) 文化財建造物保存技術協会
- 向井 禪 2008 「石川県 重要文化財金沢城石川門 現状変更について」『文建協通信』No.91 (財) 文化財建造物保存技術
協会
- 向井 禪 2013 「石川県 重要文化財金沢城石川門 表門の柱根継補修工事(揚屋工事)について」『文建協通信』No.113
(公財) 文化財建造物保存技術協会
- (公財) 文化財建造物保存技術協会 2014 『重要文化財金沢城石川門修理工事報告書』石川県
- 森 毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九 (財) 大阪市文化財協会
- 森島康雄 2003 「中世末から近世初頭の土器・陶磁器」『日本考古学協会 2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会 2003年滋
賀大会実行委員会
- 本康宏史 2003 『20世紀の照像 石川写真百年・追想の図譜 改編版』能登印刷出版部
- 谷口明伸・増山 仁 2004 「前田土佐守家の下屋敷と醒ヶ井遺跡」『研究紀要』第1号 (財) 金沢文化振興財団
- 安中哲徳 2010 「丸の内7番遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第24号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 安中哲徳 2011 「丸の内7番遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第26号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 谷内明央 2012 「小立野ユミノマチ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第28号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 谷内明央 2013 「小立野ユミノマチ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第29号 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 吉岡康暢 1985 「金沢城の発掘」『金沢城と前田氏領内の諸城』日本城郭史研究叢書 第五巻 名著出版
- 吉田純一 2003 「金沢城の『三階御櫓』」『研究紀要 金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室



旧蓮池堀から櫓等を望む



石川橋から櫓・左方太鼓塀を望む



石川橋から太鼓塀を望む



表門前から太鼓塀を望む

写真図版 2 右方太鼓塀解体修理後



旧蓮池堀から太鼓塀を望む



表門前から太鼓塀を望む

写真図版 3 左方太鼓塀解体修理中



1・2区 東から



出し1 南から



2区 西から



4区 南から



5区 南から



九十間長屋台石垣 南から



出し3 西から



6区 西から



1区 南から



2区 南から



2区 南から



3区 西から



4区 西から



4区 南から



5区 水ノ手門 南から



5区 水ノ手門 東から

写真図版5 左方太鼓塀解体修理前



1区 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区-1 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-2 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-3 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-4 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-5 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-6 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-7 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-8 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-9 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-10 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区-11 控柱抜取痕完掘状況 南から



1区 調査前 東から



2区 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-17 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-18 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-19 コンクリート製控柱検出状況 南から



2区-20 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-21 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-22 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-23 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-24 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-25 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-26 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-27 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-28 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-29 控柱抜取痕完掘状況 南から



2区-30 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区 控柱抜取痕完掘状況① 西から



3区 控柱抜取痕完掘状況② 西から



3区-33 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区-34 控柱抜取痕検出状況 南から



3区-35 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区-36 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区-37 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区-39 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-40 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-41 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-42 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-43 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-44 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-45 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-46 控柱抜取痕完掘状況 西から



3区-47 控柱抜取痕完掘状況 西から



4区 控柱抜取痕完掘状況① 北から



4区 控柱抜取痕完掘状況② 東から



4区-48 控柱抜取痕完掘状況 東から



4区-49 控柱抜取痕検出状況 東から



4区-50 控柱抜取痕検出状況 東から



4区-51 控柱抜取痕検出状況 東から



4区-52・54 控柱抜取痕完掘状況 東から



4区-55 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-56 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-57 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-58・60 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区 コンクリート製控柱掘方掘削状況 東から



4区 三ノ丸北東(隅櫓台)石垣測量 北から



5区 空中写真測量 東から



5区 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-61 控柱抜取痕完掘状況 東から



5区-62 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-63 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-64 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-65 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-66 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-67 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-68 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-69 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-72 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-73 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-74 控柱拔取痕完掘状況 西から



5区-75 控柱抜取痕完掘状況 東から



5区-76 控柱抜取痕完掘状況 東から



5区-77 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-78 控柱抜取痕完掘状況 東から



5区-79 控柱抜取痕検出状況 東から



5区-80 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-81 控柱抜取痕完掘状況 西から



5区-82 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から



6区 控柱抜取痕完掘状況 北から



6区-83 控柱抜取痕完掘状況 西から



6区-84 控柱抜取痕完掘状況 南から



6区-86 控柱抜取痕完掘状況 東から



6区-87 控柱抜取痕完掘状況 西から



6区-88 控柱抜取痕完掘状況 東から



6区-89 控柱抜取痕完掘状況 東から



6区-90 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区 控柱抜取痕完掘状況 北から



1区 コンクリート製控柱掘方他検出状況 北から



1区-2 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区-3 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区-4 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区-5 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区-6 控柱抜取痕完掘状況 東から



1区-7 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区-8 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区-9 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区-10 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区-11 控柱抜取痕完掘状況 西から



1区 石川門続櫓台石垣トレンチ 東から



1区 石川門続櫓台石垣 南から



1区 三ノ丸東石垣 南から

写真図版21 左方太鼓塀3



2区 控柱抜取痕完掘状況 北から



2区-13 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-14 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-15 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-16 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-17 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-18 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-19 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-20 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-21 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-22 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-23 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-24 控柱拔取痕完掘状況 東から



2区-25 控柱抜取痕完掘状況 西から



2区-26 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区-27 控柱抜取痕完掘状況 東から



2区 排水溝（昭和保存修理）検出状況 南から



3区 控柱抜取痕完掘状況 北から



3区 控柱抜取痕完掘状況 南から



3区-30 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-31 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-32 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-33 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から



3区-34 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-35 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-36 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-37 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-38 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-39 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-40 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-41 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-42 控柱抜取痕完掘状況 東から



3区-43 控柱抜取痕完掘状況 東から



3・4区 控柱抜取痕検出状況 南東から



3区 作業風景 南から



4区 控柱抜取痕完掘状況 西から



4区 控柱抜取痕完掘状況 東から



4区-45 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-46 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-47 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-48 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区-49 控柱抜取痕完掘状況 南から



4区 三ノ丸東水ノ手門北石垣① 西から



4区 三ノ丸東水ノ手門北石垣② 南から



4区 三ノ丸東（太鼓塀下）石垣 南から



5区 三ノ丸東（太鼓塀下）石垣検出状況 南から



5区 検出状況 北から



5区-51 控柱痕検出状況 東から



5区-52 控柱痕検出状況 東から



5区-55 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から



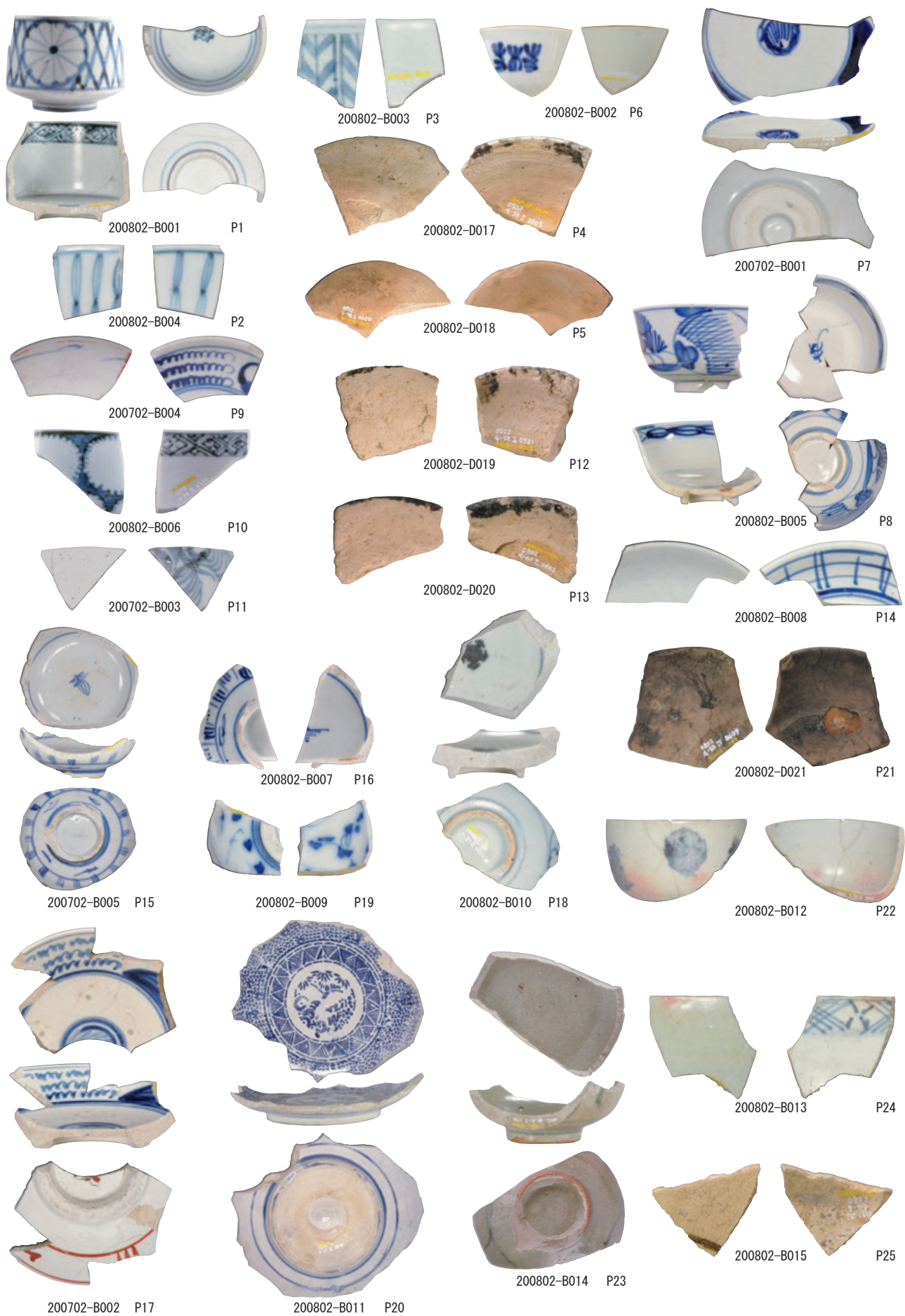
5区-56 コンクリート製控柱掘方完掘状況 東から



5区 南部（水ノ手門）検出状況 北から



5区 東ノ丸東（丑寅櫓下・東2）北面石垣 北から



写真图版 32 右方太鼓塀 土器・陶磁器



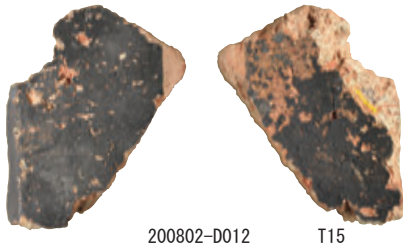
写真图版33 右方太鼓塀 瓦1



200802-D010 T13



200802-D011 T14



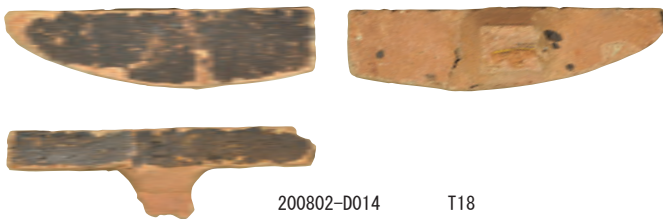
200802-D012 T15



200702-D004 T17



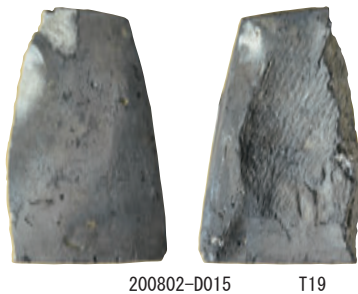
200802-D013 T16



200802-D014 T18



200802-D016 T20



200802-D015 T19



200802-M001 M1



200802-M002 M2



200802-M003 M3



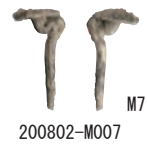
200802-M004 M4



200802-M005 M5



200802-M006 M6



200802-M007 M7



200802-S002 S1



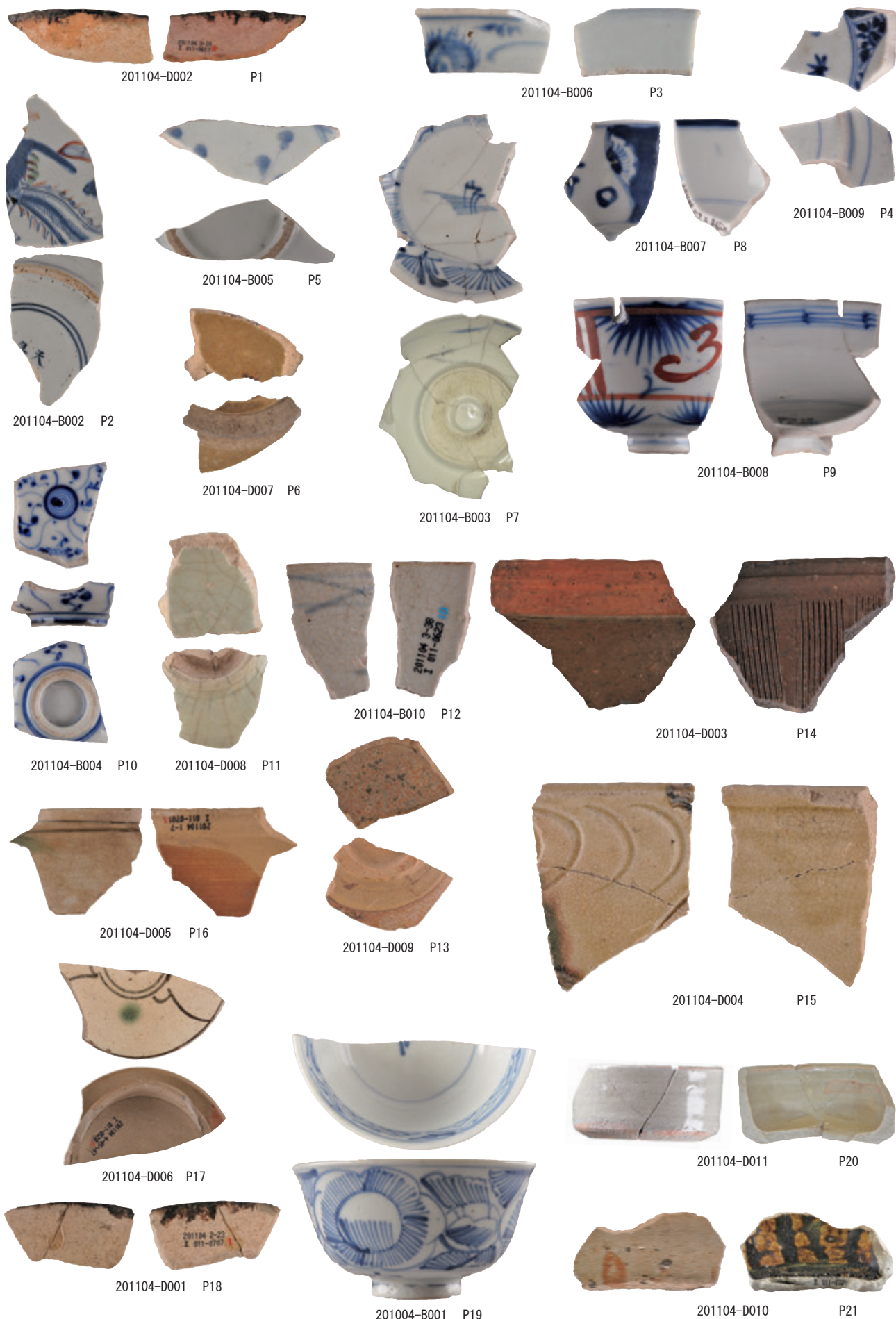
200802-S003 S2



200802-S001 S3



200702-S001 S4



写真图版 36 左方太鼓塀 土器・陶磁器



201104-D001

T1

201104-D002

T2



201104-D006

T3

201104-D008

T4



201104-D007

T5

201104-D011

T6



201104-D009

T7

201104-D020

T8

写真图版37 左方太鼓塀 瓦1



201104-D026 T9

201104-D022 T10

201104-D018 T12

201104-D017 T13



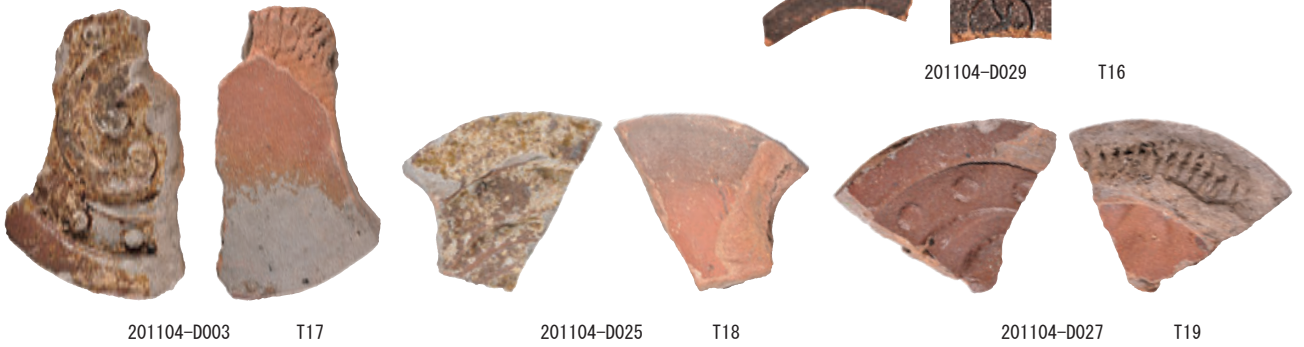
201104-D004 T11

201104-D021 T14



201104-D012 T15

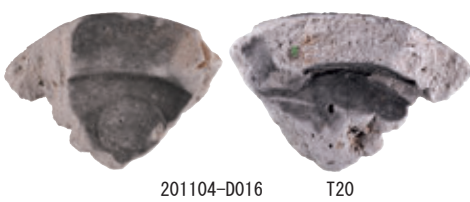
201104-D029 T16



201104-D003 T17

201104-D025 T18

201104-D027 T19



201104-D016 T20

201104-D005 T21

写真图版38 左方太鼓塀 瓦2



201104-D028 T22



201104-D015 T23



201104-D019 T24



201104-D030 T25



201104-D024 T26



201104-D010 T27



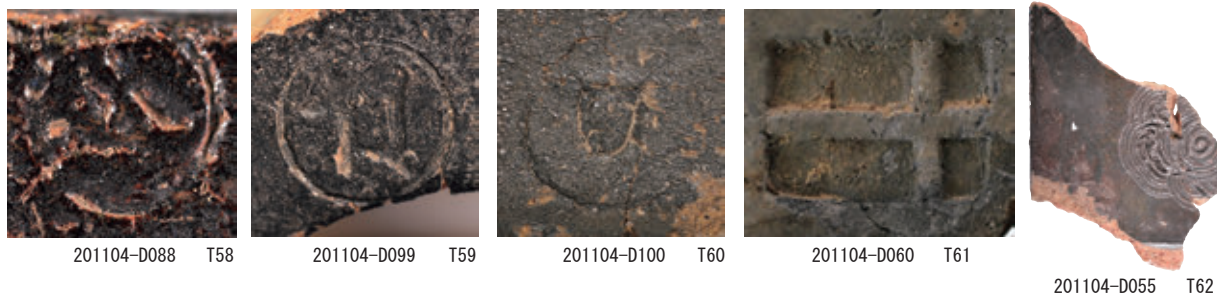
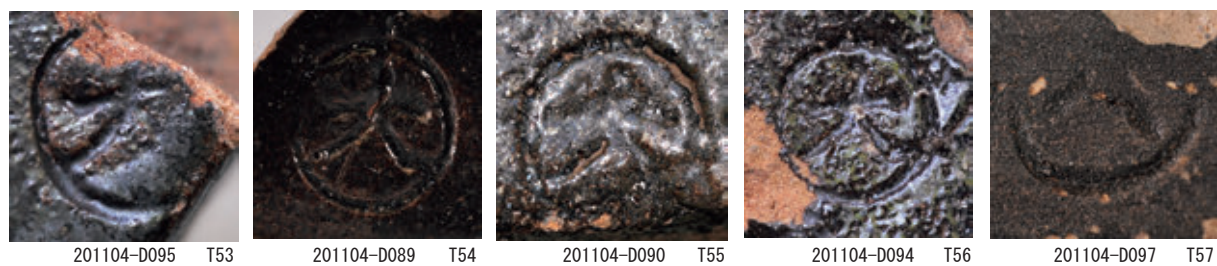
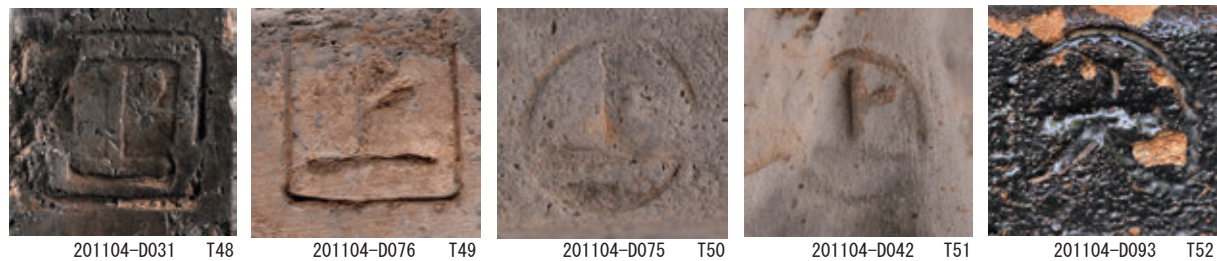
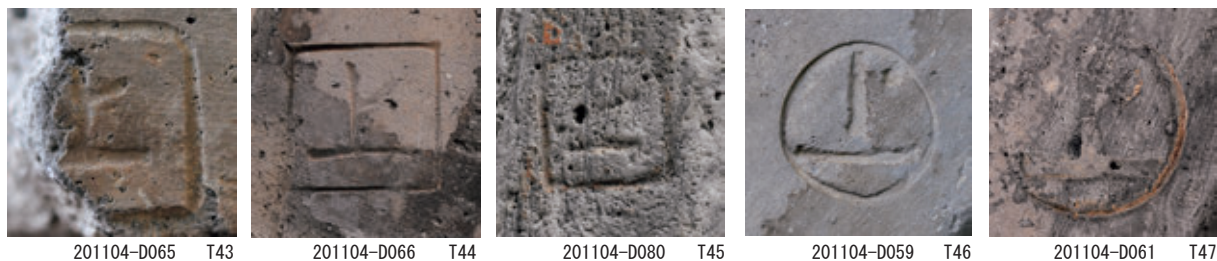
201104-D023 T28



201104-D014 T29



201104-D013 T30



写真图版 40 左方太鼓塼 瓦当·刻印



写真図版41 左方太鼓塀 金属・石製品



201104 - S003

S3



201104 - S004

S4

写真図版42 左方太鼓塀 石製品

報告書抄録

ふりがな	かなざわじょうあと いしかわもんふぞくたいこべい							
書名	金沢城跡 ー石川門附属太鼓塀ー							
副書名	金沢城史料叢書20							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮川勝次、坂下博晃、松井広信、藤根久、米田恭子、竹原弘展							
編集機関	石川県金沢城調査研究所							
所在地	〒920 0918 石川県金沢市尾山町10 5							
発行年月日	平成26年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″		(㎡)	
かなざわじょうあと 金沢城跡	いしかわけん 石川県 かなざわしまるのうち 金沢市丸の内	01	01215	36° 33′ 58″	136° 39′ 35″	20070517 ～ 20071220	200	保存 目的 調査
						20080424 ～ 20080905		
						20100902 ～ 20110127	20	
						20110512 ～ 20110926	250	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金沢城跡	城館	近世	太鼓塀の控柱抜取痕及び掘方	陶磁器、土器、瓦、金属製品、石製品				
要約	<p>金沢城跡石川門保存修理事業に伴い、附属右方・左方太鼓塀の埋蔵文化財調査を実施した。調査ではコンクリート製控柱掘方の直下で柱穴を呈す抜取痕を検出し、太鼓塀本柱に上・下段の貫穴が確認できたこと等から、コンクリート製に変更する以前は、絵図にみられる垂直の木製控柱を2段の貫で繋いでいたものと判明した。また、抜取痕の検出により、木製控柱の位置や下部構造等が確認でき、絵図・文献史料や古写真から、太鼓塀と控柱の変遷が明らかになった。</p> <p>近世前半期の遺構については、右方では太鼓塀創建前の九十間長屋台石垣が、現況で一部確認され、左方では水ノ手門周辺で、北面する門の柱痕及び礎石痕、桁形の北辺を画す三ノ丸東（太鼓塀下）石垣の延長部を確認した。</p>							

金沢城史料叢書 20

金 沢 城 跡

—石川門附属太鼓塀—

平成 26 (2014) 年 3 月 28 日 発行

編集・発行 石川県金沢城調査研究所

〒920-0918 石川県金沢市尾山町10-5

電話 076 (223) 9696 FAX 076 (223) 9697

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>

メールアドレス kncastle@pref.ishikawa.lg.jp

印 刷 能登印刷株式会社

